

平成 19 年度文部科学省・
筑波大学国際教育協力シンポジウム

開発途上国における 派遣現職教員の活躍

—帰国隊員報告会—

報告書

主催:文部科学省, 国立大学法人筑波大学

協力:独立行政法人国際協力機構

平成 20 年 1 月 5 日 (土) 10:00 ~ 17:00

国際協力機構国際協力総合研修所

平成 20 年 2 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター (CRICED)
国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

平成 19 年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
開発途上国における派遣現職教員の活躍
—帰国隊員報告会—

報告書

主 催：文部科学省、国立大学法人筑波大学
協 力：独立行政法人国際協力機構
平成 20 年 1 月 5 日（土）10：00～17：00
国際協力機構国際協力総合研修所

平成 20 年 2 月

筑波大学教育開発国際協力研究センター(CRICED)
文部科学省拠点システム構築事業

はじめに

文部科学省による青年海外協力隊への現職教員特別参加制度は、平成13年度に創設されました。派遣現職教員による任地における活躍と帰国後の派遣経験の活用方法の共有、活用可能性の拡大を目的に開催される本シンポジウムも、お陰さまで今年度4回目を迎えました。今年度は17年度派遣隊員からの報告を中心に進められました。

本報告書は、本シンポジウムの内容を、教育委員会など、現職教員を派遣する皆様に広くお知らせすることを目的に編纂されています。この報告書を通して、派遣現職教員が任国において日本での教職経験を活かして素晴らしい活躍をしていること、そして帰国してからは日本の学校教育の現場で青年海外協力隊の派遣経験があればこそなしえる優れた実践を行い、海外での貴重な経験を教室や社会へ還元するよう努力していることを広く知つていただければ幸いです。

シンポジウムでは、主催者である文部科学省大臣官房国際課吉尾啓介課長、共催者であるJICA青年海外協力隊事務局大塚正明局長より、派遣の重要性と意義をお話いただきました。次に、16名の現職教員から帰国報告として任地での活動と帰国後の活動についてお話をいただきました。次に、派遣現職教員サポート活動の代表者から平成19年度の活動報告をしていただき、最後に4名の帰国隊員と筑波大学附属小学校教諭1名に派遣経験を活かした帰国後の活動についてパネルディスカッションを行ってもらいました。本報告書は、それらの概要を収めています。

全国からお集まりくださった140名の参加者にお礼を申し上げますとともに、青年海外協力隊を通して派遣される現職教員支援の輪を、今後とも皆様と広げていきたいと思います。

平成20年2月
筑波大学教育開発国際協力研究センター
センター長 中田 英雄
教授 佐藤真理子
准教授 磯田 正美
研究員 鎌田 亮一

目次

プログラム	1
開会挨拶		
中田 英雄（筑波大学教育開発国際協力研究センター長）	3
青年海外協力隊の重要性		
文部科学省大臣官房国際課長 吉尾 啓介	5
独立行政法人国際協力機構（JICA）		
青年海外協力隊事務局長 大塚 正明	9
派遣現職教員の活躍		
分科会 1		
千澤 賢太郎（17-1, ベリーズ, 養護）	13
(千葉大学教育学部附属特別支援学校)		
佐野 由美子（17-1, ブルガリア, 家政）	33
(新潟県長岡大手高等学校)		
小川 建治（17-1, ミクロネシア, 日本語教師）	51
(大阪府柴島高等学校)		
尾形 美沙子（17-1, セネガル, 小学校教諭）	61
(藤沢市立湘南台小学校)		
分科会 2		
小野 祐文（17-1, 南アフリカ共和国, 理数科教師）	65
(横浜市立潮田中学校)		
齋下 徹（17-1, パラグアイ, 養護）	77
(静岡県御殿場養護学校)		
植松 早苗（17-1, モザンビーク, 野菜）	87
(静岡県立田方農業高等学校)		
梯 泰三（17-1, ガーナ, 理数科教師）	97
(徳島県上板町立上板中学校)		
分科会 3		
野原 俊之（17-1, マーシャル, 小学校教諭）	107
(茨城県龍ヶ崎市立長山小学校)		
永井 亜紀子（17-1, ベトナム, 青少年活動）	115
(東京都江戸川区立一之江第二小学校)		

小木曾 尚子 (17-1, シリア, 音楽)	127
(岐阜県中津川市立福岡中学校)		
佐藤 忍 (17-1, ニジエール, 体育)	135
(新潟県阿賀町立上川中学校)		

分科会4

中村 希 (17-1, セントルシア, 小学校教諭)	149
(千葉県柏市立高柳西小学校)		
石郷 則晃 (17-1, ニカラグア, コンピュータ)	157
(埼玉県立いずみ高等学校)		
中沢 智恵 (17-1, ボリビア, 小学校教諭)	165
(長野県長野市立篠ノ井西小学校)		
秋山 喜代 (17-1, バヌアツ, 小学校教諭)	177
(愛知県名古屋市立稻西小学校)		

派遣現職教員サポート活動報告

浜野 隆 (お茶の水女子大学文教育学部・助教授)	185
: 幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上		
佐々井 啓 (日本女子大学家政学部被服学科・教授)	191
: 海外派遣隊員の家政分野に関する活動支援教材等の開発		
前川 久男 (筑波大学特別支援教育研究センター・教授)	199
瀬戸口 裕二 (筑波大学特別支援教育研究センター・教諭)		
: 障害児教育分野における青年海外協力隊派遣現職教員サポート体制の構築		
服部 勝憲 (鳴門教育大学 教員教育国際協力センター・教授)	203
: 派遣現職教員の活動の幅を広げるハンズオン素材とその活動展開モデルの開発		
村松 隆 (宮城教育大学附属環境教育実践研究センター・教授)	207
: 海外教育協力者に対する環境教育実践指導と教育マテリアルの支援		

派遣経験を生かした教育活動に関するパネルディスカッション

生田 佳澄 (14-1, ホンジュラス, 小学校教諭)	211
「帰国後にもつながる学習支援」(静岡県沼津市立今沢小学校)		
堀口 かえで (15-1, ルーマニア, ソーシャルワーカー)	219
「派遣経験を生かした教育活動事例報告」(大阪府大東市立谷川中学校)		
北原 三代志 (15-1, バングラデシュ, 体育)	225
「「長野県教員等ネットワーク」の活動について」(長野県須坂市須坂園芸高校)		
鎌田 和宏 (筑波大学附属小学校・社会科教諭)	231
「筑波大学附属小学校を拠点とした派遣現職教員支援システムの構築」		

田中 統治 (筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授) 237
「パネルディスカッションのまとめ」

閉会挨拶

佐藤 真理子 (筑波大学教育開発国際協力研究センター) 239

資料

—帰国隊員報告会—アンケート集計 241

平成19年度 文部科学省・筑波大学 国際教育協力シンポジウム
 「開発途上国における派遣現職教員の活躍－帰国隊員報告会－」
 プログラム

プログラム1	10:00～10:05	開会挨拶（中田英雄 筑波大学教育開発国際協力研究センター）		
	10:05～10:10	青年海外協力隊派遣の重要性（文部科学省大臣官房国際課長 吉尾 啓介）		
	10:10～10:20	「世界に飛び出すみんなの先生」DVD上映		
	10:20～10:25	青年海外協力隊派遣の重要性（JICA青年海外協力隊事務局長 大塚 正明）		

午前	分科会1	分科会2	分科会3	分科会4
10:30～11:00	1 千澤賢太郎・H17・ベリーズ・養護 “変わらない自分の中で、変わってゆく”	2 小野禎文・H17・南ア共和国・理 数科教師 “南アフリカと国際協力”	3 野原俊之・H17・マーシャル・小 学校教諭 “マーシャル共和国での取り組み”	4 中村 希・H17・セントルシア・小 学校教諭 “帰国隊員報告”
休憩5分				
11:05～11:35	5 佐野由美子・H17・ブルガリア・家政 教育 “JOCV活動 ブルガリア共和国ガブロ ヴァ織物高等専門学校”	6 斎下 徹・H17・バラグアイ・養護 “当たり前にしていた「大切さ」を実 感できた2年間”	7 永井亜紀子・H17・ベトナム・青少 年活動 “ベトナムでの協力隊活動”	8 石郷 則晃・H17・ニカラグア・コ ンピュータ “コンピュータ技術の隊員として「で きること」”

プログラム3	11:45～12:00	派遣現職教員サポート活動報告（幼児教育）（浜野 隆 お茶の水女子大学文教育学部）			
	12:00～12:15	派遣現職教員サポート活動報告（家政教育）（佐々井 啓 日本女子大学家政学部被服学科）			
	12:15～12:30	派遣現職教員サポート活動報告（特別支援教育）（前川 久男 筑波大学特別支援教育研究センター）			

（昼食）
 12:30～13:40

午後	分科会1	分科会2	分科会3	分科会4
13:40～14:10	9 小川建治・H17・ミクロネシア・日本 語教師 “こんなことをしました。－派遣前・活 動中・帰国後－”	10 植松早苗・H17・モザンビーク・ 野菜 “Contentamento”	11 小木曾尚子・H17・シリア・音楽 “言葉が通じなくても授業はでき た”	12 中沢智恵・H17・ボリビア・小 学校教諭 “ボリビアから帰ってきました”
14:15～14:45	13 尾形美沙子・H17・セネガル・小 学校教諭 “隊員間の連携の大切さ”	14 梶 泰三・H17・ガーナ・理数科 “青年海外協力隊で経験をしたこ と”	15 佐藤 忍・H17・ニジエール・体 育 “ニジエール・ドッソ第二中学校に おける体育授業”	16 秋山 喜代・H17・バヌアツ・小 学校教諭 “バヌアツ サント島ルーガンビル 市での音楽教育普及をめざして”

プログラム3	14:55～15:10	派遣現職教員サポート活動報告（ハンズオン教材）（服部 勝憲 鳴門教育大学教員教育国際協力センター）			
	15:10～15:25	派遣現職教員サポート活動報告（環境教育）（村松 隆 宮城教育大学附属環境教育実践研究センター）			

派遣経験を生かした教育活動に関するパネルディスカッション				
15:30～16:10	「帰国後にもつながる学習支援」（生田佳澄／ホンジュラス・小学校教諭／静岡県沼津市立今沢小学校教諭） 「派遣経験を生かした教育活動事例報告」（堀口かえで／ルーマニア・ソーシャルワーカー／大阪府大東市立谷川中学校教諭） 「長野県教員等ネットワーク」の活動について（北原三代志／バングラデシュ・体育／長野県須坂市須坂園芸高校教諭） 「筑波大学附属小学校を拠点とした派遣現職教員支援システムの構築」（鎌田和宏／筑波大学附属小学校教諭）			
16:10～16:45	ディスカッション			
16:45～16:50	まとめ（田中統治 筑波大学大学院人間総合科学研究科）			
16:50～16:55	閉会挨拶（佐藤真理子 筑波大学教育開発国際協力研究センター）			

開会挨拶

中田 英雄

(筑波大学教育開発国際協力研究センター長)

皆さん、新年明けましておめでとうございます。お正月の気分の抜けない中、おそらく皆さん方はこの会合が今年第一番のお仕事といいましょうか、そういうことになっていると思います。今日お出でいただきまして、遠路はるばるお出でいただいた方もあると思います。本当にありがとうございます。私は実はこの会を毎回楽しみにしております。それは派遣された先生方がまず無事に帰国され、そして現地でいろいろな体験をなさってきたことを心からお喜びしたいと思います。そう思いたいです。まずは帰国した先生方が無事にお帰りになったことを関係者とともに喜びしたいと思います。先生方は1年9ヶ月ぐらいですか、現地で活動なさっていろいろなことを体験し、そしてある時は驚きの連続であったかもしれません。その中で確実に何かを感じ取られ、そして自分の中に取り込まれたんじゃないかと思います。今日はそういう話の一端をお聞きできれば幸いです。

帰国してまだ間もないと思いますけれども、そのような印象、そういったものは帰国後に徐々に頭の中に沈殿していきます。そして沈殿していったものが徐々に自分の学級の中に学校の中にあるいは社会の中に少しづつ、意識するかにかかわらずそれが滲み出てまいります。そういったものを私は楽しみにしています。いったいそれは何だろうか。先生方が途上国に行かれて日本の学校にあって途上国の学校にないもの、また途上国の学校にあって日本の学校にないもの、そしてどちらの学校にもあるもの、そういったものを直接体験されたものだと思います。そういう体験をこれから長い教職経験の中でまとめ上げていただいて血となり肉となり、それが授業の中に社会的な活動の中に生きていることを期待します。若いときの経験は年をとつてからの経験とは全く異質なものです。若いときに経験してよかったですと思われることが、何回もそういうことを体験されるんです。現地に行かれた先生方はいったい何を体験されたのでしょうか。今日は短い一日ではありますけれども関係者とともにその経験を共有したいと思います。是非よいお話、そしてちょっといいお話、そしてこんな驚きがありましたということを私たちに聞かせていただければ幸いだと思います。先生方のそのような体験が私たち大学の関係者にとって今後サポートしていくための大きなヒントになると思います。私たちもサポートする側として今日は勉強させていただきます。今日一日ありますけれども是非先生方のご発表を期待しております。

今日は遠路はるばるお集まりいただきまして本当にありがとうございます。では一日先生方のお話を聞いて勉強させていただきます。どうぞよろしくお願いします。ありがとうございました。

筑波大学 共催：国際協力機構(JICA)



プログラム1

青年海外協力隊の重要性

文部科学省大臣官房国際課長 吉尾啓介

独立行政法人国際協力機構 (JICA)

青年海外協力隊事務局長 大塚正明

青年海外協力隊派遣の重要性

吉尾 啓介
(文部科学省大臣官房国際課長)

みなさん、あけましておめでとうございます。実は10年ほど前に、教育協力の仕事に携わったことがございまして、その当時いろいろ書いた報告書の中で青年海外協力隊への教員の現職参加がより円滑に進むように方策を講じるべきだというふうな報告書を書いたものでございますが、それが現代の現職参加制度ということに結びついてこうやってみなさんが帰ってこられた、これから出かけられるというお姿を目の当たりにして、非常に感慨深いものがございます。そういうことを書いた人間であるにもかかわらず、実はこのような報告会に出させていただくのは今回初めてでございまして、10年来こういう機会が訪れるなどを心待ちにしておりました。中田先生、先ほど毎年楽しみにしてこられるということでございましたけれども、うらやましい限りでございます。今日は最後までいろいろとお話を聞かせていただきたいと考えております。それから少々遅れましたが、ご帰国になられました隊員のみなさまにはお帰りなさいと、それからこれからお出掛けになられる皆様方には元気でいってらっしゃいということを、まず申し上げておきます。

文部科学省はこのご案内の通り、教育に関わる仕事をやっておる役所でありますけれども、なかなか開発途上国での教育協力という点ではなかなか目に見えるかたちの活動ができているかどうか自信のないところがございます。10年くらい前からそのあたりに力を入れだしたわけでございます。伝統的にどちらかと言いますと、高等教育でありますとか技術教育といった面での協力にかなり力を注いできた感がございますけれど、1990年のジョムティエン、タイのジョムティエンでの万人のための教育という宣言がされてから、初等中等への協力をどう進めていくかというところにかなり注目を集め、その中で文部科学省でも何ができるかということでいろいろな諸策を講じてきたわけでございます。その中でこの直接的に初等中等教育に対する初等中等教育の現場に貢献できる現職の先生方を派遣ということは、非常に重視をしてきたところでございます。この6年間で、現職派遣制度ができて6年経っておりますが、この6年間でもうすでに437名の先生方にお出掛けいただきまして、来年度は72名の方にさらに参加していただくということで、着実に成果を上げているものと考えております。文部科学省といたしましては、初等中等教育の分野に限りませず、全体的に教育分野への国際教育を進めていかれる大学あるいは関係団体の方々の努力を支援しようということで、国際協力イニシアティブという事業を実施いたしておりますが、その中で特に現職参加制度で出かけられる先生方を支援していくということで、筑波大学をはじめとします6つの大学等に、派遣された先生方の現地での活動や帰国後に実施される教育関連活動の支援を行っていただいております。本日はその関係でいろいろ成果が上がっておりますものを皆様方、また出かけられる先生方に活用していただこうということで、本日付の日付が刷ってございますが、冊子を用意させていただいておりますので、お持ち帰りいただいて参考にしていただければ有難いことであるというふう

に考えております。また筑波大学教育開発国際協力研究センターにおかれましては、皆様方の派遣前研修、派遣期間中の相談助言等の支援をいただきておるところでございまして、皆様にとって心強い味方であると考えております。この場を借りまして筑波大学のセンターの皆様方に感謝を申し上げたいと考えております。

この1月5日のこのシンポジウムが今回皮切りということでございますが、特に日本各地でこのような制度の重要性、意義について理解を深めて、それから関心を持っていただくということが今後多くの方に参加していただく上で非常に重要であるというふうに考えておりまして、全国でシンポジウム、ワークショップを展開するということを計画いたしております。今月から来月にかけてまして高松、仙台、大阪でのシンポジウム、ワークショップを予定しておりますので、開催地付近におられます先生方、またお知り合いがそういう近隣の都市におられる先生方、広く呼びかけていただきましてこのようなシンポジウムにぜひ多くの方が参加していただけますように案内をいただければ有難く存じます。

さて、今年は洞爺湖サミットということで、中心的な課題は地球環境ということになるようございますが、それも開発途上国との関係でいろいろなイシューが含まれておるものでございます。また、TICADアフリカ開発支援会議、これも予定されておりまして、今年は開発途上国への協力、特に教育といった場面でのいろいろなイシューがとりあげられて、広く皆様方の関心にのぼることかと思っております。皆様方、教育の現場におかれましてそういった動きについても注目をしていただきまして、皆様方の活動の中にいろいろな形で還元していただきたいというふう考えております。

翻りまして日本の教育の現状でございますけれども、教育再生会議がいろいろ提言をされております。それから中央教育審議会で学習指導要領の改訂という作業が大詰めを迎えておりまして、これからますます現場の先生方、ご苦労多いと思います。それから先生方を取り巻く状況というのも免許更新制というふうなことが導入されて、いろいろな研修が取り入れられる、学校評価が厳密に行われるということで、非常に現場の先生方大変になられるなというふうに考えております。一方でOECDが12月の初旬に発表しましたPISAの学力国際比較調査の結果ということでなんとなくいまひとつ元気が出ない感じがする日本の教育界でありますけど、何もそんなに悲観することはない。改善するところは改善すべきでありますけれども、悲観すべきことではない。日本の教育には誇るべき強さが十分にあるものと考えております。ではその強さは何なのかということを本当はもう少し十分に研究して売っていけるような形にしたいものだと考えております。そういった意味で国際協力イニシアティブでいろいろな活動を大学の関連の先生方に展開していただきておるところでございますが、よく考えてみると開発途上国での教育協力というのはなにも、日本が高所にあって何かをしてあげているということでは全くないということを実感される先生方多いのではないかと思います。我々も何を日本として提供できるのかということを考え、どのように提供したらいいのかということを工夫していきますと、教育協力はなんというかつまるところ自分磨きの活動なのではないだろうかというふうな思いを強くいたしておるところでございます。現職教員派遣の重要性という題で挨拶をせよと言われたわけでございますが、若干教育協力に関して課長として日頃思っておることをまとまらないかたちでお話する形になりました大変申し訳なく思います。最後にな

りますが、本日のシンポジウムが皆様方の交流の場としていろいろな形での実り多い機会になりますことを祈願いたしたいと思います。最後になりますが、JICA青年海外協力隊事務局の本シンポジウムの開催にあたりましての多大なご支援をいただきましたことに感謝を申し上げまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。



—現職教員特別参加制度— ～その成果とこれからの課題～

大塚 正明
(JICA青年海外協力隊事務局長)

あけましておめでとうございます。ただいまご紹介にあずかりました、JICA青年海外協力隊の大塚でございます。本日は本シンポジウムの共催者としてご挨拶を申し上げます。

おかげさまで、青年海外協力隊における現職教員参加制度も今年で6年目を迎えました。先ほどのビデオでご覧いただけましたとおり、現在派遣中の隊員165人が、現職教員として派遣されています。またすでに帰国されて、日本の教育現場に復帰された方は、272人になりました。あわせて437人ですが、当初の予定では、1年間で100人を予定しておりましたので、600人が派遣されているとしたんですけれども、少し下回っているといえます。ところで、開発途上国では、ひとりひとりの幸福につながる開発のプロセスとして、大変重要なのが教育分野での協力です。貧困や平均寿命の差など、様々な開発課題の多くは、就業率の差とか、また教育の質の問題などに起因しています。直接的な教育現場への協力は、開発途上国の子どもたちへの教育のみならず、同僚教師、そして地域コミュニティに与える影響として非常に大きな効果があります。特に日本での教育経験を活かしながら活躍する現職教員の活動は、現地でも非常に高い評価を得ています。約2年間ものあいだ、1年9ヶ月ですが、現地の人々と同じ目線で生活をし、教育活動をする青年海外協力隊は、開発途上国に対して与えるだけではなく、多くのものを得て帰ってきています。国際協力におけるボランティア活動は、とくに教育の分野においては、一方通行の協力ではなく、双方の協力、ということがいえると思います。

青年海外協力隊の事業としましては、3つあります。まず、開発途上国の経済および社会の発展または復興への寄与、2つ目は、開発途上国との友好親善および相互理解の深化、そして3つ目は、ボランティア経験の社会への還元という3つの目標です。1つ目、2つ目につきましてはすでに様々な報告をお聞きになっていることと思いますし、また本日の分科会において、帰国隊員の方々の実体験における報告を聞いていただけると思いますので、ここでは3点目の社会還元に関連して少しお話をさせていただきたいと思います。

昨年の夏に、我々JICAの方で、現職教員特別参加制度で派遣された、そしてすでに日本の学校に復職された先生方約200名の方に対してアンケート調査を実施いたしました。この参加特別制度の（事業報告書）も取りまとめております。その報告書は本日資料コーナーに展示しておりますので、ぜひ後でご覧いただきたいと思います。その中で特に、お伝えしたい次の2点について、この場をお借りしまして、皆様方と共有させていただきたいと思います。

まず最初に、よく尋ねられる質問としましては、現職教員が協力隊に参加することは何がメリットなのか、ということをよく聞かれます。これにつきまして、アンケートの中で、特に教育現場にとってよかつた点は何ですかという質問を行いました。このような結果が出ております。日本の教

育の長所や短所を再確認できたという人が91人で最も多いわけですが、次いで、広い目で学校教育を考えられるようになった、また、他の業種・分野の人とのつながりができたという回答が多くなっています。生徒を多角的かつ柔軟に見られるようになったという回答と合わせますと、教育に対する批判とともに、広がりということを体得してこられたことが明らかだと思います。また協力隊らしいのは、他の業種・分野とのつながりという回答ですが、派遣前訓練や現地での隊員同士での交流を通して、他の隊員仲間とのネットワークを構成し、帰国後も多いにそれを活用されています。復職した学校でのキャリア教育のゲスト講師として、他の業種の帰国隊員をよび、子どもたちに将来の様々な選択肢を提示していくという話をよく耳にしております。

次に、協力隊経験を帰国後の学校現場にどのように還元していくかということについて調査を行いました。やはり具体的に、国際理解教育の内容が充実したという回答が最も多く、納得のできるところです。また、協力隊参加前との大きな変化として自覚されているのが、外国籍児童への対応を含めた、子どもたちへの接し方の変化で、途上国で得た実体験での自信が、背景に表れているものだと思います。習得言語を授業に役立てている、というのは、帰国後も途上国の子どもたちとの、インターネット等を通じた交流を図っているものというように理解しております。

このように、語学力もそうですけれども、海外で、地域の人々と同じ環境の中で生活をし、教師として働いたことによるコミュニケーション能力とか、また対応能力の向上は、帰国後も様々な子どもたちとの気持ちをしっかりと受け止められるということができるようになった大きな要因ではないかというように思います。この調査によって、青年海外協力隊への参加は、開発途上国に与えることだけではなく、むしろ、貴重な実体験を多く得るもの、そしてそれらが日本の教育現場に役立っているということが確認できたと思います。

ODA政府開発援助の大幅な削減によって、わが国の国際社会における立場は非常にきびしい環境であります。国民一人ひとりがもっと国際問題または開発途上国の問題について関心を持つべきだと思います。この意思改革の推進に対しては、外務省や我々JICAは当然ですけれども、学校教育の現場においてさらに貢献が求められているのではないかと思います。一人でも多くの現職教員が参加されて、その実体験を教育現場や日本社会に還元していくことが、開発途上国および日本相互の利益につながるのではないかでしょうか。この事業は、文部科学省、各都道府県の教育委員会、学校・大学等、様々な多くの関係者や、また、協力隊を経験されたOBの方々、そして本日ここに出席されております皆様のご理解とご支援なしには成り立たないと深く理解しております。

この場をお借りして、今後のご支援をお願いいたしますとともに、日頃から、JICA事業に対して多大なるご支援ご指導をいただいております、文部科学省およびCRICEDの皆様方に対しまして、深く御礼のことば、また今後のご支援をお願いしまして、私のご挨拶に代えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。



**平成19年度
文部科学省・筑波大学国際協力シンポジウム
「開発途上国における派遣現職教員の活躍」
—帰国報告会—**

**—現職教員特別参加制度—
～その成果とこれからの課題～**



独立行政法人国際協力機構(JICA)
青年海外協力隊事務局長 大塚正明

jica 青年海外協力隊の目標

- 1、「開発途上国・地域の経済及び社会の発展又は復興への寄与」
- 2、「開発途上国・地域と我が国との間の友好親善及び相互理解の深化」
- 3、「ボランティア経験の社会への還元」

※JICA調査研究
「21世紀のJICAボランティア事業のあり方」2002より

jica 「教育現場にとってよかった点」

内容	人数
教育者としての経験をもつて、現地に対する理解が深まっている	41人
現地の文化に対する理解が深まっている	24人
現地の言語を話すことができるようになっている	25人
現地の土産先を経験して、現地の文化に対する理解が深まっている	57人
他の職種や分野での経験を経験して、現地の文化に対する理解が深まっている	64人
日本との教育の違いを学び、現地の教育環境を理解することができた	91人
現地の教育環境を理解することができた	50人
現地の教育環境を理解することができた	1人

jica

- ・日本の教育の長所や短所を再確認できた。
- ・広い視野で学校教育を捉えられるようになった。
- ・他の業種・分野の人とのつながりができた

jica 「協力隊経験の学校現場での活用例」

内容	人数
内国語が理解実習したの	49人
往外国へ現地の児童に対する対応に生じた	14人
し子方供でにたまわりが接	40人
や留学生語指導をするに接	20人
その他	18人

jica

- ・国際理解教育の内容の充実
- ・子どもたちへの接し方の変化
- ・外国籍児童への対応



プログラム2

派遣現職教員の活躍

分科会1	分科会2	分科会3	分科会4
千澤賢太郎 教諭 千葉大学教育学部附属特別支援学校 ベリーズ 養護	小野禎文 教諭 横浜市立潮田中学校 南アフリカ共和国 理数科教師	野原俊之 教諭 茨城県龍ヶ崎市立長山小学校 マーシャル 小学校教諭	中村希 教諭 千葉県柏市立高柳西小学校 セントルシア 小学校教諭
佐野由美子 教諭 新潟県長岡大手高等学校 ブルガリア 家政	齋下徹 教諭 静岡県御殿場養護学校 パラグアイ 養護	永井亜紀子 教諭 東京都江戸川区立一之江第二小学校 ベトナム 青少年活動	石郷則晃 教諭 埼玉県立いづみ高等学校 ニカラグア コンピュータ
小川建治 教諭 大阪府柴島高等学校 ミクロネシア 日本語教師	植松早苗 教諭 静岡県立田方農業高等学校 モザンビーク 野菜	小木曾尚子 教諭 岐阜県中津川市立福岡中学校 シリア 音楽	中沢智恵 教諭 長野県長野市立篠ノ井西小学校 ボリビア 小学校教諭
尾形美沙子 教諭 藤沢市立湘南台小学校 セネガル 小学校教諭	梯泰三 教諭 徳島県上板町立上板中学校 ガーナ 理数科教師	佐藤忍 教諭 新潟県阿賀町立上川中学校 ニジエール 体育	秋山喜代 教諭 愛知県名古屋市立稻西小学校 バヌアツ 小学校教諭

変わらない自分の中で変わってゆく

千澤 賢太郎

(17-1, ベリーズ, 養護, 千葉大学附属特別支援学校)

今ご紹介に与った千澤賢太郎と申します。現在千葉大学附属特別支援学校で養護教員をやっています。現在やっているのは、生活単元を極める学校でして、遊びという活動を一生懸命やっているのですが、今日はこのような場をお借りして私が2年間ベリーズという国で何をしてきたかというのをお話できればと思います。私も3年前、ちょうどこの時期、1月の初めに同じようにこの場に座らせていただいて、その頃はまだベリーズって何だろう、どこだろう？隣の人に「あんたどこ行くの」みたいな、ドキドキ、ワクワクしながらいた頃でした。それが3年経った今、どうなって帰ってきたのかというのがご紹介できればと思います。よろしくお願ひいたします。

まずベリーズと聞かれて、今までベリーズという名前を、聞いたことがありますか？私は知りませんでした、派遣されるまで。どこの国で何なのだろうと思っていました。これがベリーズの国旗なんんですけど、現物でお持ちしたのですけど、見てわかるように、中に人がいるんですよね。国旗の中に人が入っているというのは世界でベリーズだけだそうです。場所はどこにあるかというと、中米です。ここにメキシコのユカタン半島があります。先ほどのビデオでホンジュラスの先生の紹介があったのですけど、ホンジュラスが真下にあります。その上の小さな小さな国です。大きさは日本の四国程度の大きさしかありません。本当に小さな国です。また四国程度といつても、実際に人が住める地域は本当に限られていてほとんどがジャングルで、日本で言えばちょっとした町くらいの大きさのものが点々と5～6つあるくらいの国です。人口は約30万人です。本当に少ないですね。以前調べると、新宿区と同じくらいだそうでした。それが一つの国の人口だということです。人種は、先ほどの国旗にもありましたように、見てもらってわかるように黒人と白人を意味しているそうなんです。仲良くという意味なんんですけど、すごく多民族国家で、クレオールというヨーロピアンと黒人との合いの子、黒人の方は奴隸時代にいらっしゃった方々、あとはメキシコのメスチーソの方、先住民のマヤ、中国から来た人、台湾から来た人、その他ヨーロッパから移住された方がたくさんいる。5人集まればほとんどが人種も宗教も違うような、そんな国でした。公用語は英語です。各隊員の方は経験されていると思うのですが、公用語と実際現地でしゃべっている言葉は全く違います。一応英語は通じるんだけども実際は現地の言葉ということでした。私は北寄りだったのでスペイン語がすごく話されていました。気候は熱帯、雨季・乾季しかありません。産業は、人口が少ないということなんんですけど、サトウキビ、オレンジ、観光、これくらいしかなかったような感じがしました。ほとんどが輸入に頼っている国で、そのため物価が非常に高かったです。例えば日本のペットボトル、日本で110円とかそれくらいですかね。同じくらいです。現地でも日本円で90円、80円くらいな感じの国でした。通貨はベリーズドルといいます。1 USD = 0.5 BZD ということで計算がしやすいのですけど、USDの方も非常に流通している国でした。政治は議院内閣制、

元首は未だにエリザベス女王なんです。実はこの国、1970年代にイギリスから独立したばかりなんです。その当時は英領ホンジュラスという名前でした。独立はしているんですけども未だに元首だけはエリザベス女王、お札にもエリザベス女王の顔があるという、そんな国でした。世界第2位のバリアリーフがあるということで、ダイビングする人にとってはオーストラリアのあそこと沖縄とここ、というくらい有名な所らしいです。私は行ってから知りました。ベリーズというのはこのような国です。

私は一体何をしてきたのか。その前に私はなぜ隊員に参加したかといいますと、隊員に参加した頃がちょうど30になる手前でした。そのとき病院を6年間やり終わったところなんですね。その時に疑問に思うことが多々ありまして、俺が進んできた道は合っているのかと悩み始めた頃でした。初心のときに描いたことが、今自分は出来ているのかとか、日々悩むことが多かったです。そのときにたまたま学校で現職教員参加制度のお知らせがあったので、「これだ」と思って参加させていただきました。何か挑戦したかった、というのが、参加のきっかけになりました。

配属はMinistry of Educationです。文部科学省みたいな、ここに配属になりました。勤務先はMarry Hill RC School Special EDということで、ベリーズの学校はほとんど教会が経営をしているという形でした。私の場合、RC、ローマンカトリックの学校でした。先生の給料は学校から払われるのですが、学校の経営自体は教会のグループがそれぞれやるということでした。私の場合はローマンカトリックのスクール、その中にある特殊学級という形になりました。

これは本校舎のほうで、日本と違って廊下がないので建物があつてすぐ教室という形になります。この辺が教室の入り口になるんですけど、すぐ中です、でなきや暑くてやってられないということもあるのですが。これが全校生徒です。日本でいう小学校1年生から中学校3年生までの学年がエレメンタリースクール、プライマリースクールとしていました。これが私が所属していたSpecial ED、特別支援学級というところになります。小さな小屋という感じで離れにあって、本校舎と離れているところも不都合がいろいろあったのですけども。

配属先はコロサルという、国でいう第三都市ぐらいの北寄りのところでした。配属期間は1年9ヶ月です。要請内容としましては、同校には特殊学級があり、障害を持つ生徒が在籍しているがこれを指導する専門教員がいないためということで、ベリーズはすごくアメリカから近いということもありまして、色々な情報はすごく入ってくるんですが、なんとか養護学校を作れたり、特別支援学級が作れたりしたのだけど、実際まだまだ教員を養成するという、その指導者を育てる環境がなかつたり、そういうところだったので、このようなものが求められていたのだと思います。私の地位としては、養護教員コーディネーターということです。業務内容としましては、さまざまな障害を持つ児童・生徒への指導、養護担当教員への助言・指導、養護教育センター設立の計画・立案というのが要請内容でした。ここから実際、私がどのような活動をしてきたかというところに移っていきたいのですけども、本題は先ほどお話ししたので、私の学級のお話です。

生徒は12名いました。この12名というのは、年齢は先ほどお伝えしたように6歳～15歳までいました。要するに小学校1年生から中学校3年生の子が一つの教室にいるんです。また障害児のほうも多様でして、肢体不自由を持つ方から知的な障害を持っている方、言語障害を持っている方、聴覚障害、視覚障害、全部が一つの教室に、しかも年齢はバラバラで在籍しているという形でした。

そのうち教員は1名、サポート教員ということで近くから助けを求めて、地域の方で助けを求めてということでもう一人入ってきて、あと私が入りました。

赴任して最初の3ヶ月間何もできない状況でした。何をしたらいいんだろう、先ほど言った状況が非常に辛かったです。今まで私は日本の恵まれた環境、やりやすい学校の中で仕事していたのがいきなり年齢がバラバラ、障害の形がいろいろあるという中で何をしたらいいんだろうというところで、何もできなかったのが現状でした。その中で3ヶ月間、私が最初に考えた、とにかく見よう、とにかくこの学校、この学級がどんな所なのか見よう、というところから始めて、導き出した私がやっていこうと最初に決めたことです。まず、教育課程の定義というものが必要じゃないかと思いました。授業はあってないようなものなんです。授業時間はあるんですけど、全部バラバラです。先生の気分次第だったんです。「今日は何の教科書持ってきてる?」という感じで、今日10人中8人くらいが算数の教科書を持ってきている。じゃあ今日は算数をやろうか、今日は暑いから体育はやめよう、とか、あってないようなものばかりだったので、まず時間通りに進めていくものをやっていきたいなと思いました。これは必ず必要だった、様子を知るということを考えました。今お伝えしているように、それだけバラバラな子たちがいるので、学力の差がものすごくあります、私が見る限りこの子はもっとできるんじゃないかな、という子が思ったよりできなかったり、ということがあって、まずはそこからやりたいなという、基礎的な学力はある子が多かったのでやりたいなと思いました。担任の障害理解、学級経営への提案、担任が行う授業への協力・提案、この辺が私の課題で、最初に抱えました。

それでは実際にやってきた内容をお伝えしたいと思います。第一期、最初は先ほどお伝えしたように、観察をとにかくしました。見るのがとにかく解決だと思いました。それからこれはすぐにできたことだったので、体育の授業をやらせていただきました。子供たちは外で活動するのが大好きだったので、これはすぐに授業に移せまして、このような形で体育の授業で、これはマラソンをやっていました。これはソフトボール投げ。これは縄跳びをやりました。これは日本で私がやっていたことだったので、バケツベースというものをやりました。これは子供たちには好評で、サッカーがやはり人気だったので、それを少し変化した形のようなものだったので、とても人気がありました。たまには他の、これは体育教員の方なんんですけど、活動に来てもらって一緒に協力してやったこともあります。これは日本でよくやられている(ボッチャ)というゲームなんんですけど、これをやりました。これは教材がなかったので、実はこれ、赤いガムテープと青いガムテープでぐるぐる巻きにしただけなんんですけど、十分にできました。中に砂を詰めて石を詰めてガムテープでまとめたという感じです。

第二期、ここが中心になっていくところなのですが、私が中心を置いていた個別指導をやらせていただきました。最初に言ったように学力の差がすごくあるというところで、これは一人ひとりを見ていかなければいけないなというのを非常に感じました。その中で、このように一人ひとり抽出という形で別教室を用意していただいて、一人一週間に2~3回しました。この辺の教材は随分その辺から集めて作ったりしました。教科ができる子は教科を、教科まで行けない子に関してはそのような個別に合った内容をやりました。できる子はパソコンも指導したりしました。中心としては第二期ということで中盤は個別指導、一人ひとりの指導を中心に行いました。

第三期をということで、これは最後の4ヶ月なんですけど、これは私が一番やりたかったことです。何かというと集団授業というものが成立していなかったんです。授業は集団で行われていたんですけど、先ほど言ったようにその日の担任の気持ちによって何をするかということもありますて、できない子はもちろん置いていかれますし、できる子でも遊んでいても教員は何も言わなかつたのでは是非これは集団でやるものとということで、作業をやりたいなと思いまして計画しました。実はこれ最初に計画していたんですけど、なかなか機会が無く、やっと最後の3～4ヶ月目で、ゴーサインが出て、出来ました。何も無いところから作っていきました。教室の前の芝生の上でいらない廃材を使って、現地の方と一緒に作っていきました。農作業を選んだのですが、これは私がやってきたということで選ばせていただきました。こんな感じで子供たちと毎日共に働くということでやらせていただきました。3ヶ月しかなかつたんですけども、なんとか一通りの過程を終えることが出来まして、最後、大根を収穫できて、みんなで食べました。

こんな感じで私はやらせてもらったんですけど、やってきたことは体育、個別指導、作業ということだったんですけども、私は最初すごく悩んでいました。何かというと、現地で自分は何者なのかということでした。JOCV、ボランティアなのかそれとも日本から来た教員なのか、何なのかというところで非常に葛藤したことがありました。その中で私が導き出した答えというものは、日本の教師でなくボランティアでもなくこの学校の一教員でありたいなと思いました。その中で私の支えになったものは私がやってきた6年間でした。それがここベリーズの活動での全てになりました。体育にしても個別の支援に關しても、やってきたものは全て日本で私が学んできたことでした。逆にそこしかなかつたんです。何か新しいものを、変えていこう、この国に合ったものを、というのを考えていたんですけど、なかなかうまくいかない日々が多くありました。その国に合わせていくのは大切なことだったんですけど、まずは自分がどんなことをやってきたのかなというところが大切でした。この2年間私が学んだことというのは、題名にある言葉なんんですけど、変わらない中で変わっていくというのは、私の中では思い、願いというのは何一つ変わらない、変わりはなかつたんですけどそれが結果的に周りが変わっていくことになったのかなと思いました。

2年間やってきたことでそのようなを感じ、帰ってきました。私は今何をしているかというと、なかなか養護学校の場合は還元できないところがあります。正直、全く何もできていません。何かできないかなという気持ちはあるのですけど、出来ないでいるところがあるので、今後その辺を私なりに探して考えていきたいと思っています。





ベリーズについて

人口: 約30万人
面積: 日本の四国程度
人種、民族: クレオール、ガリーナ、メスチーソ、マヤ、中国、台湾、その他
公用語: 英語
気候: 热帯(雨期、乾季)
産業: サトウキビ、オレンジ、観光
通貨: BZD(ベリーズドル 1USD=0.5BZD)
政治: 議院内閣制
元首: エリザベス女王
その他: 世界第2位の長さのバリアリーフがある。
1970年代、イギリスより独立。
(前英領ホンジュラス)

概要

配属省庁名
Ministry of Education, Sports, and Youth
勤務先
Marry Hill RC School Special ED
勤務先所在地
Croatal
配属期間
平成17年9月～平成19年3月(約1年9ヶ月間)





要請内容

要請理由

同校には特殊学級があり、障害を持つ生徒が在籍しているが、これを指導する専門教員がいないため。

隊員の地位

養護教育コーディネータ

業務内容

- ・様々な障害を持つ児童・生徒への指導
- ・養護担当教員への助言、指導
- ・養護教育センター設立の計画、立案

配属先の概要

学校の概要

コロサル地区最大級の小学校。1977年設立。クラス数18(幼稚部、特殊学級含む)。生徒総数500名弱、教員数22名、スタッフ2名。年間予算規模17,500USドル。(人件費を除く)

特殊学級の概要

- ・生徒: 12名
- ・年齢: 6歳~15歳
- ・障害種: 知的障害、ダウン症、肢体不自由、情緒障害等
- ・教師 2名(内1名はサポート教師)

学級の課題と隊員の活動

- ・教育課程の整備
- ・生徒の実態把握
- ・生徒の学習能力の底上げ
- ・担任の障害理解(児童・生徒理解)
- ・学級経営への提案
- ・担任が行う授業の協力・提案

活動説明

第1期: 平成17年9月~12月

第2期: 平成18年1月~6月

第3期: 平成18年9月~平成19年3月

活動第1期

- ・学級観察
- ・体育の指導(教育課程の整備) 
- ・実態表の作成(生徒の実態把握)  
- ・学級状況のレポート作成(学級経営の提案)  





第2期

- ・学校調査
- ・個別指導計画の作成(生徒の実態把握、担任の障害理解)
- ・週案の作成(教育課程の整備)
- ・授業記録の作成(担任の障害理解)
- ・個別指導(生徒の学習能力の底上げ)
- ・成績表記入
- ・学級状況のレポート作成(学級経営の提案)

Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
1 9:00 10:00 10:00～10:15	Eric <input checked="" type="checkbox"/> Eric <input checked="" type="checkbox"/> Christpher <input checked="" type="checkbox"/> Christpher <input checked="" type="checkbox"/>	Eric <input checked="" type="checkbox"/> Michael <input checked="" type="checkbox"/> Michael <input checked="" type="checkbox"/> Michael <input checked="" type="checkbox"/> Shenell <input checked="" type="checkbox"/> Shenell <input checked="" type="checkbox"/>	Morning Meeting	Friday
2 10:15 11:30 11:30～1:00	Juan <input checked="" type="checkbox"/> Juan <input checked="" type="checkbox"/> Florita <input checked="" type="checkbox"/> Florita <input checked="" type="checkbox"/>	Amir <input checked="" type="checkbox"/> Amir <input checked="" type="checkbox"/> Florita <input checked="" type="checkbox"/> Florita <input checked="" type="checkbox"/> Jorge <input checked="" type="checkbox"/>	Rest	
3 1:00 1:50	Daisey <input checked="" type="checkbox"/> Daisey <input checked="" type="checkbox"/> Ana <input checked="" type="checkbox"/> Celia <input checked="" type="checkbox"/>	Goftey <input checked="" type="checkbox"/> Goftey <input checked="" type="checkbox"/> Ana <input checked="" type="checkbox"/> Ana <input checked="" type="checkbox"/> Amir <input checked="" type="checkbox"/>	Lunch Time	
4 2:00 2:30 After School				Cleaning





第3期

- ・作業学習の準備(隊員支援経費の活用)
- ・作業学習の開始(教育課程の整備)
- ・引き継ぎ資料の作成
(担任の障害理解、学級経営への提案)













その他

- ・教材研究(生徒の学習能力の底上げ)
- ・障害の特徴に関する資料作成
(教師の障害理解)

成果と課題

- ・教育課程の整備
 - 音楽と美術の授業、生活訓練学習(調理・洗濯など)
- ・生徒の実態把握
 - 継続
- ・生徒の学習能力の底上げ
 - 継続
- ・担任の障害理解(児童・生徒理解)
 - 継続
- ・学級経営への提案
 - 新施設の設立
 - ・担任が行う授業の協力・提案
 - 教材研究
 - 研究授業

未来のビジョン

- ・特別支援教師の増員
 - ・新養護学校の設立(教室数を増やすことを含め)
 - ・教師の育成プログラム
 - ・小児科や民間支援機関の増設
 - ・福祉施設の設立
- これらに関わるポランティア
(JOCVのみならず。)

隊員として知つていて特な情報

- ・ない物は、作る、もらう、おくつもらう。
- ・とにかく、意思表明ははつきりと。
- ・記録は出来るだけ残す。
- ・言いたいことがあれば、文章で。
- ・ダメで元々。
- ・いい加減で。
- ・行動は、現地人、心は日本人。
- ・楽観的観測。(でもあきらめない。)
- ・帰国の飛行機に乗るまで、希望は捨てない。
- ・話しあは、同僚→管理職→その上→事務所の順で。

知つて得する生活情報

- ・停電は、諦めが肝心。・日本食必需品。
- ・暇つぶしは必ず持参。・遊ぶ、とにかく遊ぶ。
- ・JOCVのルールは、知つておくと特。
- ・がんばって、他国のVと仲良く。
- ・家族、仲間を呼ぶ。・ご飯はがんばって作る。
- ・夜うるさくても、寝る。・お湯がでなくても我慢。
- ・隣人が怪しげな物を進めても無視。
- ・大家とは、仲良くね。
- ・犬注意。・自転車、もっと注意。・つてはフルに活用。
- ・ネットがあれば、有効に。・ダイエットはしない。

現職教員として知つておいてよいこと

- ・所属校には、時々連絡を。
- ・新聞、電話、映像など送る。
- ・出発前に現場で友だちを増やしておく。
- ・帰国半年前には、所属長に連絡。
- ・帰国後のこと何パターンも考えておく。
- ・現職ではない学校隊員と協力を。
- ・持っている教材は、宝。(日本の教科書、参考書)
- ・筑波さんの拠点システムを有効利用。

あなたは、JOCVとして仕事をしますか？
日本の現職教師として仕事をしますか？
それとも新しい立場をつくりますか？

きっと、期間中これを痛烈に問われる事でしょう。
どうしても比較をしてしまう事も多くあると思います。
帰国してからも色々なことがわかると思います。
どのような活動をしても。
ご活躍とご健康をお祈りしています。



ブルガリア共和国ガブロヴォ織物高等専門学校

佐野 由美子

(17-1, ブルガリア共和国, 家政, 新潟県長岡大手高等学校)

よろしくお願いします。新潟県立長岡大手高等学校の佐野由美子です。現職教員派遣制度を利用して、平成17年度4月より2年間青年海外協力隊としての派遣に参加させていただきました。今年度4月より、新潟県立長岡大手高校に、派遣以前中に在職していました学校より転勤しまして、現在に至ります。

ブルガリア共和国の概要等については、時間がありませんので、紙面をご覧ください。ブルガリアの位置ですが、ヨーロッパの地図の中で、このように小さな、黒海に面した所にブルガリア共和国があります。私の任地でしたガブロヴォという町はブルガリア共和国のちょうど中央に位置します。東西を分ける長い山脈があるのですが、バルカン山脈という所です。ブルガリア共和国の大きな産業の一つであるバラの産地であるカザンラクという所から写したバルカン山脈で、山の向こう側が私の任地になります。

2年間ですが紙面で内容をまとめてみました。これから派遣される先生方がいらっしゃれば、派遣前の訓練について少しご紹介したほうがいいかと思いまして内容に入れたのですけども、そうではないのかなという感じもありますので、ざっとスライドだけご紹介します。

見たこともないキリル文字から始めたブルガリア語ですが、二人の先生に丁寧にご指導頂きました。教員として、二人の指導方法は私も非常に参考になり、お二人とも語学の先生ではありませんでした。男性の方は新聞記者で特派員として日本にいらっしゃった方です。女性の方は旦那さんのお仕事が日本ということで、一緒にブルガリアから日本に来てまだ間もないということでした。訓練の後、お二人の日本語のほうが非常に上達したんじゃないかなという感じもあります。語学だけではなくいろんなことがあった訓練の様子です。このスライドは、私の6人派遣された同期の仲間たちと先生二人と語学交流のときにお迎えした二人と写真を撮ったものです。後半に広尾訓練所とブルガリアJICA事務所との衛星通信で任地の様子を知るということがあったのですが、当初の要請内容に無かったファッショングループのカリキュラムも学校に全くないので、作ってほしいということがここで初めて知らされました。修了式で任国のほうに赴きました。1ヶ月間のホームステイ生活をしながら語学訓練を受けて、語学の実践実習ということで幼稚園へ実習に行って、最終テストに合格して任地に向かいました。

私の任地のガブロヴォですが、人口7万人程度の中規模の町です。産業は衣料品の製造、皮革製造等が中心になるような町です。気候については明瞭な四季を持っているブルガリア共和国なのですが、夏は最高気温35度くらいのこともありました。冬は、私の住んでいたところはバルカン山脈の麓にあたりまして、非常に寒くてなってマイナス30度という寒さの日がありました。冬の道路はアスファルトの上に氷が張って、歩いて靴の底の跡がついているという状態です。上の写真は、冬

は太陽があまり当たらないのですが、天気の良い日がたまたまあったので写してみたものです。食料についても、非常に野菜、果物が豊富でとてもおいしくて、体を壊すことなく2年間過ごすことができました。上の写真はロマといわれる家族で、ごみ収集所を転々と進んでいて、生活に使えるものがないかということを生活の糧にしている様子です。

私の勤務先だったガブロヴォ織物高等専門学校です。校舎は非常に古くて、大きな校舎ですが、ガラスが割れているところもあります。前の部分はコンクリートですがここはグラウンドで、体育の授業をやっていました。車が停まっているのですが、この写真は卒業式のときで来校者が多く駐車場代わりに使っているということです。非常に古い学校で、職業訓練校です。生徒数約300名で、10年前に比べると生徒の人数が約半分近くになっているということです。14クラスありました。コースが非常に多く、織物、ニット、皮革製品、コンピュータ、衣料製造、服飾デザイン、関連コース等のクラスがありました。教師数は36名です。要請内容は、ガブロヴォ織物高等専門学校で、日本の高校1~3年生にあたる生徒に、ファッショントレーナーとして学生の製作に助言を与えることがおおきな要請内容でした。先ほどお話ししましたファッショントレーナーのカリキュラムを考えてほしいということがありました。

今日は時間が短いのですけれど、要請内容であったガブロヴォの織物高等専門学校での授業の内容プラスソフィア観光総合学校という所で日本料理の講習会をやりましたのでそのお話、また日本で私が在職していました新潟江南高等学校とグランチャロフ総合学校という所で絵画交流をしましたので、それについてお話したいと思います。

ファッショントレーナーの授業ですが、当初私が事務所に聞いていた話ですと、私のカウンターパートの授業に助手のような形でついてアドバイスしていくということだったのですが、学校に行きましたらあなた一人で最初から選択授業を作るから教えてくださいと言われ、いきなり一人で授業を持つことになりました。カウンターパートもいますから、カウンターパートが授業を観に来て授業内容の参考にしていく形になりました。選択授業ということで、日本の教育とここもまた違うところなのですが、全校から希望者を募る、コンピュータをやっていても、それから染めをやっていても、どんなことをやっていても、やりたかったらどうぞという形でしたので、いろんなクラスからいるので、私が頭に描いていた形どおりの、日本の高校の被服科でやっているようなファッショントレーナーの授業内容はそっくり当てはまりませんでした。基本的なところから、それからいろんなコースで参考にできるものを入れたほうがいいのではないかということで、授業内容を考えました。学校の担当の教頭先生も、好きなようにやってください、日本人の働き方を同僚に見せる、それから日本の文化、日本らしいものをその中に入れて授業を組み立ててくださいということでしたので、試行錯誤の中でやってきました。

新年度が9月からですから秋に入って木々も色づいてきて、とてもきれいだなと思って、だんだん寒くなってきたので、外に日に当たって生徒たちといろんな話をしながら授業をするのもいいかなと思って、そういう機会がないことだったので、スケッチをしたものを作り、刺繡で表現をしました。コンピュータを選択している生徒はそれもまたグラフィックで利用することもできるんじやないかと思いましてそのように進めてみました。縫い物をするときはこのような教室でしました。これは女性用のパンツの製図の絵です。縫い物をするときはこのロシア製のミシンと、ロックミシン

というスカートの裾などを切りながらかがつていくミシンを使っていました。

授業の後半のほうには、日本の文化を取り入れるということで浴衣を作つて、着物の形を実際に作つて理解する、そしてそれを洋服のデザインに入れたいと思っていたのですが、そこまでは時間が足りなくてできませんでした。ブルガリア製の材料を使うことが私の大きな一つの目的でもありましたので、学校に要請はしてあったのですが、なかなか材料が買えない、買うお金がないと言われ続けて、予定より2ヶ月くらい遅れてこれは完成できないかも知れないと思ひまして、思い切つて校長先生に直接、こういうことをしたいという計画があるのだけれどどうしたらいいかという話をしました。じゃあすぐに買いに行こう、という形になりました、こういうところが面白いところでもあったのですが、それまで私のほうで苦労もしたのですが、このようにして浴衣を製作しました。ブルガリアでこここの生徒たちが初めて自分で着物を作つたと思います。帯も作りました。帯には本当は合わない布だと思うのですが、学校側がどうしても光沢のある布でやりたいということで、つるつるした薄いサテンという生地で作りました。これなんんですけど、帯に結んでもほどけてしまって駄目なんだと言っても見た目が大事だということで、どうしてもこれでやりたいということで、私も硬くするために、中にちょっと厚いネルのような、いらないシーツのようなものが学校にありそれを貰つて、中に入れて芯の代わりにしたり、工夫して着ました。布が買ってもらえない間は、茶道をやつたり、書初めなどもやりました。時間稼ぎではないんですけど、こういうことも取り入れて、ピンチをなんとか乗り越えて無事に完成しました。男子生徒が着ている浴衣はJICAのブルガリア事務所にあったものを借りたものです。

文化祭が年度末の5月にありました。ファッションショー、それから作品展示会が町の中心地であります、その様子です。ブルガリアの生徒たちだけで考えた着物のイメージがこんな形です。ろうけつ染めの模様を施して、こんな形になっています。これはカウンターパートの授業で製作したデザイン画です。後ろの作品とも展示しました。これはニットのコースの生徒の作品です。ここで日本文化紹介ということでファッションショーの中で生徒の作品を発表しました。音楽は沖縄の三線の民謡を使って生徒たちが表現しました。小物なんかも、私は何も言わなかつたんですけど、雑誌等を見て、自分たちのイメージする日本というものをうまく表現できたんじやないかと思います。

年度末ですが、卒業式がありました。カウンターパートのクレメナさんは1年間一緒に仕事をしました。新年度は、彼女は私なしで、私の授業内容を参考にして自分で授業を組み立てているというふうになって、私のほうはどうだったかというと、実は担当の教頭先生が病気で、新年度の授業の組み立てが滞つてしまつて、授業が組み込まれませんでした。で、どうしたかというと、あなたやりたいんだったら自分で生徒を集めなさいと言われて、自分の授業計画を張り出したり、前年度の授業を受けた生がまたやりたいと言ってきましたので、その生徒に何曜日だったら、何時からできる?という形で、自分で生徒を集めてやりました。新年度の60周年を迎える記念行事があり、ここでまた作品を発表しました。後期の、これは私の母校である大学の先生方から贈つて頂いた材料を使ってバッグのデザインをして製作をしました。

首都ソフィアの観光専門高校で日本料理講習会の講師をしました。この学校は料理の隊員を希望していたそうなのですが、状況が難しいということで家政分野が全部出来る隊員がいるけれどどう

かということで事務所から学校に紹介したら是非来てほしいということで、飛び込みの要請という感じでしたが、3～4ヶ月くらいでしたが、ここで料理を教えました。ただブルガリアで簡単に手に入るるものでという条件だったので、味噌などは手に入りません。味噌汁はデモンストレーションでやりました。サラダを作るときもキュウリは非常に大きいキュウリで、アクが強いのですが、板ばらをして塩で少し揉んであくを取って柔らかくして、皮を少し使って、盛り付けると非常にきれいになると先生たちがよく感想を言ってくれました。日本の料理はきれいで野菜をたくさん使って栄養価も高いということで理解して頂きました。非常に熱心な先生方で予習をしてきて、私が実習のときに行くと、先生方は非常に素早く動いていました。お米はありますが魚はいなかったのですが、お寿司をどうしても作りたいということだったのでサーモンやハムやチーズを使って、つまり寿司、簡単に出来る料理をお教えしました。

時間がなくなってきたのですが、もう一つの活動で、絵画交流会をやりました。新潟の高校と、コンピュータ隊員のいる学校と、絵画交流することになりました。この学校が、何か日本とやりたいという話を出して、後輩の隊員が「佐野さん何かないかな」ということだったので、「じゃあこんなことはどうかな」と提案して即やつてみようということで、私も日本に電話をして、始めることになりました。10月31日、展示会の初日ですがオープニングセレモニーの展示会場の前で学校の吹奏楽部の生徒が演奏する、JOCBも皆でイベントを企画することで大変大きな初日になりました。日本の私が勤めていた学校でも文化祭でブルガリアの様子を展示したり絵画の展示もするということを行いました。それだけで終わってしまうのもつまらないと思いまして、私の任地でも、私の勤めていた学校の作品を是非紹介したいと思いまして、展示会をすることになりました。展示会場を探すのに非常に苦労たのですが、ブルガリア人の友人が助けてくれまして、学校の一部に教育博物館があつてその中のブースを借りることが出来まして展示しました。私たちは書道の作品を文字として見ますが、ブルガリアの方は絵というふうに見るんです。何が書いてあるのかわからないので、私は正しく伝えたかったので、一つずつ作品にどういう技法を使ったのか、何を書いてあるのかを全部翻訳して展示をしました。そのときの友人の助けが非常に大きかったです。この作品を博物館の希望により寄贈することになって、今もあります。この年の5月にまたゴルナのほうで展示会があつて、そこで、今は大使が替わりましたが、そのときの福井大使ご夫妻が見学に来られたときの写真です。

私の2年間弱ですが、活動で非常に苦労したこともあります。ブルガリアの事務所の方の「上手くいいたらおかしいと思え」という言葉がいつも頭にあったのですけど、日本で仕事をするときもこれは大変なことで、ブルガリアでやるといつてもそんなに上手くことは運ばないとはわかっていたのですけど、苦労して、そのときにはブルガリアの友人、それからアジア支部の仲間の力、日本の方、大学の先生方、それから日本の職場の同僚が力になってくださいました。相手の望むボランティアの難しさ、あとは、熱意で何とかするというのは私はあまり好きじゃないのですけど、そういうところも勉強になったなというのと、健康第一でなければできなかつたなと思います。相手の望むボランティア活動の難しさというのは、要請内容があつて私たちは派遣されるわけですが、時間差もあります。要請内容が実際には変わることもあって、そこでやはり柔軟に対応できなければ相手が望む活動は難しいんじゃないかというふうに感じました。状況を見ることがとても大事だと

いうことがわかりました。

現職に復職しまして、新しい長岡大手高校で、家政科被服科の学校なので、私の活動の紹介をしたり、授業内容でブルガリアの民族物を紹介したり刺繡を紹介しながら自分の中に取り入れて関係活動をしていきたいと思います。

以上で終わります。



平成20年1月5日
平成19年度文部科学省・延喜大学国際教育協力シンポジウム

「JOCV活動
ブルガリア共和国ガブロヴォ織物高等専門学校」



新潟県立長岡大手高等学校
佐野由美子

自己紹介

佐野 由美子

- × 新潟県公立高等学校家庭科教員
- × 新潟県立新潟江南高等学校在職中、現職教員派遣制度を利用して、平成17年4月より平成19年3月まで青年海外協力隊参加ブルガリア共和国にて家政隊員として活動
- × 平成19年4月より新潟県立長岡大手高等学校に勤務、現在に至る

ブルガリア共和国概要

- × 面積：11.09万km²（北海道の1.4倍、緯度が北海道あたりに位置する）
- × 人口：797万人
- × 気候：南は温暖湿润な地中海性気候だが北側は冬の冷込みが厳しい
- × 時差：日本との差は-7時間（サマータイム期間は-6時間）
- × 首都：ソフィア
- × 民族：ブルガリア人（約80%）、トルコ系（9.7%）、ロマ（3.4%）
- × 言語：ブルガリア語、文字はキリル文字を使用
- × 宗教：大多数はブルガリア正教（ギリシャ正教等が残る東方教会の一派）
- × 政体：共和制
- × 元首：ゲオルギ・バルヴァノフ大統領（2002年1月就任、2006年再任）
- × 議会：一院制（240名）
- × 通貨：レバ（レヴァ） 1 Lev=約76.5円
- × 産業：農業、酪農、近年はIT（主にソフトウェア関連）産業が発達

ブルガリア共和国とJOCVの歴史

- × 681年 第一次ブルガリア王国成立
- × 1185年 第二次ブルガリア王国成立
- × 1396年 トルコによる占領
- × 1879年 第三次ブルガリア王国成立
- × 1944年 共産主義政権成立
- × 1946年 ブルガリア人民共和国成立
- × 1989年 共産党独裁体制終焉
- × 1991年 民主的な新憲法採択
- × 2007年 1月よりEU（ヨーロッパ連合）加盟
- × 1993年（平成5年）2月15日初代青年海外協力隊員派遣
- × 2006年（平成18年）12月最終隊員赴任、現在17名活動中

ブルガリアの位置 <http://www.state.gov/j/diplomatic-map-of-bulgaria>



任地ガブロヴォの位置



発行/駐日ブルガリア大使館「ブルガリア」より引用

国の中南部に東西を横断するようにバルカン山脈が走る



山脈の向こう側が任地ガプロヴォ。ブルガリアの南に位置するカザンラク市内より撮影

ブルガリア派遣中スケジュール

- × 平成17年4月から6月
広尾青年海外協力隊訓練所で派遣前訓練を受ける
- × 平成17年7月
ブルガリア共和国赴任、現地語学訓練開始
- × 平成17年8月 任地にて活動開始
- × 平成19年3月 帰国



派遣前訓練



苦しかった訓練ですが素晴らしい仲間と出会いました。この仲間とともに青年海外協力隊員としての力を身につけるために訓練を乗り切りました。

スタニスラヴァ・フィリボバ先生



コンスタンティン・ラネヴ先生



ブルガリア語担当 2人の恩師

「朝の集い」とランニング前の風景



朝6時屋上集合「朝の集い」



朝の集いが終わり、ランニングに向かう

訓練開始、間もない頃

4月末ブルガリア大使館にて

イースターのお祝いで
大使館に招待されました



毎日宿題、毎週テスト・・・

2人のお客様を迎えて語学交流会

野球 日本語教師の二人 デザイン
政治 お客様 先生 生態調査

語学訓練

広尾訓練所とブルガリアJICA事務所との衛星通信で任地の様子を知る

派遣語研修修了式

訓練生は全ての訓練課程を修了し、語学試験に合格し、無事修了式を迎えた。

私たちには青年海外協力隊員として、それぞれの任国に赴いた。

平成17年7月ブルガリア共和国に赴任

約1カ月間、首都ソフィアでホームステイをしながら現地語学訓練を受けた。

現地語学訓練開始

ソフィア市内の幼稚園に語学実習に行きました

園児の名前を聞き、折り紙で作った首飾りに書いて、プレゼントする

「日本の伝承遊びを紹介」
ペットボトル製の剣玉と糸電話を園児と製作

語学教室にて筆記試験終了



JICAブルガリア事務所にて
ブルガリア語スピーチテスト



最終語学試験に合格し8月に任地ガプロヴォに向かった。

現地語学訓練最終テスト

任地ガプロヴォ



バスセンター

ガプロヴォのシンボル「鐵治屋ラチヨ・コバチヨ像」



町のシンボルイゴト橋

市役所



エタル屋外民族博物館



ソコルスキ修道院



ロマの家族



ガプロヴォの冬



野菜・果物が豊富な市場の様子



冬の道路は厚い“氷の道”となる

ガプロヴォ織物高等専門学校



- × 1946年設立ガプロヴォ地区最大の職業訓練校
- × 生徒数約300名
- × 9年生から12年生まで合計14クラス
- × 織物、ニット、皮革製品、コンピュータ、衣料製造、服飾デザイン関連コース等14コースがある。3・4・5年のコースがある
- × 教師数36名

ラドゥコフ校長

要 譜 内 容

- 1 勤務先：ガプロヴォ織物高等専門学校
- 2 指導対象者：16歳から18歳の生徒
- 3 業務内容：ファッショントレーナーとして学生の作品に助言を与える。

活 動 内 容

- 1 ガプロヴォ織物高等専門学校で教員として生徒を指導
 - (1) 選択ファッショントレーナーの授業を受け持ち、日本独自のデザインや手法を取り入れた授業展開を実施する。
 - (2) ファッショントレーナーの教育課程の編成
- 2 ソフィア観光高校にて教員対象の日本料理講習
- 3 ゴルナ・オリヤホヴィツツア市ヴィチヨ・グランチャロフ総合学校美術専攻生徒の作品と新潟県立新潟江南高校の美術・書道作品の交換交流を行う。後に、日本からの作品をガプロヴォ市にある国立教育博物館に寄贈する。
- 4 その他
 - (1) エタル屋外民族博物館民芸品品評会にて日本文化紹介ブース設置
 - (2) ソフィア県ロゼン村民族衣装交換交流会
 - (3) 国際婦人クラブバザー参加

3つの活動について話をします

1 「ガブロヴォ」
での授業について

2 「ソフィア」
での日本料理
講習について

3 「ゴルナ」と
新潟の絵画交流
について

時間がある場合は、その他の活動やブルガリアの生活文化についてお話をします

1 ガブロヴォでの授業について

(1) ファッションデザイン授業



教室



ロシア製ミシンとロックミシン



(2) 浴衣の製作

材料はブルガリア製の綿プリント地を
使用。日本製の布地よりも幅が広い。



浴衣製作は本来、型紙を使いませんが、
生徒がわかりやすいように型紙を作り、
使用しました。
生徒は長い型紙と布に戸惑いながらも
一生懸命製作しました。

浴衣と帯の縫製

どうして帯はこんなに長いの??

帯の中に不用布を入れ、芯の代わりにしました。つるつるした生地なので苦労して縫いました。

冬休み明けに書き初めをしました

学校に予算がなく材料が買えないかも知れないというピンチもありましたが、無事に完成!!

(3) 文化祭 5月31日

町の中心にある公園を会場に作品展示とファッショショードが行われた

音響担当の生徒

ヘアメイクはボランティアの生徒

染色コースのクラスが授業で製作した着物

デザイン画

授業内容の展示

刺繍作品

ファッションショー

ブルガリアの高校生による日本文化紹介



(4) 5月末 卒業式



卒業生の門出を祝う花のアーチを作りました

日本でいう成人式のようないい意味がある“バル”卒業と共に成人（18歳）を祝う

9月から新年度が始まります。

2006年度は私の授業が時間表に組み込まれないという大きな壁にぶつかりました。

そこで自分で生徒を集め授業をすることになりました。授業計画を生徒に提案し、希望を募りました。

また今年度の大きな学校行事の知らせがありました。

大きな学校行事“文化祭”を経え、年度末を迎えた

カウンターパートのクレメナさん



ガブロヴォ織物高等専門学校創立60周年記念行事が行われた。

10月20日は学校での記念式典

そして

10月21日は市役所ホールで議員や企業からの来賓にファッションショーを披露した



(5) 創立60周年記念行事 10月21日

(6) 活動後期の授業



浴衣の生地を使ったバッグのデザインと製作を行った

2—ソフィア観光高校での教員対象 日本料理講習会について

観光専門高校は2006年5月創立記念式典のなかで世界各国料理を披露したい、という要望で講師を探していました。

学校側の「ブルガリアで手に入る材料で日本料理を教えてほしい」という要望にこだえるためにレシピを紹介し、調理方法を2005年冬から教員対象に講習した。

**ソフィア観光専門高校
教員対象日本料理講習会開催**

メニュー
かつ丼・ツナサラダ和風ドレッシング・味噌汁のデモンストレーション

ブルガリアのキュウリは日本のキュウリより大きく、厚い皮をむいて使用する

箸の使い方

生徒も参加

メニュー
手まり寿司・和風デザートかぼちゃの茶巾包・点茶デモンストレーション

試食と点茶デモンストレーション

3 ゴルナ・オリヤホヴィツァ市ヴィチョ・グランチャロフ総合学校と新潟江南高等学校の藝術・書道作品交換交流について

任地ガブロヴォから約30km北に位置するゴルナ・オリヤホヴィツツア市にヴィチョ・グランチャロフ総合学校があります。

この学校は1年生から12年生まで同じ校舎で学び、美術・コンピュータそして英語専攻のコースがあります。

この学校にはコンピュータ隊員が教員として勤務しています。

ブルガリアと日本の間に橋を架けるために

2006年6月学校訪問・10月日本から作品到着

校長先生と教頭先生

江南高校から交流についての承諾書が到着

新潟江南高校から美術・書道作品が到着

2006年10月31日 展示会初日



「オープニングセレモニーの様子」
JOCV主催イベントとして書道・
茶道・折紙などの日本文化紹介を行った



書道デモンストレーション



2006年12月 ガブロヴォ市国立教育博物館で展示会を開催



作品は国立教育博物館に寄贈することになった



2006年9月 新潟江南高等学校文化祭で ブルガリアの生徒の作品を展示紹介



その後、新潟市内にある
国際交流協会で2回目の
展示を実施

任地ガブロヴォでの展示会が実現



展示中の展示会場



展示会場探しや作品内容翻訳の
力になってくれたアニーさんと

生徒の作品が両国の懸け額になることを期待します



2007年5月ゴルナ・オリヤホヴィツア市内で展示会が再び開催された



日本大使館福井大使夫妻が展示会見学にいらっしゃいました

JOCV活動で思ったこと

- × ブルガリアの友人そしてJOCVの仲間、日本の皆さんからの応援が困難を乗り越える“力”となった
- × 相手の望むボランティア活動の難しさ
- × 自分の思いを伝える熱意で人の輪が広がる
- × 健康第一

1 生徒対象に青年海外協力隊活動紹介

2 ブルガリア民族衣装のデザインやモチーフを授業内容に取り入れる

3 平成20年2月新潟県高等学校教育研究会家庭科部会で青年海外協力隊活動報告を予定

帰国後の還元活動



以上で終わります

ありがとうございました

ブルガリアの生活文化



祝日5月24日教育文化の日



小中高・高等専門学校の生徒、大学生、教職員によるパレード



首都ソフィアにある地下室を利用した商店



ブルガリア北西「チプロフツイ」の風景



郊外の一軒家

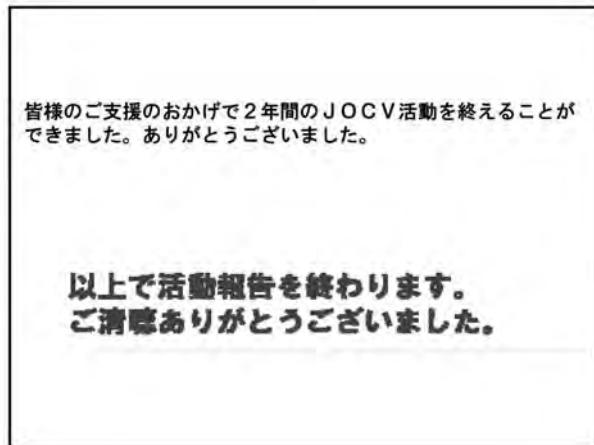


薪ストーブは暖房器具そして調理器具



新鮮な野菜・ハーブを使ったブルガリア料理





こんなことをしました。 －派遣前・活動中・帰国後－

小川 建治

(17-1, ミクロネシア, 日本語教師, 大阪府立柴島(くにじま)高等学校)

小川と申します。よろしくお願ひいたします。本日いろんな方が参加されていると思うのですけれど、一番切羽詰っていらっしゃるというか、切実なのはやはり4月から参加される方だと思うので、一応その方に向けてのお話ということで進めさせて頂きたいと思っております。よろしくお願ひします。

まず、いきなりなんですが、これ、実は僕がミクロネシアから持つて帰つてきたものなんですが、何だとお思いでどうか?後ろの皆さん、これちょっと触つてみてください。この長さももしかしたらポイントかもしれません。この布なんですが、今から3つ選択肢を挙げたいと思います。どれか一つに手を挙げて下さい。1番、スカート。2番、テーブルクロス。3番、お葬式の飾り。どれか一つに挙げてください。正解は全部です。1番にも2番にも3番にも使います。ちなみに4番目としては、お別れのときとかに、さよならの印として渡すものもあります。これは、僕は4番の使用目的としてもらいました。決して1番ではないです。このようなもの、実物(を端から回したい)と思うのですが、是非触つてわかるもの、実物を皆さん持つて帰られるといいかなと思っています。では、始めたいと思います。

まず、小川と申します。広島生まれの広島育ちです。こんな情報いらないですね。2000年、柴島高校の商業科の教員、簿記とか情報処理を担当しております。2005年、5年間働いた後に青年海外協力隊に参加いたしました。ミクロネシア連邦の日本語教師でした。去年の4月に柴島高校、幸いにも同じ学校に復職させていただきました。なぜ協力隊に行ったかといいますと、まず私は大学を卒業してすぐに教師になったものですから、非常に、このまま教師をやっていて、自分が民間の社会人というものを経験したことがなかったので、それでいいんだろうか、生徒に伝えるものがあるんだろうかとコンプレックスを持っておりますので、何か自分の世界を広げたいということがありました。それから、日本や外国の言語・文化への興味。あと困りたい。これは最初のコンプレックスとも関係しているのですが、ものすごく困った状況に陥ったときに自分がどうするのだろうかという興味があつたんですね。ちょっとMっぽいということもあります。それで、どうやつたら困るんだろうかと、どうやら日本にいるままでは、便利だし人も知り合いもいっぱいいるし困れなさそうだと。自分をとことん困らせようと思ったらどこに行つたらいいか。やっぱり途上国かなと思ったわけです。ということで、きっかけは自分のためだったんですね。でも、それでいいと思います。ボランティアというと、誰かのために自分を捨てて何か、というイメージがあるのですが、本当に自分のためでいいと思うんです。皆さんは教師ですので、悲しいかな、教師の性というものがありまして、子供を目の前にするとつい、この子のために何かしたい、と思ってしまうんですね。ですので、私も最初は自分のためでいいのだろうかと思っていた部分があつたんですけど、ミクロ

ネシアに行ってみて子供の顔を見ると、やっぱりこの子達に何かを伝えたい、何かしたい、と思ったんです。ですから、必ずそういうふうに意識が変わるべきが来ますので、それでいいと思います。

ミクロネシア連邦ヤップ州のヤップ島という小さな島に一つだけ高校があつたんですが、そこで日本語や日本文化を教えてきました。ここが日本です。そしてミクロネシアのヤップ島、ほぼ赤道に近いところですが、ありました。本当に小さな島で、人口が5000人くらいでした。周囲が9×9キロメートルなので、自転車で一周できる島です。有名なのは石のお金で、石のお金は現在でも使われています。それからふんどしですね。現地の人は普段はTシャツにGパンなんですが、正式な伝統衣装はふんどしをはいて、上は何も付けません。男女とも、女性もトップレスという状態です。

学校の様子です。これがヤップ高校の敷地なんですが、平屋建ての建物がひたすら続いているという状態でした。これはあとから出でますけども、スクールバスです。これはすべてアメリカの援助で貰った、貰い物のバスです。校長。こんなの校長でいいのかと思われるでしょうが、一番右端に移っているのがJICAの職員なんですが、彼が駄目ですね。南の島でこういう格好をしてはいけません。左の方が、正しい働く格好です。右が間違っております。学校の様子、これは卒業式なんですけども、左側は僕のステイ先の弟です。アメリカ式の卒業式ですので、35度とかいうクソ暑い中でこのような格好をしております。右側はこれは小学校の卒業式なんですが、これは（ヌーヌー）という首飾りをかけられればかけられるほど祝福されている印なんですね。ですので最後にはこんなふうにえらいことになるわけなんですが、こういうふうに作ったものをかけてもらうほど、幸せというか、おめでとうと言ってもらっているということになります。

これ、気になる成績表というものなんんですけど、成績の付け方はアメリカ式でした。A B C Dがあつて、EがなくてFが落第です。それぞれにプラスとマイナス、AプラスとかBプラスとかを付けることができます。上から2番目は僕のクラスなんですが、この子は割と賢かったのでAマイナスを僕は付けていますね。欠席、遅刻とあるんですが、ものすごく大目に見てます。そのあと態度とか努力、それから参加度、課題とあるのですが、それぞれに対してコメントを付けます。僕はそれぞれ、良いとか素晴らしいとかあるのでそういうのを選んでいるんですが、このコメントが、日本で教師をされている方からすると信じられないようなコメントの候補があるんですね。「いつもバカ」とか、そういうコメントがあつたりして、こんなの選んでいいのかなというものがあるんですが、そんなものも入っていました。アメリカ式です。これが、アメリカの大学とかに入学するときに必要になるので、割と皆成績は必死に良い成績を取ろうとするのに、努力は一切しません。なので成績だけを気にして、何もそこに結びつく行動はしないというのが彼らの特性でした。

これが日本語クラスの様子です。これもアメリカの援助で建てられた建物なのでとてもきれいなんですが、僕が前で授業をしておりまして、今ひらがなを教えているところですね。これはかるたをしているところです。先ほど卒業式のときにかけていたヌーヌーという頭飾りを皆つけています。これは箸で豆を移すゲーム。本当は小豆とかあつたらいいのですが島ないので、島の豆を使って、箸は日本から送ってもらっています。これは何だと思いますか？これはフルーツバスケットなんですね。現地にもちろんフルーツバスケットはないのでこれが日本の遊びかどうかは疑問なんですが、これも授業中にやつたらめちゃめちゃ白熱しまして、椅子が壊れたりとか、足打撲とか、ものすごい状態になります。高校生とは思えない。どんなに写真をちゃんと撮ろうと思ってもぶれると

いう、いかに彼らが速く動いているかがわかると思います。これは習字ですね。書道を教えているところです。本当に彼らの集中力はすごいのですが、飽きるのも、5分で飽きます。

これは学校のチャイムなんですが、まず学校システムの違いですね。ほとんどすべてアメリカのお下がりでした。教科書も、授業のスタイルとともにすべてアメリカのお下がりでした。ですので、歴史の時間といったら、アメリカの教科書を使ってアメリカの歴史を教えているんですね。何かおかしい、という気がします。行事や祝日はほとんどありません。ほぼ毎日授業です。会議がめったにない。これはめっちゃ嬉しかったんですけど、僕は今、日本の所属校で週に3回会議があるんですね。定例の。それぞれが2時間ずつくらいあるんですけど、ミクロネシアでは、会議は3ヶ月に1回あるかないかでした。保健室がない。これもすごいですよね。体調不良を訴えても放っておかれます。精神的につらいとか言おうものなら誰も助けてくれません。これもすごいなと思いました。時間割が毎日同じ。これは、順番は変わるんですけど、ひたすら同じ時間割を毎日繰り返すんです。でないと皆忘れる。月曜日が何とか火曜日が何とか覚えられないと思います。チャイムが適当。僕最初、チャイムを守りなさいよと言っていたんですけどチャイム自体が、この鐘を教頭が鳴らすんですけど、教頭が鳴らし忘れたりとか、寝ていて5分遅れるとか、毎日あるんですね。だからチャイムが適当に鳴るので、「チャイムを守りなさい」とは言えずに、非常に最初はストレスがたまりました。自分で鳴らしに行ったろかと思いました。突然の授業キャンセル。今日はこの後大掃除、とか急になるんですね。あとは雨が強くなったので帰ります、とか。もうまさしく南の島のハメハメハ大王状態でした。外国人教師の多さ。これはもうフィリピン人とかアメリカ人とかが非常に多かった。日本人の僕も含めて、現地人の教師があまりいなかったです。現地では、教師という仕事があまりいい仕事として受け入れられていなかった、給料が安いとかいろんな待遇面があると思います。それから、もう何もかもがない。予算不足、備品不足、教員不足です。ホワイトボードのペン1本貰うのに3ヶ月くらい言い続けないと貰えなかつたりとかしました。

困ったこと、大変だったこと。言葉がわからない。これはもちろんですがしょうがなかったです。公用語は英語なんですが、日常的には島の言葉を皆使いますので、その島の言葉が最初まったくわからず、という状態でした。とにかく時間にルーズ。パーティーが5時からやでと言ったら、パーティーが本当に始まるのは夜の8時とか、そんな感じが日常茶飯事でした。何もかも忘れる。宿題を1回出したのですが、全員が、きれいに心の底から忘れました。普通日本だったら、知っているけどわざとやらなかつたとかあるじゃないですか。そんなのなし。もう本気で心から皆忘れているんです。盗む・壊す。これは本当に悩まされました。日本の雑誌とかを持ってきていたんですけど、ものすごく盗まれるんです。JICAのシールさえ盗むんですよ。あんなん誰もいらんと思うんですけど。ものすごく盗まれました。ひたすら暑い。これは毎日、雨季と乾季なんんですけど、ものすごく暑いです。食材がない。野菜が全然食べれなかつたです。伝染病が多い。これはマラリアではないんですけども、デング熱という病気があります。蚊に刺されることで感染するんですけども、非常に怖い病気がありましたので、蚊に刺されないようにキンカンとムヒは常に持っているという状態でした。でもそれでこそ協力隊。日本と一緒にでは意味がないと常に自分に言い聞かせていました。

嬉しかったこと。慣れると皆ものすごく親切。例えばスーパーに行ったとき、この肉高いから買

わん方がいいよ、とか言ってくれるんです。大きなお世話なんですが、そういうこともあります。ものすごく皆親切で、皆が僕のことを知ってくれていたので、声をよくかけてくれました。日本好き。やはり、日本統治の時代がありました。1914年から1945年まで30年間日本でしたので、おばあちゃんおじいちゃんが日本語を話せるという人がほとんどでした。本当に、こういう海を見てもらつたらわかるんですよ、美しい自然がありました。素朴で素直な生徒たちでした。帰るとき、島を離れるときには、「日本にいつか行きたいんだけど、大阪って所にいるんだよね。空港に行って、賢治はどこだ、って探すからね」って言ってくれたんです。人口5000人ですから、空港に行って賢治はどこだって言つたら本当に僕に辿り着くんですよ。だから日本の1億2000万という人口が想像もつかないんです。「空港に行って賢治を探すからね」ってマジ顔で言っているんです、高校生が。

逆カルチャーショック。日本に帰ってきてから、会話が全部わかる。これはすごいことなんですよ。電車とかに乗っていると、隣のカップルの余計な会話とかが全部聞こえるので鬱陶しいということがありました。言いたいことが全部言える。今もそうなんんですけど、細かいニュアンスも含めて全部言えてしまうという、これが素晴らしいことだなと思います。知り合いがいない。梅田の、大阪の街をどんなに歩いても知り合いに会わない。これはすごいですよ。僕の住んでいたヤップという島では、スーパーに行くだけで皆に見られ、僕が昨日何を買ったかを皆が知っています。だから知り合いがいないのは本当にすごかったです。ハイテクにいちいち感動。エレベーターや！とか思いました。エスカレーターで！とか、あとはそういうハイテクではなくても、例えば常にきれいな水が出るとか、それから電気は絶対停電しないとか、本当にすごいなと思いました。あと丁寧なのに無表情な人々。例えば接客でも、店に行ってものすごく丁寧な言葉を使っているんだけど、いまいち無表情な感じというのがありました。あとこれは僕自身のことなんですが、やたら人に触る。帰ってきて、「元気やった？」とか言いながら男を抱きしめたりとかしてしまうんですね。ということで、やたら人に触るようになってしまって、最初は気持ち悪がられました。あと遅刻魔化。素で遅れるんです。向こうでは皆が遅刻することに腹を立てていたのに、帰ってきたら僕、仕事の大切な約束に普通に遅れるとかしていました。なくす・忘れる・間違える。こんなの日常茶飯事で、同僚から貰った大事なデータをなくしたりとかしていました。「なんてよく考えられているんだろう！」。これは仕事なんんですけど、例えば4月の最初の年度初めの会議に、普通に3月まで、年度末まで予定が決まっているというのがすごいなと思いました。ヤップだったら、来週のことも決まっていないですね。まあその日のことも決まっていないんですけど。そういうことがありました。

所属校に向けての発信ということですが、手紙・カード・ビデオ交換。それから月に一度通信を出していました。教え子の手紙、本人が書いたものに私からの手紙を同封。これは、僕が担任を日本でしていたときに、皆が卒業式のときの自分に向けて手紙を書いてごらん、と言って、実はもうそのとき僕は協力隊に行くことが決まっていたんですがそれを隠して、皆に書かせて、それをヤップから僕の手紙を同封して、1年後くらいに、皆が卒業したときに送ったということをやったんです。それからクロスロード。JOCVの雑誌ですね、それからJICAのホームページへの投稿などをしていました。この写真は僕の所属校に向けて子供たちが手紙を書いているところです。

3月までにしておいてほしいことなんですが、今の仕事を、まずきっちりとしてほしいと思います。あいつはよ行ってほしいわ、くらいなのでなく、できれば、あいつがいなくなるのは痛いけど、

でもあいつやつたら頑張つていけそうやしな、と言われるような仕事ぶりをしてほしいなと思います。ブログかＨＰ、僕も作ったんですけど、是非とも作っておいてください。訓練所に入ってからでは、時間がありそうでないので、あと訓練が終わってから出国まで1週間～10日くらいしかないので、是非とも作っておいてほしいなと思います。それから協力者、転勤しそうにない人を見つけておく。これも大事で、僕は英語の先生を見つけていろんな、例えば通信とかをコピーして印刷するのをお願いしてから行きました。本当に助かりました。学校生活の写真や映像を撮る。これは本当になんでもない、例えば昼休みの写真とか、そんなのでもいいと思うんです。もちろん行事とかの写真でもいいと思います。あとは学校生活以外でも例えば家族の写真とか。向こうは本当に家族を大切にする国が多いと思うので、家族を、お父さんとかお母さんをすごく見たがるんですよ。だから家族写真、普段撮っていないと思うんですけど、是非撮られたらいかなと思います。

活動中にしてほしいこと。一緒に写真やビデオを撮る、自分が写っているもの。なかなか自分も撮ることがないんですよ。でも帰ってきて日本の生徒たちが見たいのはこの先生がどこで何をどんな感じでやっていたか、というのを見たいので、自分が映っているものを是非撮ってほしいなと思います。実物、さっき見せたスカートとかですね、通信。月1回がベストかなと思います。週1回出している人もいたんですが、ちょっと鬱陶しがられていました。なので月1回くらいかなと思います。それからフォトレター交換と物々交換。時差がもしかない国であれば、Web交流もできたら格好良いだろうな thought もします。これは僕はできませんでした。「世界の笑顔のために」の参加というのはJICAのプログラムで、日本の人たちからいろんな物資を送ってもらう、その費用をJICAが持ってくれるというのがあるんですけども、それに参加するといいかなと思います。ただこれは、申し込みをしてから実際に届くまでに1年くらいかかるので、タイミングが大事なんです。行ってすぐ申請をして、しかも申請の時期が決まっているんですけど、帰る間際に届くという感じかなという気がします。それから「どう伝えるか」。帰つてからどうやってこの状況を日本の子に伝えようか、ということは常に考えて頂ければなと思います。で、あせらず、楽しむ。

帰国後にしていること。まず学校で、1日1回はYappの話を絶対するぞと僕は決めています。Yapp先生と呼ばれています。ちょっと気持ち悪がられております。後任との交流。後任がいればということですね。「伝え方」のセミナー。JICAというJICAによく似た団体があるのですが、その伝え方のセミナーに参加したり、別の高校に行ったりとか。あとは地域の、僕は日本語教師だったので、日本語習得のボランティアをしたりしています。

終わりに。僕が思うに、一般隊員はこうだと思うんですね。派遣中は80%のやることがある。派遣が終わってから前後が20%。でも現職参加はこうだと僕は思います。やはり行く前とか行ってから、帰つてからいっぱいやることがあるのではないかと。これは僕自身にも言い聞かせているんですけど、そのように思います。

ということで、まずは健康第一で楽しく行って頂きたいと思います。下に活動中のブログとか、今も残っているので、もしよかつたら覗いてご参考になさって頂ければと思います。以上です。ご清聴ありがとうございました。



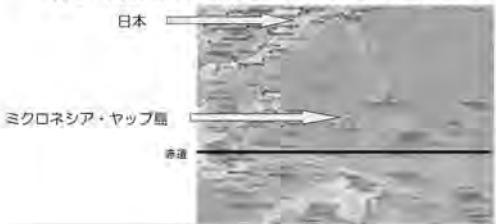
こんなことをしました。

—派遣前・活動中・帰国後—

大阪府立柴島高等学校 小川 建治

活動内容

ミクロネシア連邦ヤップ州ヤップ島にあるヤップ高校で、現地の高校生に日本語や日本文化を教えた。



自己紹介

- 小川 建治 (おがわ けんじ)
- 広島生まれ・広島育ち。
- 2000年 柴島高校の商業科教員になる。
- 2005年 青年海外協力隊に参加。
(17年度1次隊・ミクロネシア・日本語教師)
- 2007年 柴島高校に復職。

学校の様子(1)



なぜ協力隊に？

- 「新卒教師」のコンプレックス
- 日本や外国(言語・文化)への興味
- 困りたい！

そう、きっかけは「自分のため」でした。

でもそれでいいんです！！

学校の様子(2)



学校の様子(3)



授業の様子(1)



学校の様子(4)



授業の様子(2)



学校の様子(5)



授業の様子(3)



授業の様子(4)



困ったこと・大変だったこと

- 言葉が分からない
 - とにかく時間にルーズ
 - 何もかも忘れる
 - 盗む・壊す
 - ひたすら暑い
 - 食材がない
 - 虫(伝染病)が多い
- …でも、それでこそ「協力隊」。
日本と同じでは意味がない！！



授業の様子(5)



嬉しかったこと

- 慣れると、
みんなのすごく親切
(たまに親切すぎる)
- 日本好き
- 言葉にできないほど
美しい自然
- 素朴で素直な生徒たち



学校システムの違い

- アメリカの「お下がり」
- 行事や祝日がほとんどない
- 会議がめったにない
- 保健室がない
- 時間割が毎日同じ
- チャイムが適当
- 突然の授業キャンセル
- 外国人教師の多さ
- 予算不足(備品不足・教員不足)



逆カルチャーショック

- 会話が全部分かる！一うるさい
- 言いたいことが全部言える
- 知り合いがない
- ハイテクにいちいち感動
- 丁寧なのに無表情な人々
- やたら人に触る
- 遅刻魔化
- なくす・忘れる・間違える
- 「なんてよく考えられているんだろう！」



所属校に向けての発信・交流

- 手紙・カード・ビデオ交換
- 月に一度の「ヤップ通信」
- 教え子への手紙(本人が書いたものに、私からの手紙を同封)
- クロスロード・JICAホームページへの投稿



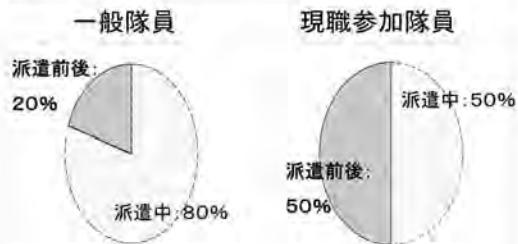
帰国後にしていること

- 学校で…
 - ・ 伝える(学年・クラス・授業・個別)
 - ・ 後任との交流(授業)
 - 校外で…
 - ・ 「伝えかた」のセミナーに参加
 - ・ 伝える(府立高校)
 - ・ 地域の日本語習得支援ボランティアに参加
- …まだまだいろいろできそうです。

3月までにしておいてほしいこと

- 今の仕事(+引継ぎ)をきっちりと
- ブログかHPを作つておく
- 協力者(※転勤しそうにない人)を見つけておく
- 学校生活の写真や映像を撮る

おわりに



活動中にしてほしいこと

- 写真・ビデオを撮る(自分が写っているもの)
- 「実物」入手する
- 通信(月1回がベスト?)
- フォトレター交換、物々交換
- Web交流(時差が少なければ)
- 「世界の笑顔のために」参加
- 「どう伝えるか」を常に考える
- あせらず、楽しむ! (^_^)

何はともあれ、まずは健康第一で、楽しんできてください。

ご活躍をお祈りしています。

ご清聴ありがとうございました。

小川 建治 活動中のブログ:<http://kyap.exblog.jp>
ホームページ:
<http://www15.plala.or.jp/everlasting-wind>

隊員間の連携の大切さ

尾形 美沙子

(17-1, セネガル, 小学校教諭, 藤沢市立湘南台小学校)

尾形と申します。よろしくお願ひします。藤沢市で6年間勤務した後に、現職参加制度でセネガルに小学校教諭ということで行って参りました。それで今も(藤沢)市の小学校に(5)年生の担任として勤めています。

今日は割と突然のお話だったのでほとんどあまり準備も出来ず、大して役に立つ話ができるかわからないのですが、これから行かれる先生方によって少しでも、ほんのちょっとでも役に立てればと思ってやって参りました。話も下手だし面白く話せるかはわからないのですが、他の先生の発表もあって非常に恐縮なのですが、よろしくお願ひします。

まず、私の任国は、西アフリカの最西端にあるセネガル共和国というところで、今日さっき人から聞いた話ですがパリ・ダカールラリーが今年中止になったということで、そのパリダカのゴールであるダカールが首都である国なんですけども、2002年にフランスを破ったというとおわかりの方もいらっしゃるかと思いますが、そのセネガルという国に行きました。国はイスラム教の国で、公用語はフランス語ですが、ウォロフ語という現地の言葉が一番よく通じます。90%以上の人人が話すことが出来て、私なども小学校教諭としてですが、普段の生活も含めると、フランス語とウォロフ語両方を使っていたかな、という状態でした。国はもちろん一年中暑くて、普段雨が降る時期と降らない時期があるかなという感じで、降らない時期の方が断然多くて、その時期に学校があります。雨の降るときは、皆さん(畑)をやりますので、学校はお休みになるということで、長いバカンスの間が雨季で、それ以外の間は乾季ということになります。

私への要請は、小学校教諭ではあるんですけど、要請内容が、環境教育だったんですね。環境教育というのは、日本の中でも総合とかでやられる先生はいらっしゃると思うのですが教科として成り立っているわけではなく、セネガルでもまったく同じことで、教科の中に位置づけられないものなので、それを図工や音楽や体育といった情操教育の中でなんとかやりなさいといったような感じです。それで私の方は大変戸惑っていました、訓練中から何を準備したらいいのかよくわからず、環境という言葉にすごく押し潰されそうになっていました。それで実際派遣されてみましてまた更に驚いたのが、その要請をもらっているのは私一人で、セネガルの中で他に環境という名前の要請をもらっている人はいなかったんです。私は職種は小学校教諭なんですが、環境教育ということにかなりプレッシャーを感じながら、最初の半年あまり何も出来ずにいたなと思っています。それが変わるきっかけになったのは、隊員同士の連携でした。それで今回、隊員同士の連携についてお話をさせて頂こうかなと思いました。その連携活動は、ちょうど今日、それをセネガルで始めてくださった隊員の方がここにいらっしゃっているんですけど本当に、その方々の始めてくださった、教員養成校での教員を対象にしたセミナーというもので、それは隊員同士で連携して行う活動なんです

ね。それをきっかけに隊員同士で集まって悩みを言い合ったりとか、それからどんなことを実際学校で具体的に教えているのかということを交換する機会にもなって、それをきっかけに自分の活動も前進したと思っています。結局私は、環境教育は捨てたというか、おいて活動することに決めたわけです。それは他の小学校教員の隊員がセネガルで、ほぼ全員情操教育の普及という要請で活動していたからです。それで私が彼らとともに活動することになって、全く見えなかつたものが、あ、前が見えたなという気持ちで、とても気持ちも軽くなつたし、悩みも話せるし、同じ問題を抱えている隊員同士手を取り合つて前に進めるな、というふうにすごく心強くて、それから先は1年間でした。

それでセネガルの学校の様子なんですが8時から朝が始まって、10時半まで、うちの学校の場合だったかもしれないんですが、ぶつ通しで子ども達は教室の中に閉じ込められています。それで30分の休憩があって11時から1時まで、というのが1日の日課です。一週間5日のうちの火曜日と木曜日だけ、午後2時間の授業があります。それで、小学校のクラスは6学年で、2クラスが標準サイズで、一応町の普通の学校は6年生まで2クラスで全部で12個の教室があつて、12人の先生プラスアラビア語の先生とか校長とか、数人ずつ交互に学校にいるという状態です。

先生たちなんですが、これはもう知つていらっしゃる方がたくさんいらっしゃると思うんですが、鞭を持っていて、子供を鞭を使ってしつけています。先生同士はとても愛想がよく仲がよく、でも先生同士の会話は主に世間話と、女人だったらおしゃれに関する話という感じで教育に関して議論するという雰囲気は全く学校になく、各教室でも本当に学級報告、という日本語もちょっと当てはまらないんですけど、仕切られた空間の中で先生が好き勝手にやっているという感じで。子ども達は教科書は、私の任地の学校においてはほとんど使われていませんでした。先生が1冊の教科書を持っていて、それをただひたすら黒板に写し、子ども達はそれをただひたすらノートに写すというような状態です。

それで、私の要請、というか自分で選んだ部分もあるのですが、図工、音楽、体育といった教科については時間割の中には一応位置づけられていて、毎週同じ時間割で、それは日本でいう文科省、セネガルでいうと教育省で定められている時間割で、その時間割は一応変えることは出来ないことになっていて、その時間割の通りに行われているはずなんですが、実際図工の授業、ほとんど見たことない。音楽、ほとんど聴いたことない。体育、ほとんど見たことないという状態でした。それで、何から始めようかなと思っていたんですが、消去法と言つたらあれなんですが、図工、材料が少ない。体育、暑い。じゃあ音楽かというような感じで、私は最初音楽から始めました。フランス語が公用語なのでフランス語の歌を調べて、人から聞いたウォロフ語の歌も調べて、ピアニカ一つで歌を教えました。普段セネガルの先生たちは、もちろんピアニカもないですから、自分の声で、自分の知つてゐる歌を教えます。一応歌詞は黒板に書いて説明もするんですが、子ども達の最終目標は歌を楽しく歌うことではなくて歌を暗唱することで、それが先生たちの目的でもあるので、鞭を使って音楽を教えるみたいな、下手をするとそういうことになりかねかいくらい、音楽を楽しむとか音を楽しむ音楽という感じではなかったです。それをなるべく楽しいものにしようかなと思って、授業を始めました。その後実際、教員養成校で隊員同士で授業を始めるということになる前は、私は図工や体育には手を出していました。でも他の隊員の方々が図工や体育を現地の先生達

に教えて、そこから私も学んで、隊員同士学んで、きっかけがつかめたなというふうに思っています。あ、こういう感じで、ここに今あるもので授業をしていけばいいんだなというようなヒントをもらって、それを任地に持って帰ってできたと思います。

大切なことは本当に隊員間の連携で、隊員間の連携も、横の連携と縦の連携があると思うんですね。縦の連携というのが前任者と後任者の繋がりだと思うんです。それで横の連携というのがもちろんその場に、セネガルに同じ時期にいる隊員同士の繋がりだと思うんです。隊員が始めたことが自分一代で終わってしまうとなったら、やはりできることはすごく限られているし、もしかすると自分一代では全く解決できないかもしれないと思った途端にそれをやめてしまうかもしれないと思うんです。そうではない方が多いかもしれないんですけど、私は自分に後任が、要請を出してもいいよ、と言われた瞬間にすごく勇気がわいてきて、あ、途中まででもやればいいんだ、というふうに思えたので、縦の連携もすごく大事だなと思います。

先ほど言いましたけれども、教員養成校の研修については未だに、もっと日取りよく改善された形で続いている、最初に始まった2005年の最初のセミナーから3シーズン目を終わろうとしていますが、たまに送られてくる今の隊員からの便りを見ても、本当に前の隊員と今の隊員のやっていることが繋がっていてそれで、セネガルの協力隊の活動は進んでいるな、と現在でも感じることが出来るので、すごくありがたいなと思っています。

今日はたくさんいいお話を聞いた後で私の話で申し訳ないのですが、もし皆さんがもっとここを聞きたいというところがありましたら、私からそのところを具体的に説明できたらいいなと思っていますので、質問を頂きたいと思います。



活動報告

小野 穎文

(17-1, 南アフリカ共和国, 理数科教師, 横浜市立潮田中学校)

おはようございます。よろしくお願ひします。先ほどご紹ひにあずかりました、17年度1次隊で南アフリカ共和国にいっておりました小野と申します。よろしくお願ひします。現在は、横浜市立潮田中学校で活動をしております。ではすみません、座って失礼します。よろしくお願ひします。

派遣期間、2005年4月12日から2007年3月19日まで、ギリギリまで、任地にいました。南アフリカ共和国の、ムプマランガ州のシヤブスワという町で、ンデペレ教育センターという、教育センターで働いていました。こちらにいる先生方、多くは学校に入ってる方が多いと思うんですけども、私の方は教育センターにはいって、カウンターパート、実際に一緒に働くひとは、教育指導主事にあたる、CI、カリキュラムジェネレーターと言っていましたけど、そのCIと一緒にはたらいておりました。D.J. Tshumaといって高校の物理化学ケミカルサイエンスの先生です。南アフリカに派遣される方はいらっしゃらないということを聞いていたんですけども、とりあえずこんな紹介をしたいと思います。真ん中の図です。インド洋と太平洋の境目です。結構すごいきれいなところですね。花がすごいいっぱい咲いていて、3分の2以上の、地球上の、花がそこにあるという。それから、これは、サバンナですね、ゾウ、ライオンとかくじらとかペンギンとか、いろんな野生動物を見に行って遊んでました。それからこれ、首都のプレトリアという場所なんですが、結構きれいな場所です。これがケープタウンですね。ご存知かと思いますけども。ケープタウンもすごくきれいな町です。観光地ですね。これは、ジャカラタという南米原産の花らしいんですけども、これは、ジャカラタがそこらじゅうにあって、紫色の、桜とはちょっと違うんですけども、まあ日本でいうと桜並木みたいな感じです。それからですね、町の中です。都会ですね、本当に。人口は600万人くらいいる都市なんですね。そこのガラス張りのやつはダイヤモンドで有名な、・・・。まあ、先進国みたいな場所なんですね。

ここに来て、俺はいったい何しに来たのか。発展途上国でみんなと苦労しながら汗水流して、なんていうイメージでは、ない。金がいっぱいある国。中進国にもう一息で入るというような。ただ、問題が一つあって、一方、私の任地のシヤブスワという町並みなんですけど、コンクリートの道路があって、町の1周分くらいあります。全然風景が違いますね。牛がそこらじゅうを歩いてて、もう、道をふさいで。それから、水ですけれども、水出ないんですね。2週間、3週間どころか、もう1ヶ月以上でないことも結構あって。出ても、水道の蛇口から、1滴2滴ずつくらい、だらだら出るだけ。ひたすらバケツの下で、何時間も我慢して水を溜めている。こここのうちは水がないですね。写真とろうとしたら金くれと手を上げました。

これが、公共の住宅です。こういう住宅がいっぱいあるんですけど、これはタダです。アパルトヘイトってご存知だと思いますけど、黒人と白人さんね、黒人白人という言い方が差別的な用語に

なっちゃうかもしれませんけれども、ここでは黒人白人と言っちゃった方が早いっていうか、生活のレベルがまるで違うので、向こうでもブラック、ホワイトというくらい、はっきりと生活が分かれていって、アパルトヘイトのせいだと思うんですけど、首都から追い出されて、こういう住宅もうまっちゃうという、

電気、これはね、もう、通ってますけど、水は出ません。箱があつて中はこのまま。何もない。ただ本当にただで入れるということで。このへんの地域の人は就職率が20%くらい、その人はどこで住んでいる、と。その、まあ、格差が非常に激しい町でした。(シヤブスワの町は)首都から100キロちょっとといったところでした。先ほど言いましたが、アパルトヘイト時代にンデペレ族のホームタウン、要するにあなたはここに住みなさいと勝手に強制移住させられた場所です。赤土で何もない、農作物は育たない、そういうところです。人口30,000人というのですが、2,000人というところから10万人というところまで、南アフリカには11個の公用語がありまして、ンデペレ族とソト族、使ってることばもまるで違います。植民地時代に使われたアフリカーンと英語と、各部族のことばがあります。

結構賑やかな町で、ここが一番中心地ですね。これ写真撮るの実はすごく怖くて、南アフリカは犯罪がすごく多いので、カメラを出して、それを人に見られると、そのまますぐ襲われる。ポケットにカメラを入れておいて、かしやっと撮って、ああすぐ逃げようと。写真を撮りたいがために行動してたという。ただこれ、唯一近代的というか、・・・。これ、ケンタッキーじゃなくてアフリカンフライドチキンという。これが自分で立てた家ですね。イリーガルハウス、もう、イリーガルなうですけど。やぎがそらじゅうにいて、扉あけたら家にやぎが。

これが私のうちだったところですね。ホームステイしました。カップがありますね。これ、カップウォーター、溜めて、入れるというよりかはひたすら溜める。蛇口がここにあるんですけども、ここからここまで水があがらないんですね。あの、水圧がなくて。これ泥棒よけの、先ほど言った通り危ないので・・・。

活動目標なんですけれども、先ほど言った教育指導主事CIと、それから地元の教師と連携して理科教育の普及に取り組むということで行ったんですけども、一番最初にやっぱり驚いたのは学力ですね。彼ら、僕らが最初に行ったのは、物理化学を専攻する高校生です。要するに理系の高校生です。大体グレード10からグレード12、要するに高校1年から3年までの勉強になるんですけども、これを調査してみた。調査をしたのは実は最後ですね。帰国間際、最後に、先生と教育委員会のほうにこんなもんだってことをちゃんと認識して授業をしなきやダメだよってことを示したくてやったんですけども、2,635人、全数調査をして、データを。これ、問題の一つですけれども、こんな程度の問題です。

五択問題で、1mは何センチですか。という問題を出したところ、答えが出たのが、高校3年生の理数科専攻ですよ、理数科専攻で30%。会話にならないですね。正直言って。まあ1キロは何メートルですかと、これ絶対わからないですね。これ五択問題ですから20%は下駄はいてるようなもんですね。ゼロに等しい数字です。ま、グラフ見ればわかります。

少なくとも1mは1センチじゃないなということがわかった人というのが高校3年生という感じです。これ、1mを手で示してみてといったんです。高校1年生です。

最初から話にならないということが。距離の感覚、数字の感覚、時間の感覚がゼロに等しいので、理科はできません。物理をやってる。式をたてろということで、182キロメートルを、120キロメートル/毎時でぶつとばしました。じゃあ何時間かかりましたか、という、式をたてなさいという問題。これだとちょっとできるんです。できると言つていいのか分かりませんが、理数科専攻です。将来はドクターになるという人たちがこのレベルです。理科ですが、一体どんなものか。元素なのか、混合物なのか、原子なのか、金属なのか。これも理数科専攻ですがまずわかっていません。硫化鉄は高校1年生ですぐ習う内容なので、絶対に知つていなければいけない。一番最初の高校1年生の授業が純粋物と混合物という、まあ、まるでわかっていないということが判明した。50点満点で、13点が、グレード10。ちなみに、五択問題なので、12.5点が下駄をはいている、ということです。彼らはテストをやると、すごくカンニングをするんですね。で、学校に問題を配つて11人が理数科専攻にいた。その11人全部同じ答えを書いてきた。これ、絶対先生が教えたなという感じかなあと思ったんですが、その平均、平均って言っても全員同じんですけど、その点数が11点でした。カンニングしても、間違った答えしか書けないというすさまじい状況で、要するにゼロからのスタートだということがわかりました。これ、数学科の同じ任地にいた人なんですけれども、もらつてきちゃたんですけれども、まあ、これが、理数科専攻です。まあ、要するに、中学校3年生で30%、高校1年生で45%の人がようやく合ってるという感じですね。それから、グラフ。この辺になるともうめちゃくちゃです。こんな感じになります。丸とか描いてるやつもいますね。一次関数ということばすらわかつていなかつたようです。

でもう読んでください。 $0.3 \div 15$ は0.09と書いている。10で割るときは小数点を左に動かす、ということを教えた人だった。そこが問題じゃなくてなんで9なの？ということを聞いて、戦いつづけるんですけども、最終的には計算機使って調べたら、合つたというほうですね。これが生徒だけじゃなくて、先生も同じレベルで、教えるときに、 $2.5 \div 10$ で、じゃあ出るかというような話をしたら、計算機をやらせて、一生懸命うつと。

10進数はわかつてるんですよ。これジャブっていうのは理科の物理化学専攻の専門の教育指導主事が、こういうことをある日先生に教えていました。これ、すみません、知つてると知らない人がいるかもしれないですが、これが酸素で、知つてますね、これが水素ですけども、これで普通は水なんですけれども、水は水素結合せずこのところういたりするはずだったんですがなぜか全部つながってる。

もう水じやなくなつてると、こういうのを堂々と、自分の地域の先生方に教える。僕はそれを見ていて、どうしようと思って、まあ彼はすごくプライドが高いので、困つたなと思って、違うぞと言ってもそれは認めてくれないので、こうやって教えたほうがもっとわかりやすいぞと、もうわかりやすいもへつたくれもないんですけど、そういうふうにしました。

ある日の教師サークルでこれも有名なベクトルの問題ですけどA地点からB地点までまっすぐ行つたら秒速1m斜めに進んでいきましたという問題があつたんですね。これは入試問題というか卒業試験問題なんですけども、これをみんなで検討しようという。図に描いたらどうなるようということをこの二つの図を描いて、永遠と議論してる。一時間くらい。僕はてっきり生徒のロールプレイをしていると思ったら、あとでそのジャブ君がやってきて、どっちが正しいの？と聞かれました。

要するにその先生が何も知らない。その前に英語を覚えて文章読みよと。なので、こんなもんかなと思って授業を始めたら、まずそれはあっさり破られた。ですので、もう0もわかつてないというここからはじめないとまずできなかつたなということでした。

それから、計算機は触らせてたら十進法理解してくれないじゃん、ということで、もう計算機使うなというところから、こんなことやってました。彼らにやつたんですけれども、いろいろやつてました。何でもかんでもとにかくやってたんですけども、そんなふうにやって。でね、環境の悪さもすごいあるんです。学校が足りないとか筆記用具がないとかいすがないとか教科書がないとか。でもそれは全然問題じゃなくて、そんなことは工夫すれば何とかなる。一番困ったのは、先生が来ない。半年以上先生がこない。15分くらい説明したら、出て行かれて、向こうでゲームやってあそんでる。で、生徒は何やってるかというとその後遊んでるんですね。何でそんなことするんだよというと、教育は生徒の自主性を育てると。自主性はほっとくということ。

もう一つ困ったのが、ミーティングをやるんですが、その日食事が出るか出ないか、それがおいしいかおいしくないか、それしか反省が出てこない。ミーティングの内容なんか何も出てこない。物をもらうことだけを考える。約束が守れない。先ほどありましたけど、先生に授業を見せて、一緒にやりましょうというと、俺は用がある、俺は忙しい、といって遊びにいくんですね。結局俺一人でやるはめになる。何も先生に教えることはできない。できた、と思って、こんなことはそんなに簡単にできないんだ、とわりきってやる、で保護者はここでは文句を言いません、まあそんなことを考えてました。あと折り紙をやったり、日本紹介のビデオをやったり、写真をとつといたほうがいいですね日本の、家族とか、学校とか、それから日本食のレシピは役に立ちません、なぜかというと食材がないから。得意なものがある人は、合気道が得だったので、折り紙はくすぐだまを。それからHP、ビデオレター、年賀状を日本に送ってやって。あまり難しいことをやってもと思ってやってました。

最後に学校でみんなに言ったことは、こういうことを伝えればいいかなと、学校全体で学校道徳こんなもんものをやっていきましょうと。こんな感じで、長くなつてすみません。



活動報告

17年度1次隊 南アフリカ派遣
理数科教師

小野 祐文

基本情報

派遣期間 2005年7月12日～
2007年3月19日

任地 南アフリカ共和国 ムプマランガ州
シャブスワ
ンデベレ教育開発センター

カウンターパート(一緒に働く人)
D.J. Tshuma (高校物理化学の教育指導主事)



南アフリカって
どんなとこ？



南アフリカってどんなとこ？
美しい自然



南アフリカってどんなとこ？
たくさんの生き物



南アフリカってどんなとこ？
美しい町並み



先進
国
？



シヤブスワ紹介

プレトリアから北東へ120km
アパルトヘイト時代ンデベレ族のホームタウンとして作られた街.
人口3万人(と聞いた)
住民の半数はンデベレ族.
残りの半数はソト族
電気水道はあるが、水道はよく止まる.
産業は特にない.



活動目標

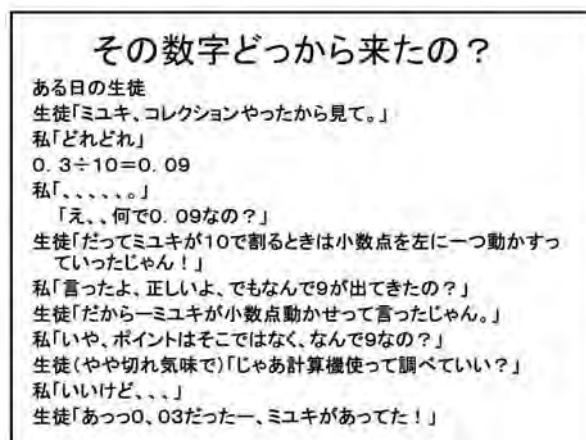
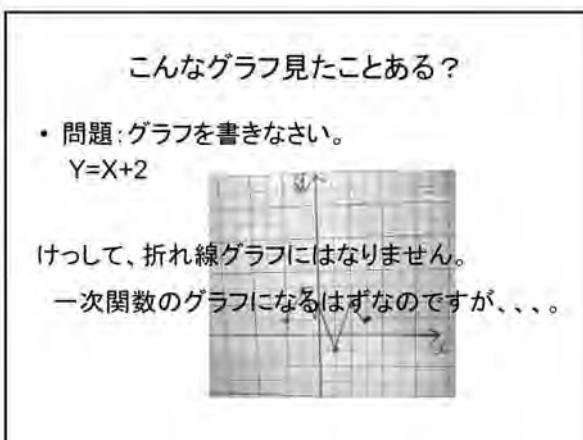
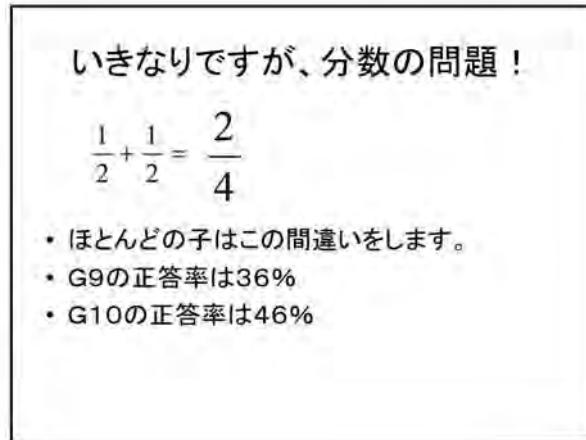
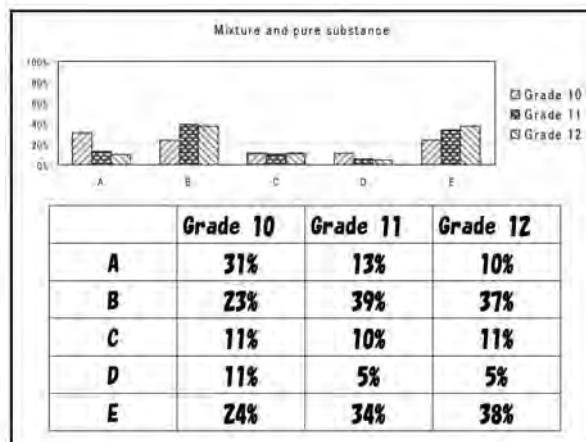
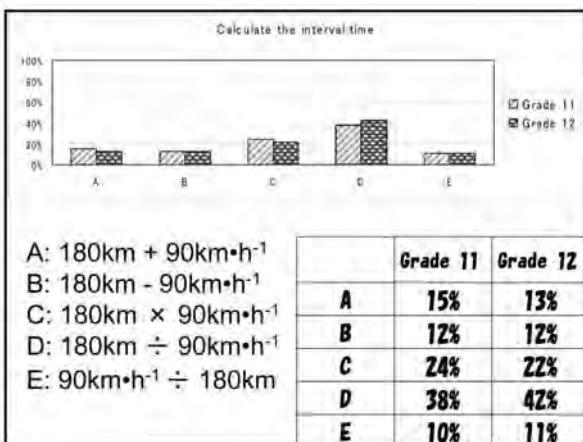
CI 及び地元の教師と
連携して地域の
理科教育推進に努める.

生徒の学力

2007年1月にSiyabuswa Weltevrede 地域の高校生全員を対象に彼らの物理・化学の基礎概念を調査した.

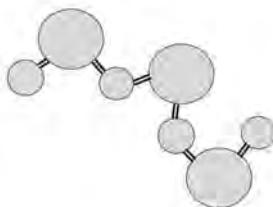
	G10	G11	G12	Total
Siyabuswa	807	671	272	1750
Weltevrede	345	318	222	885
Total	1152	989	494	2635





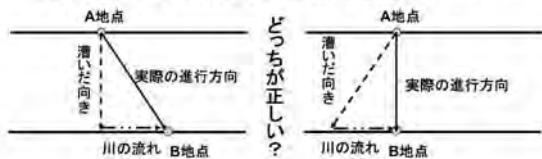
ある日のジャブ

水は水素結合している！



ある日の教師サークル

川をA地点からB地点まで渡ろうとしている。秒速2mで対岸にまっすぐ漕ごうとしたが、川の流れが秒速1mなので斜めに進んでいった。これについて次の問いに答えなさい……



教訓

こちらで勝手に限界を決めてはいけない
↓
このくらいはできるだろと思ったラインをあっさり破ってくれる

数学的センスが身につく前に計算機は触らせるな。
↓
彼らは十進法すらわかっていない。

活動内容

Project "Study Circle for Science Education" → 教師のための勉強会

Project "Mobile Science Laboratory" → 移動実験教室

Project "Supporting Science Class" → 実験を中心とした授業サポート

Project "JOCV School" → 生徒を対象とした補習授業

その他の活動

- 実験室の管理運営
- CIのサポート
- GET のサポート
- コンピュータサポート
- CASS モデレーションのサポート
- ワークショップの参加
- 日本紹介
- ニュースレターの発行
- ポスター活動
- 家庭教師





教育環境の悪さ

学校が足りない。
実験道具がない。
教室、机、いすがない。
教科書がない。

↓
こんなことは問題ではない！

教育に対する認識の差

週7時間の理科の授業のうち
実際に行われるのは3分の1程度

半年以上教師が来ないことも

授業は教師が過去問を棒読みし、一気に説明する。
15分後生徒に任せて出していく

実験は義務付けられているものの行われない。

教師のミーティングで最大の争点はその日の食事！

支援に対する認識の差

物をもらうことだけを考える

午後2時以降に勉強会をしても来ない。
給料が上がる可能性のあることはするが、
教育の質を上げようと思ってはいない。

約束は守らない

TTをやるとこちらに押しつけて遊びに行ってしまう

へこんだときは

1. ネタができたと思う！
2. スタートラインを下げる。
3. たかが2年かそこいらでできることはない割り切る。
4. 絶対日本の学校のほうがストレスフルだと思ひだす。
5. 旅に出る。

堪忍のなる堪忍はだれもする
ならぬ堪忍するが堪忍





発信 日本→南アフリカ

写真は撮つ西本食の部屋、家族、電車、学校などなど
書道
日本食はあるものを使うしかない。
折り紙
レシピが役に立たない
得意なものがあれば、持っていく
折り紙は、くす玉が一番うけた。あと動くもの

発信 南アフリカ→日本

あんまり大空段に構えないほうがいい
ビデオレター

知っている人が遙か国にいるっていう
だけでも十分かも

日本の教育への還元

とりあえず、全校道徳をやったが…

協力隊を美化してしまうのも嫌だし
かといって、批判的では道徳にならないし
ボランティアやりたいっていう人の輝く瞳は
つぶしたくないし。微妙でした。



最後に



ボランティアをやって学んだこと

ボランティアはやってあげるという気持ちでは失敗する
やらせていただくという気持ちのときにはじめてうまくいく

人に何かを与えられたとき、自分は何倍もの何かを与えられている

現実だけを見てしまうと前に進めない
夢だけ見ても前に進めない
夢を持ちながらも、現実をしっかりと見つめること



あいさつ
そして…
誠意



帰国隊員報告会

～当たり前にしていた「大切さ」を実感できた2年間～

斎下 徹

(17-1, パラグアイ, 養護, 静岡県立御殿場養護学校)

どうもはじめまして。昨年3月末にパラグアイから帰ってきました現在静岡県の御殿場養護学校というところで、高等部に所属しております。行くまでは小学生と3年間一緒に勉強してきたんですけども、この経験を少し話させていただきたいと思います。この職業やりながら、人前で話すのが苦手なですから、原稿を丸読みさせてもらいます。

はじめさせていただきます。私は平成17年度17年1月から平成19年3月まで養護隊員として南米パラグアイに派遣されておりました。協力隊に参加した理由はいくつかありました。学生のころから発展途上国といわれる国々を旅行することが好きで、いつか機会があればそのような国々で何か活動することができたらと思っていました。同時に自分の職業、特別支援教育においてもっとも必要な資質はコミュニケーション能力だと常に思っています。が、採用されてから3年間主に発達障害や知的障害を抱えている子どもたちと接しながら、果たして自分は彼らの気持ちを本当に理解できているのか、彼らの気持ちになった立場で指導・支援できているのかと疑問に思うようになっていました。そのような折、この現職教員特別参加制度を知りました。自閉症の子どもたちは、言語の違う国に1人おかれている状態とよく言われます。私もそのような状況に身をおくことで、どんな気持ちで子どもたちが過ごしているのかを、少しでも理解できるのではと考え、自分の資質向上のため迷わず参加を申込みました。

まず、私が赴任したパラグアイについて少し説明させていただきます。パラグアイは南米大陸のほぼ中心にあります。国土の広さは日本とほぼ同じです。公用語はスペイン語、もともとの原住民が使用しているグアラニ語です。しかし田舎になればなるほどグアラニ語だけの使用率が高く、スペイン語が話せなくなります。主産業は農牧民業です。薬草に水やお湯を注いだテレレもしくはマテと言われる飲み物をみんなで丸くなって飲みながら雑談をする習慣があり、そのためか、みんなのんびりしていておしゃべりが大好きです。約70年前に日本からの移住者が現在のパラグアイ産業の礎を築いたため、南米の中でも特に親密国です。パラグアイの常に大きな問題としては、貧困問題があります。また、貧富や都市と地方格差が著しいことも重大な問題です。

続いて、パラグアイの特徴的な教育事情について、少し説明させていただきます。教育制度としては、5歳から14歳が義務教育での基礎教育、15歳から18歳の中等教育になっています。しかし基礎教育段階から進級制度があるため、留年や中退率も高く様々な問題につながっています。特殊教育に関しても約50年の歴史があります。しかしながら、現状は特殊教育を学べる機関が極端に少なく、特殊教育に携わっている教員のほとんどが障害への知識や配慮を欠く教育活動が行われているのが現状です。私の配属先も他に漏れず同様でした。私の配属先は、首都アスンシオンから60キロほどパラグアリ県パラグアリ市の町外れにある、この上ない希望という意味のディビナ・エスペ

ランサー特殊教育センターという教育文化省管轄の施設でした。私が赴任した1年前、日本の草の根無償援助を受けて建て直し、規模を拡大したところでした。ディビナ・エスペランサーの授業内容は、地域に住む知的、肢体不自由、視覚、聴覚などを抱える子どもや中学校に通う特別な支援を必要とする子どもへ適切な教育支援を行ったり、また障害を抱える未就学児に対し早期教育を行ったりもしています。日本でいう学校と地域教育センターを兼ね備えたような施設で、すでに60名ほどが在籍していました。ここでの私の特定内容は、障害についての知識や指導技術が乏しい全教員へのスキルアップと、同時に子どもたちへのスキルアップでした。しかしながら赴任当時の参観期間を通して、次にあげられるようなハード、ソフト面双方において、大きな日本との違いに気付きました。特に、特別な教育支援を必要としている子に対し、視覚的教材をまったく使用しない、普通学校と同様の黒板を写すだけの授業にものすごく戸惑いを感じていました。はじめはこの現状で何から手をつけたらよいかまったく分からず、また限られた時間の中で要請内容のように学校全体を変えていかなければならないという勝手な使命感が私にはありました。それが生徒なり同僚への不満や憤りばかりにつながっていました。しかしある日まわりへの憤りを先輩隊員に漏らすと、仕方ないよ、先生方には責任は無い、彼らも同じように教わってきたのだから、と言われ、はっとしました。まさにその通りでした。また、教員の技術力や意識の低さには日本とは違う背景があるからであり、もし自分がそのような境遇になったとき、果たして彼らと異なるかと言えば正直同じだろうということにも、その言葉から気づく事ができました。そしてそのような遠いところばかり見てるばかりでは何も始まらない、まず足元から、自分のできることから始めていこうと思い直しました。ここから私の事実的な活動が始まったと思います。まずは、午前、午後とも各一学級に入り、直接生徒を担当させてもらいました。その授業では指導を実体験することを通して、徐々に現状や問題をふまえた上での切り込みを探っていきました。それらの活動を通じ、問題と考えられる点は次のような3点が考えられ、それぞれにアプローチをしてみました。1、教員の障害特性に対する知識が乏しいこと。2、特殊教育に適した授業方法を知らないこと。さらには特殊教育により必要な教材の知識と教材作りに必要な資金を出せない現状、などでした。

1に対しての支援方法として、講習会などで伝えていくことを考えました。配属先の教員や校長からの要望と自分の考えが合致し、赴任6ヵ月後から定期的に講習会の機会を頂き、次のような内容の講習会を行いました。すべての講座において障害に関する難しい専門知識は避け、障害者への接し方として最低限必要な知識や、知的障害者に対しては言葉よりも視覚的なアプローチが必要ということを実体験を通して感じてもらう演習を取り入れるなど、内容も工夫することを常に心がけました。体育のときは体育隊員に協力を要請し、彼女の専門分野である楽しくできる全身運動のアイデアと私の専門分野である障害児体育での体育など実践を踏まえて紹介しました。赴任1年が経過するころから、配属先以外での講習会をやらせていただく機会を何度も頂き、各地の教員養成学校の学生、現職の養護学校、小学校、幼稚園などの教員などを対象に広く知つてもらうために行ってきました。

2に対しての支援方法として、特殊教育に必要不可欠な要素を含みながらもこちらの現状に沿った授業方法を確立すること、そして確立後はそれらを教員に啓蒙していく活動計画を立てました。午前のクラスの生徒は重度から中度の生徒たちを担当し、一斉ではなく個々にあった課題ができる

ような体制や方法を実践し教師に紹介しました。あわせて日常生活の指導方法も実践し、教師や保護者に紹介しました。午後は知的に軽度の生徒や普通学校で進級できない生徒のいるクラスで一斉授業のスタイルづくりを目指し、活動しました。担任と一緒に授業内容や方法を考えながら、教材の使い方などは自分が準備、アドバイスをし、授業は実際に担任にやってもらうような授業形式で行ってきました。これらの授業を模索し続けていくうちに、子どもたちの理解の様子から次の要素を盛り込んでいけばいいことが分かり、授業スタイルが確立されていきました。A、視覚的な教材を必ず用いること。B、座っているだけでなく黒板の前などに出て操作的なものを行ったり動きのあるものを取り入れること。C、子ども自身が考える時間を必ず設けること。Cに関してはやり方はいろいろあると思いますが、私が行ったのは黒板を写して終わってしまうのではなくその時間をより多くの問題に取り組めるようにこのようなプリント学習を行ってきました。あと、同じ単元内容を最低3、4回は繰り返すことなども心がけて行いました。これらの授業スタイル確立後は先ほどの講習会などで、全体に対してこのスタイルの紹介と、定着と練習のためこれらの要素を必ず盛り込んだ模擬授業の組み立て、発表をグループごとで行い全体で評価しあう研修の機会を何度も設けました。この研修体制のもう1つの目的は、各教員の授業方法の引き出しを広げることにもありました。

3に対しての支援方法として、廃材で作れる教材の開発と紹介を考えました。ダンボールや生活廃材を使った教材を開発し担当生徒と実践活動を通して紹介したり、同じく共通の課題を解決するための教材をグループごとで話し合い、作成、発表、評価しあう機会を設け、教員の教材作りのスキルアップを図りました。さらには任期終盤で職場にパソコンが2台導入されたため、パソコンを利用した教材作りができるような技術向上を全教員対象に個々に行いました。次第に私の教材を借りたいという教員が増えたため、貸し出しのシステムを作りました。教材はこのように教科ごと単元ごとに整理し、貸出票を作りその管理を図書室の司書員に頼みました。さらには今までの講習会、プリント学習、そして教材のデータすべてをパソコンに保存して、いつでも教員ができるようにしました。

これらの活動を通じての成果ですが、1、授業に教材を使う教員の増加。自分で操作的視覚的教材をまねして作ったり授業で使ったりしようとする試みが見られるようになりました。また、私の教材を多くの先生が利用してくれるようになりました。2として教員の意識の変化。1つの例を紹介します。この写真は2年目の任期終盤に行われた学習発表会の練習のようです。マスゲーム演技で体育教員が言葉だけの指示を行い続けて子どもたちがなかなか理解できないでいるのを見かねた教員数名が、彼らの左手首にリボンを巻きこちらの手から上げればいいんだよ、と指導していました。以前には見られなかった活動が教師自身から出てきたことが大変うれしかったことです。3、子どもたちの能力向上。視覚的な教材を授業で使うことで子どもたちが理解でき、課題をクリアできました。またそのような教材や手立てをしたことによって、子どもたちが能力を伸ばせることを教員に対して立証することができました。

1年9ヶ月の活動を通して、自分の活動が配属先やパラグアイの問題の根本的な解決につながったと言えば必ずしも言えません。でも大きなことはできなかつたですが、多くの同僚が私に最後に言ってくれたように新しい視点を投じることができたと思っています。同時に私自身も多くの視点

をこの活動を通して持てるようになったと思います。日本では気付けなかったこんなにたくさんのこと学ぶことができました。志望動機の1つでもあった子どもの気持ちが痛いほど理解できました。分からぬ言葉で次から次へと指示されて右往左往しているとき、言いたいことがあるのにそれをうまく伝えられないとき、子どもたちはきっとこんな状況下でこんな気持ちでいつもいるのだろうなと思えるようになりました。パニックになる気持ちも理解することができました。今では自分が以前より子どもの気持ちにそった姿勢や伝え方ができるようになったと感じています。また海外での活動を通して、双方の国の良い点、悪い点に気付くことができました。とりわけ以前は気付けなかった日本のように気付けたことは私にとって大きな収穫でした。以前日本にいたときは、正直日本という国を好きになれませんでした。自分の国に対して誇りというものを持てない自分がいました。教育に対しても同様です。比較的批判ばかりされる日本の教育でよいところを見出せないでいるのが現状だと思います。以前の私もそうでした。でも日本の教育の質の高さ、教員の意識、指導力の高さなどすばらしさを実感することもできました。もちろんその現状に甘んじてばかりいってはいけないと思いますが、教師自身が日本の教育の悪いところばかりでなく良いところも自分たちで実感して、もっと自信を持っていいのではないかと感じることができます。同時に以前は面倒くさいと思っていた教員の研修ですが、その制度自体があることやまた私たちは教材を手作りするとき教材を買ったら事務に請求し使った分がしっかり返金されます。その体制が保障されているからこそ私たちは子どもたちのために教材を作ることができることなど、今まで当たり前すぎてありがたみすら感じることができなかつた日本のさまざまな教育体制に気づくことができ、今では本当にありがたく思えるようになりました。

最後に、未だ日本の教育界に自分のこの経験を十分還元できるとは言えません。でも、今後の教師人生において必ずプラスになる経験をさせてもらったと思っています。この機会を下さった多くの方々に本当に感謝したいと思います。ご清聴どうもありがとうございました。



帰国隊員報告会

～当たり前にしていた「大切さ」を実感できた2年間～

17年度1次隊 パラグアイ 養護
齋下徹
(静岡県立御殿場養護学校)

パラグアイの紹介

- ・言語：スペイン語、
グアラニ語
- ・産業：農牧林業
- ・特色：テレレ(マテ茶)

とても親日国
・問題：
貧困
貧富の格差

パラグアイの教育事情

- ・5～11歳（基礎教育 第1・2サイクル）
- ・12～14歳（基礎教育 第3サイクル）
- ・15～18歳（中等教育—日本の高校に相当）

※ここまで義務教育

就学率：第1・2サイクル 90%
第3サイクル 50%
中等教育 33%

留年率：第1・2サイクル 15%（最も高い）

中退率：第3サイクル 7.8%
中等教育 12.7%

活動内容

任地：パラグアイ県 パラグアリ市
配属先：ディビナ・エスペランサ特殊教育センター

活動内容

任地：パラグアイ県 パラグアリ市
配属先：ディビナ・エスペランサ特殊教育センター

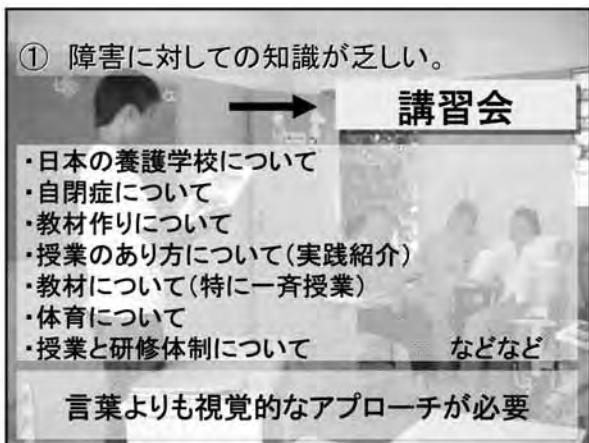
- ・午前、午後の2部制。半日授業。
- ・各クラス教師1名。T.Tのシステムなし。
- ・教材なしの授業。黒板を写すだけの授業。
- ・教員の研修時間なし。授業が終わると即帰宅

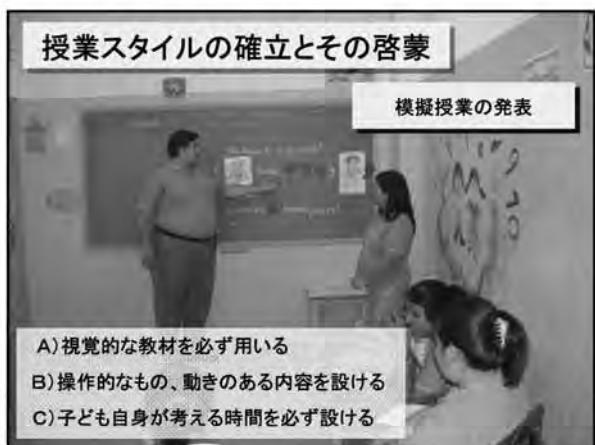
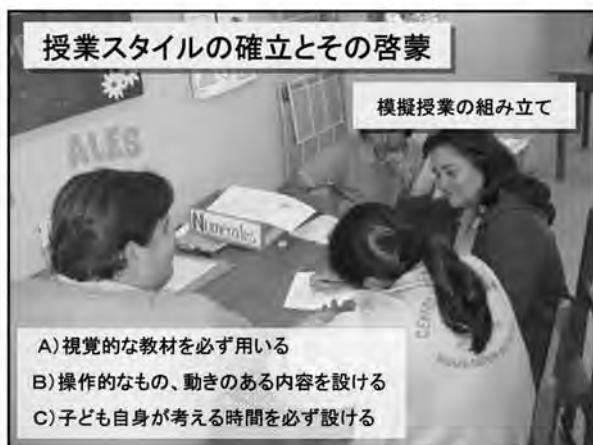
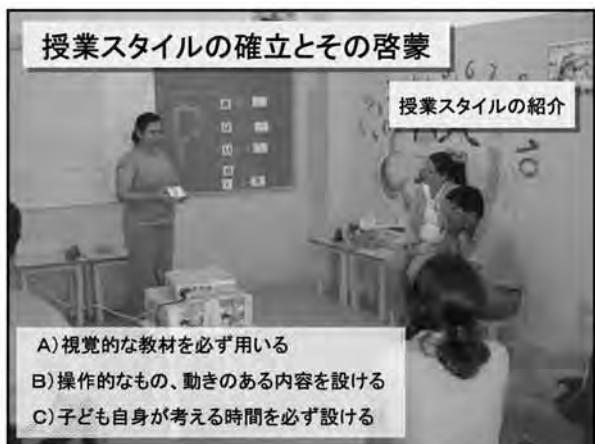
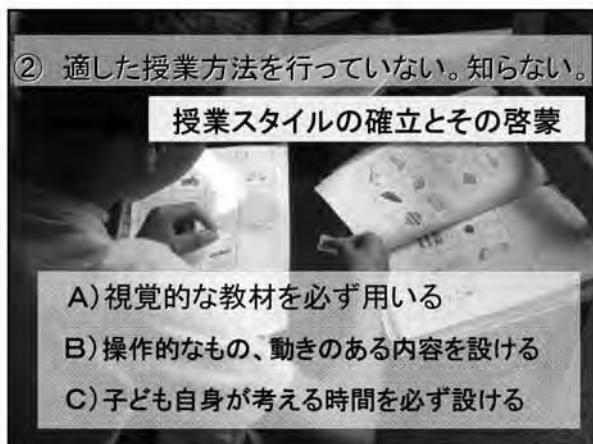
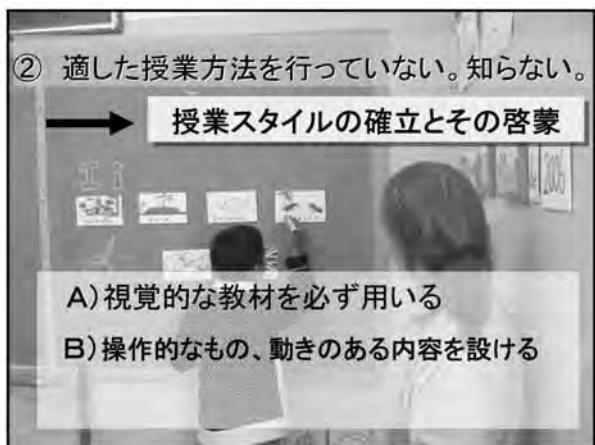
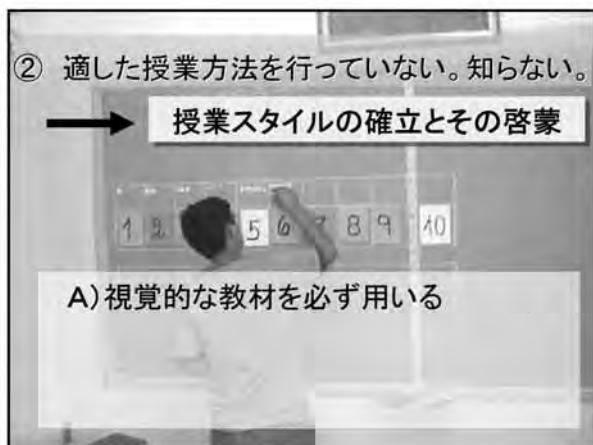
などなど

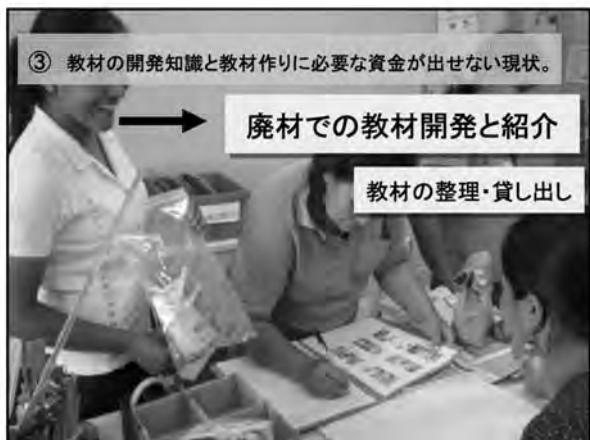
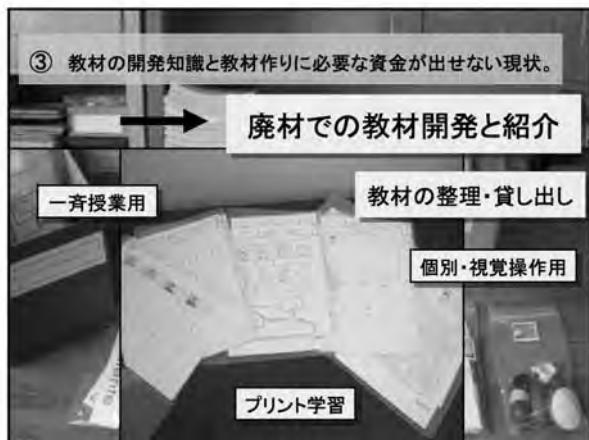
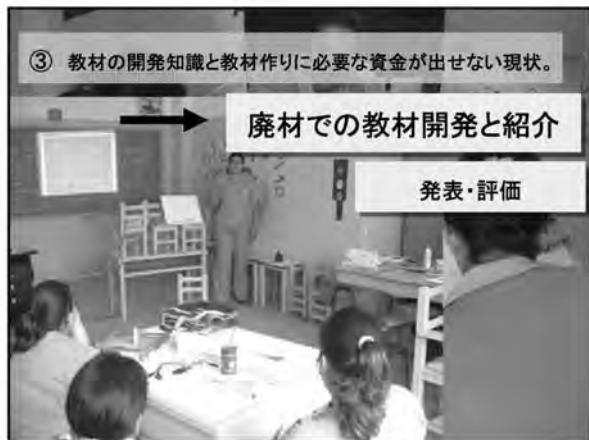
① 障害に対しての知識が乏しい。

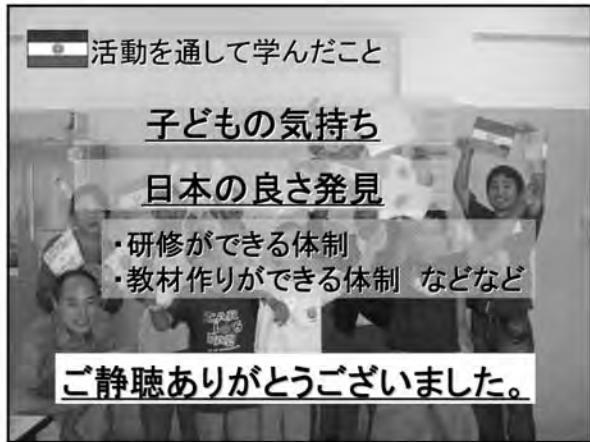
② 適した授業方法を行っていない。
知らない。

③ 教材の開発知識と
教材作りに必要な資金が出せない現状。









Estou Contente! 心を満足させること。

植松 早苗

(17-1, モザンビーク, 野菜, 静岡県立田方農業高等学校)

よろしくお願ひします。今日は、どんな発表をしようか迷ったんですけども、一通り自分がやってきた活動を紹介する中で、何かヒントになることがあればいいなと思って、全体的に紹介をしていくことにしました。協力隊に参加して最後一番感じたのは、どんな活動をするにあたっても、自分の気持ちを満足させることが一番大事じゃないかなと思いましたので、この題名をつけさせていただきました。Contenteというのは満足と言う言葉になります。では発表を始めさせていただきたいと思います。

隊員帰国の様子です。帰国したときはこんな感じでした。迎えに来た家族が、ちょっと怪しい子たちじゃないの、ちょっと汚い子たちじゃないの、と思うくらい真っ黒く日にやけていました。3月の日本ではとても目立っていて、機中でも、の人たちは日本人なのかどうなのかということを小さい子たちが怪訝に思って見ていたのを、今まだ1年経っていないんですけども、すごい遠い日のことのように思い出されます。帰国した次の日なんですけれども、実は次の日に、一度、自分がお世話になっていた任地に電話をしました。そしたら、何が起こっていたかというと、電話の奥で、爆弾が爆発する音と、リビングと窓が揺れる音が電話の奥でしていたんですね。何が起こっているのかというのを聞いたときに、首都はマプトという町なんですけど、マプトの近郊の南にある軍の施設の弾薬庫が爆発をした。爆発をして、ロケット弾とか、あと・・・、軍の施設の周りにはバラック作りの民家が立ち並んでいたんですが、その民家に次々と打ち込まれていくというか自然に爆発をしてとんでいってという状態です。

右上の写真が、モザンビークの人たちが、爆撃というか暴発した爆弾の前で、北へ北へ歩いているところです。この間も、たくさんの爆弾が彼らの頭上を舞っていたということです。これはこの弾薬庫の近くに住んでいた友達が撮って送ってくれたものです。右下の写真が、彼女が勤めていた学校にロケット弾が着弾した様子です。彼女の学校からは、大体20キロくらい爆発した弾薬庫は離れているんですが、彼女の家から、左上の写真のようなキノコ雲が見えていたそうです。左下は、完全になくなってしまった市場の近くにあつたいい学校なんんですけど、もう全然なくなってしまった民家です。まだ帰ってきた次の日だったので、日本の空気の違い、3月の日本の、光がたくさんあふれている生活と自分が耳にした任国の任地状態との差がすごく激しく感じられて、ああ自分は日本に帰れてよかったですというのを、強く感じたのを覚えています。このときに、日本で、次の日の新聞にのったんですが、国際記事だったので、すごく小さな記事で、重症者300人、死者30人とのっていましたが、それでみなしごになった子たちも非常にたくさんいて、近くの学校とか教会などにたくさんの子どもたちが（もらわれていったと思います）。今モザンビークという場所の話をしましたが、モザンビークという国がどこにあるかというと、南アフリカの右上、マダガスカルとイン

ド洋をはさんで対岸にあります。首都はマプト、公用語はポルトガル語、現地語はシャンガナやマクワ、それに・・・、大体主に10くらいの現地語が使われています。人口密度は大体1平方キロメートルに23人という考えられないですが、面積は大体日本の面積の2倍です。日本とのかかわりというと、アルミなんかをモザンビークから輸入していたりだと、魚介類で、モザンビークと書かれたものが、エビなんかで多く見られます。首都マプトは右側の地図にありますが、モザンビークの中でも一番南側、ほぼ南アフリカと接するくらいの場所にあります。北はタンザニアとザンビア、南は南アフリカと囲まれていて、タンザニア、ザンビアなどは観光の国で非常に有名ですが、南アフリカも有名ですが、モザンビークはまだなかなか日本人にとっても大変なじみの薄い国だと思います。このあたりは緑が多いことからアフリカの・・・と呼ばれていますが、先日ニュースの23(ツースリー)などでもやっていましたが、中国人による黒檀の伐採が非常に問題になっている地域もあります。現地の人たちは、今日自分が生きるお金が欲しいのでとりあえずあるものを売ってしまうという生活を今も繰り返している場所です。私の任地も首都マプトからだいたい30キロくらい、市ではないので郡ということになりますが、農村地帯です。かなり多くのものが首都マプトからも流れていますし、この辺の地域の野菜というのも首都マプトへ売られていったりもしています。住居は学校の敷地内に建つ教員住宅です。やはり水は出ませんでした。近所の人たちの様子です。アフリカは大家族の国ですが、同じ2LDKの家なんですけれども、中には8人とかで暮らしているお家もたくさんあって、中から出てくる子どもたちの多さに非常に驚いた気がします。子どもたちといつても、いとこやお姉さんの子どもとか、おばあさんの遠縁の子どもなんかを預かっている家もあって相互扶助という概念、非常に根強く残っている場所でもあります。鳥なんかは捌いていますが、こうやってだいたい私も任地で食べていました。子どもたちはだいたい近所みんな一緒に育っていくので、今いる4人しか載っていないんですけど、この子たちも私の家にも勝手に入ってきて勝手にお菓子を食べたりして怒ったことも何回かありますが、そういうふうにして近所の人たちの温かい目に守られながら子どもが本当に可愛がられて育っていました。任地にはだいたい各都市にこういったカリソウ(?)と言うんですが、大きな葦みたいなものでつくった小屋に生活している人も非常に多くて、その小屋はたまにああいう散髪屋さんになったりしています。市場には野菜、おばさんたちが、大体女性ですね、女性が地元で取れた野菜を、今写っているのはレタス、トマト、タマネギ、あと養鶏が盛んでしたので、卵なんかも売っていました。それ以外のもの、調味料とかは右上にありますバラッカと呼ばれる雑貨屋さんなんかで買っていました。

ここから活動の話に移りたいと思います。活動のモチベーションとしては、私は全体的にオレンジの線が活動のモチベーションなんですが、なかなか急速にぐっと上がることはませんでした。常にどうしようかなと悩みながらやっていた気がします。ただし、健康状態と生活に慣れる速さは、たぶん隊員の中でもかなりはやかったと思います。もう最後の方では別に何の不自由もなくバケツで水浴びもしていましたし、・・・にもお手伝いさんと一緒に行ったりしていました。健康状態も今日ちょっと風邪をひいていますが、モザンビークでは大きな病気一つすることなく、マラリアもかかることなく帰ってきました。活動内容ですが、一つは通常の授業です。農業学校に赴任をしましたので、通常の座学45分、座学でも45分の授業を2コマです。生徒の対象は一応エスコーラセクンダリア(?)といいますが、大体中学校を卒業しているくらいの生徒からなので、16歳以上であれ

ば入学できるということなので、40歳、45歳というおじさんですね、自分から見たらすごい先輩もいました。授業はどうやっていたかというと、だいたいがOHPを使ったりだとか黒板に大きな絵を描いて行っていました。なぜかというと、赴任当初から授業をお願いねって持たされたわけですが、大きな問題はまず現地の人たちの言葉を聴く能力、これは非常に苦労しました。それから書く速さ、黒板に書く速さというのはやっぱり限られた時間ですので、非常に生徒たちもいっぱい書きたいですよね、教科書を持っていないから自分のノートを教科書代わりにしなきゃいけないので、その分たくさん先生にも書いてほしい。だけど私は書く速さは遅いので、それを補うためによくOHPを使っていました。それからも一つは、定期テストの作成。3学期制で学期にだいたい3回テストがあるんですが、そのテストの形式が日本の形式と全く違うので、そのへんは非常に苦労しました。問題の出し方によっても、生徒はわからなかつたり、答えがわからなかつたりとかしてしまうので、そのへんはまわりの先生と相談しながら、かなり時間をかけてやっていきました。それ以外、当初私の座学の授業には、この先生ですね、このシリという先生が（普段）のパートナーでと紹介されたんですが、アフリカの多くの国でもそうだと思うんですが、大半の先生が副業を持っています。それは、自分の生活を守るため、もう一つはその先生はそうだったんですが、学校に通いながら先生として授業をしている先生もいます。もう一つは体調不良。アフリカは、途上国ではそうだと思うんですけれども、ちょっとした体調不良が命にかかわることがあるので、ちょっとしたことでもちょっと様子をみたいと言って休む場合が多々ありました。日本の方法を押し付けるのは非常に簡単なんんですけど、私は郷に入れば郷に従えではないですけれど、できるだけ・・・していました。ただし、やっぱりそれだけだと自分の活動自体も不安がたくさんあったので、頼れるお母さんみたいな先生を、お母さんと言ったら失礼な年齢んですけど探して、仕事とか生活、儀式とかでもわからないことなんかは必ず聞くような先生、その先生をつかまえて必ず聞くようにしていました。すごい些細なこと、生活の中でのちょっとした、水が出なかつたらどうするのとか、薬はどこで買えばいいのとか、これがなくなつたらどうしたらいいのとか、お手伝いさんも・・・もわからないんだけど、というようなことは、生活すること自体が非常に大変なので、自分自身の大きな負担になるということで、できるだけ小さなことでも相談するようにしていました。そういう意味でその先生というのは向こうにいたときの自分のオブザーバー的な先生で、非常に心強いサポートをしてくれました。もう一つは、その土地において自分が初心者であるということを常に忘れない姿勢というのが、やっぱり気持ちよく相手が教えてくれる一つのマナーじゃないかなというのを強く感じました。日本人だからとか、やっぱり最初は言ってくるんですけど、私はたくさん知らないこともあるんだよといろいろ聞いていくと、初めてだからねと言ってたくさんいろいろなことを教えてくれるようになりました。もう一つ座学以外にもやっていたことが実習なんですけれど、私は農業高校の教員免許でこちらの方が非常に親しみがあって、体を使ってやることはやはり非常に教えやすかったです。接木をやったことがない、接木は接木でもなんこう（？）なんかの接木は向こうでも主流です。今回はナスとトマトの接木をやってみたりとか、というふうに試しで接木を試験的にあるものでやってみました。元々手先は器用じゃないので成功率2割程度でしたが、非常に楽しそうにやってくれたのでよかったです。ときどきこれ日本から持つていった簡易土壤検査機器なんですけど、それをちょっと多めに持つていって、ここの土壤は何性だねっていうのを言

って、彼らも卒業論文を書かなきやいけないのでそういうちょっとした手助けをしたりとか、ここでレタスを育てているんですが、ちょっと隣の畑を借りて生徒と一緒に日本の野菜を、あまりよくないかもしれないですが、日本の種を持っていって日本の野菜をちょっと育ててみて、どんなふうに違いますかとかというのをやってみたりとかしていました。ただ活動していたんですが、いつもやっぱり片隅にあるのは私はいったいここで何ができるのかなということと、今まわりにいてくれる人たちは何を自分に望んでいるのかなというのを非常に、それをいつも考えながらやっていました。とにかくわからなかつたら相談をする、不安に思つたら相談する、何をやってもらいたいかというのも相談をする。相談をしてできそうなことをやってみる。やってみて出来なくても後悔はしない、というのをやっていました。やってみることというのでやってみたのは、1個はネリカ米の栽培をやってみました。ネリカ米自体は乾燥に強いということだったので、できるだけ水が簡単に準備できて乾燥しないところに蒔いてみたんですが、やはり雨季の雑草の力が非常に強くてですね、やっぱりネリカ米は負けてしまうことが多かったです。ただし栽培した場所にも多少よって収量は違ったので、そういうことでも彼らのいい実験になったのではないかなということ、新しい品種を自分たちが栽培できたという一個の誇りになったかなというふうに思っています。それからこれ最後の方ですが、貯水タンクの建築をやっていました。ここは大きなタンクがここからだいたい200メートルくらい離れたところにコンクリート製のタンクがあったのですが、やはり・・・などのバケツで生徒が持ってくるというと一人で栽培できる野菜の量、栽培面積というのが非常に限られていますので、できるだけ近いところにタンクを1個大きいタンクを作ろうということで、先生の力を借りて穴掘りからやつてきましたが、ちょっと粘土層が出てしまったので当初の計画よりは赤くなってしまいました。このへんは事務所の方なんかにも協力いただいて予算を出して～。同じ隊員にも大変なときは声をかけて手伝つてもらつたりしながら、このへんの鉄骨を入れるというのには向こうで簡単にタンクを作るときにはあまりやらないんですが、今回はやってみようということでやりました。完成したのが、これが1個目のタンクなんですが、中にコンクリートを塗つて帰る頃にはたくさん水が溜まつてきました。もうひとつこれが、近くに住む先生が自分もやってみたいということで、その先生が私たちのやり方をまねて作ったタンクです。この活動をやってよかったですというのは、生徒が喜んでくれたというのと、もう一つ自分でいいけじめがついたなというふうに思います。それ以外には行事での発表、できるだけ行事で日本のことを探るみたいに、これは簡単に、広島出身の子がいたので原爆の資料をちょっと借りてこういうことが起つたんだよという、反応は様々でした。これは、折り紙。やはり手先が器用じゃないのでひどく不恰好なものになつてしまつましたが、生徒たちは家に持つて帰つたりして楽しんでくれていました。あとは行事にできるだけ参加をするということが一番私の触れ合ういい機会になつたと思います。これはお手伝いさんですが、彼女は非常に仲良くしていました。近所の子たち、すごいいたずらっ子でしたけれど、とてもいい私と大人をつなぐいいコネクションになつてくれしていました。満足するコツですが、自分と人の活動は、現職参加で先生でというと、なかなか自分の活動が一番だと思つてしまつがちだったんですけど、人の活動と自分の活動をあんまり比較して自分を陥れないようにする、はまらないようにするということと、できなかつたらできないことは早めに諦める。強情を張つてやり過ぎるのではなくて、早めに諦めよう。準備されている活動は、要請された活動はあるけ

れど準備されている活動はないので、自分でできるだけ早く活動を見つけるようにしていました。それから活動の基準は自分が関わっていることを幸せにできることで十分じゃないかなと思いました。任国は好きですかと今聞かれたら、やっぱり好きと答えられるかなというふうに思います。以上で発表を終わります。

Estou Contente!
心を満足させること。

17年度1次隊 野菜 派遣国 モザンビーク
植松早苗

帰国

■ あのちょっと色の黒いみすぼらしい子達じゃない?



次の日のニュース



アフリカ・モザンビーク
アフリカの肺

首都 マプト(MAPUTO)
公用語 ポルトガル語
現地語 シャンガナ、マクワ 等
人口 約20,000,000人
人口密度 23人/平方km
面積 日本の約2.2倍



任地 BOANE



■ 首都 マプトから30km
■ 都市とは言えない中規模の農村です
■ 住居は学校の敷地内に建つ教員住宅
■ 蛇口はあれど、水は出ず。

近所の人々



■ 同じ間取り(2LDK)なのに、大家族。
■ Familia とは、従兄弟もそのまた従兄弟も含む事が。
■ 相互扶助 はアフリカの常識
■ 基本、鶏は地鶏、とれたてです。
■ 天使の笑顔と 悪魔のほほえみは紙一重。

買い物は地元で…

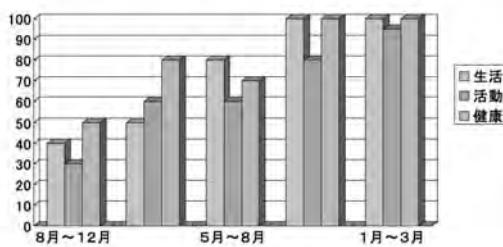


- ・ノート1冊から魚まで、何でもそろう雑貨屋さん。
- ・市場にも結構いいものおいてます。
- ・床屋は10円から。

活動



活動のモチベーション



通常の授業



求められるものは…

45分授業、2時間続き



- ・問題は聞き取り能力
- ・書く速度
- ・定期テストの作成



CPかT・Tか…



- 大半の先生が副業をもっています。
- 学校に通いながら、教えている先生もいます。
- 体調不良や交通機関の不便さから休むこともあります。



とことん話し合う事も大事ですが、ある程度おおらかに捉えていました。

本当に頼れる仲間探し



仕事や生活
分からぬこと・不安・疑問



大きな心の負担

- 私の解消法
- 小さな疑問や不安なことを聞ける人を見つける。
 - 初心者であることを忘れずにいること。

実習:体力ありますか?



成功裏2割の結果木 時々取り出す丸物アイテム・土の検査



まずは出発確認から 基本は人力

いつも心の片隅にあるのは‥



- いったい何ができるのか
- 何を望まれているのか
- 支えてくれる人たちへの感謝。

- 1 相談する
- 2 とりあえずやってみる
- 3 後悔しない

活動 何事もまずやってみること

ネリカ米の栽培‥



貯水タンク建築 I



貯水タンク建築 II



時には手伝いをお願いしながら



2つのタンク完成



学校がどうのよりも、自分の中でいいけじめがつきました。

行事での発表



■ 日



日本について、知り興味をもってもらいたい。

行事に参加すること



人と触れあうこと..



満足するこつ(私の場合)



- 人の活動と自分の活動を比較しない
- できないことは早めにあきらめる
- 準備されている活動はないので、自分で活動を見つけること
- 活動の基準は、自分が関わっている人を幸せにできることで充分
- 全ては人の出会いを大切に

任国は好きですか？



好きor他の国より好き

終わり

まずは、健康に気をつけて

青年海外協力隊で経験したこと

－ガーナ共和国でボランティアとして理数科教育に携わって－

梯 泰三
(17-1, ガーナ共和国, 理数科教師, 上板町立上板中学校)

みなさんこんにちは。今ご紹介にあずかりました、徳島県上板中学校の梯泰三といいます。たぶん小さな部屋なので声が通ると思うので、マイクなしで発表をさせてもらおうと思います。

最初に今日発表させていただく内容なんですが、10個ほど用意させていただきました。簡単に紹介させていただきます。一番最初、私の自己紹介、それからガーナのこと、それから任地はタマレという場所だったんですが、そのタマレについて。それからみなさんガーナってチョコレートの国と思われているかもしれません本当にそうなのかなということを僕なりの考えをこれから述べていきたいなと思っています、それからなぜ協力隊に参加したのかということ。それから私の要請と活動。これから以降は本格的に活動のことを話させてもらうんですが、少し授業の様子をビデオで見ていただけたらなと思っております。それから理数科隊員、教員として派遣をされましたので私の任地の学校のこと、実際にガーナの任地の先生たちのこと、それから生徒のことを話させてもらったあと、最後、今後帰国隊員のとして私が何ができるかなということを一緒に皆さんと考える機会にできたらなというふうに考えています。宜しくお願いします。

最初に自己紹介ですが、17年度1次隊でガーナ共和国に理数科教師として配属されました。配属先はここにもありますが、タマレ市教育事務所というところですが、日本で言えば市町村の教育委員会かなと思っていただければいいと思います。そこでもらった僕の役目というのは、science and mathematics volunteer officer理科と数学の先生ですよという役目をもらいました。現在は先ほども紹介していただいたんですが、徳島県の上板中学校で勤務、お世話になっております。1年生の担任で教科は数学、陸上部を担当しております。

次、任国のガーナについて話させてもらいます。アフリカの地図がここにあるんですが、ガーナってどこかなってみなさんおわかりになるでしょうか。だいたい頭の中で考えてみてください。どの辺りかな。実はガーナというのは西アフリカと言われています。ここにあります。西アフリカと言うところにあります。それでクラスとか学校の生徒たちにはこういうふうに説明しています。いま点線が入りましたがこれは東経0度、北緯0度の線を描いてみました。ということは、ガーナは0度、0度に最も近い国なので、僕はクラスの生徒には地球のおへそに一番近い国だよというふうに説明をしています。次、こちらの方にガーナを拡大した地図があるんですが、首都はアクラです。海沿いのここにアクラがあります。私の任地というのは結構ガーナから遠くて、Northernと書いてありますが、北部州の州都タマレ市というところにあります。首都アクラからはだいたいバスのターミナルに行くと20時間くらいと書いてありますが、故障があったりとかバスが出なかったりするもので、だいたい20時間から2日くらいの間みておけば、僕のタマレには行くことができるんじやな

いかというふうに思います。どんどん進めさせてもらいます。ひょっとすると、そこだったかな名前は忘れました、メーカーさん、お口の恋人何とかさんが、何とか何とかチョコレートというのをだしていて、ひょっとしてガーナってチョコレートの国かなって思われがちなんですが、これはあくまで僕の考え方です。試験などで絶対そうだと思わないでください。ちょっと一緒に考えてみたいなと思います。国際菓子協会というホームページからとつきました。2004年のデータですが、チョコレートの生産量と消費量、アメリカ、ドイツ、イギリスというふうになっております、チョコレートですね。どこにもガーナというのはこのデータでは入っていません。一方、2007年の外務省のデータなんですけれど、カカオの生産というところではコートジボワール、ガーナの隣の国ですが、2位ガーナ、それから近くの国、同じ西アフリカの国ナイジェリアというのが1位2位3位となつております。ということを考えると、僕はガーナはチョコレートの国ではなくて、カカオの国かなというふうに思います。少しこれを発展させて考えると、やっぱりチョコレートがもしつくれる、おいしいなと世界中の人が思ってくれるような国であれば、ガーナという国はもしかしたら開発途上国とは呼ばれないのかもしれないかな、そういうふうな技術を持っていると呼ばれないのかもしれないのかなというふうにあるので、ガーナが将来カカオの国から本当にチョコレートの国になれたらなというふうに思いながら活動していたことも事実です。

それから、大体これが僕の任国、任地の話なんですが、少し話を変えさせてもらいまして、なぜ私が青年海外協力隊に参加をさせてもらったのかということを、話をさせてもらおうと思います。1番最初なんですが、やはりボランティア活動に興味を持っていました。大学生の頃、もう10年以上も前になるんですが、学生の頃からボランティア活動、徳島県にいくつか授産センターといわれる障害者の方の施設があるんですけれども、そういうところでボランティア活動をしていまして、そういうことがきっかけで大学生の頃からボランティア活動に興味を持っていたということがあります。それから学校に勤めている、この中にも中学校、高等学校それから小学校で勤めてられる先生方おられると思うんですが、特に中学校で勤めていると教科指導また生徒指導というのでどうしても悩みというのがでてきます。そんな中でもしかしたら環境の違うところで自分が仕事をすることで、ボランティアとして活動することでまた日本に帰ったときに教科の指導とか生徒指導で何か役に立つようなヒントというのを学べるんじゃないかなということがありました。それから3つ目なんですが、やはりいろんな場所に行くことで人々と出会いとかふれあいを求めてという理由も3つ目にありました。こういうような理由3つ、他にもあるんですが3つ書かせてもらったんですが、なかなか青年海外協力隊って一步踏み出すことってやっぱり難しいと思うんです。遠い場所でもあるし海外もあるしというところもあって。僕は現職派遣をさせてもらいましたが、なかなか職場の理解が得がたいというようなところもあるんですが、なんで僕が協力隊に行くことになったかと言うと、神戸のほうで協力隊の説明会に3年か4年前に参加させてもらったときに、ある参加者の方がこういうふうに経験談の中で私に語ってくれました。世の中で最も教育環境が整っていない場に足を運ぶということが教員、教師としての務めではないでしょうかというような話をしてくれる先生がいまして、その言葉を聞いたときにぽんと背中を押されたような気がしました。決して行かなければならないと思ったんじゃなくて、あっ僕、教員だから行ってもいいんだって、行ける機会があるんだっていうふうにこの言葉を聞いたときに思うようになって、じゃあ挑戦してみようかな

ということでいろいろホームページを調べたりだとか学校の職場の学校長に相談をしたりだとか、JICA四国の方にお世話になったりだとかというところから手探り状態で始まったのが、私の協力隊参加への第一歩になりました。というのが大まかなところなんですが。

早速そしたら次はお手元の資料では2ページ目になると思うんですが、本格的に任地での私の活動についてお話をさせてもらいたいなと思います。それに当たって1番最初に私の要請と活動についてお話をさせてもらいます。まずJICAさんの方からいただいた私の要請というのは、ガーナ発の巡回型理数科隊員としてと書きました。ガーナは私が行くまでは、ほとんどの場合は一高校の教員としてある高校に配属されるというふうな形ですべての理数科隊員が配置されていたんですが、私は巡回型隊員、先ほども言いましたが教育事務所に配属されまして、いろんな学校を担当させてもらいました。後から詳しく言わせてもらいますが、担当校は確かに小学校で約100校、中学校で80校ありました。そのあたりの苦労話も今日させてもらえたならと思っております。それと同時にもう終わったのですが、ガーナではSTM、science、technology、それからmathematicsプロジェクトというのがあります、それを大きな3つの群でそのプロジェクトが行われたんですが、その中の1つであるタマレ市のプロジェクトを支援する、草の根で支援するためにというふうに自分が心の中では噛み砕いていたんですが、そのためにJICAさんの方から要請を受けたと思っております。実際にこういうふうな要請をもらって私がどんな活動をしていたかということなんですが、主な活動として理数科隊員ですので小中学校での理数科の授業。目的は2つありました。先生たちの指導力の向上ということと、それから当然当たり前なんですが、生徒たちの学力の向上という2つのことを目標に授業は行っておりました。それからこのプロジェクトとも関連した、ガーナの他の隊員の活動ともいろいろ関連するんですが、ワークショップの開催というのをしておりました。なかなか学校に行って授業をするだけでは先生の指導力の向上というのは難しいものもありますので、先生たちだけ呼んできてワークショップの開催というのをしておりました。やっぱり1番は指導主事と書いてありますが、私が配属されていた教育事務所の先生方、それから学校の校長先生、それからその学校で算数や数学や理科を担当している先生方を集めてワークショップを開催したり、これ理数科隊員の研修の場って書いてありますが、ガーナ今100人近い隊員が派遣されていると思います。その中で理数科隊員が開催する大きな行事が3つありました。1つはアコソンボ訓練と呼ばれるんですが、簡単に言えば教育実習みたいなものです。それから実験ツアーと呼ばれまして、全国をめぐつて実験道具がないもので隊員が集まって実験道具を用意してバスを借りて実験の道具がない学校に行ってというふうに、隊員が夏休みであるとか春休みであるとかというふうなときに、みんなで集まって隊員同士の研修会ですね、研修会をかねてこのようなワークショップを開催していました。当然この中には理数科隊員だけじゃなくて他の隊員、HIVの対策の隊員、感染症の隊員にも授業をしてもらいました。理数科の授業と関係があると思ってしてもらいました。それから休み時間には楽しいこともしたいなと思ったので、青少年活動の隊員であるとかとにかく隊員をたくさん集めてきてワークショップを開催しました。それから最後に他国のボランティアとの交流の場というふうに書いてあります。ほかの国でもそうだと思うんですが、ガーナにもたくさん他国のボランティアが来ております。この開催したワークショップにはVSOイギリスのボランティア団体だと思うんですがVSO、それからピスコ、アメリカのボランティア団体だと思うんですがピスコの方とかにも来

てもらって、やっぱり語学の点では彼らにはなかなか敵わないのでそういうふうな英語について教えてもらったりだとか、彼らのアイデアを教えてもらったりだとか、自分たちはこういうふうに思っているんだけどどう思うということで、いろんな人とにかくいろんな人を呼んできて自分自身の指導力の向上の場でもありますし、やっぱり先生たちの研修の場をつくりたいなというふうなことで、いろんなことを試行錯誤しながら大きなものとしては年3回やっておりました。実際に、ここに書いてるワークショップなんですが、ワークショップでやっていた、私の授業をビデオに撮っています。たくさん隊員がいたのでビデオを撮ってくれることができました。このビデオを見てもらいたいと思います。ガーナに行ったばかりの映像で、すごく自分自身が緊張しているのがわかるビデオで恥ずかしいんですが、拙い授業で申し訳ないんですが、ご覧ください。

(ビデオ)

すみません。というふうな授業を行っていました。ちなみにこれはJICAさんの方にお世話になって、顕微鏡の使い方の授業をしたんですが、JICAさんの方にお世話になって100倍まで見える簡易顕微鏡というのをプロジェクトと関連して買ったものがありましたので、それを利用させてもらいました。非常によかったなと思うのは大きな顕微鏡と違ってこれくらいの顕微鏡だったので持ち運びが便利なんですね。いろんな学校にもって行くことができて、僕はこの顕微鏡のおかげで随分助かった思い出があります。今見てもらったビデオで見るとアフリカの学校っていいな、黒板もあるし机もあるし学校に屋根もあるなって思われて、素晴らしい学校であれチョークもあったじゃないか、黒板に僕が白い字で書いてたじゃないかって思われがちなんですが、これはやっぱりワークショップでした授業なので、どちらかと言うと施設設備の整った学校でさせてもらいました。実際私が通っていった学校というのは、こんな立派な学校ではなくて、ちょっと見てもらいたいんですが、その前にすみません、タマレの学校の現状をもう一度言わせてもらいます。私の任地タマレは東西南北に30キロ30キロの正方形だと思ってください。その中に中学校が250校、中学校が70校あるそうです。教育長からそのように聞きました。それで私は小学校80校と中学校20校、だから全部で100校を担当しなさいよというふうに言わされました。少し話をさせてもらうと、当然こんなの2年間で、正確に言うと1年9ヶ月で全部担当できることはできないので、僕は中学校4校と小学校4校を担当していました。どういうことかというと、週は月火水木金で5日です。そのうち1日は事務所の方に行きたいです。午前中は小学校に行って午後から中学校に行っていました。だから4校4校というふうに、自分でたくさんの学校を与えてたくさんチャンスは増えたんですが、申し訳ないんですがそのチャンスは8校でしか活かすことができなかつたんですよ、ちょっと残念だなというふうにも思ってるんですが、時間的なことそれからバイクで20キロ片道30キロ走りますのでそういうことを考えると、午前中に1校午後に1校というのが適当じゃないかというふうに僕は判断をしていました。その学校が何ですが、ちょっと写真を見てもらう前に、私の思ったことは、やっぱり写真で見てもらったのですがさっきビデオで持てもらったものがすごくやっぱりいい学校です。何がいいかというと人材の面でって書いてあります。やっぱり先生がいます。授業するっていうとその学校の先生が来てくれる先生がいます。ぼくが行ってた学校には生徒はたくさんいるんだけども、実は校長先生しかいないとか、校長先生とあと一人二人先生がいるんだけども、今日は校長先生しか来てないよとか、っていう風な学校がたくさんあったので、やっぱりあの人材の面でいつ

ぱい差があると思うんです。タマレの中でもある学校には完璧に時間割が朝から夕方まで組めるだけのスタッフがいる。でも、ちょっとほんの10キロバイクで走った学校には、生徒がたくさんいるのに校長先生しかいないっていうふうな人材の面での格差。それから2番目は施設・設備の面でっていうふうにも書きました。校舎、施設、設備、それから教材でかなり差があります。これについて少し、写真を見てもらおうかなって思います。一つ、これ、ここにあのこれも私の任地の一つの学校ですが、日本の援助で建てられた学校です。こんなすばらしい学校があります。屋根もあって壁もあってすごいきれいに壁が塗装されているっていう風な学校があります。まあ、町の中心部なんですが、これも私の学校なんですが村の学校に行くとこんな感じです。本当に壁なんかないですね。生徒も制服なんか着てないです。さっきから何度も言ってますが、やっぱり同じタマレの学校なのに校舎や施設・設備の面でかなり違っているっていうふうなところがあります。で、実際私が通っていた学校を少し紹介させてもらうと、こんな学校です。今、写真で見せた学校ですね。この学校は、本当にこういう小さい黒板が一つあるだけで、チョークは僕が買って、プレゼントしました。それから、他の学校ではこういう風な屋根があってもまあ、バラック状態のような壁があっても、この学校に僕は、通ってました。で、なんかそうやっていたらなんかちょっとシーンとなって、みなさんがなってしまったのが残念なんですが、実は僕は好きなことがあって、学校までの風景が大好きでした。見てください。バイクで行ってたのですが20キロ30キロこんなまっすぐな道。きもちいですね。まっすぐな平らな道。バイク好きな人がいたら、走りたいなって思われるのではないか。それから、途中にはこれ、何の木かわかりますかね。神様がやどる木、バオバブですね。バオバブの木が当然生徒の家にあったりとか、風景、僕はとっても大好きでした。僕は時々風景に目を奪われて、外の前の穴が見えなくて危ない思いをしたりだとか、でも僕はとっても、バイクを走らせるのが好きでした。

時間も迫ってきます。学校の先生についての現状を少しお話させてもらいます。他のアフリカでもそうだったんですが、やっぱり基本的な計算ができない。日本だと完全に最近問題になっていますが、指導力不足教員というような言い方をすると厳しいかもしれません、日本の感覚で言うとそういうふうになるんじゃないかなって思います。用語を正しく理解していない。正方形を長方形と教えたり、直方体を長方形と教えたり、という風な用語を正しく理解していない。経験力不足。教材教科がありませんので、当然そういう風なこともない。使い方も当然知りません。残念なことに、やっぱり高い収入を求めて、辞職する人が多いというのもこれは残念なことです。

ちょっと見てもらいたいのですが三分の二、二分の一がなぜかこんな計算になっちゃうんですね。二分の一がここに来ると逆になっちゃうんですね。六分の三。こっちを通分した三分の二がなぜかこっちにきちゃうんですね。こうがきまってなるんですが、三から四を引くとマイナスになるのに、なぜか答えはちゃんと六分の一になるんですね。すごいなって思いながら自分も見てましたが、ちゃんと証拠写真も載っています。彼はこういう風に計算もしてるんですね。でも、これは笑い事かもしれませんがこれがガーナの教員の問題だと思います。これ先生が教てるっていう、彼だけじゃなくてちゃんと通分ができる先生、計算ができない先生たくさんいます。やっぱり、これを克服していくこと、っていうのがやっぱりガーナの教育の課題であるし、隊員として派遣されていた私自身も何かできることがあるんじゃないかなって考えております。厳しい、現実がここに現れて

いるんじゃないかなって思います。

それから生徒についてです。すいません。これ冗談言うのに作ったのですが、タイミングを逃してしまったので申し訳ありません。生徒について話をさせてもらいます。やっぱり就学率低いです。ある学校長、校長先生と話していると就学率50パーセントっていうふうに聞きました。でも、その中でも乾季、雨季になるとどうしてもやっぱり、さらに生徒減っちゃうんですね。そういう風に考えると修める方の修学って言うのは、もっと低いんじゃないかなって僕は思っています。それから健康面でマラリア、コレラ、ポリオ。健康面での被害っていうのは感染症の隊員らと話をしていると本当、深刻な問題っていうのが健康面でも衛生面でもあるように思います。でも、僕はこれが好きでした。生徒たちも明るく、礼儀正しい。ぜひ、今担当している上板中学校の生徒に、生徒たちの姿を見習ってもらいたいものですね。グッドモーニング、先生おはようございますなんて、言ってくれる生徒もいるんですが、うちのクラスは今は全員できていないような気がします。それからやっぱり働き者です。よく働きます。午前中に学校に来て、午後から何か牛を飼ったりであるとか、何か物を売っています。よくよく考えると、牛を10頭ぐらい持っていると、平均的なガーナ人の年収にもなると思います。そういう仕事をしているんですね。今、日本の中学生で、年収ぐらいの価値のあるものを動かしながら仕事ができる中学生って今、いないんじゃないかなと思います。このあたりを考えると今、学校現場で問題になっている生きる力って考えると、ガーナの生徒、僕のクラスの生徒どっちがあるのかなって考えるとちょっと僕は疑問になるところがあって、どっちかなっていうふうに考えております。生きる力に関してはひょっとするとガーナの生徒の方が持っているんじゃないかなと、なぜかというと働く力を彼らは持っているからです。それから、やっぱり高いコミュニケーション能力。積極的に僕に話しかけてきます。言語の学校に通っていると英語、現地語の2カ国ですが、二つの言語二カ国じゃないですね、二カ国に言語が話すことができます。たぶん、日本の中学生で、英語と日本語が不自由なく、使える生徒は少ないとと思うので、コミュニケーション能力の点でも、日本生徒がガーナの生徒に比べると劣っているかなっていうふうに私は思います。

それから時間もせまっています。やっぱり問題は十分な教育を受けられない。どうも同じような発表が続いていますが、ガーナでも同じようなことを感じて帰ってきました。最後になりますが、私が今度は帰国隊員としてできることですが、考えていることです。当然、国際理解教育とか、人権教育を通じて私がしてきた経験というのをクラスの生徒、それから現在勤務している学校の生徒。徳島県の生徒。まあ、できれば日本の生徒に伝えていければいいなっていうのが私の目標であります。幸いなことに徳島県の人権教育のテキストには、名前を忘れたのですが、ザンビアでエイズの隊員だった方の、指導っていうのは載っておりました。それを子供たちに見せながら僕もこれやったんだぞって言うところに、青年海外協力隊のところにマークせよなんて授業では、人権教育のほうではやったりもしております。それからできれば国内でのボランティア活動。学生のころから好きだったので、JICAさんの活動以外になるかもしれないんですがボランティア活動もできたらなって感じで続けて、何かのボランティア活動ができたらなって思います。それから奨学金への協力って書きました。あの、理数科隊員がガーナは多いので、奨学金をJOCVが、つくってあります。それに、少しなんですが、正直金額で言うと年間五千円くらいなんですが、それが授業が払えると思う

ので、一人の生徒の。五千円ぐらいずつこれも協力できたらなって思います。それから最後ですが、これは難しいですが、まあ僕の年齢からいくともう一回くらい、行こうと思えば、協力隊に行けるかなと思います。あの、妻に言うと怒られるのでここで言いますが。また行くって言われそうなんですが、まだ行ける年齢かなって思っています。四つ目はでもたぶん厳しいかなって思っています。発表を終わらせてもらうのですが、最後にもしかしたらこれから派遣される方がいるかもしれません。最後に僕が言いたいことは、僕の友だちから帰国後よく聞かれます。あの行ってきてよかったですって。僕は、自信をもってよかったですと答えています。行ってきてよかったですか悪かったですか、いろんな苦労もあったし嫌なことも正直言ってあったのですが、僕は協力隊に参加して非常に良かったなと思っております。以上で発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。



青年海外協力隊で経験したこと

ガーナ共和国で
ボランティアとして
理数科教育に携わって

徳島県 上板中学校 植 泰三

内 容

1. 自己紹介
2. 任国ガーナ 任地タマレ
3. チョコレートの国ガーナ！？
4. なぜ、青年海外協力隊に参加したのか
5. 要請と活動
6. 授業の様子
7. タマレの学校
8. タマレの教員
9. タマレの生徒
10. 今後できること

1 自己紹介

- 平成17年度1次隊
 - 派遣国 ガーナ共和国
 - 職種 理数科教師
 - 配属先 タマレ市教育事務所
 - science and mathematics volunteer officer
- 徳島県上板中学校に勤務
 - 1学年担任
 - 数学
 - 陸上部



2 任国ガーナ 任地タマレ



3 チョコレートの国ガーナ！？

- チョコレートの生産量と消費量
 - 国際菓子協会 2004年
 - 1位 アメリカ 1,500,935トン 1,556,175トン
 - 2位 ドイツ 1,075,965トン 917,905トン
 - 3位 イギリス 475,410トン 556,720トン
- カカオの生産量
 - 外務省 2007年
 - 1位 コートジボアール 127,6000トン
 - 2位 ガーナ 60,0000トン
 - 3位 ナイジェリア 18,0000トン

4 なぜ、青年海外協力隊に参加したのか

- ボランティア活動に興味を持っていたから
- 教科指導や生徒指導での悩みがあったから
 - 環境の違う学校(海外の学校)でどのような教育を行っているのかを知り、自分自身の指導に役立てたいと思った
- 人々との出会いや触れ合いを求めて
- 青年海外協力隊の説明会での一言
 - 世の中で最も教育環境が整っていない所に真っ先に行くのが教師の務めではないか

5 要請と活動

- 要請 ガーナ初の巡回型理数科隊員として
 - タマレのSTMプロジェクトに関連した要請
 - STMを草の根レベルで支援するために
- 主な活動
 - 小中学校での理数科の授業
 - 教員の指導力向上
 - 生徒の理数科の学力向上
 - ワークショップの開催
 - 指導主事の指導力向上
 - 理数科隊員の研修の場
 - 他国のボランティアとの交流の場

6 ワークショップでの授業



7 タマレの学校

- タマレは東西南北に30km
 - 小学校250校 中学校70校
 - 担当は小学校80校と中学校20校
- 学校間の格差がある
 - 人材の面で
 - 施設や設備の面で



村の学校



同じタマレの学校なのに
校舎がかなり違っている

日本の援助で建てられた小学校

私の勤務していた学校



学校までの風景



8 タマレの教員

- 基礎的な計算ができない
- 用語を正しく理解していない
 - 正方形を長方形 直方体を長方形
- 経験の不足
 - 教材や教具に触れたことがない
- 離職する人が多い
 - 高い収入を求めて転職

指導力不足



$$2/3 - 1/2 = 3/6 - 4/6 = (3-4)/6 = 1/6$$

9 タマレの生徒

- 低い就学率
 - 小中学校の就学率は50%
- 健康
 - マラリアやコレラやポリオ
 - 栄養不足
- 長所は
 - 明るく 礼儀正しい
 - 働き者
 - 高いコミュニケーション能力



教育を充分に受けられない

10 今後できること

- 国際理解教育や人権教育を通じて
- 国内でのボランティア活動
- 奨学金への協力
- JOCVやSVへの参加

ありがとうございました



マーシャル共和国での取り組み

野原 俊之

(17-1, マーシャル, 小学校教諭, 竜ヶ崎市立長山小学校)

はじめまして。私は、先ほど紹介にあずかりました、17年度1次隊マーシャル派遣の野原俊之と申します。どうぞよろしくお願ひします。拙い発表で申し訳ありませんが、少しでも参考にしていただければ嬉しく思います。では、早速発表の方にうつりたいと思います。

まず、派遣国の概要について紹介したいと思います。私が派遣されたマーシャルなんですが、南太平洋にうかぶ小さな島国です。無数の島が集まってできている共和国になっております。その総面積なんですが、大体霞ヶ浦位ということで、ちょっとイメージしにくいとは思うんですが、とても小さな島です。「太平洋に浮かぶ真珠の首飾り」というような形容もされているんですが、とても細長い国です。写真にありますように、島には幹線道路が一本しかありません。信号もないようなとても細長い国です。一番標高が高いところでも大体10mくらいということで、地球温暖化の影響もとても受けている、そういう国です。人口は、私が派遣される前の統計ですと、約53,000人ということで、大体東京ドームに収容される人数と同じくらい、と想像していただければわかると思います。ただ、今どんどんどんどん人口が急上昇中ということで、住む場所も少なくなっているような状況になっております。海洋性熱帯気候ということで、一年中高温多湿の夏のような状態が続いています。日本統治の時代が長かったこともありますて、親日がとても多い国となっております。ここにアメダマと書いてありますが、アメダマも向こうの現地語として使われていました。他にもヤキュウとかサシミ、サルガタ、アミモノなどというふうに、日本語がそのまま現地語になっているものもあります。エンマンと書いてありますが、これは向こうでよく使われていることばでした。日本語に訳すと、大丈夫とか問題ないとかそういう意味にあたるのですが、何事もこのエンマンという一言で解決してしまうような、とてもおおらかな国民性です。ただ、これはちょっと問題あるだろうということも全てエンマンで解決してしまうので、エンマンには助けられたこともありましたが、逆に苦しめられたこともあります。南国特有の、とてもおおらかな、悪いことばでいうと、計画性がない、いいかげんなところもありました。

私は算数を教えていく要請内容で派遣されたんですが、算数に対しての学力はとても低いです。まず数というものに対しての概念があまりないので、計算をするときも指を使って足し引きをするというレベルでした。なので、例えば繰り下がりとか繰り上がりとかで10を超してしまって指が足りなくなってしまって、するともう計算がわからなくなってしまうというような状況でした。派遣内容についてなんですが、まず要請を受けたのは、現地教諭の指導力向上、教員向け研修会の実施、モデル授業の企画・実施、とありました。それを受け、現地に入りまして、私の方で少し内容の見直しをして、児童の基礎学力向上、教材の開発、現地教員への働きかけ、というように噛み砕いて自分の活動に取り組んでいきました。まず、児童の基礎学力向上についてなんですが、一番

ベースになったのはやはり毎日の授業です。自分は3年生から6年生まで、全部で10クラスの授業を毎日担当しておりました。一コマが45分間で行っていました。ただ、授業といつてもまず全くルールがないような教室の状態だったので、ルールを整えるという条件整備のところから活動を始めました。例えばどんなルールを作っていましたかというと、まず、時間を守る。用具を大切にする。授業中には飲食をしない。ゴミを投げ捨てない。などの、生活面についてのルール。それと学習上のルールとしては、準備をしっかりと整える。人の話を聞く。挙手をして発言をする、というように、本当に基本的なルールなんですが、そのルールをきちんと整備していくことがとても大事かなということを感じました。次に指導内容の吟味なんですが、一応カリキュラムということであるんですが、担任名が列挙されているだけのカリキュラムということ、児童の実力に全く合っていないカリキュラムということだったので、その指導内容を児童の実態に即したものへと編成しなおして、そして取り組んでいきました。TTの活用ということで、全ての授業は現地の教員と組んで行いました。現地の教員と組んで行うことにはいくつかメリットもありました。まず一番は、現地の教員の力を借りて細かな説明もきちんとしてもらえるというところに尽くるんですが、それ以外にも、自分が授業の骨組み作りを行っていって、そして説明を現地の教員にやってもらうという形をとることによって、現地の教員も、自分で説明をしながら、指導の仕方について体得していくというようなこともあります。なので、このTTの活用ということは、自分にとっても、現地教員にとっても、双方にとって大きなメリットのある取り組みではないかなと思いますので、ぜひ活用していただければいいなと思っています。ただ毎日の授業だけでは、特に学力の不振については救うことはできませんので、補修クラス、または休業を使ってのサマースクールなども行っていました。サマースクールについては、マーシャルという国は、6月・7月・8月の中旬までが夏季休業ということでとても長い期間休みに入ってしまいます。休みの期間、子どもたちは何をやっているかというと、特にあてもなく、そのへんをぶらぶらぶらぶら歩いていて、ただ無駄に時間を過ごしているという状況ですので、サマースクールを開くことによって子どもたちもその無駄に過ごしていた時間を持つて過ごすことができたということで、学力を伸ばすという以外にも、いくつかのメリットがあったのかなと今になって思っています。

続いて行ったのが、教材作成に取り組みました。ワークシートの作成をまず行いました。現地語の説明をいれた例題をまず最初にのせて、その下に練習問題をのせていくという形で、特に重要な単元についてはこのワークシートを整備して授業の中でも活用しました。先ほども申し上げましたように、現地語の説明を入れた例題なんですが、これは現地の教員が自分で授業をするときにも参考にしてもらえばいいなということも考えて、そのような例題を盛り込みました。あと補助教材もいくつか作成しました。補助教材と言っても、そんな特別なものを作ったというわけではありません。できるだけわかりやすく、そして使いやすくということを念頭において作成しました。なるべく現地教員が継続的に使えるようにということを考えながら作成しました。また日本から届けてもらった「算数セット」についてもとても効果的でした。やはり日本の算数を研究している人たちが考えて作ったものなので、とても無駄なく使いやすいものなので、ぜひ「算数セット」なんかも活用していただければ、きっと役に立つかなと思います。

続いて、現地教員への取り組みです。ワークショップ・オープンクラスなどを行いました。でき

るだけ現地教員のニーズに応えていくということで、現地教員の声を拾いながら、そしてその中で、本当に必要なものは何かということを考えながら行っていきました。行った内容としては、例えば、黒板にはどういうふうに字を書いていったらいいのかとか、ノート指導をするにはどのようにしていったらいいのかとか、あとは、コンパス・分度器の使い方。立体について教えるときはどのような教え方が効果的なのか、などというような、日常の授業に直接還元のできるもの、または、現地の教員がとくに苦手にしていることをピックアップして行ってきました。

今から派遣される方も今ここで聞いていると思いますので、派遣前にどのようなことをしておいたらいいのかということについて話したいと思います。まず、情報収集を密にするということはとても大事かなと思います。特に前任の人との連携、生の情報を仕入れるということは特に大事になると思います。次に、得意分野を再確認する。派遣される要請内容は人によって違うと思います。私は算数で派遣されましたが、例えば体育で、図工で、日本語教育で、というふうに、それぞれ要請内容違うと思いますので、その要請内容に合わせて、自分の得意分野が一体どういうことなのか、例えば体育だったら自分はどういうことがちゃんと伝えられるのか、というようなことを再確認しておくと、向こうにいったあと安心して、自信を持って取り組めるんじゃないかなと思います。

言語や生活について。今から派遣される方は、一番ここを心配してくるんじゃないかなと思います。私自身も、全く英語がしゃべれるわけではなかったし、日本から離れて生活するというのも当然初めてでした。なので非常に不安はあったんですが、これらについては気づくと慣れているかなと思います。言語については、私、今でもペラペラしゃべれるというわけでは全くありません。片言のことばしかしゃべることはできませんが、一緒に生活しているうちに、だんだんだんだん、お互いの気持ちが、こう、ことばを介さなくても通じるようになっていきますし、お互いにお互いを分かり合おうという気持ちがあれば、何となくは伝わっていきますので、そんなにナーバスになる必要はないかなと思っています。生活についてもちろん風習とか、食べ物について、全然違うところもありますけど、それも半年くらい過ごしているうちに慣れていきますので、心配する必要はないかなと思います。あとは日本文化のネタなんかを自分で用意していくと、活動とは直接関係ないかもしれません、人間関係づくりにはとても役に立つと思います。例えば自分が柔道ができるというのであればそういうデモンストレーションを見せてみたりとか、日本の歌、童謡なんかを歌ってあげるとか、折り紙でいくつか作品を作つてあげる。そういうことをやってあげると、それで向こうは自分に興味を持ってくれるので、きっかけ作りにはとてもいいかなと思います。ネットワークづくりなんですが、特に派遣前訓練の時には、自分の職種以外、自分は小学校の教員として派遣されたんですが、それ以外のたくさんの職種の方と出会う機会がありますので、そういう中での出会いを大切にして、それぞれの情報交換をしておきますと、自分の幅も広がりますので、いざというときに役に立つかなと思います。

続いて派遣中から帰国後のことについての話をしたいと思います。自分ができなかつた反省も含めての話になってしまいますが、まず、リアルタイムの情報発信は、できれば行ったほうがいいかなと思います。日本に帰ったあと、自分の場合、教室で、「向こうの国の様子はこういうふうだったんだよ」という過去形で話すよりも、実際に行っているときに、「今自分はこういうことをしているんだよ」「向こうの生活はこういうふうなんだよ」というふうに、現在進行形で話をした方が、よ

り伝わると思いますので、日々の活動で大変とは思いますが、ぜひリアルタイムの情報発信を行ってあげると、日本にいる人たちはとても助かるんじゃないかな、嬉しいんじゃないかなと思います。あとは、記録の蓄積。例えば、日記をつけたり、ブログを書いたりというふうにして、毎日の様子・活動を記録していくこともとても大事ではないかなと思います。自分の心情とか状況の変化について客観的に判断することができますので、記録を蓄積していくということは自分にとってもメリットがあると思います。データの共有。もしネットが使える環境ならば、最大限に活用してお互いのデータを送信しあうということも役立つと思います。後任との連携。自分の取り組みの様子を、できるだけ後任に伝えていくということも、お互いのためになると思います。継続的な取り組みにとっては後任との連携はとっても大事になると思いますので、行える場合はぜひ行ってください。派遣中なんですが、日本で教員をなさってる方は特に感じると思うんですが、とても自分自身が使える時間が増えますので、自分を磨くチャンスと思って、例えば語学を磨く、自分の専門性を磨く、時間を有効に活用していただきたいなと思っています。あと活動報告の準備なんですが、日本に帰ってしまうととても時間がなくなってしまいます。日々の毎日の仕事で精一杯になってしまいますので、活動報告の準備なんかも派遣中にしておくと楽かなと思います。

最後に、活動を振り返ってなんですが、まず、現職参加で行くと、約3ヶ月間少ないということです。それがとても、こう、後々大変かなと思います。特別なことだけをやっていくと、1年9ヶ月息が続きませんが、何かをスタートしようと時間が足りなくなると思いますので、自分で見通しを持って、大体3ヶ月後にはこういう姿になっているといいな、ということを思い描きながらやっていくといいかなと思います。派手さを求めずに、日ごろの積み重ねを大切にしていく。表面的な結果、例えば、点数であるとか、比較ばっかりにとらわれてしまうと、その場だけの自己満足とか、あと終わってみたら結局何も残らなかつたというようなことが自分自身ありましたので、確実にできるものを一つずつ増やしていくというような気持ちで、毎日の積み重ねを大事にしていくことが大事じゃないかなと思います。日本人かどうかもあるんですが、一番最初はどうしても日本人だからできるとか、自分は関係ないとか、あいつにやらしておけば自分が楽ができるというふうに現地の人からは思われていました。ただ人間関係が構築されていくに従って、日本人だからというところから、野原だからというふうに、自分の人間性、中身の方を見てくれるようになります。そうなってくると活動もだんだんだんだんスムーズになっていくかなと思いますので、人間構築の部分についても大事にしながらやっていくといいかなと思います。最後に、種をまく気持ちということで、全てに結果が出るわけではありません。ただ、心をこめて努力したことは思わぬ副産物をもたらすことがあります。マーシャルでは、算数ができるようになったからといって、進学や就職につながるわけではありませんでした。ただ、算数をとおして、自分もやればできるようになるんだ、という自信をつけさせることができたかなと思います。わかる喜びをどれだけ伝えることができたか、子どもたちの顔が、目が、輝く瞬間をどれだけ作り出すことができたか。そのことを、自分自身、心の支えにして頑張ってきました。そしてその姿を、現地の教員に見せることによって、現地の教員の心の変化も少しずつではありますが見えてきたんじゃないかなって思っています。

偉そうなことも言ってしまったんですが、自分の反省も含めての発表でした。ご清聴ありがとうございます。

ございました。



マーシャル共和国での取り組み

17年度1次隊マーシャル派遣
小学校教諭 野原 俊之

派遣国のおすすめ

- ・霞ヶ浦
- ・ネックレス
- ・最高峰
- ・東京ドーム
- ・夏夏夏夏
- ・あめだま
- ・エンマン
- ・指計算機



派遣内容



- ・現地教員の指導力向上
 - ・教員向け研修会の実施
 - ・モデル授業の企画・実施
- ↓
- ・児童の基礎学力向上
 - ・教材の開発
 - ・現地教員への働きかけ

児童の基礎学力向上

日々の授業

- ・ルールを大切にする
- ・指導内容の吟味
- ・T-Tの活用



課外活動

- ・補修クラス
- ・サマースクール

教材作成

ワークシート

- ・現地語の説明
- ・段階的な内容



補助教材

- ・分かりやすく
- ・使いやすく
- ・算数セットの活用



現地教員への取り組み

ワークショップ オープンクラス

- ・ニーズに応える
- ・継続性
- ・日々の授業に直結



派遣前には

- ・情報収集を密に
- ・得意分野を再確認
- ・言語や生活は気付くと慣れています
- ・日本文化の「ねた」
- ・ネットワーク作り

派遣中→帰国後

- ・リアルタイムの情報発信
- ・記録の蓄積
- ・データの共有
- ・後任との連携
- ・自分自身を磨くチャンス
- ・活動報告の準備

活動をふりかえって

- ・長くて短い1年9ヶ月
- ・派手さを求めず、日頃の積み重ねを大切に
- ・日本人 → ノハラ
- ・種をまく気持ち

ベトナムでの協力隊活動

永井 亜紀子

(17-1, ベトナム, 青少年活動, 江戸川区立一之江第二小学校)

それでは、私の協力隊の活動を発表させていただきます。先ほどの先生のようにあまり端的にまとめていませんのでちょっとまとまりがつかなくなりそうなんですがけれども、よろしくお願ひします。

ちなみにこの写真はベトナムの農村の風景です。でははじめにベトナムといつて私が事前に抱いていたイメージというか知っていたことを皆さんも思い浮かべていただきたいんですけれども、私が思い浮かべていたことは、以上の3つがベトナムへ行く前にベトナムに行ったらこういうことかなと思っていたことがこの3つでした。それから、もうちょっと基礎的なベトナムの情報について言いますと、正式な国名はベトナム社会主義共和国という社会主義の国です。首都は上方にありますハノイになります。人口は約8411万人ほどです。民族の構成は、1番多いのはキン族という民族で先ほどのアオザイなんかを着る民族もキン族の人たちです。そのほか53種類の少数民族も住んでいます。面積は日本の90%ほどとなっています。地形は縦に長く、日本のような地形に似ているのではないかと思います。私の任地は首都にありました、北部にありますハノイというところが任地でした。それでは配属先なんですが、配属先はハノイ市人民委員会という、人民委員会とは地方における行政の機関のことで、いろいろな種類があるんですけれども、そこに配属されました。その名称がチルドレンズパレスというところで、日本語にしますと児童王宮というふうに訳されていましたが、そういう子供がたくさん活動する場所に配属になりました。

それでは、そのチルドレンズパレスという施設の紹介をしたいと思います。ちょっと長いですけれども、だいたい年齢は5歳から15歳くらいの子どもたちが芸術やスポーツなどさまざまな課外活動の機会を提供している施設。また、いろんな催し物や諸外国の子どもたちとの交流の窓口となっていて、この子どもたちが近隣の国に行って、アジア諸国に行って交流したりとかいうことも行っていました。なぜこういう施設があるかというと、ベトナムの学校では日本の学校のようにクラブ活動がないのでこの機関がその役割を果たしているということで、ハノイだけでなくどこかの県に行ってもだいたい小さいながらもこういったものがベトナムにはありました。私が勤めていたハノイのチルドレンズパレスではいろいろなこのようなクラスが開講されていました。(5'00)私が所属していたのは一番上の直訳すると工作隊科というなんか堅苦しい名前なんですが、もうちょっと柔らかい言い回しがあるのかもしれないですがベトナムも直訳するとそういうことで、語学とかトランペット、楽器、小太鼓などを行うところで、そこで私は所属をしていました。これは今紹介したいいろいろなクラスの一例です。左上の伝統の楽器を練習していたりとか右側は子どもなんですかけどすごいショーのような感じで、煌びやかなこともやっていました。テコンドーなんかも人気で一生懸命練習していたり、これもとってもかわいくて小さい子どもたちがバレエの練習

をしてしたり、いろんなことをやっているところでした。

それでは、私の要請内容ですが、いろいろな課外活動を教えているところなのでその指導、また催し物の企画、また日本との交流活動を行うなどという要請、それから課外活動の中では日本語クラブというものがありましたので、そこで簡単な日本語の授業や日本の文化の紹介を行うほか、さまざまな課外活動がありますのでそのうちの2つ以上の自分の教えられる得意科目の指導を担当するという要請が書いてありました。催し物では、記念日の行事や協議会や発表会などの企画・運営を職員たちとともにを行うということが書いてありました。そのほかにも、日本の諸団体や地方自治体との文化交流活動への支援を行うということもありました。

それでは要請内容と実際の活動の内容を比較して見ますと、実際行った活動は一番主にやっていたのは、日本語クラブの指導にあたりました。それから折り紙クラスはなかったんですけれど協力隊が入ったことでそういうクラスを開設して指導をしたり、ほかの数学のクラスとか科学のクラスとかほかのクラスに飛び入り参加して、クリスマスの時期などはクリスマスのイベントをやったりクリスマス会を開いたりその中で折り紙を折ったりしました。チルドレンズパレスの工作隊科の職員に対しての日本語指導も少し行いました。それからさまざまな活動があったんですけれども、ベトナムには青年団という団体がおりまして、その青年団に対して日本語を指導する、チルドレンズパレスの職員ではないんですが一応チルドレンズパレスの職員に行きなさいと言われて行ってやつていました。それから幼稚園の教諭、近隣のハノイにありました幼稚園に行きました先生方に日本の折り紙と一緒に折って教えてみました。日本語クラブの活動の趣旨ですが、小・中・高校生までが学びに来ていましたので、簡単な日本語や日本文化を紹介するというようなことをしていました。では主に行つた指導の項目ですが、こういったことをやりました。主にそんなに難しい、日本語教師ではありませんので、難しい専門的なことはできませんでしたので遊びを交えてゲームをしたりしながら歌を歌つたりして楽しく日本語と触れ合うということを重点においてやりました。主に中学生が1番多かったんですけれども、興味を引いてもらえるような楽しんでできる書道なり遊びなり折り紙なりをやって、楽しくできるようなことを考えてやっていました。こういったことをやって、右下は南中ソーランというソーラン節をクリスマスのイベントのときに発表しているところです。イベントをやってほしいということをよく言われていましたので、クリスマスのイベントでドラえもん音頭というのを先輩の隊員から教えてもらったので、それを一緒に踊りました。右はこれもドラえもん音頭を踊っているのはひな祭りのときに踊っています。それからいろいろ日本との交流の機会も多く、埼玉や千葉県の先生方が下見に来たときには交流会をしたり、JICAネットを使って埼玉県にいる小学生とインターネットを通じてクイズをしたり歌を歌いあつたりしての交流会もしました。それから左側は、静岡県から高校生がスタディツアーデやってきました、そこでも交流をチルドレンズパレスの日本語クラブの生徒と一緒に南中ソーラン節や高校生がマツケンサンバを教えてくれたので一緒に踊っているところです。右は節分の会などをやっています。それからチルドレンズパレス以外でも活動を少ししていまして、平和村という枯葉剤の被害児がいろいろ学んだりする施設、SOS村という全国にありますけれども児童養護施設、菩提寺というの普通のお寺なんですが、親のいない子などを預かっていたお寺に行って、日本語や日本の歌を指導したり子どもたちと遊んだりということをしました。障害者の訓練施設というの、これも枯葉剤の被害で体が不自

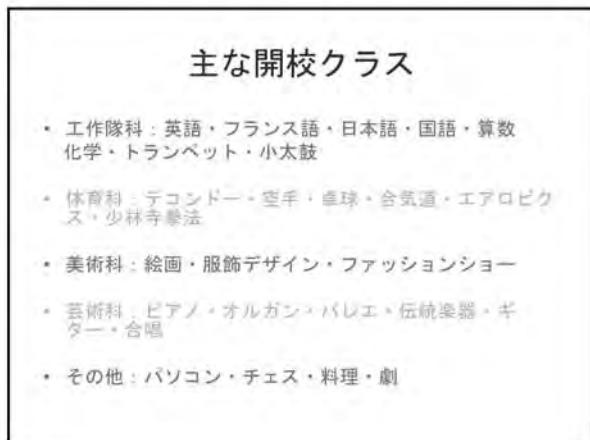
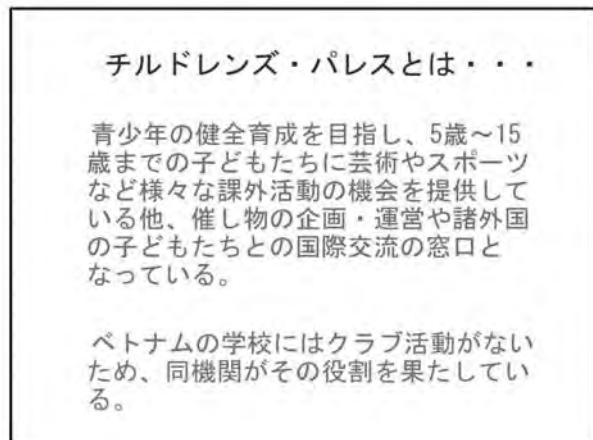
由な人たちがいろいろ職業訓練、アクセサリーなどを作つて売つてゐる場所だったんですけども、そういうところに行って歩けない人たちのお手伝い、歩行訓練のお手伝いなどもしました。ハノイの近隣にありましたバクザン省というところに同期の現職参加の教員が3人いたんですけども、そのうちの1つの学校のドンロ2小学校というところで何回か図工の授業をさせていただきました。平和村の様子はこんな感じで、楽しく遊んだりすることをしました。SOS村も、これは家族が10人くらいいるんですけど、皆さん本当の親はみんな違うんですけども、ひとつの家で家族のように住んでいるというところに行って、一緒に遊んだり折り紙したりしました。ここは菩提寺というお寺ですが、ここも親がいない子どもたちが尼さんに育てられているんですけど、そこにいてお絵かきしたりとか日本語を勉強したいという高校生がいましたので教えたりしていました。これはやはり枯葉剤による障害のある子どもたちがアクセサリーを作つたものを売つて収益を得ているようなところでしたが、そこに行って歩行訓練のお手伝いなどをちょっととさせていただきました。

私は現在図工の専科、東京都は図工の専科があるんですけども、図工の専科がありましたので図工の授業をしてみたいということがありまして、小学校に行って図工を教えました。これはホイyan祭りという、中部にホイyanという場所があつて、そこでJOCVが、JOCVだけではないんですけど、いろんな団体が集まつてお祭りを企画したイベントです。日本の方から子どもたちや日本の協力者に2500、5000羽の半分くらいの折鶴を折つてもらって、ホイyanに送つてもらって当日ホイyanのほうで半分くらい、2500羽くらいを折つてこのように右のようによつて貼り付けました。これはホイyan祭りで小学校の教員とか青少年活動とか教育系に関する教育分科会という分科会を設けまして、そこのメンバーとともに行つた活動です。右のようなベトナム人と日本人の人が握手をしているような絵が完成しました。これはベトナムの小学校5年生の教科書にありました、詩をもとに、もしも魔法が使えたらという詩がベトナム語の教科書にありますそれを読んでみて、じゃあベトナムの子どもたちはどんなことをしたいんだろうか、もしも魔法が使えたらどういうことをしたいのかということを絵に描いてもらいました。自分が尋ねていたところのいくつかのところで描いてもらいました。ひとつは小学校5年生の女の子の絵ですが、家族全員を幸せにしたいという絵を描いてくれました。それからチルドレンズパレスの女の子はお金持ちになりたい魔法を使いたいということでした。SOS村の男の子は優しい仏様になつてみんなを助けたいということを描いてくれました。これはなんかとてもじーんと感動してしまつたのですが、小学校5年生の男の子が描いてくれた絵は、日本とベトナムの国旗が描いてくれてあるんですけども、こちらですね、いつまでも平和でありますようにという、これはその学校の校門を描いてあるんですね、その学校はODAで建てられた学校ですので、日本の国旗のマークが入つてましたのでその辺からこういう絵を描いたんだと思います。

最後に活動を通して感じたことですが、事前に自分が思い描いていた活動とはとっても実際ギャップがありまして、私は図工の教員なのでそういうことをやるものだと思っていたんですけども、実際はチルドレンズパレスではほとんどそれは、要請内容ではそういうことがやれるようなことが書いてあったのですが、現地に行ってみたらちゃんとした先生がいるのでやる必要はありませんときっぱり言われて、何度もやりたいと言つたんですけども必要はないと言われてそれはできなかつたんですね。自分がいろいろ用意していったりしたこと也有つたのですが、来てみたら実は違う

ということもありました。日本語をこんなに一生懸命、文化を紹介するとは思っていなかつたので、実際はそんな感じでした。とても最初はすごく悩んでいたんですけども、結果として考えてみればチルドレンズパレスで日本語を教えられたことも普段ではできないことですのでいい経験でしたし、配属先以外のところでもいろんな人たちと出会うことができたのでそういうこともよかったです。それから自分が絵を教えたい、チルドレンズパレスで絵を教えたいとか自分のやりたいことあったんですけども向こうは必要ないと言われてまして、そういうことも含め、自分がやりたいことを相手側に押し付けるのではなくて、むこうが必要としているということを考えてその中でできることをやつた方がいいんじゃないかなと思うようになりました。それから1年9ヶ月ベトナムで生活してみて帰ってきて、今の日本の社会に欠けている点など生活の面でなどを感じました。日本においては1年9ヶ月間では同じ期間日本においてはわからなかつたことなので、協力隊に参加で着てよかったです。それから、たくさんの任国で知り合つた人たちの暮らしがこれからも幸せであつてほしいと思います。また、向こうの人たちもこちら側のことをそういうふうに思ってくれているんじゃないかなと思います。協力隊のよいところは、そういうような関係をお互いに気づけるところが魅力なのではないかと思います。それではまとまらず拙い発表でしたが、ありがとうございました。終わりにさせていただきます。







要請内容

職員や関係者と協力し、課外活動の指導、催し物の企画、日本との交流活動などを行う。

要請内容

課外活動については、日本語クラブでの簡単な日本語の授業や日本文化の紹介を行う他、卓球、エアロビクス、ピアノ、絵画、キーボード、料理、フラワーアレンジメント、ファッショングデザイン、手工芸のうち2つ以上の得意科目の指導を担当する。

要請内容

催し物に関しては、様々な記念日の行事や競技会、発表会や野外活動などの企画・運営を職員と共に行う。

この他に日本の諸団体や地方自治体との文化交流活動への支援を行う。

実際の活動内容

- ・日本語クラブの指導
- ・折り紙クラス指導
- ・他のクラスに折り紙指導
(クリスマス会など)
- ・職員対象日本語指導



実際の活動内容

- ・青年団対象日本語指導
- ・幼稚園教諭対象折り紙指導



日本語クラブ活動主旨

小・中・高校生を対象に簡単な日本語や、日本文化を紹介する。

日本語クラブでの主な指導項目

- ・ あいさつ、会話の表現
- ・ 様々な単語練習（動物・果物・月・曜日等）
- ・ 歌（大きな古時計、ドラえもん、小さな世界等）
- ・ 踊り（南中ソーラン、ドラえもん音頭等）
- ・ 日本文化紹介
- ・ 日本語を使ったゲーム
- ・ 日本アニメ上映（となりのトトロ）
- ・ 日本の絵本読み聞かせ
- ・ 折り紙
- ・ 絵画や工作
- ・ 日本の生徒との絵や手紙・E-mailの交換（埼玉県草加中学校）



日本語クラブで実施したイベント

- ・ クリスマスイベント参加
- ・ ひなまつり



日本語クラブで実施したイベント

- ・ 埼玉・千葉県の教諭との交流会
- ・ JICA-net を利用した埼玉県の小学生との交流会



日本語クラブで実施したイベント

- ・静岡県の高校生との交流会
- ・節分



チルドレンズ・パレス 以外での活動

- ・平和村（枯葉剤被害児施設）
SOS村（児童養護施設）
菩提寺で日本語・日本の歌指導・
子どもたちと遊ぶ
- ・障害者訓練施設で歩行訓練の補助
- ・ハノイ近隣のバクザン省・
ドンロ2小学校で図工の授業



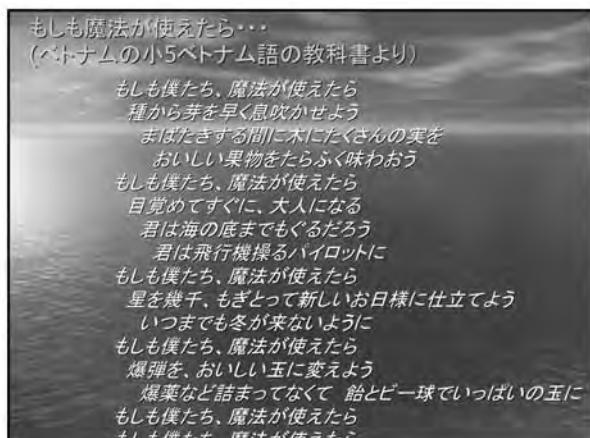
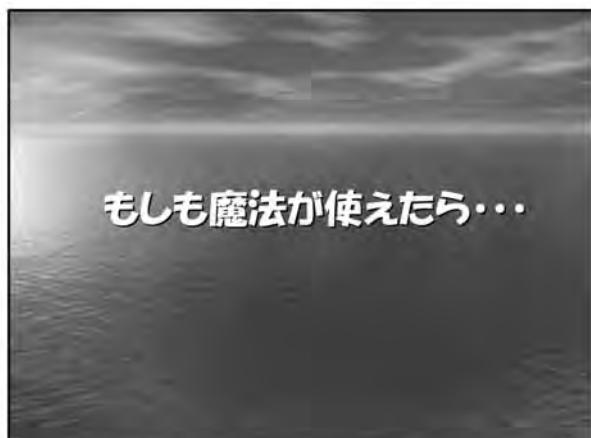
平和村

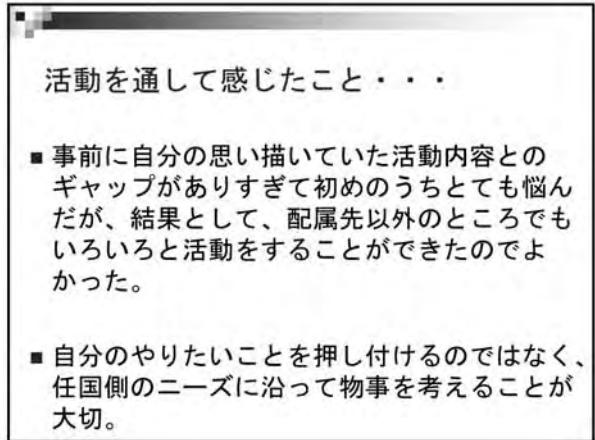
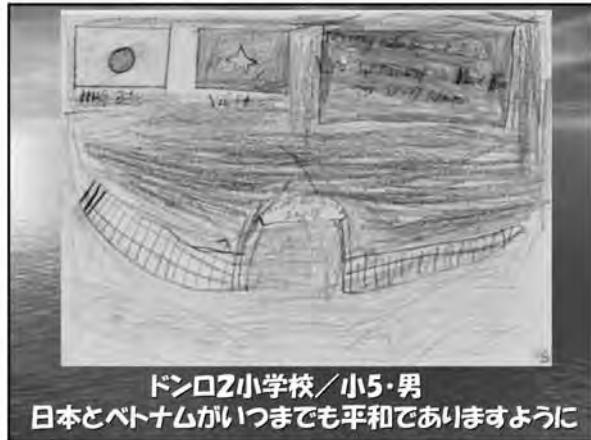


SOS村



菩提寺





活動を通して感じたこと・・・

- ベトナムで生活して、今の日本社会に欠けている事などを感じた。日本に居てはわからない事なので協力隊に参加できてよかったです。
- 任国で知り合った人たちの暮らしがこれからも幸せであってほしいと思うし、きっと彼らもこちらのことをそう思ってくれていると思う。協力隊の良いところは、そのようなお互いの関係を築けるところなのでは...。

ご清聴ありがとうございました。

言葉は通じなくても授業はできた

小木曾 尚子

(17-1, シリア, 音楽, 中津川市立福岡中学校)

岐阜県中津川市立福岡中学校から来ました小木曾尚子といいます。私はシリアのほうへ音楽の隊員としていってきました。言葉は通じなくても授業はできたということでお話を聞いていただきたいんですけど、言葉は通じないというか私はほとんど喋らずに子どもたちと授業をしたという感じですけど、まずその様子を見ていただきたいと思います。

(ビデオ)

という感じで、最初にちょっとしたイントロクイズみたいなことをして子どもたちの興味を惹きながら授業をしていたんですけど、最初私は本当に不安で言葉がうまく喋れるかどうか人一倍その辺が心配だったんですけど、こんな私でも何とかなったかなという感じです。でも今の授業風景なんですけど、これは私の配属先がウンルワというところで国連の機関がやっているところだったんですけど、そのお客様が見えたときで、だからギリシアの方とかカナダの方とかが来ていました。なので今特別な格好をして子どもたちは最初にパレスチナ体操というのをお客様に披露してからこの授業だったので、こういう格好をしていますけど、こんなふうに授業をしていたんですが、これは私としては駄目な授業といいますか、何が駄目かというと次なんですけど結局私が授業していくは駄目なんです。技術移転がねらいなので、音楽の授業を根付かせること、私たち日本人が帰った後も音楽の授業が続いていけるようにするために、現地の先生がやらなくてはいけない、日本人を必要とする日が来るよう目指してやってきました。この写真を見てもらえるとわかるように現地の先生がやってくださってるんですけど、すみません左の写真なんですけど、やっぱりまだ弾けないというはあるので、私がちょっと弾きながら子どもたちが歌う、先生は音階の指導をしているとかいう感じの写真です。右側のほうは子どもがキーボードを弾いていますけど、音楽クラブで一緒に頑張ってきた子をつかってというか授業で弾いてってお願いして子どもたちが歌っている、一番後ろに現地の先生が座っているんですけど何とかこういう先生方の前に出て授業してくれるといいなということでやってきました。技術移転がねらいということで、音楽の授業もやってほしいんですけどまずその前にやらなければいけないこと皆さんもわかっていると思うんですけど人間関係を作るというところです。そのために私が心がけたこととして、まず笑顔で挨拶ということ。シリアの方々は、ほかの国もそうだと思うんですけど、自分の国を本当に愛していますのでとにかく他の人にも自分の国を好きになってほしい、そういう気持ちをすごくもっていらっしゃるので、私が悲しい顔をしているとすごく心配してくれたり、とにかく笑顔でいるというのはすごく大事かなと、私もこの国で楽しい生活を送っていますよということで、笑顔で心がけるということです。その次に名前を早く覚えるというのがあるんですけど、生徒の名前より職員の名前、私は4つの学校に行っていたんですけど、だいたい60人くらいの先生

がいるんですけど、私は最初生徒の名前をすぐ覚えようと思ったんですけど、一緒にいた先輩隊員がまず職員の名前を覚えなきやだめだよと言われて、えっと思ってその時にすぐ名前と特徴ですね、この人は顔が大きいとか、いつもサンダルを履いているとか、化粧が濃いとか、そういう名前と特徴、メモを取りました。そうするとわりとすぐ覚えられるようになってきて、ムハンマド先生とか言うとやっぱり喜んでもらえたかなというのはありました。名前でやっぱり親近感が持てたのかなということを思います。あともう1つとして、たくさん褒め、認めるということで、言われると嬉しいことをたくさん覚えておくということももちろんんですけど、校長先生の前でその先生のことをすごく褒める、よく頑張っているよ、今度はそういうJOCVなんかは教育庁とかいうところに訪問することも何回かあるんですけど、そういうところで自分の学校のことを褒める、すごくいい学校ですよ、そんなふうにどんどん学校のいいところや先生のいいところを伝えるようにしました。そうしていくと、なんとなくまわりの人たちも日本人をわかるとしてくれるというか、尚子、私をわかるとしてくれるのかなということを感じました。もちろん私は3代目なので、今までの隊員がそういうのを築いてくれたんだなという信頼関係に感謝する気持ちも忘れずにやってきました。

シリアという国はイスラム教です。ものすごいやはりこれは私たちが想像する以上のものがありまして、エピソードなんですけれど、子どもがコンサートするからぜひ行こうよという話をしたら、行かないっていうんですね。なんでって言うと、行きたくないから、音楽を聴きにいくと楽しいよっていうと、いや僕たちにはコーランがあるから、コーランで育ってきてるから音楽なんていらない。まあなるほどなと思ったんですけど、こういうことがあったりとか、イスラム教はお客様をもてなすことすごく大事にしているので、先生方が朝学校に行くと疲れているんですね、どうしたのって言うと、昨日お客様がいっぱいいたから大変だったのよって、それが一応理由になってしまい、今日は私もう疲れているから尚子授業やってみたいな感じで。最初はえっと思うんですけど、まあそういう国もいいかなということを感じるようになってきました。インシャアッラーというのは、今この下の写真は、職員室はないので先生方が空き時間のときにこういう休憩室みたいなところがあるんですけど、ここでおしゃべりをしながらまたいろいろな約束をするんですけど、そういうところで最後に先生方がインシャアッラーと言うのは、神がすべてを決めるから、行くか行かないかは神が決めるからみたいな感じで、こういう約束の仕方をするんですけど、結局行ってみても来なかつた、次の日どうしてこなかつたのと/orってみたら、神が決めたからみたいな感じで、約束を破られることはしょっちゅうなんんですけど、最初は頭にくることが多かつたんですが、2年目になると私もそういう言葉を使い始めて、結構楽に約束ができるというか、向こうはもうそういう気持ちだからこっちもこういう気持ちでみたいな感じで、わりとでも最後の方はこれは便利だなということを感じて、違いを発見することが楽しくなってきたという感じです。違いということで、日本と比べて考えないということでいろいろあります。教員の体罰が激しかったりとか、勝手に成績をつけていく、これもどこどこの家の子どもだからこの子は中だとか、この子は全然よくできるんですけどもういいみたいな感じで、家柄とかで決めてる、私も納得がいかなかつたんですけど。あと教師の一方的な授業、それから音楽の授業を重要視されていない、子どもよりも自分たちの都合を優先させる、いろんなことがあるんですけど、それがおかしいと考えていると、自

分の頭がどんどんおかしくなってくる感じなので、こういうことがあっても自分はちゃんとしよう、日本に帰ってからこんなこと絶対許されないだろうなということは思いながらやっていました。1つ、1年目に、どうしても子どもが一生懸命練習した曲なのにその曲を発表させない、この曲はさせないということがあって、もうそれは私も我慢できなくて校長室に行って、私はこれ納得できないと言って校長室の机をポンと叩いたら、その校長先生に尚子なに失礼よ、机を叩くなんてと言われて逆ギレをされて、なんで尚子そんな怒ってるのと言うから、気持ちが伝わってないからと言うと、あなたのアラビア語がわかんないからよみたいな感じで言われてしまうことがあって、悩んだこともいっぱいあったんですけど、そういうのがだんだん慣れてくる、やっぱりそのへんはあまり自分で追求しない方がいいんだな、一線をおいておこうというふうに考えていくと、なんとなく物事がうまく進んでいくようになっていきました。

私の主な生活ということで、どんなふうな1週間を送っていたかということをお話したいと思います。日曜日から水曜日までは任地で授業を行っていました。そして木曜日、この日は授業はなしにしてもらって学校のほうにお願いして、首都にあがります。他の音楽隊員、私以外にも4人いましたので音楽隊員と会議を行って、次は何をやろうとか、教科書をつくろうとか、コンクールをやろうとか、そういう会議をしました。あと教員講習会などを行ったりしました。金曜日はイスラム教はお休みなので、向こうの国はお休みの日なので私も学校をお休みして、先生の家に遊びに行ったりとかそんなことをしていました。土曜日は任地で音楽クラブを行うというふうでした。夏休みや冬休み、私の学校も6月くらいから9月くらいまで3ヶ月間お休みがあったので、こういう時を利用して隊員でみんなで教員講習などを開きました。一つの主な活動として、音楽の授業がなかった国で音楽の先生を育てるということで、ほとんどの先生が音楽の授業を経験していませんので、音楽の授業の重要性をわかってもらえないところもあります。そのでまず首都に30名ほど音楽の先生がいらっしゃいまして、その先生のための講習会をはじめて行いました。そこで新たにリコーダーの吹き方とか作曲の仕方など、そういうのを講習会を開いたところ、音楽の先生が非常に興味を持ってもらって、私たちと信頼関係とまではいかないかもしれませんけど、そういうのができてきたので、今度私たちが音楽の先生をもっと増やしたいんだけど、地方にももっと音楽の先生をつくりたいんだけどと言うと、じゃあ私たちが教えに行ってあげるわということで、首都からバスで4時間とか3時間とかかけて駆けつけてくれるようになってきました。2番として、地方の、今度最初に13人の小学校の先生ということで選抜、校長先生と相談をしてこの先生にこの学校の音楽の授業を担当してもらおうということで、選抜したんですけど、各地方から13人、その先生方の講習を行ったのですが、首都の音楽教諭がトレーナーとして、この金髪の方なんですけれど、やはり言葉がしゃべれます、私たちはしゃべれないので、現地の先生が言うことによってもののわかり方はやくなりますが、かっこいいというのもありますね。そういう憧れなんかを持ってもらえて、私たちがバックでフォローするという形で行われていきました。3番として、今度その13人の先生方がそこで学んだことを自分の学校に持ち帰って、私たちと一緒に授業を行なながらスキルアップをしていくということをやってきました。4番目として、小学校、今度は全員教員を対象にした学校集会を開こうという話をして、今度その前に13人の先生が講習を受けてきたことを活かして各学校で広めてくれたというのです。結果、学校の音楽の授業への意識が変わってきて、授業をやってくれ

る先生が増えてきました。現地の教員の協力がなにより大切なのは、私がいくら頑張ってもアラビア語はやっぱりだめなので、子どもたちの喰らい付きも違ってきます。この様子は、コンクールを行ったんですけどその練習なんですが、ちょっと映像が悪いんですけど見てください。

(ビデオ)

見てもらうとわかるんですけど、子どもは私服を着ています。なので休日の練習です。こういう練習に現地の先生が一緒に参加してくれるということは本当にありがたいことだと思います。あと・・・という太鼓があるんですけど、この叩き方はもう私は全然わからないんですけど、近所で音楽をやっていた人がいてその人が協力してあげるよと言ってきててくれてやってくださいました。

いま、振り返って実感することとして、現地の先生や現地の方々を頼りにすると結果いいことがいっぱいあったなということを思います。ほんと最初は我慢ですけれど、自分でやった方がはやかったり、自分がやった方がもっと子どもが成長するんじやないかとか勝手に思ってしまったりすることもあったんですけど、結果として先生どんな授業にしたいか願いを伝えることによって、自分がアラビア語がなんとなく上達してきたかなというのが少しですけどありますし、自分の言葉がわかってもらえやすくなってきたというのもありますし、現地の先生が授業のイメージが私と打ち合わせをすることによってわいてきますので積極的にやってくれる、現地の先生と生徒の楽しい音楽の授業を見ることができた、後ろで私はほほえましくそれを見てることができたというのは、すごくよかったです。

私の報告はこれくらいとして、シリアというとみなさん危ないイメージがたぶんあるんじゃないかなと思うんですけど、暮らしてみるとわかるんですが全然本当に安全な国で、人々は優しいですし料理もおいしいですし、とても住みやすい国でした。それから自分が好きな音楽を通して外国にも仲間ができたということは本当に大きかったなということを思います。協力隊に参加して本当によかったです。すみません、拙い発表でしたけどご清聴ありがとうございました。



授業風景



言葉は通じなくても授業はできた



岐阜県中津川市立福岡中学校 小木曾尚子

日常で心がけたこと

- 笑顔であいさつ
 - ・「この国で私は楽しい生活を送っています」
- 名前を早く覚える
 - ・生徒の名前より職員の名前
 - ・その人の特徴のメモをとる
- たくさん讃め、認める
 - ・言われるとうれしい言葉をたくさん覚えておく

↓
日本人を分かろうとしてくれる

⇒今までの隊員が築いた信頼関係に感謝

願い

- 音楽の授業を根付かせること！
日本人を必要としない日がくるように



日本と比べて考えない

- 教員の体罰
 - 勝手な成績のつけ方
 - 教師の一方的な授業
 - 音楽の授業は重要視されていない
 - 子どもよりも自分たちの都合を優先
- ↓
それはおかしい！と考えていると、自分の頭がおかしくなる！？⇒「自分はちゃんとしよう」

宗教と人々の生活

- コーランがあるから
- お客をもてなすことが大切
- インシャ アッラー

違いを発見することが
楽しい！



音楽の授業のなかつた国で、 音楽の先生を育てる

1. 首都の音楽教諭の講習会
2. 地方の13人の小学校教諭の音楽講習会 首都の音楽教諭がトレーナー
3. 13人の先生と授業を共に行いながらスキルアップ
4. 小学校全教員を対象にした音楽講習会

13人の先生がトレーナー



私の主な生活

- 日～水曜日は任地で授業
- 木曜日は首都に上がり、他の音楽隊員との会議や、教員講習会
- 金曜日は休み
- 土曜日は任地で音楽クラブ
- 夏休みや冬休みに教員講習会



現地の教員の協力がなにより大切！



音楽の授業への意識が変わってきた！



シリアの名所



今、振り返って実感すること

- 人間関係の大切さ
- 自分が変わられた
- 中東問題、現地の人の声

ご清聴ありがとうございました



音楽を通して出会えた仲間



ニジェール共和国 ～ドッソ第2中学校における体育授業～

佐藤 忍

(17-1, ニジェール共和国, 体育, 阿賀町立上川中学校)

新潟県阿賀町立上川中学校から参りました、佐藤忍と申します。笹館所長を前に非常に緊張しております。よろしくお願ひします。

私は2005年7月から、2007年3月まで、西アフリカにあるニジェールという国に行つてきました。今日はニジェールでやってきたドッソ第二中学校の体育隊員として活動してきたことを紹介したいと思います。まずはニジェール共和国における任国事情をちょっと説明したいと思います。すみません、地図の入れ方がよくわからなかつたので文字だけで失礼します。面積は日本の約3倍、それから地理上でいくと西アフリカで2番目に大きい国と言われています。人口1160万人というふうになっているのですが、実際にはもっとたくさんの人口がいると思います。なぜならこれらを調べる行政は全く機能していないのではないかと思います。それから、この数字をどうやって調べたかも非常に疑問が残る人数です。それから、人種ですが、ハウサ、ザルマガ、多くいます。写真のらくだに乗っているのはコワレル族、それから下の、顔がオレンジ色に塗られているのはボロロ族のボロロ祭といいまして、歯が白い、目の白さで美男子コンテストが行われています。毎年行われていて、日本からもツアーを組んでこのボロロ祭を見に行くなんていうのもあるようです。それから、右下にあるのは、ニジェール人たちが、一般人というか、お金持ちでない人が住んでいる藁の家です。気候は北から砂漠気候、サヘル気候、サバンナ気候、3月～6月が一番暑い時期になります。グランドの灼熱の太陽の光は非常に厳しかったです。子どもたちは靴を持っていないので、裸足で体育の授業をやるわけですが、「マダムばっかり靴を履いてるよ！」なんていわれて、私も裸足になってみたのですが、火傷しそうなので勘弁してくれと靴を履かさせていただきました。それからハーマタンという風が吹く12月から2月なんですが、現地語でクッサといいまして、非常に霧がかかったように、もやがかかったように、砂埃がひどいですね。そうすると耳の穴、鼻の穴が真っ黒くなつて、部屋はびっちり閉めているんですけども、部屋が砂だらけになつてしまつます。それから、一人当たりGNPということで、この数字は私たち日本人の1ヶ月分の半分、これがニジェール人の1年だといわれています。一日1ドル未満で暮らす人の比率が61%と言われています。それから成人識字率、これは世界最低だといわれています。右の写真は、青少年活動の方の写真なんですけれども、識字率を上げる活動も行っていましたが、イスラム教のアラブ語を習っている現地人には、見も知らぬ外国人がフランス語や文字を教えることが理解されることは難しいといつていきました。余談ですが、ある隊員がお父さんやお母さんの絵を描いてごらん、と紙とクレヨンを渡して書かせたところ、大人がとんできて、やめろと。なぜやめろと言つたのかというと、イスラム教は偶像崇拜をしてはいけないからだと、そういう話を聞いて、活動する前に私たちがやらなければいけないことは、任国の文化・宗教、習慣をしっかり理解することだと重く受

け止めました。それから人間開発指数ですが、162カ国中161位ということで、国連開発指数、一つ目が成人識字率、二つ目が5歳未満児死亡率、三つ目が国民一人当たり国内総生産、というので開発指数が出ているわけですが、近年シエラレオネが戦争か内乱か何かをやめたおかげでニジェールが最下位になったという話を聞きました。5歳未満児死亡率、1000人あたり265人と、この右の写真は私が雇っていた警備員の夫婦に子どもが生まれた写真です。この子は私がうちを出てくるときには元気にすくすく育っていましたが、簡単に子どもたちが死んでしまうのも目の当たりにしてきました。出生時の平均余命が46歳、初等教育純就学30%、それから為替レートですが、日本円の約5分の1だというふうにして、私たちはいつも計算していました。産業経済状況はご覧の通りです。農牧業と工業、しかしながら現在ではウラン市場の低迷ながら、全くというほど、ニジェール国の資源になるものはない。他国からの援助でまかなっている状態。ニジェールにおける主要ドナーは世界銀行、EU、UNICEF、などなどです。援助額ではフランスが飛びぬけて多くて、次にEU、世界銀行、その後にドイツ、日本であると聞いています。

活動の紹介、学校について、体育授業について、バレー、ボルについて説明していきたいと思います。学校についてですが、ニジェールの中学校は中学校1年生、2年生、3年生、4年生まであります。1年生には約600人前後が入学してきますが、徐々に退学、それから家の都合、等々で卒業学年になるころには100人いないのではないかと思われます。それから職員数ですが、トッソ第二中学校では、男性職員が20人女性職員は私を含めて4名という状態がありました。指導教科は日本とほぼ変わりません。学校の方は、8時半から始まります。8時25分になるとその右上の写真にある鐘を叩くんです。そうすると国旗掲揚が始まって1時間目、8時半から始まります。2時間目、そして2時間目と3時間目の休憩のときに子どもたち・職員は、その右の下二つにあるようなちょっとしたおやつを買って空腹を紛らわします。4限が終わると休憩、そして一度生徒・教師は家に帰ります。そして5限、6限となります。下の、5限、6限のカッコの16時～17時、17時～18時というのは、4、5、6と非常に暑くなります。日陰のないグランドでは、気温計では測れないほどの暑さになります。少しでも太陽が傾いてから授業を行うように、4時から30分遅れになっています。日本とニジェールの比較ですが、教育制度、日本では義務教育に対して、義務化されていない。進級試験、進級前に行います。小学校においても実施しているので、留年して、やっと入学してくる者もいます。それから教員ですが、ニジェールでは高校を卒業した人も教員をやっていました。それから生徒は、学年が上がるにつれて、裕福な家庭、それから優秀な生徒のみが学校に通うようになります。優秀な生徒というのは、自分のうちが貧困であっても、明かりを求めてノートを持っていって電気の下で勉強する、ランプの下で勉強をする。そうやって一生懸命、とにかく上にいきたいんだという、貧困でありながらも優秀な生徒は中学校4年生まで上がることができます。生徒の年齢ですが、ニジェールでは、自分の誕生日を知らない人がほとんどです。出生のカード、身分証明書みたいなものもあるんですが、大体何年、みたいなことが書いてあって、「実際おまえ本当は何歳なんだ！」というような中学生がたくさんいます。生徒指導に関してですが、体罰、ひどいです。すぐ殴ります。中学校の女の先生は鉛筆がぽんと落ちると、自分では拾いません。あなた拾いなさい、といって拾わせるんですよねー。すごいです。びっくりしました。それから、施設設備に関しては、校舎・建物のみ、机・椅子、電気・水道なし。水道、でもうちの

学校は恵まれていて、1本だけありました。それから教材に関しては、ニジェールでは全くありません。あ、私の学校ではありませんでした。これがドッソ第二中学校の校舎・建物です。赤土とコンクリートを混ぜて建てたもの。屋根もあって、立派な方だと思います。教室内の様子です。ご覧ください。机・椅子ありますが、机の板がなかつたり、早い者勝ちで座ったり、それからござを自分で持ってきて授業を受けている状態です。それから窓はついているんですが、ガラスがなくて、窓をあけると熱風とか砂が入ってくるためにあまりあけられません。なので薄暗い中で授業を受けています。ニジェールの黒板です。黒板、非常に乾燥していますので黒板を消すときはスポンジに水を含ませたもので拭いています。体育の授業についてですが、もう一人の体育教師と一緒にこのような単元計画を立てて授業をしていました。10月の体作り運動と、日本の授業と同じようなことをしていました。集団行動も含めて行っていました。ただ、私の行っていました2年間は、ラマダン、断食の時期と重なって、ほとんどの生徒が体育の授業はやらない。なので、ほとんどの生徒、出席していませんでした。それから11月になるとやっと生徒が学校に着始めます。2月、マット運動ですが、一番寒い時期なんですが、マット運動と言っても、マットはないので、砂の上で行います。当然私も砂の上で前転、後転、いろいろしてきたんですが、子どもたちは賢くてですね、その辺に落ちてるビニール袋を頭にかぶせてですね、砂の上を前転したりするんですね。非常に、黒人たちの髪の毛というのが砂がつきやすいというか、くるくる渦を巻いているので、非常に砂だらけになるんですよね。子どもたちはまさに生きる力だと思います。それから5月、暑いときです。気温45度を普通に超しています。裸足で、石も転がっているグランドでですね、牛もよく横断していくんですけども、牛の糞を踏みながらサッカー頑張っていました。それからリュット、ニジェール相撲です。この頃になると、バカンス前で生徒ほとんど来なくなります。これは、集団行動の様子です。映像が非常に悪いんですけども、私は日本式の体育に非常にこだわりました。本当は身長順に並んで体格の同じような子と前後でペアになって活動とかしたかったので、4列横隊、1列横隊から2列横隊等の訓練を一生懸命やりました。なかなかできませんでした。サッカーの様子、それから高飛び。高飛び、非常に危険です。怪我だけは絶対にさせられないなど。なぜかというと、前の、前任者とか、骨折とかすると、医療機関が発達していないので、骨折してもギプスとかがないので変な風に骨がくつついちゃうから、骨折とかはさせないようにねなんていって、見えませんが非常にふかふかにした砂の上で着地しています。中学校2年生で135センチとびました。女子で115センチの記録でした。それからこれは、ニジェール相撲の様子です。映像悪くてすみません。日本とあまり変わらないような相撲ですね、いわゆる相撲です。それから、これが授業の様子です。来てる人数は20人くらいなんですが、私は70名の名簿を一生懸命読んでですね、出欠確認します。それからこれが準備運動の様子。学校活動においての悩みなんですが、授業ができないんですよね。なぜかというと、国が教師たちに給料を支払わない。ストライキを起こして、授業が成り立たない。生徒が途方にくれて、私だけが授業をやっている状態で乱入して、生徒指導の先生に来てもらって追っ払ってもらって、そのうち生徒が来なくなって、授業ができない、という悩みがありました。バレーボール活動ですが、私で4代目になります。非常に、もう4代目になるので、前任者たちが育てた、選手・それから指導者の技術レベルが向上して、体育隊員のバレーボールの専門性が必要になってきました。バレーボール隊員が派遣されて、もっともっと専門技術のレベル

を向上させようということで、2006年の8月にバレーボール隊員を6名派遣しました。目的はご覧の通りです。ニアメ、ドッソ、ドゴンドッチ、タウアということで、体育隊員がいる場所で授業活動をしてきました。授業活動での様子です。男性のバレー選手6名を呼んで、細かな打ち合わせをしながら、選手たちの技術向上を目指しました。それから、ニジェールのナショナルチームとの交流試合もやってきました。女子は私も出たんですけれども、なんと、ナショナルチームに、日本人チーム、ボランティアチームが勝ちました。それから、私で4代目になるんですが、予算は申請してバレーボールのラインをこのように作ることができました。切れないようにミシン目を二重にしたりしてやったんですが、ラインができたら一気に技術の向上がアップ、それから自分でジャッジができるようになってきました。バレーボール隊員と、市内の中学校のレベルを上げようということで、市内にある10校の中学校に巡回を行いました。バレーボールJOCV杯という大会を企画しました。まず、州、それから市にお願いをしに行って快く承諾してもらって、ドッソ市の体育指導主事にしつこくしつこく通って、市内の中学校の先生たちを呼んでもらったんですが、3回インシャーラーとよばれる待ちぼうけをくらって4回目にやっと打ち合わせをして、さてさて大会はできるのだろうか、と開催したところ、なんと、お偉いさんたちがしっかり来てくれました。また、チームも、あんな打ち合わせ一回でこんなに揃ってしまって、私も驚いています。打ち合わせに来なかつた先生たちですが、大会になると突然やる気を出し始めまして、このように大会実施することができました。普及活動においての悩み。予算がない、それからニアメの首都にはあるんですが、ない、ほとんど地方にはない、それから指導者不足、それからスポーツをする環境、現地人の生活環境、とくに女の子は家事仕事等をするのでなかなか運動することを理解してもらえずに、女子のスポーツ選手の低迷につながっています。それから現地人の協力、中々技術移転という部分が理解されず、また、私たち女性であること、一隊員でしかないことが軽視されています。ニジェールからの普及への兆しですが、やる気のある隊員、それから理解してくれる現地人が少なからずいる、それから、もっともっと色んな機関を巻き込んでやっていく。私で4代目、今5代目が行っています。これからどんどん増えていくのではないかと思います。それからボランティア経験を現場に生かすということで、実際帰ってきてから時間がなくて、理想でしかありません。日本に対する印象、ドッソ第二中学校の生徒はこのように考えています。そこで私たち日本人に対する、非常に、期待が大きいです。今、現職参加したことで私にできること、中々時間がない中ですが、現実を伝える、そして日本の子どもたちの心の中に何かを感じてもらう、そして子どもたちが作っていくこれからの未来が何かを変えていく、日本にはその力があり、そこに住む私たちにもその力があるということを教えていきたいなあと思っています。すみません、急いでしまって。以上で終わります。



ニジェール共和国

～ドッソ第2中学校における体育授業～

新潟県阿賀町立上川中学校

佐藤 忍

1. ニジェール共和国における任国事情

面積：126万7000km²（日本のおよそ3倍）
理：西アフリカで2番目に大きい国
陸に囲まれ、海からは約650km離れている。
南西から約300kmにわたってニジェール川。
国土の3分の2はサハラ砂漠。その残りがサヘル
(サハラ砂漠の南部の乾燥地帯)である。
国の半分以上は、遊牧民さえも住むことができない土地。
人口：1160万人（2002年）
都：ニアメ（Niamey）（55万人：95年）
教：イスラム教徒75%、その他はキリスト教、原始宗教

1. ニジェール共和国における任国事情

人種：ハウサ族、ザルマ・ソンガイ族、カヌウリ族、
トゥアレグ族、トゥーブー族、ブル族など

民族：ハウサ（52.0%）、ザルマ・ソンガイ（21.2%）、
トアレグ（10.4%）、ブル（9.8%）、
カヌリ（4.4%）、トゥーブー（0.5%）、
グルマンチエ（0.3%）、アラブ（0.3%）

言語：フランス語（公用語）、ザルマ語、ハウサ語など



1. ニジェール共和国における任国事情

気候：北から、砂漠気候／サヘル気候／サバンナ気候

3月から6月が一番暑い時期になる。
特に4月の日中の気温は45℃を越えるほど暑さになる。
そのため、雨は地面につく前に蒸発してしまう。
12月から2月が涼しい時期で砂漠の温度は夜には零度まで下がる。
ハーマタンという風が吹くと埃の霧となり、全てを覆い尽くす。
5月の終わりには雨が降る。南部の方では年間平均550mmほど。
北部の方では一年間で150mmも降らない場所もある。

1. ニジェール共和国における任国事情

1人当たりGNP：US\$220（1997年）

成人識字率：15.3%（男性23.0% 女性7.9%）
(1999年／世界最低)



人間開発指数：2001年 162カ国中 161位
(最下位は シエラレオネ)

人口増加率：3.3%（2000年／世界最高から10位）

出生率：女性一人当たり 7.3%（1999年）



1. ニジェール共和国における任国事情

5歳未満児死亡率：1000人当たり265人（2002年）

出生時の平均余命：46歳



初等教育純就学／出席率：30%

通貨：CFA（セーファーフラン）

為替レート：1ユーロ 656 F.CFA

すなわち100円がだいたい470F.CFA

※1ユーロ=140円で計算



1. ニジェール共和国における任回事情

主要産業：農牧業、鉱業
経済状況：伝統的な農牧業と70年代半ばより急成長したウラン産業により成り立っている。累積債務、ウラン市況の低迷、天候不良などにより87年以降マイナス成長に転じ現在に至るも、内政上の不安定さが原因となって構造調整計画の円滑な実施が遅れ、国政の混乱からクーデター事件を招来し、また次第にインフォーマル経済が拡大しつつあるなど、厳しい経済環境にある。
わが国の援助実績：
(1) 有償資金協力（2003年までENベース） 34億円
(2) 無償資金協力（2003年までENベース） 454億円
(3) 技術協力実績（2003年までJICAベース） 121億円

2. 活動内容の紹介

- ①学校について
- ②体育授業について
- ③課外活動（バレー・ボール）について

①学校について

生徒数	・中学1年生（6年）・・・約600人 ・中学4年生（3年）・・・約1000人
職員数	・男性職員・・・20名（教員4人） ・女性職員・・・4名（教員0人）
指導教材	・フランス語、英語、数学、理科（生物・化学・物理）、社会（歴史・地理）、家庭科、体育

校 時 表

1限	8:30~9:30
2限	9:30~10:30
3限	10:40~11:40
4限	11:40~12:40
	休憩
5限	15:30~16:30 (16:00~17:00)
6限	16:30~17:30 (17:00~18:00)



日本とニジェールの比較

	教育制度	進級試験
日本	小・中義務教育（6-3-3制）	なし
ニジェール	義務化されていない（5-4-4制）	進級毎に行う。小学校においても実施。

日本とニジェールの比較

教員	生徒	生徒年齢（中学校）
教員免許取得した者	義務教育	12-15歳
免許必要なし。※1992年より採用なし。	特徴的な家庭・優秀な生徒のみが通う。	12-20歳

日本とニジェールの比較

生徒指導

学校・家庭・
地域の連携

体罰・退学

施設・設備

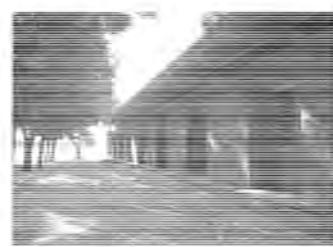
県・市町村の
管理下

授業用のみ
机・椅子、黒板
・水道なし

教材

指定教材等全
児童・生徒に
配布

なし



ドッソ第2中学校 校舎建物

赤土とコンクリートを混ぜ合わせて建てたもの。屋根もあり、公立中学校の中では、とても恵まれた校舎である。



教室内の様子

使用できる机・椅子はほとんどない。電気がないため、教室は暗い。窓を開けると教室が明るくなるが、熱風や砂が入ってくるため、開けられない。



教室黒板

黒板を消すときは、バケツに準備された水にスポンジを浸したもので拭く。乾燥しているため、数秒で乾く。

②体育の課業について



10月・集団行動



1月・サッカー



3月・走り高跳び



6月・リュット（ニジェール相撲）



出欠確認と授業の様子



学校活動においての悩み

国が教師たちに給料を支払わない



教師たちがストライキを起こす



授業がなりたたない！！

活動においての悩み

生徒が途方に暮れる



体育の授業に乱入！



生徒が来なくなる・・・

③課外（バレー・ボール）活動

- ・1999年より体育隊員の派遣開始（ドッソ第1・2・3中学校）
- ・歴代隊員のバレー・ボール普及活動
- ・2002年バックアップ・プログラムにて日本人選手6名招へいし普及・技術移転を行った。
- ・現地選手・指導者の技術レベルの向上

体育隊員のバレー・ボールの専門性が必要になってきた。

バレー・ボール隊員との連携

2005年よりバレー・ボール隊員の派遣

体育隊員とバレー・ボール隊員の協力した活動により、バレー・ボールの普及と専門技術レベルの向上をねらう。

- ・2006年8月短期バレー・ボール隊員6名派遣
バレー・ボール隊員を中心に、体育隊員4名、カウンターパート2名と共に4市へ巡業を行った。

バレー・ボール隊員との連携

◎巡業活動の目的

- ・指導者の技術向上
- ・男子バレーのフォーメーション練習やコンビプレーを視覚的に学んでもらう
- ・ナショナルチームの強化
- ・今後のバレー・ボール活動への提言

バレー・ボール隊員との連携

◎巡業活動

体育隊員がいる都市での巡業活動
ニアメ（国立青年スポーツ学院）
ドッソ（ドッソ第2中学校）
ドゴンドッチ（ドゴンドッチ第1中学校）
タウア（タウア第2中学校）

*各都市の周辺でバレー・ボールを行っている現地人コーチ・選手も招待し、講習会を行った。

連業普及活動



連業普及活動



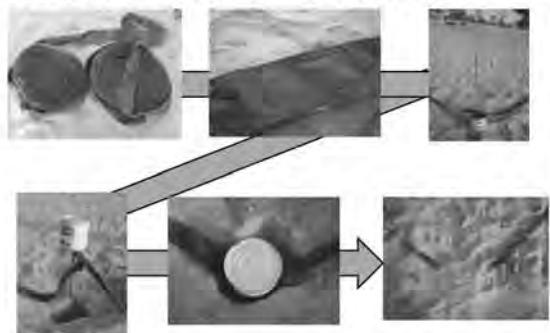
ナショナルチームとの交流試合



ドッソ第2中学校のバレー・ボール活動

- ・初代隊員：小グラウンドの柵を作る。
- ・2代目隊員：バレー・ボール支柱を立てる。
- ・3代目隊員：日本バレー・ボールチームよりボール・ユニフォーム等の提供を受ける。
- ・4代目隊員：バレー・ボールコートのラインを作成。

隊員支援経費の活用～ライン作成～



隊員支援経費の活用～ライン作成～



課外（バレー・ボール）活動の様子



市内中学校への普及活動

- ◎バレー・ボール普及活動
～バレー・ボール隊員との連携～
・2代目バレー・ボール隊員の活動
→ドッソ市内中学10校への巡回

★JOCV杯の企画

バレーボール大会開催に向けて

快く承諾！

しつこく連つて
やっと召集して
くれた（怒）！

ドッソ州スポーツ局
ドッソ州中教委
委員会モニソ州中
高監督局に提出

ドッソ市体育指
導主任より体育
市内体育教師の
召集

指導法、運営方
法、ルール、参
加方法などの打
ち合わせ

3回待ちぼうけ・・・（泣）。
4回目の打ち合わせに、2名の体育
教師が集まってくれた（嬉）

バレーボール大会開催に向けて

当然バッチリ！

多方面、多面的

ドッソ市教育局、市
スポーツ振興委員会
バー・ハイマー、体育
指導主任、各学校長
への裏内

JOCV杯！

きっと誰も来ないだ
ろうな・・・

★JOCV杯



★JOCV杯



★JOCV杯



★JOCV杯



普及活動においての悩み・・・

- ・国、地方にスポーツへ回すほどの予算がない
→ほとんどが他国からの支援・援助で賄っている。
- ・施設設備が皆無
→協力隊員が入っているところには、最低限のものをそろえることができる。
- ・指導者不足
→歴代隊員が育てた選手が指導者として活動。しかし、施設・設備、道具がないこと、全くのボランティア（無収入での活動）となってしまうため、活動できずにいる。

普及活動においての悩み・・・

- ・スポーツをする環境
→灼熱の太陽の下、スポーツをするには過酷。飲料水を確保できる場所に限られる。
- ・現地人の生活環境
→ほとんどが貧困家庭がため、子供たちも働かざるを得ない。毎日の継続した練習の確保ができない。
- 退学する生徒が後をたたない・・・。学校単位で大会を開くと、出場させることができない。
- 地方に行けば行くほど、女子の学校へ行かせることやスポーツをすることの理解がなされない。

普及活動においての悩み・・・

・現地人の協力

- 現地人は、物資による援助・支援を求めている。
他国とのボランティア団体と比較される。
- JICAのような“技術移転”というボランティア協力を理解されない。また、隊員が女性であること、ただの一隊員でしかないことで軽視されている。

ニジェールのスポーツ普及への光り・・・



3. ボランティア経験を現場に生かす・・・

総合的な学習

- ・国際理解
- ・社会科との連携
- ・発展途上国との理解

道 勤

- ・奉仕、ボランティアの心の育成

学級活動

- ・進路指導
- ・将来の日本を担う子どもたちへの世界を広げる

3. ボランティア経験を現場に生かす・・・

お金持ち

科学技術の発展

原爆をうけた国

食べ物が豊富

頭がよい
まじめ

学校へみんなが
行ける
<教育の充実>

3. ボランティア経験を現場に生かす・・・



現職参加した私にできること・・・

世界最貧国の子どもたちの現実を伝える。

日本の子どもたちの心の中に、何かを感じてもらうこと。

子どもたちが作っていくこれからの未来が、世界を変えていく。日本にはその力があり、そこに住む私たちにも力がある。

帰国隊員報告

中村 希

(17-1, セントルシア, 小学校教諭, 柏市立高柳西小学校)

よろしくお願ひします。私の自己紹介をさせていただきます。千葉県の柏市立高柳西小学校というところで、小学校教員をしています。派遣前は、隣の小学校の高柳小学校というところにいました。地域は柏西です。今回初めて発表ということなので、パワーポイントも初めて作ったので、この機会があつて初めて、自分の活動を振り返ったという形なので、ちょっと不十分な発表かと思いますがよろしくお願ひします。

帰国隊員報告ということで、17年度1次隊、中村希です。派遣国はセントルシア。職種は小学校教諭で派遣されました。最初にセントルシアのことを簡単に説明して、要請内容と実際自分がやったことということで発表していきます。セントルシアについてです。位置なんですけれども、カリブ海に浮かぶ小さな島国です。これがカリブ海なんですけれども、小さな丸がしてあると思うんですけれども、この国です。大きさなんですけれども、面積は616キロ平方メートルで、東京23区とだいたい同じくらいという小さい島です。バスで、ミニバスで一日で一周できてしまうぐらいの広さです。イギリスから1979年に独立していますので、まだ若い国です。人口は約17万人で、公用語はイギリスから独立したことで、英語になってます。現地語というのもあったのですけれども、フランス統治の時代もあったので、現地語はフランスなまりのパトワ語というのがありました。配属先なんですけれども、これも私の配属先のビルで、ここの2階に勤めてたんですけれども、首都、カストリーズという町だったのですが、首都中心部にあるディストリクト2というところなんですが、小さい島なんですが全国が8校の教育部に分かれてまして、そのうちの一つのディストリクトという、一番首都中心部にあるというところでした。まったく同じ要請内容で、前任の方がいらっしゃって、私は、2代目として派遣されました。前任の方は現職ではないんですけれども、講師を経験されて、行ったという方でした。

ここディストリクト2は、小学校が8校あります、中学校は4校。私立がそのうち1校ということで、公立学校は7校統括していました。これが学校の様子で、校舎と校庭。校庭っていうとちょっとおかしいんですけども、コンクリの校庭なんかがありました。先に進んじゃいました。要請内容も踏まえて、町の様子なんかも写真で出したんですけども、移動はミニバスといって、このワゴン車、これでどこにでも行きます。行き先が行き先別にいろいろあるので、どこでも乗れるんですけども、私が、首都のタウンの近くに住んでいたので、私が住んでいるところからいろいろなところにいけて、不便さはありませんでした。手を上げればどこでも乗れます。南の島で、観光と農業で食べている国です。生活も観光業が盛んなので、スーパー・マーケットとかもありますし、そんなに買い物等で不自由したことはありません。立派なスーパー・マーケットなんかもあります。ガス、電気、水道も自宅にありました。ただ、停電だと水道が止ったり時々あったので、水

の便利さって言うのはすごく感じて帰ってきました。

では、要請内容に移ります。要請内容なんですけれども、大きく分けて3つ。体育と算数とその他ということで事前に聞いていました。細かく要請を今回また振り返ってみたんですけれども、体育の方に関しては体育の導入と普及、スポーツテストの実施、カリキュラムや指導案の作成および普及というのが3つ大きくあります。算数の方は算数教授法の紹介や教員への助言、ワークショップの開催、年間指導計画の改訂や教材開発、学力テストの実施。あとはその他ということで、他の隊員と協力してセントルシアの教育向上に関わる各種活動ということになっていました。事前にこれを受けて、私が想像していたのが、全く体育の授業がないんだろうなと、全然行われていないので、どんなものが体育なのかっていうのをする。自分が見本を見せて、先生たちがそれの真似をするのかななどなく思っていたので、例えば準備運動をしてボールゲームを一つするだとかラジオ体操を教えてみたりだとかそういうことを想像はしていました。算数の方は内容が難しくて、先生たちの助言をするということなので、いったいどんな助言ができるのだろうとちょっと不安はありました。その他の方で他の隊員と協力してっていうのがあるんですけども、セントルシア小さい島なんですけれども、教育隊員が結構派遣されていました前任もいましたし、他のディストリクト、8つのディストリクトに私が行ったときには、だいたい各ディストリクト一人ずつだったので8人の教育隊員がそのときはいました。ただ年度が違っているので少しずつズレがあって、減ったり、私が行った時が一番多くて、各ディストリクトに一人ずついるっていうふうに配分されていました。具体的にはそうやって、体育はそのようにすればいいなって思ってたんですけども、他の事に関してはやっぱり具体的な想像はあまりできないで、実際には任国に行ったっていう感じです。

実際に行ってみて、訓練が終わって、何をしようかなって思ったときに、やっぱり向こうの小学校の現状、前任の方からも少しお話は伺っていましたし、16年度の別の地域に派遣されている方からもJICAの事務所なんかで話を聞くことはできたんですけども、やっぱり実際にやってみて、全然わからない状況だったので、まず最初には学校巡回、授業観察ということをしました。配属先が一つの小学校ではなかったので、いったいどんな事が行われているかっていうことも知りたかったですし、ディストリクト、オフィスの方では、一応行って、説明、面談みたいのが少し一回はあるのかと思ったのですけれども、実際は何もなくって、「よく来たね」みたいな挨拶等があっただけで、具体的に「あなたにこんなことをしてほしいのよ」っていう風な話は全くありませんでした。学校巡回始めるときも一番最初にオフィサーといって、私一応カウンターパートという人が日本で言う教育長さんみたいにあたると思うんですけども、そういう方が一応いらっしゃったんですけども、その方からも挨拶はあったんですけども、その要請に関して仕事に関してって言うのは何もなかったので、今度学校行くときにつれていくからねっていうような話をされて待ってたんですけども、なかなかこないので、学校に行きますと言ったら行ってこいっていう風に言われて学校巡回を始めました。一応校長先生のほうに挨拶するときも、体育と算数を見ていてくださいということで、こういう要請内容なので、それを見たいですっていうことを言って学校を周ることにしました。

もう一つは、先ほどもいったんですけども、狭い国なんですけど、教育隊員が何人もいました

16年度、15年度等もいたので、その方からお話を聞くっていう機会も、これ部会というのもありますて、算数部会、体育部会と環境部会っていうのがすでにセントルシアのJICAのメンバーの中でできていたので、そこの活動で、一応すぐ参加というか、部会は自由意志なんですけれども、そこでお話を聞けるということで部会の参加っていうのはすぐにしました。学校を見た様子で、授業風景なんですけれども。右側は普通に授業を行っているところですね。算数の授業をみている間にいろんな授業を見たんですけども、私、語学力がやっぱり低かったので、いろんな授業を見てすごくわかりにくくて先生がどこまで説明をしているのかっていうのがなかなか聞ききれなかったというのが実態なんですけれども、算数の板書なんかを見て、ああこんなことを言ってるんだとか、こういう教え方なんだなっていうのはわかりました。一番最初に言ったこと、全校朝会で発表した写真なんですけれども、全体の様子を見ていて、算数の授業もわりと普通に想像していたよりも、日本と同じように教えているし、先生方も教材を工夫したり、例えば自分で時計をダンボールを使って、針をつかって、作ってみたりとか、掲示物なんかも自分で作ってる。これはもう先生や学校によるんですけども、そういう先生もいて、自分が先生たちに助言するっていうのがすごく難しいなっていうのを感じました。

紹介なんかも行われていて、体育の授業も実はここで行われていることがわかりました。ここに写っているの体育の先生なんですけれども、この先生は担任を持たずに体育専科で職務をしている先生でした。体育専科の先生というのが配置されていて、前任の方から聞いていたんですけども私が行く前の年は、8校で2人の先生が体育専科をしていたらしいんですけども、私が行ったときには8校に5人。私立はちょっとのぞかれてしまうので、7校で5人。2人の先生は2つの学校を掛け持ちということで、各校に体育の先生が1人ずついるという状態がわかりました。で、授業のほうも日課の方に含まれてまして、週一回程度の授業が一応行われていました。ただ、それまでがどうだったかって言うのはよくわからないんですけども、physical Educationとしての扱いというのがわりとゲーム的なところがあって、ゲームっていう風な表現をしている学校だとか先生方もいたので、体育の先生方はもちろん認識しているんですけども、担任の先生の中には、ゲームの時間という風に思っている先生もいたようです。

そのほかにもスポーツ大会の実施と言って、運動会ではないんですけども、陸上大会のようなものだとか、サッカー大会、あとネットボールって言うスポーツの大会が学期ごとに行われていて、それも現地の先生方が企画、運営していたので、想像が体育の導入と普及ということだったので、随分感じが違っているなっていうのを感じました。

算数のほうなんですけれども、算数は毎日1回、多いとき2回行われていました。もちろん一斉授業がすごく多くて定義の暗唱だとかそういうことをさせる時間は、長い感じはしましたけれども、授業の形態としては日本の授業の仕方とさほど変わりはないんです。ただ問題点を挙げるとすれば、練習問題が少ないという日本との違いというか、練習問題が圧倒的に少なくて、定着っていう意味では子供たちの定着がはかりきれていない、っていうのが現状でした。できる子はできる。できない子はすごくいっぱいいる。掛け算なんかも覚えていない子は6年生とかでもいました。難しい教科書っていうのが、ここで少し感じたのは、やっぱり日本は教科書がすごく優れていて、教科書を前からやっていくと力がついていくようになっているっていう。先生方もそれをみれば参考にでき

るし、順番なんかは自分でそんなに気にしなくても大丈夫なんですけれども、日本の教科書はすごく難しくて、教科書を前からやっていっても、一応理解できないだろうと思われるような教科書だったので、逆に先生方が教科書から抜粋して順序良く教えているのを見て、すごいなっていう風に感じました。

実際自分ができることを考えたときに、体育の先生方がいるっていう事がまずあったので、体育のワークショップを軸にやっていこうと考えて、ワークショップの開催をしました。いろんな種類のワークショップをやったんですけども、一応体育の授業は行われてはいたので、どういうのを提案すればいいのかなって思ったんですけども、先生方にもちょっと聞いては見たんですけどもアクティビティの紹介をしてくれっていうのが多かったので、縄跳びなんかがあって、そういうのを使って縄跳びを紹介したりだと、あとは体育の授業は単発で、週1回しかないんですけども、単発でやるんじゃなくて毎週積み重ねていくと上手になるよっていうのを縄跳びで、実際子供を使って1時間目は簡単なやつ、2時間目はちょっとスキルを上げてっていう風にやるとみんなすごく、みんなが上手くなっていくよっていうのを紹介しました。

もう1個は、算数のほうなんですけれども、こちらのほうは算数部会で協力して、部会の人たちと一緒にやりました。こちらのほうでも、少ない練習問題をカバーするためにみんなでどんな、例えばフラッシュカードをやったりだと、百マス計算をやったりだと、写真に出てる計算カルタを紹介したりとかしました。このときに、私たちやっぱり算数の授業についてどうしてそれが必要なかすごく難しかったので、この真ん中に写っている人が算数のカリキュラムを試作して、算数を一番つかさどる偉い人だったんですけども、ここにJICAのシニアボランティアの方が派遣されていたこともあって、部会とこの方と一緒にワークショップを開催するっていうことで先生方にこんなのはどうだろうかっていうことを提案してきました。

その他として、イベントの開催、ミニ運動会をやったりだと、日本紹介みたいなことをやってみんなに楽しんでもらったりもしました。普段は毎日ワークショップっていうわけにもいかないので、普段何していたかっていうと、学校を巡回して体育の先生と一緒にTTの形をとって体育の授業をしていました。そのときに簡単な指導案も書くようにはしていたんですけども、なかなかやっぱり毎日のことで本当はそれをきれいにまとめられればよかったですけども、単発的になってしまったのが残念です。後は、依頼されたテスト作りっていうので、学力テストっていうのが部会の方で、全国テストを年に一回やっているんですけども、そういうことを積み重ねがあったので他の学年のテストも作ってくれっていう風にオフィサーから依頼されて、これ唯一お願いされた仕事なんですけれども、他の学年のテストも作って、成績を出してあげたりしました。

活動をふりかえってみて感じたことをいくつか。やっぱり短い活動期間。行く前はちょっと2年間不安だったので、短くてうれしいなって思っていたんですけども、2年目の活動を振り返ってみると1年目に比べて何がなんだかわからない。向こう側も何をしてくれるのかわからないっていう状態での活動を2年目で学校の様子がわかって、自分がこうしていこう、この中でこうやっていこうと思っているときに九月から始まって、3月まで、2学期の途中くらいで終わったって感じなんですけれども、お願いされることが増えてきたんですね。例えばさっきのスポーツイベント、学校での。行事なんかでもこれやってねっていう話が来ているころに帰国なんだよっていうのがすご

く残念でした。できればまる2年いたかったなって思います。

教員の仕事だったので、語学はすごく重要で、私の学力では、子供の師範授業って言うんですかね、こんなのどうでしょうっていうのがなかなか難しいなって思いました。体育なんかでも短い指示でって言いたいんですけど、自分がしゃべったらいっぱいしゃべらないと説明しきれないって言うのがあって、語学はやっぱり大事だなって感じました。ただ日本での経験ということで現地の先生方が経験も年齢も、もちろん賃金も私よりも全然たっぷりの先生にこんなことを・・・ほうがいいよってやっぱり言えない立場ではあるので、日本ではこういう風に教えています、こんなのはどうですかっていう提案はできたので日本の経験はすごくよかったです。日本と比べるとセントルシアはこうだよっていう風な言い方ができたのはすごくよかったです。

以上で終わりなんですけれども、自分もすごく貴重な経験をさせてもらったなって思って、ただ何を残してきたかって言われるとなかなか難しかったんですけども、ちょうど教育改革のタイミングと重なっていたので、体育の定着という意味では、ちょうどいいタイミングで私が派遣されたのでできたなって感じます。以上で発表は終わりです。



帰国隊員報告

17年度1次隊 中村 希
派遣国 セントルシア
職種 小学校教諭

セントルシア

- カリブ海に浮かぶ小さな島国。面積は616km²
- 1979年2月22日、イギリスより独立
- 人口約17万人
- 公用語は英語



配属先

- 首都中心部 District2
- 2代目隊員として派遣
- 小学校8校(私立1校)



要請内容

- 体育
- 算数
- その他



要請書の内容

- 体育の導入と普及
- スポーツテストの実施
- カリキュラムや指導案の作成及び普及
- 教科教授法の紹介や教員への助言、ワークショップの開催
- 年間指導計画の改訂や教材開発
- 学力テストの実施
- その他 他の隊員と協力してセントルシアの教育向上に携わる各種活動

実際の活動

- 学校巡回・授業観察
- 部会活動への参加



セントルシアの小学校

- 体育
- 体育専科の教員配置 (8校で5人)
- 週1回程度の授業
- スポーツ大会の実施
- 算数
- 毎日の授業
- 一定義の暗唱
- 少ない練習問題
- 難しい教科書

7

ワークショップ開催(算数)

9

10

その他

- 学校巡回体育の授業
- 依頼されたテスト作り
- 体育の成績表

Part A:

1. "six hundred and thirty-five thousand, and twenty-six" in numerals is
(A) 35,620 (B) 35,629 (C) 355,204 (D) 600,036,026

2. These sets of numbers in size order, smallest first is
(A) 50,289 (B) 29,999 (C) 29,992 (D) 30,000

3. Round off "3,648" to the nearest hundred.
(A) 4,000 (B) 3,600 (C) 3,500 (D) 3,000

4. The Roman numeral for 4 is
(A) X (B) V (C) VI (D) IV

5. The number "817" can be written as
(A) $817 \times 10^0 + 5 \times 10^1$ (B) $817 \times 10^1 + 7$ (C) $817 \times 10^1 + 7$ (D) $817 \times 10^0 + 7$

6. If $N = 3$, then $N + 2 =$
(A) 1 (B) 3 (C) 5 (D) 6

7. $396 \div (205 + 106) =$
(A) 172 (B) 182 (C) 411 (D) 431

8. $116 \times 24 =$
(A) 146 (B) 236 (C) 264 (D) 2784

9. $236 \div 11 =$
(A) 6 (B) 21 (C) 20 (D) 329

10. $11 - 4 \times 2 \times 3 =$
(A) 1 (B) 8 (C) 13 (D) 20

11

活動を振り返って

- 短い活動期間
- 語学の重要性
- 日本での経験

12

— 155 —



コンピュータ技術の隊員として「できること」とは

石郷 則晃

(17-1, ニカラグア, コンピュータ, 埼玉県立いすみ高等学校)

派遣前と同じ職場でいすみ高校というところで、情報教育、ならびに環境教育を担当しております。平成19年3月末に帰国してすぐに職場に復帰したわけですが、現在のところ、高校1年生の担任をさせていただいている状況にあります。周りの周囲の先生方は1年位のリハビリ期間を置いて少しゆっくりしたらどうかという話もあったのですが、無理を言って担任をさせていただいている状況になります。採用以来9年間同じ学校になりますので、そろそろ人事異動の声がかかるかも知れないと思っております。

私は、ニカラグア共和国というところの、国立自治大学マナグア校というところの、情報システム及び研究開発センターで、主に大学内のネットワークの運用助言と国際インターネット回線網の運用助言を行っていました。この、国立自治学校マナグア校というのは日本で言うところの東京大学と同程度の大学であつただろうかと思います。

少し話はますが、ニカラグアの公教育制度についてお話をしたいと思います。初等教育が6年、中等教育が5年、大学が4年という風になっています。修了試験というものを受けて合格しないと進級できない状況になっておりますので、15歳で初等教育の2年生ということもありました。また、学校へ行くためには学費が必要な状況でもありましたので、多くの子どもたちが学費を払えない状況にあります。学校へは行つていよいよ状況であります。学齢期の子どもでも生きるために働かなくてはいけないという現状を見てきました。今、画面に出ています写真はごみの採集処分場で資源ごみの回収をしている子どもの写真です。私はコンピュータ技術という職種で派遣されていたのですが、職種以外の活動として同じ隊員の間でニカラグア教育委員会という組織を作りました。日本人として現地の子どもたちのために何ができるのかなということを考え、行動するというようなこともやってきましたので、その一例としてこのごみの採集処分場の見学というものを行いました。そのときの写真になります。それぞれが、生きるために必死な状況にあるということです。すべての子どもが分け隔てなく学校に行くという状況が望ましいとは思うのですが、実はそうではなかったということです。これが開発途上国の現実というものなのかな、とも思いました。

続いて、私は配属先の情報システム及び研究開発センターという部署で何を行っていたかのかについて少し説明してこうかと思います。学生を相手に講義を行うということはほとんど無く、大学職員や教授陣を相手に国際インターネット回線網の運用に必要な助言などをすることが主な活動でした。学生を相手にするわけではなかったので、少し寂しいところはあったのですが、こちらから研究室を訪ねていくこともかなり多かったので、自然と交流が持てていたのかなと思っています。コンピュータネットワークシステムの設計書であったり、仕様書、運用マニュアルらしいものはある程度はあったみたいですが、そのほとんどは彼らの頭の中にあるという状況ですので、担当者が

いないと何もできない状況でした。さらにそのようなシステムが壊れてしまうと新たに手探りで作り直すという状況でしたので、かなり大変な状況でした。

私が主に担当してきたのはネットワーク監視システムの構築の手順書の作成でした。システムといつても各パーツごとにわけると10以上になります。またこれらのパーツを決まった順番で準備しなくてはいけないので、彼らが頭の中で理解しているだけでは、十分ではなかったわけです。ですので、スペイン語、現地はスペイン語なのですが、スペイン語で手順書を作ることになりました。スペイン語の手順書を作るために配属先のメンバーにいろいろと話を聞きながらスペイン語の表現を探るということは日常的に行っていたのですが、十分とはいえないために活動を開始してから半年経ったあたりで、スペイン語のレッスンに週2回1時間ずつ通うことになりました。スペイン語の先生が偶然にも大使館に出入りしている方だったので日本人の求めている表現に的確に答えてくださったので、非常に勉強になりました。技術的な問題で行き詰ることは無かったのですが、言葉の壁というものは非常に厳しいものだったのかなと思います。継続して学習していくないと十分な活動が行えないとも感じました。最終的に、活動とは関係なく帰国2日前まで語学の先生との語学のレッスンというものをしておりました。今となっては活用する場はほとんどないですが、当時は語学学習というものにはまっていたという状況だったのかなとも思います。それだけ、プレッシャーになっていたのだなとも思います。

私には、一般的にカウンターパートという職場の現地人のパートナーはいませんでした。その代わりに、活動先のセンターに在籍している6人の現地人が私のカウンターパートの代わりになるのだとJICAの事務所のほうからは事前に説明されていました。活動を始めてわかったことは、各メンバーとの関係が1対1では無かったので、彼らにとって責任というものが中途半端なのだと感じたことです。また、活動場所がそれぞれ個室でありまして、個室が割り当てられていましたので、彼らは活動スペースに閉じこもってしまい、情報交換というものには一般的にいう電子メールもしくはチャットというものを使う状況で、活動場所においての会話がほとんど無かったという状況でした。朝「おはよう」という挨拶を交わしてから、帰りがけに「さよなら」という挨拶をする以外会話がない日も珍しくありませんでした。人との交流の少ない部署であったのは、とても寂しいことでした。情報システム及び研究開発センターというところに在籍しているメンバーの6名はその全員が大学のOBでありOGがありました。私より年齢の低い方も2人含まれており、平均年齢は33歳くらい、とても責任感が強いグループだったので、担当者一人で抱えてしまうことも多く、一見、分担されていてバランスがいいようにも見えたのですが、その人がいないと何もできない状況になったりしているグループでした。常に最新の技術を導入したいというのは、どこの国でも同じであるのかなと思うのですが、基本的なことを理解しないまま応用になってしまいうような場面も多かったです。基礎基本に忠実に従えば発展的な内容にも対応できると私は考えていたのですが、その基礎基本がしっかりと理解できていないような状況で、応用を行おうとするわけですから、ばかばかしいかもしれないようなことから、ともに勉強しなおすような状況でした。専門的な用語も入ってくるのですが、一例を示していきたいと思います。

コンピュータネットワーク上に設置されているサーバというのに動作が不安定な状態になっていきますと、ネットワーク全体にストレスがかかるようになりますと、放置しておくとネットワー

クが動作すらしなくなるわけです。復旧にも時間がかかるてしまうので、事前に察知して手当てするのが一般的なですが、各サーバは動作報告という動作記録を自分自身に保存しているような状況です。サーバの台数が少ないならば、各サーバの動作記録を手動でチェックしてもかまわないのですが、ネットワーク機器を含めて数十台から数百台になりますと、このログチェックというのもとても面倒になります。ですので、このログチェックというものを自動で行うサーバを新たに設置することにします。こうすれば一元で管理できるのでとても楽になります。しかしログの読み方を知らなかつたり、ログの持つ重要性を認識していなかつたりしますので、ネットワークの管理の重要性から説明をしまして動作ログの読み方という初歩的な状態まで戻ってともに勉強しているような状態になりました。

私の活動についてまとめたいと思います。マンパワーとして期待されていた部分が大きかったかなと思います。教授のかわりに後期の分の講義を持っていただけないか、なんていう話もありました。しかし一職員として働くことは簡単だったんですが、あくまでも協力者であるというスタンスは守りたかったので、みんなで考えてともに方向性を考え出し、一緒に作り上げていくということに徹してきました。手本は示すのですが、実際にやるのは現地の人、という状況です。また高度な提案もいろいろあったのですが、彼らの力量や必要性を考えて、今後彼らの力だけでやっていけるかと一緒に考えて、欲張らないということをモットーに活動していました。彼らのサポートをしているに過ぎないということです。欲張らずに、ということです。

職種コンピュータ技術として派遣されると、活動以外でいろいろと問題があることがありました。一緒に行っている隊員への対応です。ほぼ全員がノート型コンピュータを持参してきているわけですから、そういう状況で質問が一極集中する状況でした。隊員のための隊員なのがなとも思いました。たとえばですが、デジタルカメラの画像がコンピュータに取り込めないような状況ですとか、プレゼンテーション用のソフトの使い方がわからないだとか、大切なデータを誤って削除してしまったとか、ハードディスクが壊れたので治して欲しいだとか、このような連絡が、当たり前のように私のところに来るわけです。時間も場所も考えず、朝5時に携帯電話に電話がかかってくることもあります。ニカラグアの隊員は多いときで60名程度でしたが、コンピュータ技術の隊員は2人ほどしかいませんで、さらに私は首都で活動していましたので、事ある度に私に連絡が来るような状況でした。私から客観的に見て言えることは、背伸びをしないで、欲張らないことでした。現地の人の視点に立てば、コンピュータというものは必ずしも必要なかつたりします。コンピュータを使うことよりも、もっと原始的な部分で、活動で勝負をかけるべきかなと思いました。ですから、自分にできる範囲で活動を行って欲しいと私は願っています。しかし、活動中も報告書の作成であったり、活動の報告会であったり、そのような報告会などではコンピュータを使わなければできないこともありますので、必ずしもコンピュータ抜きというわけにもいかないのかなと思います。

簡単なのですが、安全対策ということについてお話しします。一般的にはニカラグアでは路上バスは安全対策のために乗らないとか、タクシーはタクシー強盗対策のために避けるだとか徒歩は路上強盗が出るので歩かないでほしいとか、そのように言われていました。要は、外出の際は細心の注意を払って行動するしかなかったわけです。残念なことながら、私は路上強盗にあってしまいました。

た。 原因は、歩いてはいけない地域を人の少ない時間帯に1人で歩いてしまったからです。 荷物を取られただけで大きな怪我もなくよかったです。 現地の事務所からは強く指導されました。 中米のほとんどの国は携帯電話使用可能であって、ニカラグアも例外で無く、隊員に安全対策のために現地事務所から貸与されるような状況でした。 学生デモが首都のあちらこちらであったときなどは、毎日のように携帯電話に連絡が来るような状況でした。

現地のインターネット環境について簡単にお話します。 パーソナルコンピュータやインターネットというものは大変高価なものなのですが、一般的なものではありません。 利用する人が裕福層だけという状況に限っています。 インターネットカフェが数多く点在していますので、そのようなものを使っていく状況にあります。 日本語が使える環境がないので、自分で整えていくしかないのですが、私の場合は大学の研究開発センターの中でインターネット一日中使い放題という状況でしたので、まったく無縁がありました。 ほかの多くの国も同じようにインターネットカフェ形式で利用ができると聞いています。

最後に、現職派遣制度を利用して派遣されたにもかかわらず、現地では大学の研究開発センターというところにいるだけであって、教育活動を十分に行っていなかったことに対して、今でも派遣制度を使って行ってしまったことがよかったですのかどうか、疑問が残っています。 ただ毎日コンピュータの前にいるだけで人を相手にすることもかなり少なかったわけです。 活動の終わりが迫ってきたころ、ストレスから集中ができないような状態が1週間ほど続いたこともあります。 結果を残そうと焦ってしまったからかもしれません。 すぐに結果の出ないようなことをしているのだと言い聞かせて、ある程度気が楽になったわけですが、日本と違った環境で生活するのですから、最初のうちは見ているもの感じているものが新鮮に思えると思います。 そのような新鮮に思えるうちにいろいろと記録に残すことも重要なと思いました。 私自身は写真に撮ったり記録に残すことを余りしなかったので、実のところ、写真は他の隊員よりも少ない状況にあります。 帰国後の文化紹介などで使う写真にも困るような状況ですので、気がついて、新鮮だな、これ日本にないなと思ったときには写真に撮るような習慣があればよかったです、と私自身反省しています。

私自身首都にいることが多かったので、ほかの隊員とともに時間を持つことも多かったわけですが、できれば、現地の人と多くの時間をもつともっと過ごすことができたらよかったです、と少し残念な気持ちでいっぱいです。 ほかの隊員と違って、ほかの国の隊員と違って、ホームステイ形式でしたので現地の人と一緒に生活する状況でしたので、ある程度の交流は毎日のようにあったわけです。 このような派遣前訓練を含めて貴重な2年間を与えてくださったことに対して感謝の気持ちでいっぱいです。 今の私にできることというのは、この2年間の話を伝えて、さらに皆さんに情報提供することぐらいしかできませんので何かありましたらまた声をかけていただければと思っています。 以上です。



コンピュータ技術の隊員として 「できること」とは

平成17年度1次隊 ニカラグア隊
埼玉県立いすみ高等学校 石郷 則晃



ニカラグアの公教育制度

- 初等教育…6年
- 中等教育…5年
- 大学…4年
- 進級は修了試験に合格しなければならない
- 学校へ行くためには学費が必要…多くの子どもが払えない
- それぞれが、生きるために必死




活動について(2)

- カウンターパートとの関係
- プロジェクトのメンバーがカウンターパートの代わり



活動について(3)

- コンピュータ機器の遠隔監視の手法確立
- 監視の基礎基本からもう一度一緒に学ぶ必要があった



活動について(まとめ)

- マンパワーとしての期待

あくまでも協力者であること

- 彼らの力でできること

欲張らずに少しずつ確実に

隊員として

- 隊員のための隊員？

欲張ってはいけない

- 安全対策

危ないと思ったら手遅れ

- Internet環境

あまり期待しないほうがいい

さいごに

- 無理をしない

- 見たもの、感じたものは新鮮なうちに

- 現地の人との交流を大切に

以上

ボリビアから帰ってきました

中沢 智恵

(17-1, ボリビア共和国, 小学校教諭, 長野市立篠ノ井西小学校長)

こんにちは。午後の1番最初から宜しくお願ひします。最初になんだかアンデスチックだね、服装が変ねと思われている方もいるようなので、先に紹介させていただきます。ボリビアの小学校で活動していたんですが、その任地を去るときに学校の先生たちがくれました。その先生たちとのことを今日は紹介させていただくので、着てきました。宜しくお願ひします。

内容はご覧の通りです。最初に任地の配属先の概要について少しだけ説明させていただきます。任国はボリビア共和国で、任地はスクレ市というところで憲法上の首都ということになっています。ややこしいんですけど、実際の首都は別のところにあります。そのことでスクレ市は今かなり荒れていて、町から警察官が一人もいなくなるという、学生と警察のぶつかり合いがあつて警察がここで命の危険があるということで市から警察がいなくなってしまい、スクレ市の刑務所から囚人が逃げてしまったということになったそうです。～に政情も不安定な国です。道路封鎖とかストライキとかいうのも頻繁にあって学校がお休みになることもありました。でもそういう不安定なことやちょっとおつかないなということを補うに余りあるほどの魅力的な国でした。

ボリビアはどこにあるのというところですが、ここから先は少しボリビアについて知っていただるために今いる学校で朝の全校集会のときに子どもたちに対して紹介したものを見ていただきたいと思います。クイズにしていたんですけどみなさんはもうレジュメが手元にあるので、答えはみんな知っているということでどんどん進みます。ボリビアは南アメリカ大陸にある海のない国です。これがボリビアの国旗です。真ん中にはコンドルやリヤマというボリビアにいる動物が描かれています。ボリビアという国は、首都は富士山より高いところにあります。広さは日本の3つあるんですけども、住んでいる人は日本の15分の1という少ない人たちが暮らしています。ボリビアクイズの時間です。というふうに学校でやったんですが、低学年問題、ボリビアはいま朝である。これは朝8時半くらいの全校集会だったのですが、こんな感じで。高学年問題、ボリビアでは富士山より高いところにも町があり、たくさんの人人が暮らしています。空気がうすく、酸素が少ないと起きることはどれでしょう。まあ皆さん答えがわかっているので先に進めます。これは実際に自分が経験してクイズがつくことができたのかなというふうに思っています。実際にサンポーニャとかケーナとかそういう笛を吹いていたら頭がガンガンすることがありました。こんなようなものも見つけました。実際にこの右側にあるのは村の小学校の校庭にあるサッカーゴールです。トイレのほうはちょっともっと山のほうにある村にありました。でももっと普通の村はトイレのないところが多いので、あるだけいいのかなと思います。

配属先のほうに進みます。配属先はスクレ市の公立のバレンティン・アベシア小学校で1年生から5年生まである小学校に行きました。4クラスか3クラスで中規模の小学校です。スクレ市の本

当心中に位置するところで、校長先生がものすごく意欲的な女性でした。PROMECAパイロット校のひとつであるんですけど、最初に配属されたときには全くパイロット校になるということは思いもよらず、調整員の方からも、この学校はパイロット校にはならないから、パイロット校じやない学校でプロジェクトとどう関わるか頑張ってねと言われていたので、パイロット校になったときにはお互いにびっくりしてしまいました。PROMECAということについて少し説明させていただきますと、これはボリビアの政府と教育省とJICAと一緒にやっているプロジェクトで、教育の質向上プログラム、難しいこといっていますが大切にしていることは、お互い事業を見合いましょう、教師同士で学びあう研修を大事にしましょう、学級という温かい仲間づくりを大切にしましょうというものだと解釈しています。このPROMECAとその隊員がいる学校現場で期待されていたことは教員経験の共有、と言う部分です。先生たちは、ボリビアの場合は昇級試験があって他人の技術は私の技術、他の人にあげるなんてもったいないという考えがあったので、先生たちは授業を見合うとか自分が作った教材を貸そうとか、そういうことはあまりありませんでした。ちょうど自分が途中で思ったこととこのPROMECAで期待されていたことが一致したので、その部分だけ取り入れて活動を続けました。あとで写真も出てきますが。学校は2時から6時までの午後だけ学校で、1つの校舎を3つの学校が使っていました。これが学校の入り口なんですがこんなふうに使っていました。自分は午後のアベシア小学校のところだけいたんですが、折角だからと思い、夜まで居座って音楽学校で笛を習っていました。これが学校の全景です。結構こうゴムとびなんかして遊んでいる子がいてゴムとびがはやったんですけど。男の子たちはメンコとかをして遊んでいましたので似ているなと思っていました。この学校でどんなことを期待されていたかというと難しいことがいっぱいあったんですが、行く前は教師に対してどんなことするんだとか、カリキュラム作ったりすごいことに関わるのかななんていうふうに勘違いして選びました。ここに行く前、派遣前訓練というとても刺激をたくさん受けている期間があったのですが、そのときは年代も職種も出身の地域も全然違う人たちとの共同生活で本当にいろんなことを学び、人とのつながりもできていい機会だったなと思いました。

ここからは発表に入るんですが、活動中と現地で携わったことについて前中後にわけて紹介させてもらいます。現職のまま行ったので、本当にこうやって改めてみるとちょっとしかいなかつたんだな。7月に赴任したんだけれども8月の半ばまでは現地での語学訓練があり、ボリビアの場合はもう11月にテスト期間に入ったので、実際には8, 9, 10のその3ヶ月しか授業がありませんでした。12月と1月は夏休みだったので学校はお休みでした。そして真ん中の頃、2, 3, 4, 5, 6, 7月とあるんですが、まあこのへんも冬なので冬日課になり授業時間が短くなっていました。後半はもう3月になつたら帰国準備で大忙しで、3月は5日間くらいしか学校に行ってません。なので本当にあつという間だったなと今思います。最初の頃はひたすら授業観察をさせてもらい、それぞれの先生方が持っている経験や技術を学んでいました。その頃はまだ日本のやり方を伝えるんだとか教材をたくさん作って使ってもらおうとか、先生たちと算数に入ったんですがTTでいこうなんていうふうに思っていた頃です。そんな頃にちょうど隣の村に、日本からの算数セットがダンボール7箱分ドーンと届けられて、そこにいた村落隊員から、算数セットがきたんだけど全く使い方がわからないから使い方の研修会をしてくださいと言われ、近所にいた隊員、学校関係の隊員4人と研

修会を実施しました。行って2ヶ月での話だったので、すごいびっくりというか、もうスペイン語もしどろもどろでえらいことだったんですが、度胸付けにいい機会をもらったなと思いました。また、これから先どんなことをしていったらいいかわからないということもあるえい、いったいこの人たちはどのくらい算数ができるのだろう、どこが苦手なんだろうと思い、学力テストもそこの現地にいた先生や先輩隊員たちと一緒に行いました。これは算数セットの教材を紹介している、見覚えのある数え棒のところなんですが、結局算数セットの中にある教材の中では数え棒とおはじきが現地にあるもので対応できるし、使いやすいなというふうに思いました。洗濯ばさみでとめてるのは磁石が使えない黒板だからです。ぺたっと張り付くような便利なものはありませんでした。統一テストを実施して、どうやら分数が苦手みたいだよ、じゃあ分数関係の教材を作ったり導入の場所のモデル授業をして研修会をやろうかなんてことを思っていたのですが、みんな学校も忙しいし休み中にやろうかなんて言っていたんですけど、全然人が集まらずなんで休み中にやるんだというふうな雰囲気だったので、それはたち切れになってしまいました。そして新しい年になり、難しいことはですね、やってもどうせ日本人だからできるんでしょみたいに言われたこともあります、どうやら日本のこと伝えようというの大きな思い違いだったんじやないかとようやく気づくことができました。そしてこの頃はお手軽な教材の紹介、それも押し売りのように授業に持つていて生先生、今日授業でこれ使ってみたいんですけど、今日時計の勉強ですよね、これ使っていいですか、みたいなかんじで押し売りで教材を紹介したこともありました。さらにすごい素敵な授業をしている先生たちが多かったので授業を見合う会をやりましょうよという提案をしてました。でも最初にお願いしますって言いに行った先生は、人にいろいろ言われるのが嫌だから、みんなに見てもらうなんて怖いから嫌々と言って、最後の最後にはやって下さったんですが、結構最初の方はいろんな人に拒否されていました。大きなのではなく小さな研修会を実施していたそうです。ようやく新しいことや日本のやり方を伝えるなんてことはせずに、先生たちの持っている今の経験や技術を共有するための媒体になりたいなと思うようになったそうです。こんなような教材を紹介しました。右下でやっているのは百マス計算です。30人の職員の中でこれならできそうだなと思う人が1人でもいたらラッキーだし、授業に取り入れてくれる人がいたら超ラッキーみたいな勢いでやっていた頃です。雨が降ったりサッカーの試合が重なると参加者は4人とか5人とかになっちゃいます。でもわかりやすいお得感を大切にして研修会をしました。そのころ専門家の方に、とにかく失敗しないと、失敗してみせろと言われ、そうかそうか私は同僚としているんだということを改めて認識し、モデル授業をするようになりました。そのころ先ほど紹介させていただいたPROMECAというプロジェクトとのパイロット校になってしまい連携が始まりました。派手な教材を作つてこんな研究授業をしているときに、授業の計画や指導案作成と教材作りとか研究会への参加をさせてもらいました。また学級を大事にしていきたいということもあったので、学級目標をつくるというのもちょっとだけお手伝いさせてもらいました。ボリビアの先生たちの教材作りは上手だな、見せ方がうまいなというふうに思いました。こんなふうに紹介したものを見た先生方が自分なりにアレンジしてくださっているのを見たことは本当に嬉しいなと思いました。端っこは割り算らしいんですけどこれ無理があるなど、あまりはないみたいです。でもこんなふうに使ってもらえて本当に嬉しかったです。あとは折角日本人だったので日本の遊びもこんなふうに紹介してきました。活動していると

きに日本のことといっぱい聞かれたんだけれども、日本のこと紹介できるツールが自分の中にすごい少なくてちゃんと日本を知ることが大事だったなと思いました。あとは所属先の異動しそうもない方と連絡を取り合う、誰と連絡を取るのかちゃんと連絡をあなたとねという確認をしていけばよかったなと思いました。どんなことができたかなと思ったのですが、ゴミをゴミ箱に捨てるということがずっと言い続けたことだったかなと。これだけだったかなと思います。やっぱりこのような経験をさせてもらったことがものすごい感謝だったかなとそれだけなんですけど、確かに辛いこともあったし何でこんなことやってるのというふうに辛くて悲しくて泣けてくることもあつたんですが、今はいいことばかりが残っているかなと思います。こっちは日本の学校との関わりで前の学校にも今の学校にもボリビア行ってきましたが有難いです。自分はすごく変わった、自分が変わったというかまわりを見る目がちょっと変わったことと、あと子どもに対してもそうだし対応する力が幅が広がったかなというところが自分自身で思っています。長々としゃべってしまいました。以上で終わりです。ありがとうございました。



ボリビアから帰ってきました



17年度1次隊 中沢 智恵

発表内容

I. 任地・配属先の概要

II. 活動の概要

III. 活動前後をふりかえって

I. 任地・配属先の概要

1. 任国
ボリビア共和国

2. 任地
スクレ市
(憲法上の首都)



ボリビアってどこにあるの?



ボリビアの国旗



ボリビアって

- ・首都は、ふじさんより高いところにあります。たかさ3800m。
- ・ひろさは 日本の3つぶん
- ・すんでる人は、日本の15分の1

ボリビア クイズの時間です。

これは、しおのみずうみです。

ていがくねん もんだい①

ボリビアも、
いま朝である。

○か ×か？

ていがくねん もんだい①

ボリビアも、
いま朝である。

✗ いまは、
よるの 7じはん。

高学年問題①

ボリビアでは、富士山より高いところにも町
があり、たくさん的人がくらしています。
・空気がうすく、酸素が少ないためにおきる
ことはどれでしょう。

- ①ふえをふくと、頭がいたくなる。
- ②マッチをすっても、火がつかない。
- ③コーラやビールのあわがたたない。

高学年問題①

正解は

- ①ふえをふくと、頭がいたくなる。
- ③コーラやビールのあわは、ものすごく
たちます。なので、コップをすごくな
めにしてつぎます。

ボリビアで
見つけたもの



トイレ



サッカーゴール

配属先概要

- ・スクレ市 バレンティン・アベシア小学校
- ・職員数 29名
(校長1 事務1 学級担任17 専科8 守衛2)
- ・スクレ市の中心部に位置する。
- ・PROMECA パイロット校のひとつ
—パイロット校になったのは、配属された次年度のこと。

プロメカ

PROMECA (El Proyecto "Mejoramiento de la Calidad de la Enseñanza Escolar")

- 教育の質向上プログラム
 - 開発課題「子どもが主役の学習環境作り」
 - 目標は、日本の経験を基にした「学校・学級経営手法」「教授法」の定着
- 大切にしていることは、授業を見合い、教師同士で学びあうこと、学級経営。

プロメカとの関わり

学校現場で、期待されていること

- ・教員経験の共有
 - 授業を見合おう。
 - 同僚のいいところを真似しよう。
 - 教材や授業を一緒に考えよう。

学校の様子

- ◆パティオ(中庭)を囲むように、口の字型の校舎があります。
- ◆学校は、午後2時から6時まで。
(午前・午後・夜で学校が変わります。)
- ◆1日3時間授業(70分×3)です。



要請内容

- 効果的な教育分野への支援を目指す。
- ◆児童に対する直接指導
 - ◆教師に対して教授法指導やカリキュラム提案などの改善提案を行う。
 - ◇教育分野の隊員と連携して、実態調査や改善提案のための教員向けの研修を行う。

II. 活動の概要

活動中の思い(前・中・後)

現地で携わったこと(前・中・後)

前半 8月から12月 中頃 2月から7月 後半 8月から2月

7 8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

活動中の思い(前半)

学校では、3ヶ月半ひたすら授業観察
それぞれの先生方が持っている経験・技術を学ぶ。

日本のやり方を伝えよう。
教材をたくさん作って使ってもらおう。
主になるのは先生たちだから、自分はTTで。
なんて思っていた。

現地で携わったこと

- 教員向けの算数研修会の実施
→隣の村に、算数セットが届けられ、
村落隊員より、使い方の研修会の依頼。
- 算数学力テストの実施

先生方への教材紹介



- 算数セットにある教具で、どのような学習ができるか紹介。

子どもたちの実態を知ろう。

- 統一テストを実施。
 - 子どもたちが苦手なところを分析
- 研修会を開催しよう
- 苦手分野の教材、学習法について紹介しよう。
 - 他の隊員と一緒に各学校を回り、先生方と学ぼう。

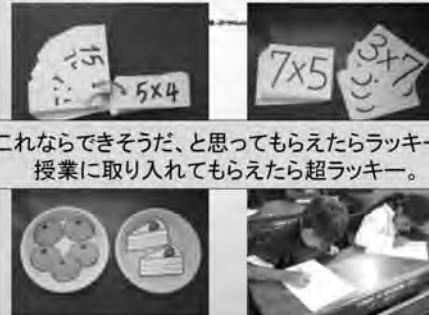
そんな理想を持ってはいましたが…。

活動中の思い(中頃)

お手軽な教材の紹介(授業に参加して)
授業を見合う会を提案
他の隊員と協力して、ミニ研修会の実施

新しいことや日本のやり方を伝えるのではなく、横のつながりが少ない同僚たちの経験や技術を共有するための媒体でありたいと思うようになる。

教材・教具の紹介



これならできそうだ、と思ってもらえたラッキー。
授業に取り入れてもらえた超ラッキー。

必要なときには…協力し合って ミニ研修会の実施など



先生方に参加してもらえるよう、いろいろ考えました。
作った教材をお土産にしたり…お得感が大事です。



雨の日や、サッカーの試合と重なると、参加者は減ってしまいます。

専門家の方に言われたこと

専門家には、同僚として毎日を過ごし、一緒に実践をつむことができない。
耳で聞くだけじゃ先生たちのものにならない。
失敗させるんじゃなくて、失敗してみせろ。

同僚であることを改めて認識。

モデル授業の実施



一人ひとりに寄りそつて個別指導をする。

子どもたちが考える場面を作る。

活動中の思い(後半)

教育の質向上プロジェクトとの連携
T・Tとして算数の授業をおこなう
日本紹介(学校・地域)

「謙虚に、同僚として。」ということを、心がけた。
ボリビアの子どもたちに、日本とのつながりを感じてほしい。

研究授業のお手伝い

授業の計画
指導案作成



教材作り

研究会への参加

学級目標作り



100マス計算



100マス計算中

答え合わせまで



100マス計算のアレンジ



算数をゲームで楽しむ



日本の遊び紹介



活動前をふりかえって

- ☆日本から子どもたちの作品を持って行けばよかった。
- ☆日本のこと現地の言葉で伝える準備が必要だった。(音楽・踊りなど)
- ☆日本の学校との窓口が誰になるのかきちんと確認し、丁寧に連絡を。
- ☆なんといっても、事務の先生には大変お手数をかけ、お世話になった。

活動をふりかえって

配属先及び関係者に
残せたと考えるインパクト

- ・直接的指導の中で子どもたちに伝えたこと
- ・授業中、ひとりひとりの子どもたちのところを回り、声をかけて個別に指導すること
- ・ゴミをゴミ箱に捨てる

活動をふりかえって…感謝

- ・同僚から学ぶことが多かった。
- ・配属先を離れての活動もいくつかおこなった。どの活動も、ひとりではできなかつたことばかり。
- ・活動以外の日常生活、旅、お祭りでも、たくさんの出会いがあり、ボリビアを少し知ることができた。ボリビアの人たちから、いろいろな暮らしぶりがあること、やさしくてくましく、笑顔で暮らすことを教えてもらった。
- ・喉元過ぎれば熱さを忘れる。いいことばかりじゃなかったけれど、いい思い出ばかりが残っている。

活動をふりかえって…やっぱり感謝。

- ・日本の学校へ、「ボリビアだより」を月に1回送ることができた。
HPにコーナーを作ってもらったり、拡大印刷して校内に貼り出したりしてもらえた。
- ・前の所属先にも、機会を作っていただき、子どもたちや保護者にボリビアでのことを紹介できた。
- ・こころよく受け入れてもらえることに感謝している。

いま

- ・学年の子どもたちにとって、南米といえばボリビア。知名度はかなり高い。
- ・人とのつながりが広がった。JICAの方々には、国際理解教育に力をかしていただいている。
- ・子どもを見る目が変わった。世の中を見る目が少し変わった。
- ・自分の実体験を語ることは、強みである。
- ・伝える相手がいることに、やっぱり感謝である。

ありがとうございました。



バヌアツ サント島ルーガンビル市での音楽教育普及目指して

秋山 喜代

(17-1, バヌアツ, 音楽, 名古屋市立稻西小学校)

宜しくお願いします。名古屋市稻西小学校の秋山です。今日は久々の同期隊員と会えて嬉しい思いがいっぱいなのと、あと2年ほど前に私が行く前にちょうど同じような時期にこの発表会があったときには、ちょうどこれから行く先生たちがたくさんいて私もその一人だったんですけど、少しでも情報を得ようと思って参加した思い出がありますので、これから行く先生たちのためにというようなかんじでつくってきたので、ざっと見たらちょっと偉い感じの先生もたくさんいらっしゃるようで緊張するんですけど気軽に聞いていただければと思います。

私はバヌアツサント島ルーガンビル市というところで小学校教諭として派遣されました。小学校教諭と言ってもJICAの要請書に書いてあったのが、英語、仏語、幼稚園クラスで担任等教師と共に音楽の指導を行い音楽の指導法について研究、指導マニュアルの作成や校内音楽会の開催を目指す。また教科書、カリキュラムの作成への提言や助言も行うという3行広告を見て、ルーガンビル市に配属されましたので、主に音楽教育に携わりました。これがバヌアツサント島ルーガンビル市です。私、今日この会場にずっといるんですけど、大体聞いていると首都の方が多くて私はかろうじて首都ではない第二の都市なんんですけど、同期隊員には笑われますが首都とルーガンビルを比べると、東京と石垣くらい違うんじゃないかというくらい田舎で、人口は2万人、食べ物はマーケットの写真が出ていますが、あるときにはあるけどないときにはない。学校の写真が下の方に載っていますがウォータータンクに水を取って子どもはそこから水を飲む。グランドはさっきの中沢さんとはちょっと違うんですけど、広々としてどこまでも続いている。私の家が最後に載っています。私は第2代だったのでもうすでに…とか窓に泥棒さんが入らないようにしてもらったり、…が入っていたりとか、…自分で守っていました。

JICAの要請を受けて自分の活動内容は自分で決めるんですけど、以上のこのような6つを自分で考え出して実践してきたつもりです。最後のインターネットライブ授業というのは現職教員ネットワークなんかが途中で入ってきたものなので、またあとからお知らせします。ひとつずつていきたいと思います。日々の授業は音楽を行うんですけども、バヌアツの音楽教育は非常に歴史が長くてですね、もうすでにこんなような教科書が、最初にも出ていますけどずっと歌集のよう載っています。バヌアツは英語クラス、普通語クラスと、イギリスとフランスに統治されていた時代があるので両方のクラスに、これはイングリッシュの教科書なんんですけど、フレンチの教科書もあったりして、このような教科書がもうすでに配布済みでそれを使って授業をしてくださいというのが第一の案件です。私が使っているキーボードが出てますけど、これは前任者が用意したもので、ちょっと次の項目と重なるんですけど、現地の先生と一緒にやっている鍵盤ハーモニカは私が調達してきたものです。日々の授業の様子をちょっとだけあるので少しだけ参考のためにあまり上手では

ないですが見ていただければと思います。私は全然ピアノは弾けないんですが、一応弾くから担任の先生に指導しなさいとかいう体制をもっていって、これは英語の歌なんですが、学校では英語とフランス語を使わなければいけないけど、私は英語もフランス語も苦手だからビスマラク語で、現地語はビスマラク語なんですが、現地の先生に説明して、やってって言ってこうやってアクションさせて。主に音楽の授業です。主に2人で指導して、分からぬところは英語はわからないからと言って現地の先生にも参加してもらって。さっきこれ鍵盤ハーモニカを吹くんですけれど、すごい状態になりますが、触ることだけでも意味があるかなと思ってやりました。まあ辛抱強くこんな感じで授業をしていました。

次に考えた日々授業していく上で、やっぱり音楽である以上用具が必要だと。あの授業の時にも思っていたんですけど、バヌアツにないリコーダーとかキーボードとか鍵盤ハーモニカを使って音楽を教えることに果たして意義があるんだろうかとすごく悩んだ時期もありました。ただ10年続いている歴史を変えてバヌアツカスタムの音楽にしてこうというような強い流れもなくて、ずっと流れに乗ってしまったという感じです。ですからキーボードは前任者が用意していて、リコーダーも前任者が英語クラスの分だけは用意していたので、残ったものとか自分の現地の先生が送つてあげるよと言ったりとか、あとフランス語クラスのほうは笛がなかったので隊員支援経費などを申請して買ってもらったりとかしていました。もうひとつはJICAの持っている、世界の笑顔のためのプロジェクトですか、もう1つ協力隊を育てる会みたいなのがあると思うんですけども、何かを得たいと思うときにいろんな方法があるんだなというのはここで勉強しました。

だんだん授業をしていくうちに授業していくもいいんですけど、いつまでも私がしていても仕方がないんじゃないかということでカリキュラムを作りたいなということが出てきます。これはバヌアツの音楽のカリキュラムが書いてある、これ訳して、どうやってカリキュラムを作ろうと考えるんですけど、そういうときに役立つのは日本での教育経験しかなくて、果たしてそれがいいのかどうかわからないんですけど、日本だと4観点にだいたいわかっていますよね。評価も教育観点がシンキングと…とか鑑賞とか創作表現とかを学年ごとにちゃんと目標を作つてそれを英訳して、こんなの作つてみたんだけど園長先生に提案して、それをこと細かくここに教科書によって1曲1曲これをやるんだよっていうのが、これを教えるんだよというのを日本語で書いてなくて英語とかフランス語で訳してもらって、それを持ってこの日はこれをやるんだよというプランまで作つて授業をするんですけど、なかなかそんなに、じゃあわかんないからやってとか言われたりとかして。でもだんだん慣れてくると現地の先生も、これリズムうちの練習なんんですけど。(ビデオ) 実は八拍子をやりたかったんですが、この先生が勝手に七拍子に変えてしまったので、それもしょうがないかなと思ってるんですけど、そんな感じでだんだんと現地の先生にわかるところからやってもらうようにしました。現地の先生が一番言ったのは、カリキュラムがあつても要するにそれに伴う技能がないといけないということで、ワークショップを開催して、私は島隊員だったのでちょっと首都は離れていたのでわからないのですが、首都はもう長い歴史なので、ミュージックパネルグループというグループがあつて、そこで毎年首都でワークショップをやつて、音楽指導法に対する。ただ、音楽指導法というと笛を吹くのは好きとか鍵盤ハーモニカをするのが好きというのはわかるんですけど、その吹き方を教えに来ているわけではないと思うんだけどなというのがすごい自分の中

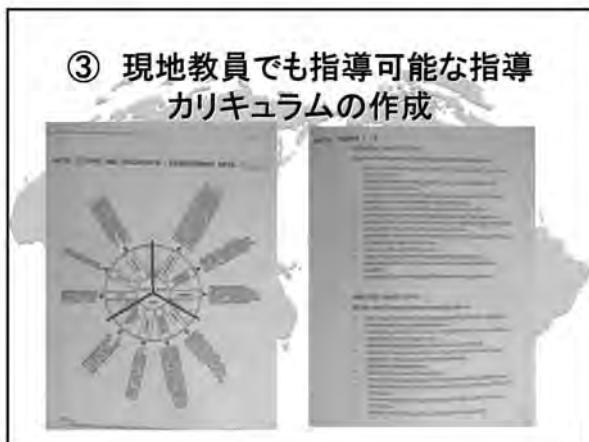
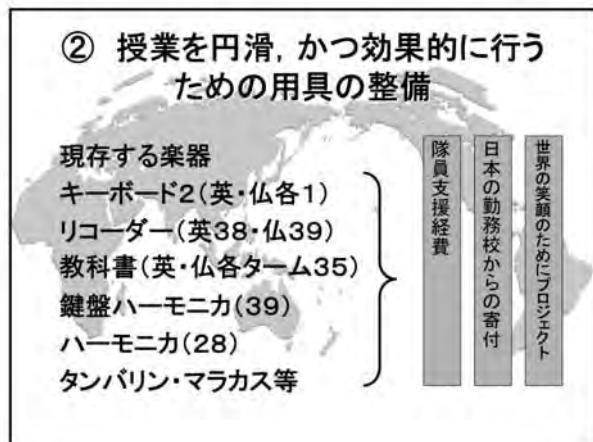
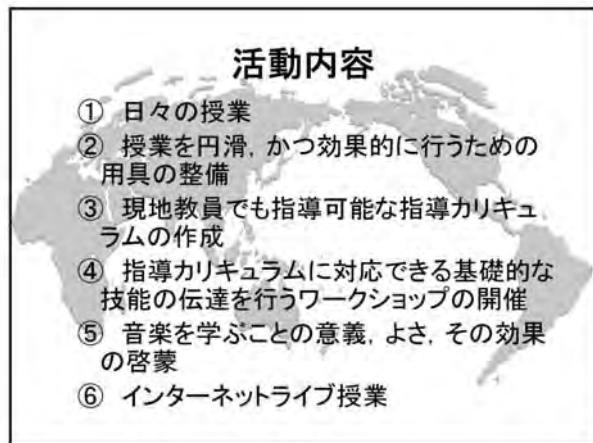
にあって、音楽をどうやって教えるのか、たとえ吹けなくったって子どもはできるようになるということを、簡単な資料を作ってワークショップで行いました。でもやっぱり現地として興味があるのは笛はどうやって吹くのとかこの笛はもらえるのとか、そういうことに終始してしまった感じはあります。

次に2つ目は日本の学校とかでもそうだと思うんですけど、啓蒙はしていきたいなと思いました。何を教えたかと言われると、やっぱり情操教育が全然発達していないという点の大切さを知って欲しかったのと、音楽とか図工ともう1つちょっと忘れちゃったんですけど、Artという教科の中にひっくるめているんですけど、非常に曖昧な表現で、指導の必要性ですね失礼しました、曖昧な表現でどの時期にどれをやるのか指定がされていないんですよ、そこをなんとなくこう、私のほかに5, 6人音楽隊員がバヌアツでも散らばっていたんですけども、そこに分かってもらえないとかぶんカリキュラムとかも変わっていかないだろうなと思いましたので、日々の授業で子どもがたとえば算数とか国語、英語とかフランス語とかできなくとも、音楽はできるようになればいいとか、ワークショップでだんだんそういうことを説明したりとか、これは校内音楽会の写真ですけども、校内音楽会を開くと親が見に来て子どもの様子をなんか成長したと日本だと思うんですけど、バヌアツはあんまりそう考えないみたいで、結構これも11時くらいまでかかってやったんですけど、一応目標としては、音楽会を開くとちょっと現実的ですけど、ファンドレイジングとしてお金が集められる、そうすると学校で物がたくさん買える、音楽はそういうことにも役立つんだということからでもよかったです、その上の2つを情操教育の大切さを分かってほしかったんですけど、ここ非常に難しかったところで、出来たかどうか非常に謎だなと今でも思っています。いろんな人、どの隊員もこんなことやって意味があるのだろうかとか本当に泣きたくなる日々がたくさん続いた中ででてきたのがインターネットライブ授業で、バヌアツに前いた隊員が横浜にいて私の現地校とインターネットで結んでライブ、生の授業をしようと、お互い文化を紹介しあうという点に終始したんですけど。これがバヌアツの写真、こんな感じですっとやっています。これはなんか練習しているところなんんですけど、この先生すごいいい先生で一生懸命にやってくれて、当時筑波大学の先生と校長先生たちと一緒にインターネットライブ授業をやりました。…ビデオ…むこうの映像とかと交換しながら、私の名前はなになにですとやったりとか、これは最後の感謝の言葉。…ビデオ…1回目がこれで2回目もやったんですけども、ボランティアしている間に教員としての仕事もちょっと入ってきたりとかして自分にとってはいい刺激になりました。

短い任期を終えて思うことは、これから派遣される方々へなんですけど、自分でも2年行ってきて意義のあった時間だとは思いますが、果たして自分のやったことが身になったかとか貢献できたかというと、非常に疑問に思うことは今でも思います。これから行かれる方々にはやっぱり活動においては、自分が必要だと思ったことはしていいと私は思います。もうちょっと言い方を変えると、したいことはする、したくないことはしない、そのくらいの強い意志が必要だと思います。したいことをしても、基本的にボランティアなので評価が付いてこない。だからその是非がよかったです悪かったかというのは自分で判断しなくちゃいけなくて、たとえ失敗、やっぱりこれは失敗だったなと思ったら、結構私はくじけてないていたタイプなんんですけど、くじけないことが大事で、失敗したらまた次とか、これでもよかったですと思うような心が大事棚だと思います。生活においては自分

はこれ学んだんですけど、自分のことは自分でするということを徹底的に、自分の健康、自分の安全というのは全部自分で守るんだということは徹底的に仕込まれました。自分でできることは自分で行なうことが基本だと思います。だから、私は英語もフランス語も中途半端で終わりましたが、現地語だけは何とか覚えて帰ってきました。覚えないとガスも通らないし電気も通らないし電話も引けないし授業もできないし、それにおいて自分のできることは。私が一番嫌だったのは住んでいる家のトイレがすごい汚くてそこだけはどうしても我慢できなくて、学校に交渉してトイレかえてくれとすごい交渉した結果変わりました。何を大事にするかというのは人によって違うし、それは自分の思いで行動して私はいいと思うので、自分でできること自分で行なえばいいと思います。いろんなしがらみとかできないこともありますけど活動においても。後悔のないように活動していただければいいかなと思います。ただ、どうしてもできないことをできないってすごく落ち込む日もあるんですけど、人に頼って解決するんだったら遠慮なく人に頼ってもいいんじゃないかな。私もすごい頼り下手で結構自分で抱え込んでしまって、体調を壊した時期もありましたけれども、遠慮なく人に頼るそういう勇気も皆さんに持っていただければなと思います。短いですけれども、以上です。





JCIV 作成 音楽カリキュラム

以下の文書は、音楽カリキュラムを作成するための手順書です。手順書を参考に音楽カリキュラムを作成する手順を示しています。

項目	説明	実施方法	実施日付	担当者
1	音楽カリキュラムの構成要素	音楽カリキュラムの構成要素について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
2	音楽カリキュラムの実施方法	音楽カリキュラムの実施方法について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
3	音楽カリキュラムの実施日付	音楽カリキュラムの実施日付について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
4	音楽カリキュラムの担当者	音楽カリキュラムの担当者について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)

Class 7 - 音楽 - 音楽カリキュラム

音楽カリキュラムを作成する手順書

項目	説明	実施方法	実施日付	担当者
1	音楽カリキュラムの構成要素	音楽カリキュラムの構成要素について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
2	音楽カリキュラムの実施方法	音楽カリキュラムの実施方法について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
3	音楽カリキュラムの実施日付	音楽カリキュラムの実施日付について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)
4	音楽カリキュラムの担当者	音楽カリキュラムの担当者について、音楽カリキュラムを作成する手順を示す手順書	2023/09/10	JCIV (JCIV)



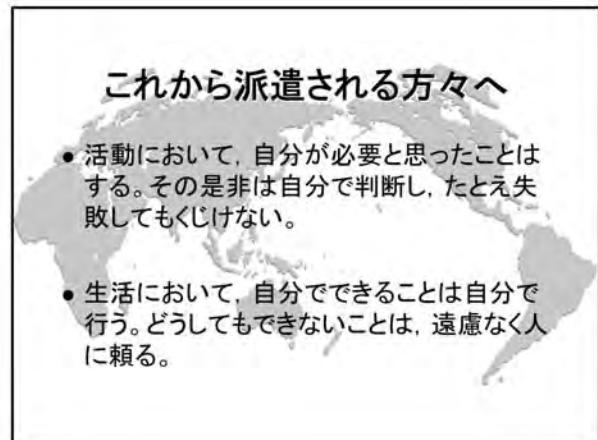
④ 指導カリキュラムに対応できる基礎的な技能の伝達を行うワークショップの開催

⑤ 音楽を学ぶことの意義、よさ、その効果の啓蒙

- 情操教育の大切さ
- ARTの系統的な指の必要性

日々の授業
WSでの伝達
校内音楽会

⑥ インターネットライブ授業



プログラム3

派遣現職教員サポート活動報告

浜野 隆 (お茶の水女子大学)

佐々井啓 (日本女子大学)

前川久男 (筑波大学)

服部勝憲 (鳴門教育大学)

村松 隆 (宮城教育大学)

幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上

浜野 隆

(お茶の水女子大学文教育学部・助教授)



【幼児教育】

幼児教育分野における派遣隊員支援と
幼児教育協力の質的向上

浜野 隆
(お茶の水女子大学)

1. 幼児教育分野の青年海外協力隊

- 要請は多いが、派遣が追いつかない分野
- 現職派遣はさらに困難
- その理由
 - ①公立幼稚園が少ない(幼稚園は6割が私立)。
 - ②公立幼稚園教員の年齢(平均年齢42.2歳)
 - ③幼稚園の財政(国庫負担のある義務教育とは違い、どこもぎりぎりでやっている)
 - ④人員の配置:臨時職員が多く、常勤職員がJOCVとして出にくい。学級担任(1学級に1人の先生)
 - ⑤帰国後、開発教育という形で社会還元しにくい(隊員経験が評価される場面が少ない)、「重要性はわかるんですが…現場は目先のことで手一杯」





2. 本事業の目的・方法

- 1. 協力隊活動広報・調査
- 2. お悩み相談: 派遣前、派遣中、帰国後
(メールでの相談、Q&A集の作成)
- 3. 教材・資料の作成・配布
(ハンドブックの多言語翻訳、ビデオ、国際動向パンフ、活動評価ツール)

活動テーマ:「幼児教育分野における派遣隊員支援と幼児教育協力の質的向上」

3. 今年度の活動・成果

■ (1) 広報・調査活動

- 昨年度に続き、公立幼稚園・私立幼稚園調査に対する広報活動の継続。
- 私立幼稚園関係者に対する理解を深めるために、雑誌「私幼時報」に青年海外協力隊の活動を紹介。
- 青年海外協力隊の広報紙 [JOCV news] に本事業の紹介を掲載し、その内容を国内幼児教育関係者にも配布。
- アンケート調査等を通じ、保育者養成機関、保育所への広報を開始した。

(2) 幼児教育協力の国際動向に関する情報集約・提供

- 幼児教育ネットワークの帰国隊員や派遣中の隊員らとの意見交換から、国際動向パンフレット作成にあたっては以下の点の重要性が明らかに:
- ①国際社会の開発課題とECD支援との接点を明らかにすること、
- ②教育分野に焦点を絞り込まないこと、
- ③途上国の乳幼児を取り巻く状況をマクロな視点から理解する重要性に言及し、そのための基本的知識や情報源を提供すること。
- 「EFAグローバルモニタリングレポート2007年版」フルレポートの翻訳について、ユネスコと協議の上、翻訳に関する許諾を得、現在翻訳が進行中。

(3) 派遣候補生および派遣中隊員への直接的助言

- 「幼児教育ハンドブック」は、各訓練所からのリクエストに応じて送付し、候補生たちに配布されている。
- 現在は「幼児教育ハンドブック[2]幼児教育協力Q&A」の作成が進行中。
- 前年度に引き続き、現在派遣されている隊員から質問を集約し、回答できるものについては回答を送付。
- 隊員の広域研修への助言、本学が実施している地域別研修(中西部アフリカ幼児教育)への候補生の参加を通じて、派遣前情報の入手、派遣先スタッフとのネットワーク作りを支援。
- 「幼児教育ハンドブック」の多言語化を進め、翻訳済み部分については即時、隊員メーリングリストに送信している。

4. 派遣中隊員がかかえる悩み

- 1. 任国の教育事情
- 2. 文化の違い
- 3. 要請に関する問題
- 4. JOCVに対する理解が乏しい
- 5. CP(カウンターパート)との関係
- 6. 活動の内容・方向性について
- 7. 語学・コミュニケーションの問題

- 1. 私には、特定のカウンターパートがないのですが、活動に際してどのような点に留意したらしいでしょうか。
- 2. 任国の教育に対してどこまで日本のな考え方が良いのか、必要なのかわかりません。子ども中心主義の伝達をすべきかどうか、判断する方法を教えてください。
- 3. 任国には任国の保育の型があり、その国式の保育にどこまで手を入れていいかわかりません。活動の方向性を決めるいい方法はあるでしょうか。
- 4. 現在の活動は、個に対してアプローチしている状況なので、広がりに欠けると感じています。「点」に対する活動を「面」に広げていくにはどのようにしたらいいでしょうか。
- 5. 配属先のJOCVに対する理解が乏しくて困っています。すでに赴任して10ヶ月になりますが、いまだに自分の配属先で私の位置づけをきちんと決められていません。相談できる現地の相手もいません。どうしたらいいでしょうか。

- 6. カウンターパートや指導主事が忙しく、時間が合わないため十分なコミュニケーションの時間が取れません。そのため、講習会の準備などにも支障をきたすことがあります。何かいい方法はないでしょうか。
- 7. 国民性の相違かもしれません、私の任国では、部下や上司の許可なしに仕事ができず、自主的な仕事が考えられません。指導主事が絶対的な権威をもっており、間違っていても間違っているといえない雰囲気があります。私はときどき自分の思ったとおりのことを言ってしまうのですが、耳を傾けてもらえない。
- 8. 要請内容と現場のニーズが結びつきません。現場での需要がわかりません。そのため、活動の方向性が見えなくて困っています。どのように活動の方向性を見つけていったらいいでしょうか。
- 9. 語学力の問題もありますが、相手とのコミュニケーションが難しいといつも感じます。そのため、信頼関係を築くことがうまくできていません。信頼関係を築くための何かいい方法はあるでしょうか。

- 10. 自分が担当しているエリアの規模が大きすぎて広く浅い活動になってしまってはいないかと不安を感じます。どのような点に注意して活動したらいいでしょうか。
- 11. 巡回先が多く各園との深いかかわりがなかなか難しいと感じます。どのような点に注意して活動したらいいでしょうか。
- 12. 任国の人々が受身(時には怠け者)で困っています。なかなか指導主事自身で物事を企画したり提案しても、私にやらせようというフシがみられます。現地の人々のやる気を引き出すいい方法はあるでしょうか。
- 13. 露骨に物質的・要求をされます。うまくかわす方法を教えてください。
- 14. 講習会を定期的にやっているのですが、その内容が浸透(定着)しにくいというのが悩みです。講習会を成功させるコツは何かありますでしょうか。
- 15. 赴任先がお休みのバカンス中、どんな活動をしていいかわかりません。完全に休んでいる隊員の方もいますが、それでいいのかどうか疑問に思うときもあります。何かいいアドバイスがあればお願ひします。

- 16. ニーズがわからない
- 17. 自分のやったことの効果が見えない(これまで何回も入って、何が変わったのか。実感が持てない)。
- 18. 協力の効果をどう確認したらいいのか。
- 19. 相手国の教育にどこまで介入していいのかわからない。
- 20. 体罰やスパルタ式教育に疑問を感じるが、どうすべきか
- 21. 任国3歳児と日本の3歳児の発達の度合いは同じようなものと考えていいか?違うとしたらどれくらい違うのか?
- 22. 現地では、衛生についての感覚が日本と大きく違います。幼稚園はごみだらけですが、先生も子どもも全然気にしていません。どこまで衛生環境について手を入れていいのかわかりません。
- 23. 任地で、比較的若い職員の人は柔軟性があり、私の言うことをよく理解してくれますが、権力のある年配の先生方は柔軟性がなく、聞く耳を持ちません。その結果、私のやっていることは全く現地に浸透しません。何かいい方法はありますでしょうか。

■寄せられた多くの悩みは、 幼児教育分野のみならず、 他分野の隊員もかかえて いる(であろう)問題

派遣中隊員ニーズ(まとめと対応)

- ①活動の方向性に関して第三者の立場、専門的な立場からのコメントがほしい
 - →拠点での対応:(Q&A集やワークショップに参加してのコメント)
- ②派遣先のニーズを把握したり、活動の効果を確認したりするための調査手法
 - →拠点での対応:(Q&A集や評価ツール作成)
- ③資料や教材が現地語になっていると良い
 - →幼児教育ハンドブックの多言語翻訳

連絡先

- ご質問・お悩みはこちらまで
- hamano.takashi@ocha.ac.jp
- お茶の水女子大学・教材配布URL
- <http://www.kodomo.ocha.ac.jp/~eccd/reports.html>
- ベトナム初等教育
- <http://www.ushioji.com/viet-kaken.pdf>

海外派遣隊員の家政分野に関する活動支援教材等の開発

佐々井 啓

(日本女子大学家政学部被服学科・教授)



海外派遣隊員の家政分野に関する 活動支援教材等の開発

2008年1月5日

日本女子大学 佐々井 啓

1. 本プロジェクトの概要

- ・家政分野の知識・技術の修得による生活の質の向上
 - ・4年間の活動成果を踏まえ、活動支援のための具体的な教材の開発
 - ・途上国の人々の生活の向上に緊要性の高い保健衛生、健康、環境等の内容の充実
 - ・参加型学習の指導過程の開発・提案
 - ・生活状況や現地情報を踏まえた活動事例集の作成

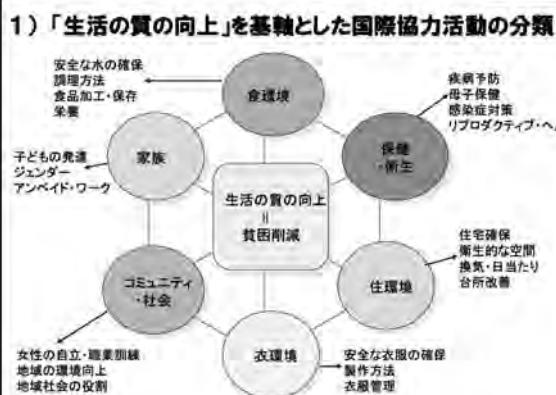
2. 今年度の活動・成果

(1)生活狀況調查

- ### 1) 家政学の見地から「生活の質の向上」を基軸とした国際協力活動の分類表を作成

2)「生活の質」に関する調査表の作成

派遣中の隊員や帰国隊員に派遣先の生活状況についてのアンケート調査・ヒヤリングによる状況表の作成



2)「生活の質」に関する調査表の作成

生活狀況分類表

1)食環境 1) 保健地の医療の実績の状況として、当ではまるものに〇をつけてください。複数選択可

3) 住環境	問題名	状況	分類
1.トイレ	ア 電気・水による虞度が低減される		
	イ 便器の水洗式を採用する		
	ウ 便器の水洗式を採用して、廻水は排水溝を通じて便槽にためる		
	エ 地面に100mmほどの溝を設ける		
	オ 回しの内に穴を開け、外にあふす		
	カ 造った構造物の内、屋外で排水し、放置する		
2.風呂・洗面	ア 余分な湯、廻槽の湯		
	イ 余分湯、廻槽から分離		
	ウ 各家庭で、お盆や水がためた水浴槽		
	エ 共同浴槽		
	オ 川や湖に浮かぶ		

5)コミュニティ・社会	指標名	概説	分類
1. こみの履歴		ア 分別収集後に、特設回収箱が設けられている イ ごみの分別回収している ウ ビニールなどの化粧品品のごみ発端がなされていない エ 伝統的な衛生的な生活をしている	
2. 女性の収入推移		ア 女性の収入を、夏野菜の収入に付加価値をつけている イ 女性の収入を、作業した商品に付加価値をつけている ウ 女性の収入を、販売する商品に付加価値をつけている エ 付加価値を付加する組織がない	
3. 店舗・販売所		ア コーナートレーラーの小さな店舗・販売所が複数ある イ 並びに大きな店舗・販売所がある ウ コーナートレーラーの小さな店舗・販売所が1-2軒ある エ コーナートレーラーの店舗・販売所がない	
4. コミュニティ活動		ア 集会などの活動が頻繁である イ 集会などの活動が少ない	

(2) 現地調査

- 現地の生活状況の把握
- 派遣隊員の活動の観察およびヒヤリング
- 現地での教材・事例集の活用とその有効性の確認・改善
- 現地の衣食住・衛生・環境の調査

ガーナ共和国 ボランティア (家政関連)



1) 小・中・高・短期大学などの教育機関

- ① Northern州 Tamare
Dahin Sheli公立幼稚園・小学校
中学校 2007年10月16日見学



中学生の授業風景



技術短期大学



- ② Northern州 Kumashi
Kumasi Polytechnic
2007年10月17日見学

被服科の授業見学



家政隊員長谷部さんの3年生
デザイン指導の授業を見学

ケータリング実習



伝統的な料理フーフーを作る



1年生は基礎確立

2年生は婦人服パターン実習



炭によるコシロでシチュー作り

私立技術専門高校 Northern州 Kumashi
③ Opoku Ware Vocational Inst. 2007年10月17日見学



④ Ramseyer Vocational Inst.



派遣隊員岩本さんに聞く

技術短期大学

⑤ Cape Coast Technical Institute

2007年10月18日見学



派遣隊員本澤さんに聞く



先生のデモストレーションに注目

伝統的な染物を利用した小物

2)地域の職業訓練・環境支援施設

① ニヤリガ 手工芸協会

ボルガバスケットの制作・販売



ガーナ最北の州にある村
2007年10月15日

② ボルガタンガ 未亡人・孤児を支援する会

籠編み・織物・手工芸による自立支援



③ガーナ家族基金ケープコーストクリニック



2007年10月18日

派遣隊員:コミュニティの中のクリニックで、アドバイスや応急手当、無料血圧診断会

3)コミュニティと環境

ビニールなどのゴミのポイ捨てによる町の環境悪化



- ・マーケットで買い物
→黒いビニール袋
- ・ピュア・ウォーター
→ビニールパック

派遣隊員の分科会(本務とは別に活動)
→Ex. 村落分科会

ピュアウォーターのパックの再利用
バッグやエプロン



(3) 今年度の成果

① 家政隊員への教材提供

- ・家政分野隊員(被服)
 - 家庭科ハンドブック・
服飾系専門学校カリキュラム
他の隊員の教材例
簡単に出来る教材(手提げカバン等)
- ・家政分野隊員(食物)
 - 家庭科ハンドブック
エイズ関連資料
栄養教育資料(英語版)
エプロンシアター(食物の消化・吸収)
(体のしくみ・胎児の発育)

②他の分野の派遣隊員への家政分野の情報提供

- ・村落開発普及員→ 生活支援全般の情報・
収入に結びつく作品づくり
ジェンダー等の問題解決
- ・理数科隊員→教材作り(身近なものを使って)
- ・PC隊員→環境問題からのリサイクル商品の
開発
- ・看護士 → 食生活情報・ジェンダーの問題

3. 今後の活動に向けて

現地調査に基づく生活状況・生活課題の集約
帰国隊員からの情報収集



派遣隊員が活用できる事例集の作成

- ・生活状況の分類
- ・地域別活動事例の提案
- ・学校およびコミュニティにおける活動事例の
提案

活動事例集(案)ー1
肥満・生活習慣病の予防

1ページ
目的
背景
ポイント
解説

2ページ
隊員報告書より



3. 4ページ 活動事例案



活動事例集(案)-2 日常着の製作—エプロン

1ページ
目的
背景
ポイント
解説

2ページ 隊員報告書より

3ページ 活動事例案

参加型学習 ワークシート案

活動事例集(案)-3 乳児の離乳食—食材選び

1ページ
目的
背景
ポイント
解説

2ページ 隊員報告書より

3ページ 活動事例案

参加型学習 ワークシート案

活動事例集(案)-4 環境を考えた消費生活—リサイクル

1ページ 目的 背景 ポイント 解説

2ページ 活動事例案

活動事例集(案)-5 調理の方法—加熱調理器具の種類 かまど

1ページ 目的 背景 ポイント 解説

2ページ 活動事例案

目的

背景

ポイント

解説

障害児教育分野における青年海外協力隊
派遣現職教員サポート体制の構築

前川 久男（筑波大学特別支援教育研究センター長・教授）
瀬戸口 裕二（筑波大学特別支援教育研究センター・教諭）



2007年度帰国隊員報告会

障害児教育分野における青年海外協力隊 派遣現職教員サポート体制の構築

筑波大学
特別支援教育研究センター
前川 久男

2008/1/5

事業の概要

○筑波大学にある心身障害科学研究、附属障害教育5校と特別支援教育研究センターにおける専門性と実践的研究等を基盤とした高度な職業人養成機能の活用
○研修プログラムと人材の活用
○様々な教育のリソースの活用
○大学間連携や機関連携で活用してきた独自の情報ネットワークの活用

↓

○派遣隊員のサポートニーズ調査
○派遣前研修の更なる改善と発展
○派遣隊員の課題に対する的確な対応(即応性・適切性・多様性)
○障害に関する各種リソースの集積と提供(教材・入材・指導法等)
○任国における人材育成への協力
○巡回サポートの展開
○帰国隊員とのネットワーク構築

ニーズ調査の実施

派遣中の養護隊員を対象(選択式アンケート調査 2006)
59人中39人 回収率66.1%

質問項目
-派遣国及び活動内容
-勤務経験と基礎資格等
-応募動機と展開したい活動等
-派遣前研修のニーズ
-派遣中のサポートニーズ
-通信環境及びインターネットスキル

図表
花幕時の要請内容と実際の任務内容

現地調査及び巡回相談の様子

ジャマイカ、ランディロ特殊教育学校
JAMRI(ジャマイカ知的障害協会)経営
ブックレット頒呈式

マレーシア、グラゴー小学校

ニーズ調査から

○国内での経験年数に関しては10年未満の隊員が半数を超える
○派遣国では、担当者のいない領域を担う実際的担い手としての期待が多い
○研修ニーズとしては、指導法、障害理解の内容が多い
○派遣国に必要なサポートとしては、「指導法」「人材養成」をあげている
○サポートの形態として、「専門家の派遣」「隊員の増員」が多い
○帰国隊員との情報共有及びアドバイスを求めている傾向が高い

現地調査から(ジャマイカ・マレーシア)

○隊員個々のスキルに対する期待が大きい
○授業における具体的な成果を望んでいる
○教科・領域に基づいた指導を中心とした授業スタイルはほぼ確立されている
○障害の理解や障害特性に基づいた指導の見通しは不十分(特に重度児、自閉症)
○ワークショップ、ブックレット作成など教員のスキルアップに資する成果への評価が高い
○現地スタッフの人材養成への期待が大きい

2007年度の事業内容

○ブログ開設によるサポートネットワークの構築

体制
-派遣隊員をサポートするサポートパートナー(筑波大学、附属特別支援5校)の支援
-引き継ぎ、現地情報などの帰国隊員の知識・経験の活用

内容
-子どもに関する知識、情報の提供
-アセスメントに関する情報の提供
-指導法、教材等の提供
-任国の教員のスキルアップへの協力
-有用なリソースの紹介
-現地活動に関する情報交換

2007年度の事業内容

隊員自学教材集の作成(DVD教材として)

○目的

- ・隊員自身が、障害の特性や指導のポイントをより深く理解する
- ・仕事の教員のスキルアップのポイントを理解する

○内容(自閉症)

- ・障害理解
- ・指導のポイント
- ・教材の作成と活用
- ・指導計画と実施場面



2007年度の事業内容

隊員活動素材集の作成(CDに収納されたファイルとして)

○目的

- ・隊員自身が、学校の教育活動で活用する
- ・ワークショップやブックレット作成の素材として活用する
- (隊員が現地語に翻訳したり、ファイルを加工して)

○内容(視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由)

- ・教材と活用
- ・指導計画と授業実践
- ・障害特性と指導のポイント
- ・教材写真集
- ・日本の障害児教育(VTR)
- ・社会的自立の多様なスタイル(VTR)



知的障害教育の日課の考え方パワーポイント資料

派遣現職教員の活動の幅を広げるハンズオン素材と その活動展開モデルの開発

服部 勝憲

(鳴門教育大学教員教育国際センター長・教授)



派遣現職教員の活動の幅を広げるハンズオン素材とその活動展開モデルの開発

鳴門教育大学教員教育国際協力センター
センター所長/教授 服部勝憲

目的

- 現職派遣教員を始めとする協力隊員により開発・活用されたハンズオン素材の収集及び評価・改良
- 他地域の隊員が即時的に利用可能とするためのハンズオン素材の活動展開モデルの開発
- 成果の「国際協力イニシアティブ」ライブラリへの登録による派遣隊員への支援体制の充実

※ハンズオン…直接手に触れる、実践的な、体験的な

方法1

- ハンズオン素材に関するニーズ調査の実施
 - ねらい: 隊員の教材開発経験や教材開発に係る困難性、必要とされる教材について明らかにする
 - 対象: 教育関連の職種(小学校教諭、青少年活動、環境教育、幼稚教育など)に就いている派遣中の隊員と筑波大学CRICEDの管理する現職派遣隊員ML登録のOB/OG隊員
 - 実施方法: JICA事務所を通じての協力呼びかけとMLを介してのメールによる依頼

方法2

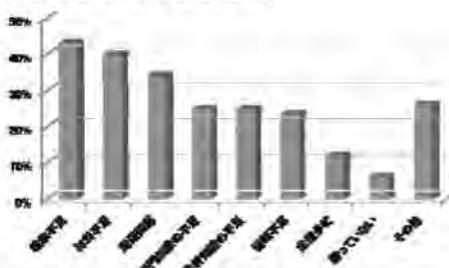
- ハンズオン素材の収集及び評価・改良
 - ニーズ調査の際に教材提供に関する呼びかけも実施
 - 実施分担者の持つネットワークを通じての提供依頼
 - ニーズ調査への回答者に対して個別に依頼
- 活動展開モデルの開発
 - 収集したハンズオン素材の一部を実際に途上国で活用することで、さらなる評価・改良と、今後の隊員が即時的に利用可能な活動展開モデルを開発する
- 「国際協力イニシアティブ」ライブラリへの登録

ニーズ調査結果1

- 実施時期: 平成19年8月～9月
- 有効回答数: 138件(調査対象人数1019名)
- 結果: 隊員による教材開発の状況について
 - 教材開発経験: 87.0%
 - 対象学年: 初等学校段階を中心に(30%強)、就学前から大学生、教員向け、一般市民向けのものまで
 - 教科: 数学(24.0%)、理科(14.5%)、日本語(13.8%)、体育・音楽(13.0%)、国工(12.3%)など
 - 参考資料: 大半が日本の教材を参考にしており(70.3%)、現地のもの(42.0%)、その他の国のもと続く(13.0%)

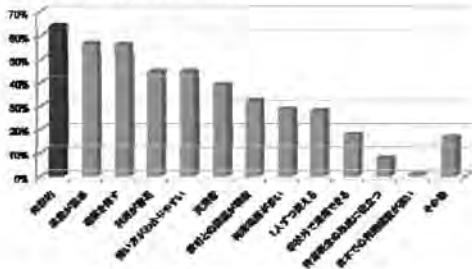
ニーズ調査結果2

■ 教材開発における困難性

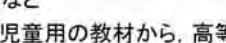


ニーズ調査結果3

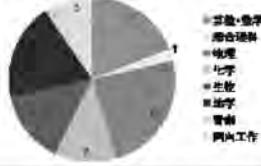
■ 必要な教材の特徴・質



ハンズオン素材収集状況

- 収集したハンズオン素材: 42点(12月12日現在)
 - 教科領域: 算数・数学、理科(物理、化学、生物、地学)、音楽、図画工作など
 - 対象学年: 就学前の児童用の教材から、高等学校段階のものまで。また、地域のコミュニティーで活用できるものもある。
 - 言語: 日本語を主体
としつつ、一部に英語、
西語、仏語

Category	Count
算数・数学	15
理科	12
音楽	5
図画工作	1
英語	1
西語	1
仏語	1



ハンズオン素材リスト

ハンズオン素材例



渡航調査概要

- 途上国でのハンズオン素材活用による、さらなる改良と活動展開モデルの開発
 - アフリカ地域:タンザニア(1月下旬)
 - 訪問地域:ダルエスサラーム、ムトワラ
 - 教材候補:「やじろべえ」、「ペットボトルシャワー」、「空き缶の凹面鏡」など
 - 東南アジア地域:バングラデシュ(2月中旬)
 - 訪問地域:カリヨイル、カジブル、チッタゴン、コックスバーアル
 - 教材候補:「百玉そろばん」、「Box Puzzle」、「音の原理と性質」など

最終成果物に向けた進捗状況

- ハンズオン素材収集はすでに完了している
 - 1, 2月に予定している途上国への渡航調査を通して、ハンズオン素材の一部をさらに改良し、活動展開モデルへと昇華させる
 - 海外渡航調査と並行して、2月には収集したハンズオン素材及び活動展開モデルの「国際協力イニシアティブ」ライブラリへの登録を行うとともに、現職派遣隊員ML等を活用し、周知を図る

海外教育協力者に対する環境教育実践指導と 教育マテリアルの支援

村松 隆

(宮城教育大学附属環境教育実践研究センター・教授)



海外教育協力者に対する環境教育実践指導と
教育マテリアルの支援

課題実施機関 宮城教育大学
課題代表者 村松 隆

事業の目的・方法
隊員の教育に役立つ教材・素材の提供
事例活用方法の指導・助言

日本の教育資源
日本の最新の環境教育情報
途上国の教育協力
学校で扱える科学実験(系材集の一部)

青年海外協力隊に提供
環境教育分野以外の諸種の活動支援
派遣における研修で活用法を指導

青年海外協力隊活動報告

データベースを使って何ができるようになるのか？

環境教育実践事例データベースを活用した指導案の作成例

環境教育指導案
ねらい・目標設定
環境教育の基本的な考え方
指導計画
指導過程
指導上の留意点
評価の観点 等
活動力活用
結果のあげ方 等
+授業資料

Step1 何をどう教えるか？
パート1の収集
Step2 どうな材料をどこでどうか？
パート2の収集
Step3 どうな学習をさせようか？
パート3の収集
指導資料を作成することができた！

環境教育実践事例データベース
<http://dbee.mwi.yo-u.ac.jp/>

（左側）

（右側）

EX) 途上国の教育で経験するゴミ問題 課題としてのゴミ教育

かつての日本
ゴミの散乱
ゴミの発生原因
ゴミ問題（衛生問題・健康影響）
ゴミの環境影響・弊害
ゴミの収集・組織的活動・政策
リサイクル・資源の活用・法律
環境保全
ライフスタイル
いまの日本 試行錯誤を伴った教育の歴史
段階的な教育のプロセスがあった

（左側）

（右側）

ゴミ教育のための指導案づくりー日本の事例を参考してー

例えば)

- Data No 190 (ゴミから考える地球環境、指導上の留意点等)
- Data No 233(エコスクール、計画と指導体制、取組法、省エネ学習の内容)
- Data No 338(社会科指導案、健康なくらしのために、指導計画と評価計画)

Data No190 Data No233 Data No338

自然環境保全とゴミ
学習者の実際の動き(体験活動)
暮らしとゴミ

いくつかの指導案例を参考にして、ゴミ学習についての体験的な取組の方法、手順を知る。

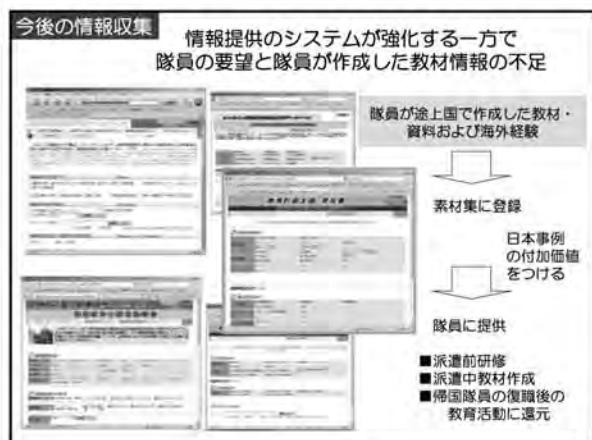
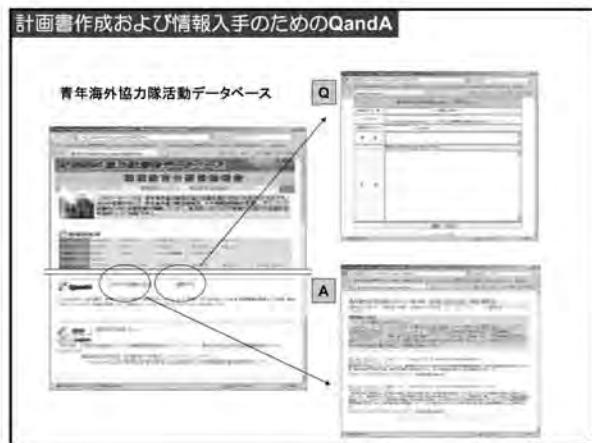
ゴミ教育：何をどう学習させるか。

■ Data No 405 (課題設定とまとめ方)
Data No405

生徒活動に関する一般的な調べ学習手順を参照し、
情報の収集の仕方、まとめ方、情報の整理の仕方を把握

（左側）

（右側）



プログラム4

派遣経験を生かした教育活動に関する パネルディスカッション

生田佳澄（静岡県沼津市立今沢小学校）

堀口かえで（大阪府大東市立谷川中学校）

北原三代志（長野県須坂市須坂園芸高校）

鎌田和宏（筑波大学附属小学校・社会科教諭）

田中統治（筑波大学大学院人間総合科学研究科・教授）

帰国後につながる学習支援

生田 佳澄

(14-1, ホンジュラス, 小学校教諭, 沼津市立今沢小学校)

こんにちは。静岡県沼津市立今沢小学校の生田と申します。14年1次隊で派遣させていただきました。静岡県の教員歴18年目になります。7年間中学校の家庭科の先生をやっていました。その後、文科省の地域指定の研究、性教育の研究だったのですが、家庭科の保育との関係があるということで小学校の方で研修を続けるようにという話で、研修をするために小学校にきました。その指定研究が終わった後に原小学校というところにかわりまして、その地域では外国人がとても多いような学校に行きました。そこで外国人担当にはじめてなるわけですが、そこから数えて9年目に今年なりました。内2年間、14年1次隊としてホンジュラスの小学校教員として派遣させていただいて、帰国後そこの学校にもう1回1年間戻る形で、そしてその次に市内で外国籍の1番多い学校に勤務させていただき、その次に中学校と小学校が道路を挟んで隣同士というそういう学校に今年から勤務しているところです。平成18年度には、JSL (Japanese as a second language) カリキュラムの関係の研修にも参加させていただきました。また、オーストラリアとかペルーの学校訪問もその後させていただくことになりました。

何故（青年海外協力隊に）参加したのかというところのお話をしたいと思います。原小学校1年に外国籍の子どもたちと初めて出会ったとき印象的な保護者とお子さんがいました。その保護者の方から言わされたのは、あと半年後に帰国します、ブラジル人学校が隣町にあったんですけど日本の小学校、公立小学校のよさに触れたいという希望で日本人の学校に入れさせた、半年後に帰国を予定しているということで、日本の国語の教科書が読めることだけがこの子にとっての学習のゴールではない、この子がブラジルに帰国した後に進学させ将来も夢に向かって勉強を続けさせたい、そうしたときに日本の公立学校のよさ、それから帰国後の不安というのをすごく感じていたので、ぜひ帰国後にもつながる学習支援を考えてほしいということを強くおっしゃいました。私もその時は1年目で全く分からなかったので、何がいいんだろうということですごく戸惑ったわけですが、先輩教員や管理職に尋ねたり、本当に分からることは保護者と話し合いながら進めて会議を作りながらやってきました。そのときに現地の教育を知りたいということ、それから開発途上国への国際協力のあり方をきちんと学んで帰国後公立校のよさを現職教員として追究していきたいというところがわたしの参加の強い動機となりました。

1年目はホンジュラス、算数プロジェクトでとても有名だと思います、先輩隊員が長い間築き上げてきて筑波大学とか大学の関連の専門の方々をお呼びしながらきちんとした体系づくりの中で積み上げてくるプロジェクトですが、そこと1年目に関わらせていただきました。国境近くのいろんなところだったんですけど、それぞれの先生方に大学で教員の再教育ということでいろんな指導書が出来上がったところで、その指導書の活用法についてそして教具の作り方とか教材の活用の仕

方とかそういうのを提示しながら伝達していくような授業だったんですけども、それを受けた後各学校でどのように授業を展開しているのかをそれぞれの学校を見させていただいてやるわけなんです。ある学校は濁流が流れる壊れかけた橋をカウンターパートと一緒に渡りながら、沼地をずるずると足を汚しながら行き、背丈を越えるくらいの草がたくさん生えているようなところをかき分けかき分け声だけを頼りに、ようやく着いた頃にはもう授業が始まっていたところだったんですけども。そういう山の中にそれぞれの子どもたちが住んでいてそこに集まり勉強を続けているわけなんです。そういう実態を含めてみることができました。2年目は首都で算数科の研修ということで、ラスアメリカスという小学校に入って教育をしました。

その後ですが、沼津の国際理解教育はこのような組織立てになっていました。帰国後1年目には、総合学習の授業の中で、文化庁の海外研修生が来校していただける機会もあったので、一緒にふるさとを紹介し合う授業を展開したり、掲示や校内放送、集会などをやってきました。市内においては沼津市教育振興会、沼教振と略させていただきますが、その研修会で派遣報告会をしたり、外団人生徒交流会というものの中で自分の経験を活かさせていただいたりしました。また、推進委員もさせていただいている関係で市の教育委員会と連携をとりながら研究を進めていくことができました。また、地域の方では時同じくして中越地震があったもので、現地に行ったときにちょうど新潟の長岡市の劇をやっていた関係もあったもので、そういうところでチャリティーコンサートと一緒にやったり通訳をやったり、長岡市の方に行って1番被害被災のひどかった学校の総合学習で仲間と一緒にコンサートのような形でやりました。

帰国後2年目、校内では先ほど申したように（外国籍の生徒が）1番多い学校へ行きましてカリキュラムを検討したり、そのときにオーストラリアの教育視察の話もありましたのでそこにも行つてきました。このような形でやってきて、そこで文科省の方との平成17年度外国人児童・生徒等に対する日本の指導のための指導者養成を目的とした研修があったのですが、そこで大きなネットワークを得る機会を得ました。そして帰国後3年目には、保護者会、保護者がどんなこと言ってるのかというのは以前はなかなか難しかったんですけども、帰国したらおかげさまで言葉を理解することはできた。今まで言葉は大きな壁となっていて、心は通じ合っているような気持ちはあったんだけども、やっぱり何が学習支援に必要なのかとかどんな困り感があるのかとか、その困り感にぐっと入ったことはできなかったんですけども、そのところが（青年海外協力隊を）経験させていただいたおかげで、一緒に共感しつつ学習体系の違いというところもわかりつつ、意見の吸い上げに生かすことができたんじゃないかなと思いました。また家庭科の持つ教科の魅力、幅の広がり、社会科の持つ奥深さというのも感じました。子どもたちは今まで、例えばこのような形で自分たちの合言葉を作ったりできました。また、キャリア教育の視点を取り上げたそういう研究も進めることもできたのではないかと思います。また、NGOを立ち上げるための支援もして、ラジオ番組も作ってみました。その中では、親御さんの中で喘息のひどい子どもがいてどこの病院に行ってもわからなかったというところで、救急協力員の放送があると知ってスペイン語でもぜひみんなに知らせたいということ、親子のコミュニケーションを図りながら進路に対する夢を育てたいという世界で共通のお話とか自分たちの国に伝わっているというお話とかを2ヶ国語で伝えていきたい、それから情報共有をしていきたいということを目的にやったものです。

今は青年海外協力隊の静岡県OB会の方も連携をとって、16年1次隊の〇〇さんという方がいるんですけれども、その方が会長さんをやりながらタティンハラ（？）という市民団体が沼津市で初めて生まれているという状態です。その他、大学との連携も取れるようになりました。保護者も一緒に勉強ができるようにということで、“14-6”はどうなのかというところなんかも教えていました。帰国後4年目ということで、教材研究も進めながら、また帰国予定のある子に対しては帰国後につながる授業というのを展開できるようにということで、自分自身の授業をみなさんには校内でも公開したり研修しあったりできるようなそういう体制づくりもしてきました。協力隊を育てる会の助言も含めまして、ペルーの教育省の方で今回企業経営研究所という助成のほうも受ける形ができて、どちらの学校に行こうが学習を進められるようなシステムも得ることができたのではないかと思います。今後の課題については以上この3点です。今後ということで、この3点についてはとても大事なことだなと感じました。以上です。



**帰国後にもつながる
学習支援の視点での活動**

14-1 Honduras 小学校教諭
静岡県沼津市立今沢小学校
教諭 生田 佳澄

自己紹介

- 静岡県教員歴18年
- 7年間中学校勤務後、小学校へ。
- 文科省地域指定研究 授業者
- 外国人担当として9年目
- 14-1 Honduras 小学校教諭
- 帰国後3校勤務・ブロック委員
- H. 17年度 JSL研修会参加
- オーストラリア・ペルー学校視察

なぜ、参加したのか？

- 担当1年目 Yさん・保護者

現地の教育を知りたい
開発途上国への国際協力について学びたい

14-1 派遣隊員としての活動

■ 1年目	■ 2年目
■ 算数プロジェクト	■ 首都公立小学校 算数科研修
教員再教育 指導書の活用法 学校訪問	■ 日本大使館主催 劇「米百俵」賛助 ■ 日本語補習校 ■ 教員養成校 障害児教育

帰国後1年目の活動（校内）

- 総合学習(国際理解教育)
文化庁招聘海外研修生来校
- 揭示・校内放送・集会
- クラブ活動



帰国後1年目の活動（市内）

- 沼津市教育振興会 夏季研修会
派遣報告・活動紹介
外国人児童生徒交流会
- 國際化教育推進委員会
研究推進校・市教育委員会と連携



帰国後1年目の活動（地域）

- 中越地震チャリティコンサート
- 文化庁招聘研修生 通訳
- 長岡市内小学校・総合学習へ



帰国後2年目の活動（校内）

- 原東小へ転勤（外国籍児童25名）
- 担当教員 2名（連携し、経営）
- 外国人児童保護者会
- 時間割・カリキュラム検討
- 外国籍児童補習教室
- オーストラリア教育視察



帰国後2年目の活動（市内）

- 沼教振 国際理解教育部
ブロック委員として
- 國際化教育 推進委員として
- 平成17年度 外国人児童生徒等
に対する日本語指導のための指
導者の養成を目的とした研修



帰国後2年目の活動（地域）

- 平成17年度 外国人児童生徒等
に対する日本語指導のための指
導者の養成を目的とした研修

ネットワーク



帰国後3年目の活動（校内）

- 保護者会の意見の吸い上げ
- 学習支援の体制化
(地域との連携)
- 国際理解集会・校内放送・広報
- 多文化共生の視点での授業
(家庭科)



子どもたちの作った合い言葉



帰国後3年目の活動（市内）

- 研究発表会で実践発表
- 隣接3校合同研修会で、国際理解分科会を設け、年間3回実施。
- 沼教振 国際理解部会
- キャリア教育の視点
- 教材開発



帰国後3年目の活動（地域）

- NGO設立の支援・ラジオ番組（外国人児童の学習支援を目的）
- 県内先進校視察（浜松・磐田・富士）
- 静岡大学との連携
- 県外担当者とのネットワーク

帰国後4年目の活動（校内） 今沢小へ転勤

- 予算化（未来塾事業）
- JSLカリキュラム
- 授業公開・研修
- 翻訳物・教材の整備
- 小中連携に向けて
- 保護者も一緒に勉強会
- 助成金申請



14-6は、どう教えるの？



帰国後4年目の活動（市内）

- 沼教振 国際理解教育部会
- 外国人児童交流会
- 県外視察から得たことの伝達講習
- 外国人担当者会の立ち上げ
- 市内に散在する外国人児童に対する教材・翻訳物の提供



教材研究



帰国予定のある児童



帰国後4年目の活動（地域）

- 企業経営研究所「海外研修助成」
ペルー学校訪問実現
- ペルービ大使館→教育省との会合
公立校の教科書・教材開発
- 協力隊を育てる会の助言

ペルー教育省にて



今後の課題

- 教材開発
- 小中連携に向けた体制作り
- 沼教振を核とする研修体制

今、活動中の隊員の方々へ

- 帰国後に活用しうる
- 教材収集
- 人材ネットワーク
- 現地に学ぶ

派遣経験を生かした教育活動事例報告

堀口 かえで

(15-1, ルーマニア, ソーシャルワーカー, 大東市立谷川中学校)

大阪府の大東市立谷川中学校の堀口と申します。ちょっと画面の方はなしでお話の方だけで進めたいんですが、一応資料としては配られてますが適当に見てください。

私は派遣前は同じ大阪府の大東市立北条中学校という別の中学校で養護教諭をしておりました。7年ほど勤めました。その後、平成15年4月から17年にかけてルーマニアという国にソーシャルワーカーとして派遣されておりました。活動の内容はストリートチルドレンの保護活動を行いました。それから帰国後ですね、平成17年4月に戻ってきました、現在の勤務校であります大東市立谷川中学校の方に養護教諭として勤務しまして、ただいま3年目が終わろうとしております。

画面を見ないとちょっとやりにくいので、すみません。ストリートチルドレンについて、帰国後すごく他の帰国隊員の方もそうだと思うんですけれども、いっぱい伝えたいことがあると。帰ってきた私も同じく伝えたいことだらけで帰ってきたのですが、まず自分の出会った子どもたち、ストリートチルドレンについて伝えたいと思いながら、1年目活動しました。そのうち2年3年といふうちに子どもたちと会話をしていますと、あっルーマニアってストリートチルドレンばかりなんだみたいなマイナスのイメージの方が印象に残っていることを感じ出したんですね。そのうちにルーマニアについてのいいところであるとか文化であるとか、それから自分自身が経験したボランティア活動というのはどういうことなんだろうか、そして私は中学校の生徒を相手にしておりますので、君たちが5年後こんな選択肢があるんだよっていう、人生の生き方のようなものも伝えたいな、そんなふうに感じ出しました。それからですね、そうやってどんな3年間を過ごしてきたかというのがちょっと写真で紹介してたんですけども、1年目については私は保健室の先生ですので、保健室の前にルーマニアのコーナーを作ったり、各学年で行う道徳だとかそれから社会科といったいろんな教科の中でストリートチルドレンや人権についてルーマニアについてお話することもありました。それから文化祭、たぶんどの方もされると思いますが文化祭でのルーマニアコーナー、それから谷川中学校では谷中祭りと申しまして地域教育協議会が主催するお祭りがあるんですね。そこでも写真展やフェイスペインティングを行いながらルーマニアについて紹介する。それからルーマニアに物資を送るというのも行いました。校外では各先生への教職員の研修でお話をしたり、他の中学校に出前の授業をしたり、そんなことも行っていました。18年度2年目ですね、2年目になりますと同じ文化祭で取り組むにしてもちょっと一味変えました。というのは、やっぱり君たちにいろんな生き方を伝えたい。そこで元協力隊員、現職参加ではない協力隊員にも協力をしていた大いに、生徒会の生徒と一緒にルーマニアのダンスを踊るというそういう企画をしたり、それから養護教諭ですので、他の養護教諭の先生方と子どもたちの健康についてルーマニアの子どもたちの現状等を伝えながら研修をするというそういう校外での活動もありました。今年ですね3年目、平

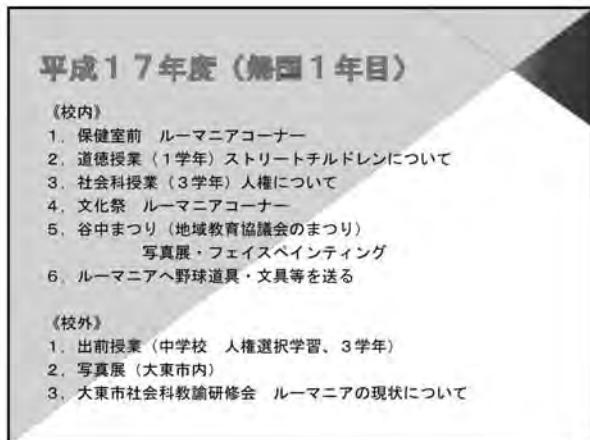
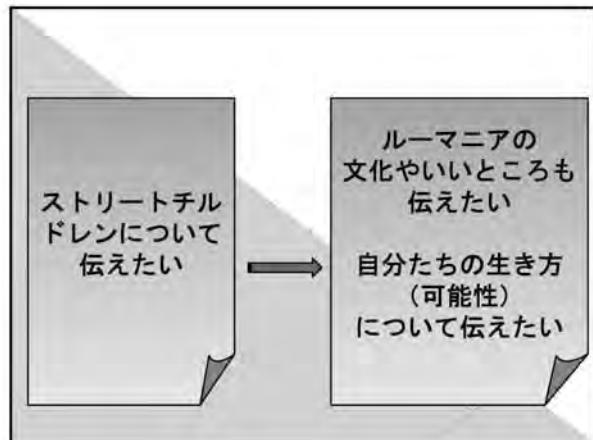
成19年度ではJOCAのほうからお話を頂いて国際交流DAYと申しまして、理数科教員のアフリカから来られた方々を学校に招待して、いろんな交流を深めました。ここでとても面白かったのが、PTAの方が学校の教育について、そのアフリカの教育との違いについて来られた方々と交流をされる、本当にちゃんとした議論になったんですね。教師としてすごく肩身の狭い、そういうご意見もたくさんありましたが、本当にこういったことが本当の地域の中での交流なんだなと思いながら拝見しておりました。

そういうふうに3年間過ごしたんですけども、ある教職員向けの研修会ですね、ある元隊員の先生が学校で1人で何からはじめたらいいんですか、どうしたらいいんですか、どうやってそんなにやってはるんですか、聞いてくださったんですね。これが今回のこのパネルディスカッションのテーマなのかなと思いながらやってきたわけですけれども、これからお話される先生はネットワークがある、私の場合はネットワークが全くありません。たぶん帰国された元隊員の先生方はほとんどが私のような立場なのかなと思うんです。帰ってきたときに転勤する、その学校の状況の様子を見ながら1年目からどんなふうに自分のよさを出していったらいい、経験してきたことを伝えている、たぶんそこが1番の最初にぶつかる課題かなと思うんですが、私はその時にどうしようもない、いろんなこと考えました。しかし現在勤める勤務校ででも、非常に学校の様子は厳しい。部活動の指導、教科指導、それから学級指導、先生方ありますよね。その上毎日のように生徒指導上の問題が日々起こる。もうたぶん本来の職務を行っていくだけでいっぱいいっぱいというのが先生方の現状じゃないか。そこでどういうふうにこの自分のよさを活かしていくかというところに、あるものを活かしていこうじゃないかというのが私の考え方です。わざわざ私の話をするために人を集めない。人が集まっているところで話をする時間を少しもらう。そういうふうに学校の中で活動を始めました。よくよく学校の中って見てみると日本の学校はすごくシステムが整っているので、わりとやりやすいですね。いろんなそういうチャンスはよく見るとあります。例えば本校ですと、昼の放送ひとつとっても文化委員の子が音楽をかけているだけなんですが、そこで文化委員の子と交渉して時間をほしい。毎日1つだけ挨拶をしていったりルーマニアの学校の様子の話をしたりしているうちに、また広がっていく。また、掲示コーナー、学校というのは至る所に掲示する場所もございます。それから全校集会、学年の取り組み、本当にあります。その中であまり自分に負担をかけずに、ちょこちょことやっていくうちに学校の中でも存在感が出てくるというか、自分の居場所というか、認めていただけるようになりますね。2年目3年目、それをどういうふうに広げていくかというところなんですね。自分の活動にしないというところです。例えば、物をおくるといつても生徒会の責任でやっていただく。国際協力で共同で企画を出していただく。自分はその中のエッセンスの自分しかできない場所だけとっていく。全部どうしても自分はやりたいと思ってしまうんですね。でもまわりの人を当事者として、まわりの人が自分でやるんだというふうに意識していただいて進めていくと、本当に自分は小さいですけれど意外といろんなことができます。そんなふうに2年目3年目と取り組んでおります。

その中でどういうふうに理解者、協力者を得ていくかということなんですね。いろんな人に当たり前ですけど相談をしながら。それから日本では企画書は大事だなと思いました。2ヶ月前の企画委員会、1ヶ月前の職員会議、こんなところでたった1つの昼の放送、小さな取り組みでもそ

ういうことをしておくと非常に理解を得やすいですし、はつきりとした意図を理解してもらえる。現場の同僚ですね、教職員は自分の仕事でいっぱいいっぱいですから、こういう余分なことに対してなかなか協力をお願いできない。でも理解者であってもらわないといけない。教職員には理解者であってもらわないといけない。そして子ども、PTA、地域の方、そういった方々を協力者にしながら進めていくと、なんとなくルーマニアがすごく有名になってきたという、そういうところではないかなと思います。それからですね、もう1つ、どのように還元するかということで、企画力、実践力という目に見えない直接的な経験でないところをどう活かすかというところなんですが、私は組織を作ったり、人人人をつなげるということを非常に学んで参りました。そこでその力をどう活かすかということで、大東市タバコゼロプロジェクトというのを立ち上げています。これは大東市の1つの学校だけじゃなくて、全ての中学校それから各保健機関ですね、それから市役所、そういったところが連携をとりながら1つのタバコゼロに向かってプロジェクトを進める。もう1つは、プロジェクトT、谷川の略なんですけれども、学校の中で谷川中学校を大好きになるような生徒たち、そういう大好きな谷川中学校を育てていこうというボランティアグループで、突然活動が始まる。例えば、クリスマスに学校を飾る、楽しくやる、そんな企画を進めたり実践をしております。なかなか現場にいると1人で1つのことを進めるというのは大変なんですが、今日この場に来て皆さんいろいろな発表を伺って、また新鮮な気持ちでやっていこうかなと思いました。ありがとうございました。





平成18年度（帰国2年目）

《校内》

1. 昼食時放送“ルーマニアの時間”
2. 文化祭
 - ①生徒会・元JOCV・在日ルーマニア人とのルーマニアダンス
 - ②青年の生き方紹介
3. ルーマニアへ日本文化を送る取り組み（生徒会）
4. 道徳（3学年）地球生活体験学習教材“命”JOCV・元JOCV

《校外》

1. 平和集会（小学校）
2. 大東市養護教諭部会夏季研修
3. 校区の公民館で講演会



H18文化祭



平成19年度（帰国3年目）

《校内》

1. 國際交流DAY (JICA青年研修事業・アフリカより22名来校)
授業視察、学級交流、PTAとの交流、理数科教員との交流
2. 生徒会が日本文化に関する物をルーマニアへ送付
(JICA世界の笑顔のためにプログラム)

《校外》

1. 出前授業（小学校3年生、ルーマニアの子どもについて）
2. 國際理解教育研修



H19国際理解Day



ある研修会で…

学校で1人で、
何から始めたらいいんで
すか？

**どのように還元するか？
～直接的な経験～**

1. 現在あるものを利用する
例えば...
 - 昼の放送
 - 朝のあいさつ
 - 通信の一部
 - 掲示板
 - 全校集会
 - 学校行事
 - 各教科

2. 自分の企画→組織の企画へ

例えば...

生徒会の活動

PTAの活動

教務部の企画

学年の取り組み

学校の取り組み



理解者・協力者を見つける

1. いろんな人に相談をする

2. 企画書を事前に提出し、

意図や目的の理解を図る。

3. 生徒・地域・PTAも

大きな存在。

どのように還元するか？

～企画力・実践力～

1. 大東市タバコゼロプロジェクト



2. プロジェクトT



「長野県教員等ネットワーク」の活動について

北原 三代志

(15-1. バングラデシュ、体育、長野県須坂市須坂園芸高校)

長野県須坂園芸高等学校から参りました北原三代志と申します。よろしくお願ひします。私は15年度1次隊でバングラデシュ、体育、ということで、体育大学で教員養成の事務所に所属しておりました。

最初の写真ですけれども、今年というか今年度、10月に行われました私のクラスの文化祭の写真です。後ろにパネルがあるんですけども、これJICAの駒ヶ根からお借りしたパネルで、また後ほど連携についてお話ししますけれども、今日は長野県教員とのネットワーク活動についてということで、帰国した隊員、それから国際協力に興味のある先生方、それから総合的な学習の時間等で、教材作りで悩んでいらっしゃる先生方の連携プレーのお話をしたいと思います。

長野県教育委員会の課題ということで、当時平成17年だったんですが、義務教育課長さんがJICA駒ヶ根の方に、なんとか外国籍の子どもたちの対応ということで協力をしてもらえないかということで相談がありました。そのJICA所長が我々帰国隊員の報告会で集まつたときに組織を作つて協力できないかということで、18年の1月にネットワークというものが立ち上りました。

我々の任務の一つとして、帰国後、活動してきたことをこういうふうに子どもたちにいかに還元するかということも含まれていたので、私も帰ってきたあとさてどうしようかと思っていたのですが、でも現場の学校では忙しくてなかなか展開できなかつたわけですけれども、まあそういう先生方がいらっしゃる。それから先ほどもお話しましたけれども、総合的な学習の時間、特に国際理解という分野でどうやって子どもたちに教えていくというか、授業を展開していったらいいのかわからないという方がいらっしゃって、そういう組織作りですね、マーリングリストを始めました。

主な活動ということで私運営委員なんですけれども、小中高2名ずつ運営委員がいまして、打ち合わせ、連絡会とか、企画。10月にも同じような話をさせていただいたと思うんですけども、はい。

HPなんですけれども、これは昨年の3月に、まあ管理はJICAの駒ヶ根にやつていただいてるんですけども、情報交換として、ここに掲載されているものは自由に使っていいと、写真でもなんでも、逆にそれが今ネットになってなかなか進んでいなくて、本当でしたら、世界地図をクリックすると、この国にはこの人たちがいて、こういう情報を持っている、ということがさつとわかるようにしたいんですけども、まだちょっとそこまではいけてなくて、これからです。

それから先ほどの活動ということですけれどもね、私の文化祭のことを例にあげて連携を説明したいと思うんですが、昨年の10月の文化祭に向けて、夏休み前から生徒たちと話をてきてですね、今2年生の担任なんですが、去年は、1年のときは、一般的な発展途上国についての調べをして、今年はバングラデシュに絞って考えようということで「バングラデシュを見よう・食べよう・

「買いましょう」というタイトルで夏休みにJICA駒ヶ根に行きまして、現地で活躍されたボランティアの方に、現地の状況を、私が話してもいいんですけれども、誰か他の人が話したほうが子どもたちは真剣に聞きますので。でこの候補生の方、バングラデシュに行かれる方と歓談しながらお話を聞いた感じですね。

これ文化祭なんですけれども、この方はスリランカOGで、ぜひ手伝いに来てくれということで、サリーの着付けを教えていただいて、生徒たちも勉強しました。来てくださった小さい女の子に着せてあげて、それくらい上手にできるようになりました。「見よう・食べよう・買いましょう」ということですけれども、カレーはですね、私がちょっと教えて、スパイスはバングラデシュスパイスなんですけれども、スパイスと肉以外は、園芸高校ですので、すべて学校の食材を使いまして、まあ大盛況で、おいしいと食べてもらえたんですが、あと「買いましょう」ということで、フェアトレードについて勉強して、シャプラニールというNGOの団体があるんですが、そこに企画していただいてですね、売上金は還元しようということで、生徒たちと、まあこういう民芸品を見ると、刺繡とか、日本とは違った素材を使っているというところがあるので、そんなところからも文化を学ぶ機会、勉強と。

私は体育の教員なもので、なかなか授業の中で、こういうことは扱えないんです。文化祭であれば、高校中でできるし、また自分ひとりでできないことも、いろんな情報とかサポートを得てですね、で、もちろんこの活動もHPに載せて、こういうようなことをやりましたから、似たようなことをやりたかったら、声をかけてくださいということも、HPを通じてですね、呼びかけをしてあります。そのような情報交換ですけれども、年に2回、帰国隊員報告会と、あと公開セミナーということで、5月にあったんですけども、午前中にHPの内容について検討してですね、お昼ちょっと前から公開予定で、私の方で参加者に活動を説明してですね、ご協力くださいということなんですが。その中で、模擬授業、塩尻志学館高校の社会の先生で16-1、エクアドルですね、色々な教材を作って、こういう授業をやって、ああいいなあと思うと、どうぞ教材も持つてってくださいということで、JOCAだといふらかお金とられるんですけども、ここでは無料で、必要とあらば。また、隊員候補生を交えてですね、…そんなこともやってます。

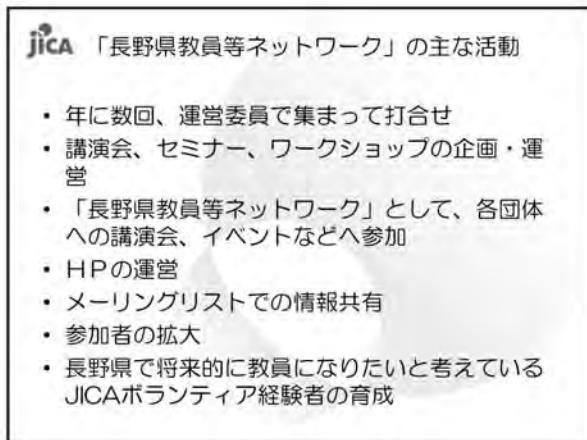
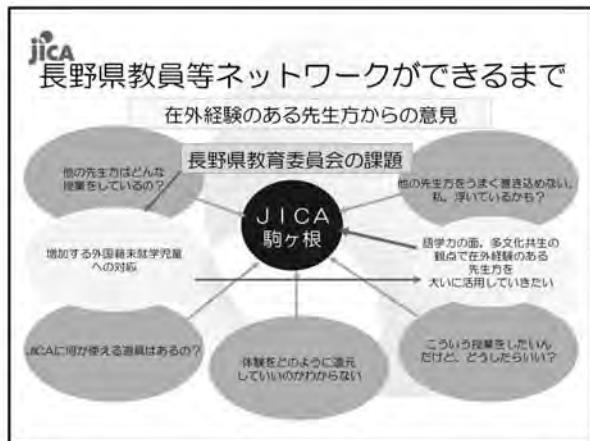
今後の課題ということで、いっそう内容の充実をしていかなければならぬ、小さな問題でももってき、できれば長野県にとどまることなく他県とも情報交換、あと県内の理解ですとか、そういう連携もしていかなければならぬんじやないかと。次回は、ああ1月の、今月ですね、27日にまたぜひ行いたいなと思います。

今県内で問題になっているのはですね、外国籍の子どもたちとその保護者との対応、言葉がわからないとか、そういうことで、長野に国際協力推進協会というのがあります、そこで通訳を派遣しているんですが、我々もそういうことをお手伝いできないだろうかということで、とくに必要とされるポルトガル語研修とか、そんなことも、JICA駒ヶ根と協力して計画しております。

個人的には、今年2月の3日なんですが、須田川（？）というところにあるボランティア団体ですね、ぜひバングラデシュの話をしてくれということを頼まれたので、話だけではおもしろくないからと、じゃあカレー作りますよということで、カレーを200食くらい作って、その中で…考えてますけれども、なかなか県知事が変わってしまいますと、我々の思惑も途中で腑抜けてしま

つたりと大変なんすけれども、がんばっていきたいと思いますので、皆さんのご協力をお願いいたします。以上です。





食文化と伝統芸術

パンダラデシュのスパイスを使ったカレーを作り、試食会を行いました。
NGOを通じてお借りした手工芸品を販売し、フェアトレードやパンダラデシュの文化や伝統芸術について学びました。
売上金はもちろん現地の方に還元しました。

平成19年度第1回長野県教員等
ネットワーク総会／公開セミナー
2007年5月20日

JICA駒ヶ根と運営委員で
HPの内容について検討

参加者に教員ネットワーク
の活動について説明

模擬授業と公開セミナー

塩尻志学館高等学校 駒村先生
「伐採と植林・環境を考える」模擬授業。
これが次の授業のヒントになります

訓練中の候補生も交えて
行われました。

jiCA ネットワークの今後の課題

- ・ネットワークの団体としての位置づけ（先生方の財産として）
- ・HPの内容の改修（さらに先生方に有効な内容にしていくにはどうしたらいいのか）

これからネットワークとしてやっていきたいこと

- ・HPを通して、長野県内の実践を全国的に広げていきたい
→HPの充実を図ることが大切。
- ・ネットワークが長野県内にとどまることなく、他県のネットワークと交流しながら、お互いに持っているノウハウを紹介できる場を設けていきたい。
- ・参加者のデータベース化など、他の団体（長野県教育委員会・高教組・県教組・長野県（国際課））にも更にもっと活用してもらえるような得策を考える
(個人情報の管理上、更なる話し合いが必要とされる部分)



筑波大学附属小学校を拠点とした 派遣現職教員支援システムの構築

鎌田 和宏
(筑波大学附属小学校、社会科教諭)

こんにちは。筑波大学附属小学校の鎌田和宏と申します。筑波大学附属小学校では筑波大学附属小学校を拠点とした派遣現職教員支援システムの構築という活動テーマで国際協力拠点イニシアティブの方に参加しております。私の方からは、本校の活動について簡単に説明させていただきたいと思います。

私ども学校、今年度で2年目になるのですが、昨年度は今画面に出したような活動をしました。この中でぜひ注目していただきたいのは、派遣の教員の報告書の分析をやって、どういう支援のニーズが必要なのかを示しているということです。隊員153人の方、派遣期間に5回の報告書を出されているその報告書に全部目を通してどの時期にどんなような問題点があるのか、またどんなことが支援として必要なのかということを分析いたしました。それについて今年度19年度の事業ですが、最終的に成果物として実践事例集に結果を収録したいと思い、どういう支援をすればいいのか考えてまいりました。我々の学校は教材開発や指導法の研究について非常に長く取り組んでいる学校ですので、そのノウハウを国際協力に活かせないかということで、派遣時に算数科、音楽科の授業にヒントになるものを作りたいということで、今年度に算数科と音楽科の授業DVDを作成しています。もちろん現地の先生方とコラボレーションするときの参考にもしていただけると思いますし、また支援事業の中で教員養成に関わるところでお使いいただけるよう字幕スーパーをいれた授業の実際のビデオを算数と音楽で作っています。このようなものを使いながら教員研修などできるのではないかということで平成18年度やってまいりました。

19年度は派遣後も援助ニーズの情報の収集をして、主に派遣後の隊員の先生方の支援をするということを重点にしてやっております。今年度6月12月、もう実施いたしましたけれど、派遣の隊員の先生方の経験を活用した帰国後の活動についての支援を考えたシンポジウムとワークショップをやってまいりました。そのことをふまえ国際教育協力ハンドブックというものをまとめていこうということをやっております。6月のワークショップは、本校の算数の教員が中南米の方に算数の支援に行っております経験ですとか、筑波大学のCRICEDの吉村先生の方から中南米の派遣経験の報告をいただきまして、実際の派遣隊員がどのような現状に直面しているのかをお話いただいたり、帰ってこられた後にどのような活動をされているかということで神奈川県の小澤先生に実際の授業実践についてお話を聞いていただいて、それについて協議をするというワークショップをやってまいりました。

それから10月の方なんですが、今お話をいただきました北原先生のお仲間の方々においで頂きまして、長野県の教員等ネットワークの活動を中心に、帰国後の活動にはやはりネットワークが大切な

のではないかということで、そのノウハウをいろいろ教えていただくというワークショップをやってまいりました。堀口先生のご発表にもありましたけれど、まずは1人のところから始めるしかないというのが現状だというのはいろいろな報告書から読み取れるんですけど、長野県のケースはまだ珍しいほうのケースなのかなと思いますが、ネットワークがあつていろいろな学校に実際に行ってお話をされてということがでてきます。あるいは私も北原先生のお話を聞いてなるほどと思ったのですが、私が話してもいいんだけれど別の人気が話すことに意義があるというお話をありました。たぶんバングラデシュについて北原先生が語りたいところもたくさんあったんじゃないかなと思うんですけど、あえて一歩ひき候補生の隊員の先生方とか、それから派遣経験者とかそういう方をお呼びしてやっていくという長野県のネットワークづくりのノウハウをいろいろ教えていただきました。これはその時の様子ですけれど、JICAの駒ヶ根の西村さん、キーパーソンだと思いますが、JICAの駒ヶ根がひとつハブになって長野県の志ある先生たちがつながっていって、そういう組織をつくっていくという経過についてお話をいただきました。これは西沢先生、西沢先生自身は派遣の経験があってメキシコの日本人学校でした。ちょうどJICA駒ヶ根のあるところが西沢先生の学区であったそうで、西沢先生は駒ヶ根の教育的な資源を利用しながら、国際理解教育、総合学習の中でやられていったという実践を報告してくれました。実際、派遣前の候補生の方々のお話を聞いたり、派遣中の方々と郵便や電子メールなどで交流しながら、小学生の子どもたちが外国の認識を深めていくというプロセスをご発表いただきました。これはカンボジアに派遣された中山先生が主に体育の支援ということで経験をふまえながら、帰国された方にJICAのテレビ会議システムを使った交流をお話をいただきました。ワークショップということで、少し授業形式でミニ授業を見せていただきながら会を進めていったんですが、カンボジアの言葉を教えていただいたり、カンボジアではどんなふうに計算をするのか実際に経験させていただきながらワークショップを進めました。そのような2回のシンポジウム、ワークショップの成果を活かしながら、我々の学校ではネットワークをつくるということのお手伝い、広報活動とかそういうところでやっていくことがいいのかなと思っているのですけれど、もう1つ帰国された隊員の先生方がどのような形で授業実践していくとよいのかということで、そのモデルの授業プランをつくるところで支援ができないかということを考えております。

2008年、今年もやりましたけれど2月15日に本校の学習公開研究発表会というのが毎年ございます。その場で帰国隊員先生の経験を生かした授業づくりというタイトルで6月のシンポジウムでご報告いただいた、パラグアイの音楽支援に行かれました小澤明子先生と私で、コラボレーションによって公開授業をして国際理解教育をどう考えるかというモデル授業の提案をさせていただこうというふうに思っております。その授業のことを検討しながらワークショップを行って、どのような教育の協力ができるのか考えを深めていけたらいいかなと思います。このような成果をもとにしまして、国際教育協力ハンドブック、仮称ですけれど、派遣現職の先生方が帰国後のことまで視野に入れそれぞれの時期にどんなことを考えていくといいのかということを、実際に隊員の先生方のアンケート調査の結果や我々が調べた結果をまとめたハンドブックを作成して、これから行かれる先生方や各都道府県の教育委員会、教育センターのほうに情報提供をしていきたいと考えています。以上で報告を終わりたいと思います。



平成19年度 文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム「開発途上国における派遣現職教員の活躍」
2008.1.5.

筑波大学附属小学校を拠点とした派遣現職教員支援



筑波大学附属小学校
鎌田和宏



平成18年度の事業

- 支援ニーズの内容把握
- 派遣教員報告書の分析
- 派遣中の相談ネットの構築に関する試行
 - メールリンク・国際附属小学校
- 派遣後の援助ニーズ情報の収集
- 算数科・音楽科の授業DVD
- 広報活動



授業実践DVD

- Division by 2-digit Numbers
4年 算数 2けたでわるわり算
田中博史氏(筑波大学附属小学校)

- Play with Music
1年 音楽 音あそび
熊木真見子氏(筑波大学附属小学校)



平成19年度の事業

- 派遣後の援助ニーズ情報の収集
 - 帰国隊員への聞き取り調査
 - 派遣国での経験を活用した活動事例収集
- ワークショップの開催
 - 6月・10月・2月
- 帰国隊員実践事例集の作成
- 一(仮称)『国際教育協力ハンドブック』



6月のワークショップ

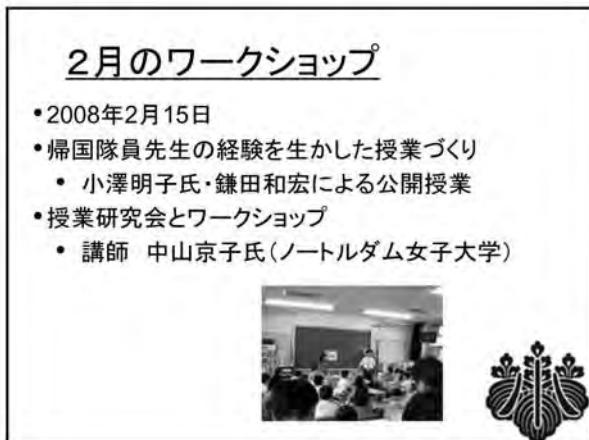
- 山本良和氏(筑波大学附属小学校)
- 「エルサルバドル他中南米への算数支援から」
- 小澤明子氏(神奈川県相模原市立上溝小学校)
 - 「音楽科を中心とした協力」
- 吉村智美氏(筑波大学CRICED)
 - 「中南米派遣経験から」



10月のワークショップ

- 西村真由子氏(JICA駒ヶ根)
 - 長野県教員等ネットワークの活動とJICA駒ヶ根の連携
- 西澤浩氏(長野県中条村立中条小学校)
 - JICA駒ヶ根との連携による国際理解教育
- 中山晴美氏(小諸市立美南小学校)
 - カンボジア派遣を活かした実践
- 駒村英明氏(長野県塩尻志学館高等学校)
 - エクアドル派遣経験を活かした環境教育





国際教育協力ハンドブック

1. 現地に赴く前に～帰国後の活動を展望して～
 1. 帰国隊員のアンケート調査結果から
 2. 国際教育協力の経験から
2. 現地での活動～帰国後の活動も視野に入れて～
 1. 帰国隊員のアンケート調査から
 2. 現地での実践を豊かにするために～授業づくりのヒント～
 3. 帰国後の教育実践か都度のための具体的な準備
3. 教育協力体験を活かした国際理解教育の実践～



パネルディスカッションのまとめ

田中 統治
(筑波大学人間総合科学研究科)

ありがとうございました。まだフロアからご質問あると思うのですが、時間が来てしまいました。ご登壇していただいた先生方、本当にありがとうございました。私はほとんど何もすることがなくて楽だったんですが、お話を伺いしていてJICAが掲げている“内なる国際化”ということを考えていました。

今ですね、外国人児童への対応ということで現場が非常に困っているときに、派遣隊員の方々の力になんか頼れるんじゃないかとそういうきっかけになっているというのは、私はある意味で日本が“内なる国際化”という課題に直面したときに、まさしくこの帰国をされた隊員の皆さんのが頼りにすると、まさしくニーズがそこにできているなということを感じました。たぶんこれまで帰国された隊員というと外国旅行から帰ったみたいな感じですね、私も実は留学したりして帰ってくると今まで遊んでたんだからみたいな大学でそういうことで急に仕事がいっぱい増えたりということもあったんですが、実は非常に重要な研修の経験を積まれて帰ってこられた方々で、その方々はただ単なる言葉の通訳とかそういうような力を持っていらっしゃるというだけでなく、非常に教師としてのコミュニケーション能力を高められた方たちなんだということを行政や堀口先生のいらっしゃる城山校長先生のように、非常にそういう人たちの力を現場でさらに生かしていくというような先生たちの研修といいますか、そういうものがだんだんと広がってきているなということを感じております。そういう意味で今日隊員のみなさんの派遣経験を生かした教育活動ということについて更なる可能性を感じている次第です。

私たち今、帰国された先生方への支援事業といっているのですが、どうも先生方はどんどんサポーターを増やしていくとか自分たちで作っていってるというとか、余計なお世話と言われそうな感じもちょっといたしました。私たちもそういう先生方の活動から大変多くのことを学ばせて頂いているなというふうに思います。そういう意味で、こういう現職派遣隊員の先生方の経験というのは教育の現場に新しい意味での国際協力のスタイルといいましょうか、サポーターを増やしていくことでの新しい教育活動になっているのではないかなということを最後に感じた次第です。それぞれの先生方も新しい専門性を獲得されたお姿を見させていただきました。どうもありがとうございました。



閉会挨拶

佐藤 真理子

(筑波大学教育開発国際協力研究センター)

どうもありがとうございました。本日は年明け早々、また遠路はるばる参加していただきまことにありがとうございます。本日の帰国隊員報告会では分科会、パネルディスカッション、各大学からは派遣現職教員サポートの活動報告があり、参加者にとりまして実りの多い会であったことを祈念しております。今現在世界の199カ国の中でいわゆる先進国と称されるのは約25カ国、それに対して途上国と分類される国は140カ国に上ります。世界の大多数を占める途上国の社会・文化、そして途上国の人々への理解はグローバライゼーションの進む世界でこれから日本の子供たちにとってなくてはならないものとなります。そういう意味で派遣現職教員は途上国の教育にとって貴重なソースであるとともに日本の将来を担うこどもたちに国際理解教育を通して異文化教育を深めることの意味でも貴重な人材です。これから派遣される先生方、それから派遣を考える先生方が、派遣現職教員のプログラムの目的を理解し、このプログラムのますますの充実にご深慮下さればと存じます。これで帰国隊員報告会を閉会いたします。どうもありがとうございました。

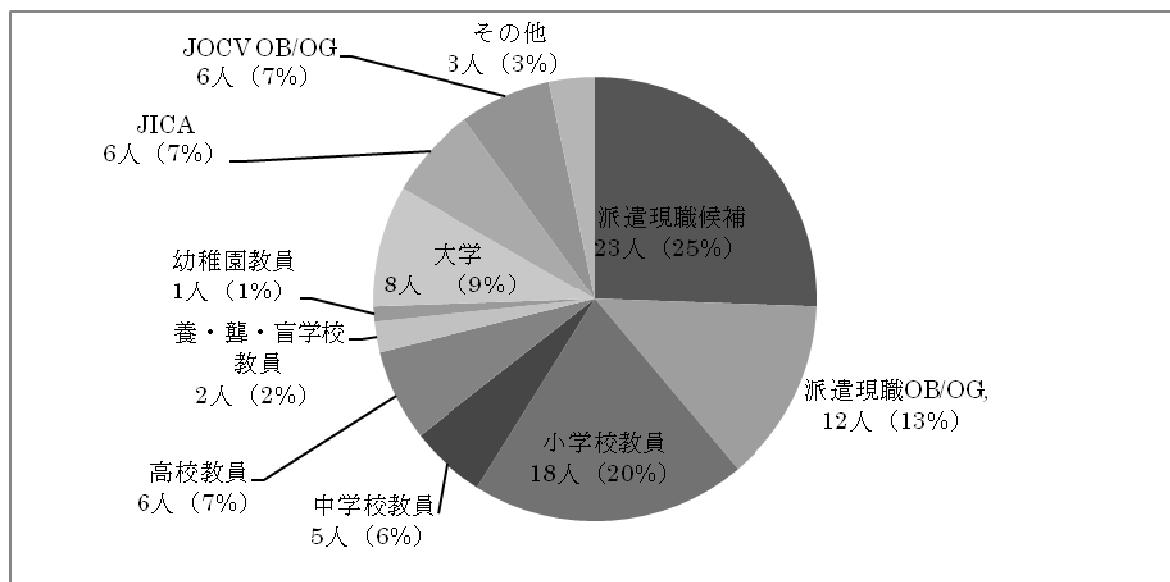


—帰国隊員報告会—

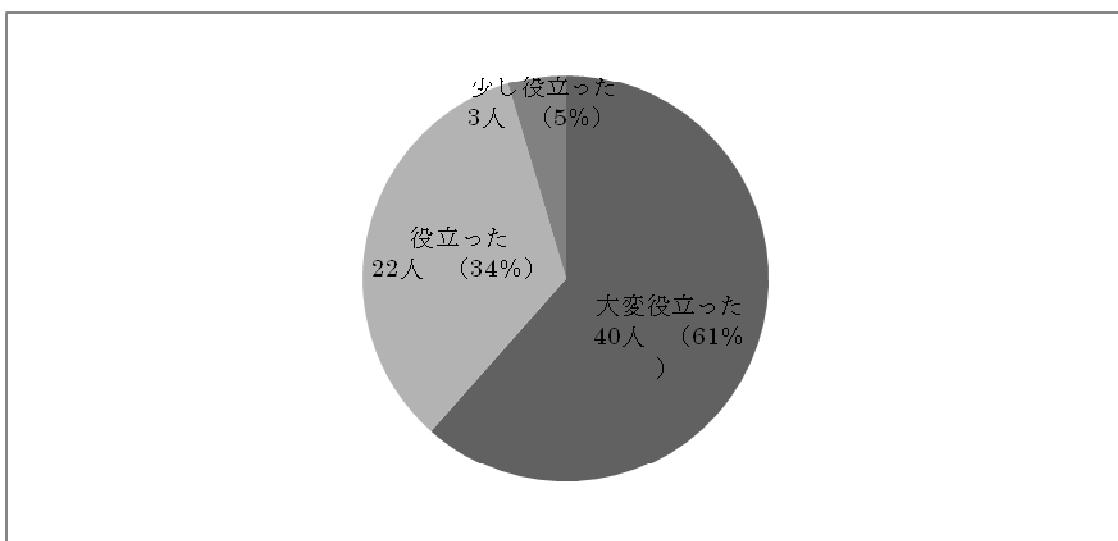
アンケート集計

開発途上国における派遣現職教員の活躍 —帰国隊員報告会— アンケート集計

Q1 プロフィール

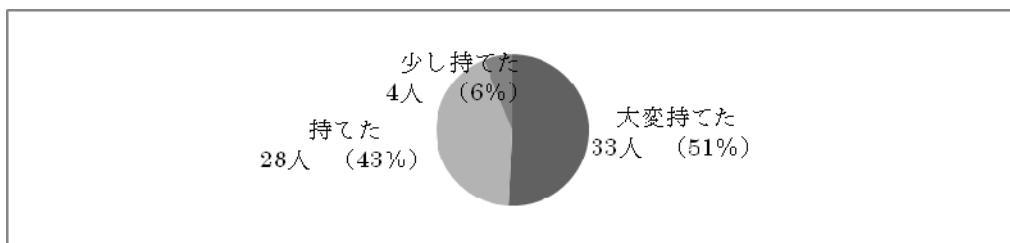


Q2 今回のシンポジウムの全体的な評価を次の中から選択してください。

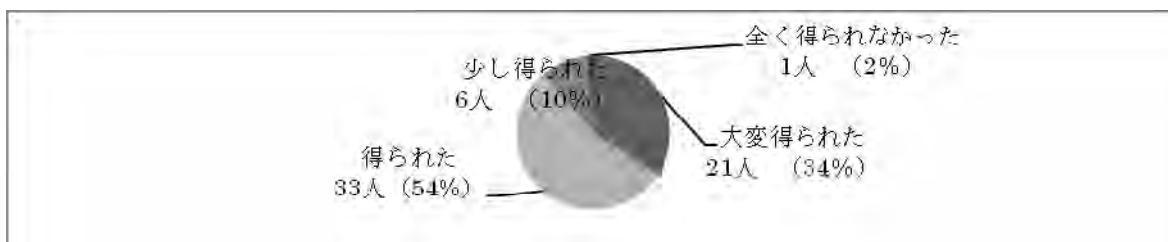


Q3 以下の項目についてのご意見をお聞かせ下さい。

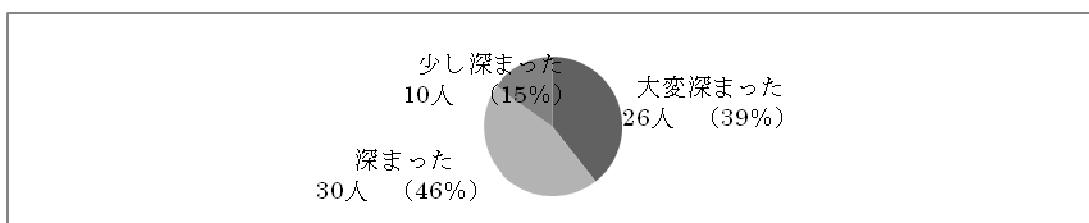
(1) 派遣現職教員の任地での活動について具体的なイメージを持つことができた。



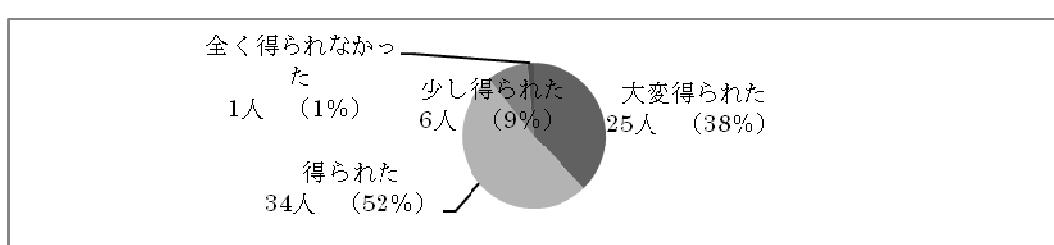
(2) 協力隊派遣前の準備や心構えについて参考となる情報を得ることができた。



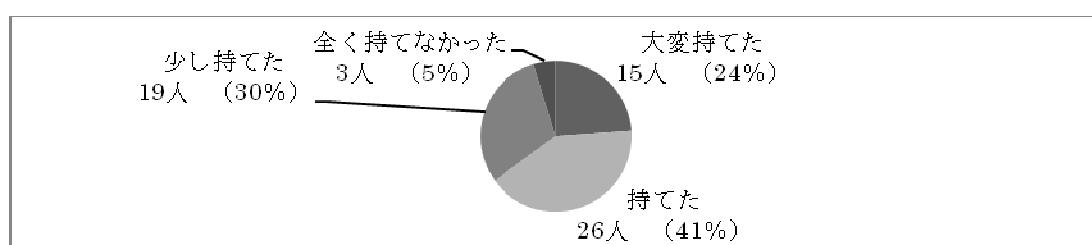
(3) 我が国における国際教育への意識が深まった。



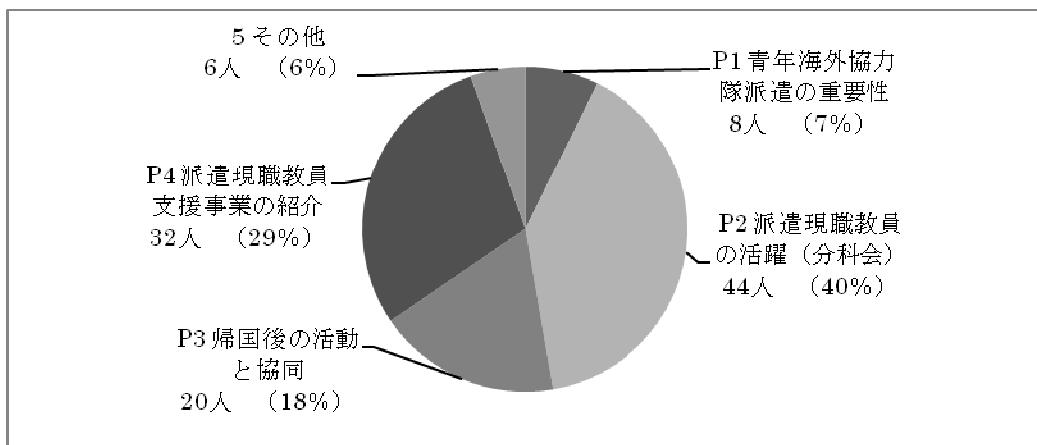
(4) 我が国における国際教育のための準備や心構えについて三等となる情報を得ることができた。



(5) 国際教育協力のための人的つながりを持つことができた。



Q4 一層深めたいプログラムは次のどれですか。



理由

- ・分科会で幼児教育に関する発表がなく残念でした。現地での教示教育の活動報告を拝見する機会が少ないです。
- ・(分科会では) もっとたくさんの会場を見たかったがムリでした。残念。「ネットワーク」の大切さを、多くの関係者で共有できることはありがたい。さらに認識を深めていきたい。
- ・将来参加を考えております。どのような活動をなさっていたのか、また嬉しかったことのみならず、苦労もお話を聞けたら幸いです。
- ・今年度現職派遣の応募をしましたが、残念ながら行くことができませんでした。校長からは養護教諭は授業で還元できないから派遣しないらしいと言われましたが、今日堀口先生のお話を聞いて養護教諭でも帰国後にその経験を活かして活躍できることが分かり、心強く思いました。
- ・立場によって深めたいプログラムは異なってくるとは思うのですが、派遣前の私には2, 3に注目しておりました。特に3の方はこれからとても活用できるプログラムであったように感じます。そして4の方は帰国後、「こんなこともできるのか?」「何かしてみたい」という想いが芽生えるものとなりました。
- ・個人的には、養護の隊員の方の話をよりたくさん聞きたかった。
- ・生の声をもっと聞きたかったから。
- ・②具体的な写真や資料を見せて頂くことで、イメージが膨らませられる。③個人で活動するだけでは不安だったので、こういったサポート体制を知られてよかったです。
- ・パネルディスカッションを行う意味は見い出せない。分科会で十分にOB・OGの活動報告及び帰国後のフィードバックは伝わっている。ネットワーク作りのベースについての話は、興味深かった。
- ・H. 20年から派遣させていただきます。日本に帰国したH. 22～英語活動が授業に組み込まれます。英語と言う視点だけではなく、国際理解といった広い視点からの授業をつくりたいと思っています。その具体的取り組みを知りたいです。
- ・これから派遣予定の身としては、実際の活動を気にしたお話を聞く機会は大変有り難かったです。
- ・JOCVの活動はとても有意義だった。しかし、それを活かす方法がなかなか見つからず還元活

動ができていないのが現状。パネルディスカッションはとても参考になった。

- ・帰国してから一定の時間が経過していることから、JOCV経験が十分にこなれており、興味深い内容であった。なお、パネルディスカッションは、パネラーの事例紹介に時間がとられ、もう少し議論を深めたかった。
- ・あと10分ずつ長ければ…。
- ・協力隊員の生の声を届けて欲しい。
- ・帰国後、日々の校務と還元活動の両立に悩みを抱えているため。
- ・全国の先生方の（協力隊の）ネットワークづくりが着々と進むことを願っています。京都市教育委員会も協力隊員採用教員・現職教員・シニア教員の方々と、ネットワークづくりを進めています。全国へと広がることを目指しています。長野県のネットワークとつながることを願っています。
- ・予定の100人に到達していないのが残念。
- ・帰国後の教育活動について、もっと多くの時間とそれぞれの先生方の活動をじっくりと伺いたかったです。
- ・帰国隊員の経験を日本の教育に活かす必要性を実感したから。
- ・②現地の生の声に過ぎるものはないと思います。③「小学校教諭」のサポート活動報告を伺いたいです。
- ・①どうしてもまだ派遣される教員が少ないため、教頭が3月頃口頭で案内（紹介）しても、関心を示すところまでいかない。でも時間や環境的なものが整えば、関心を示してくれそうな教員は多いと思う。受験者が不足している現状は、こうした問題が絡み合っているように思う。
- ②管理職の先生の考え方を変えていくためにも大切に思う。管理職研修の中でもしつこくない程度にビデオを流すなどすると良いと思う。私の場合、校長が昔、協力隊に行きたいと思ったことがあるということだったので、そんな校長先生が増えていけば広がると思う。
- ・色々な国の現状や隊員の方々の実践をもっと知りたいと感じたから。今回、多くの報告を拝聴しいろいろな国のことを知ることができたが、知らないことがまだまだあると感じたため。
- ・①5分間の挨拶ということではなく、今回の形でももう少し丁寧に話してもらえばよい（時間的に）。④帰国後を視野に入れてこそ2が生きる。おのずと日本の「現在の教育を考える」ことにつながる。
- ・なかなか隊員の方のお話を聞く機会はないので、とても興味深く役立った。
- ・派遣を控えているので、実際に体験してきた方の話は臨場感があつてとても有意義だった。発表は要請に対するものがほとんどだったが、別枠でもプログラム2の中でもよいので、「日常生活」についての様子をもっと知りたいと思った。
- ・実情を直に伺いたいため。報告書から読み取れない部分。同時に4分科会は残念。せいぜい3分科会くらいで。重なっていて拝聴できなかつたので。時間配分に考慮必要。特にプログラム1は5分間隔は所詮無理でしょう。
- ・参加した先生方本人の声を聞くことができて、質問したいことなどがイメージしやすかったので…。

- ・現職教員制度の良さや成果をどんどん集大成していく研究機関（サポート体制）があると、隊員の貢献もより価値的なものとなると思いましたので。
- ・いろいろな国に行って活躍されている先生方の活躍以外にも仕事の内容、悩み、喜び、帰国後のことなども教えてもらいたい。
- ・サポート活動報告については、別の機会でも良いと思う。主に帰国報告についてを中心にやつたほうが良いのではないか！
- ・年々帰国隊員が増えていくので、都道府県段階で組織的な活動ができるようにしたい。各県で国際理解教育の出前授業が、要望内容・学年に応じた対応ができるようになれば子どもたちへの大きな宝物となろう（県によってはOB会ができているようだ。）。ネットワークづくり①既存の組織の活性化②まず足元から。貴方と私で！③なければ作ってしまおう。
- ・国際理解教育の授業や教材作りに関心があります。ESD（持続可能な開発のための教育）に関わっています。ESDにJOCVの方々の経験を生かしていただければとも思います。
- ・日本と海外の双方に大切。教員の資質改善に必修のプログラムであると思います。（5年くらい経った人には必ず声かけるなど必要？）
- ・実際に現地で活動された先生方のお話が最も貴重だと思います。
- ・帰国後の活躍をアピールすることで、事業全体の評価につながる。

その他

- ・プログラム4は帰国隊員にとってとても有意義でした。実践紹介含め、もっと話を聞きたかったです。しかしそうなってしまうと、候補生にとって物足りない内容となってしまうかもしれません。帰国隊員だけ集まっての研修会があればとても嬉しく思います。また今回のように、出張扱いで要請で来られると、参加しやすいです。
- ・「現職教員特別参加制度」を第3者が評価した結果を報告する時間をしっかりと確保したほうがいいのではないかと考える。派遣予定の方にもその情報は役に立つと思う。そろそろ重要性を指摘するだけでは不十分な感が否めない。
- ・色々
- ・これから教員を目指す人へモチベーションの向上、動機付けの場としての役割。
- ・他機関との連携（国連機関、NGO等）をどうするか、を考える場があってもいいと思います。ネットワークづくりの重要性は分かりますが、低コストで効率よく展開していくためには他機関との連携が欠かせないと考えます。また、協力隊とは違う別の視点の「気づき」も生まれると思います。
- ・現職教員参加制度そのものを現場の先生方がまだ知らない現実がある。また、いろいろな大学が支援していることを多くの人が知らない。この2つの事実を普く広報することが重要だと感じました。

Q5 帰国後に経験を生かしたどのような活動をなさっていますか。

- ・思っていたほど経験を活かす場面が少ないようを感じる。自分で特にこれといったものは行っていないが、環境教育の授業の中で途上国のゴミ処理の現状の写真などを用いて、経験を活かしている程度です。
- ・授業の中で話す。通信。講演。
- ・分科会でもお話しましたが、校内では経験を伝える（授業、クラス、学年など）、後任との連携。校外では経験を伝える（他の高校）、日本語習得支援ボランティアへの参加
- ・授業中に、フィジーの農業の話をしています。家庭科、食品科学科の先生方を対象に、現地の料理、加工食のつくり方講習会を行いました。JICA横浜での協力隊募集説明会に参加しました。校内では、あまり大きな声で活動をしておりません。少しずつ理解のある先生方や興味のある生徒を取り込んで進めています。
- ・帰国報告や日々の授業での紹介程度でとどまっています。
- ・授業や道徳、特活の中で、テーマに合った内容を話す程度。
- ・現時点の日本の特別支援教育の現場での授業の中では、なかなか活動を活かせていません。自分の考え方、気持ちの変化、成長という点では日々の活動の中で行えているかとは思っています。このような中で、養護隊員が見える形での還元活動としては、本日のこのような場での活動報告があると思います。今後も、このような場面に積極的に参加したいと思っています。また、各県の様々な教育の研修会などで活動を伝えられる場などがあつてくれたらと思っています。
- ・帰国後の活動として、学校現場での様々な場での報告活動が中心である。他の学校等へも行き出張出前講座なども行ってみたが、なかなか現場を離れることの難しさを痛感した。現場での別の仕事のほうに追われ、自分の経験を生かすという状況ではなかった。実際は難しいようだ。特に帰国前より帰国後については難しい。
- ・帰国後6月に「ベトナムの子どもたち」というテーマで公開授業をした。子どもたち（クラスの）だけでなく、他の先生にJOCVの活動を知ってもらえた（それまでは伝える場がなかった。）。派遣中よりならの地元の新聞にベトナムでの出来事を連携した（全30回）。クラスの子に、ベトナムの出来事（言葉や文化等）を話で伝える。また、ごく稀に学級通信にベトナムのことを書いている。
- ・（社）青年海外協力協会の職員として、主に帰国隊員の社会還元活動を促進するための事業の企画・運営を行っています。
- ・普段の授業の中で何かと任国を持ち出す。他校でゲストティーチャーに呼ばれた。

Q6 感想や気づいた点などございましたらご記入ください。

- ・大変貴重な機会でした。一人一人の経験者や派遣中の隊員が、「個」ではなく、このように多くの人たちのサポートを受けている（あるいは、その気になれば受けることが可能である）ことは、素晴らしいことである。また、今後「国際協力イニシアティブ」などにより、関係者の活動の体制が、分厚いものであることは心強い。ぜひ、最大限に活かさなければと思いました。

1月27日には長野県内で「報告会」を行いますが、本日の内容や情報を伝えていきたいと思います。

- ・S. 60年度隊員OGでした（ザンビア・公衆衛生）。当時は全く日の目を見なかつたこの分野がこのようなシンポジウムを開く時代になり、大変嬉しく思いました。
- ・本日はお世話になりました。今回は派遣後の教育活動について話をさせて頂きましたが、皆さんのが苦労されながら活躍されていることを知り、励まされました。またよろしくお願ひします。
- ・昨年も参加させて頂き、前回とは違う立場（派遣予定なので）でたくさんの方のお話を伺うことができました。プログラム2をメインに参加したのですが、やはり生の声は大切だなあと感じました。うまくいった時もそうですが、苦労していたときの話の方がなんだか参考になつたように感じます。どの隊員も試行錯誤された様子が伝わってきました。現職としてあと3ヶ月で訓練に入る身分としまして、「今できることは何であるのか」また「今やっておくべきことは何であるのか」というお話をたくさん伺いたいと思います。OBの方と直接お話できる機会ですので、この後の会で伺いたいです。派遣前、訓練前からたくさんのネットワークを築いておけばと思っております。今回はたくさんの方の貴重なお話を伺うことができ、大変勉強になりました。ありがとうございました。※名札が見えづらいので、OB・OGの方や派遣予定の人には国名と職種が書いてあるとお話しがしやすいなと思います。次回はそのようにお願ひ致します。
- ・大変参考になりました。兵庫県内の派遣隊員もより充実したものにしていく必要を感じています。今後とも宜しくお願ひします。
- ・このように、つながりの持てる会は有意義かと思います。
- ・派遣されるのがとても楽しみになりました。ありがとうございました。
- ・とても参考になることが多く、ありがとうございました。
- ・①もう少しテーマ、問題点の明確化を希望します。②時間が長すぎると思います。①とも関連するのですが、時間を半分にしてもっとテンポよく進めていただければと思います。③ホールのコンディションが悪い。ドライ過ぎると思います。
- ・優れた派遣成果を上げた方のお話を直接伺い、熱意が伝わってきた。困難を乗り越えられなかつたらしき方からは、様々な問題に気づかされ、心構えをしっかりしようと思われた。派遣に向け、ネット上の情報を参考にしてきたが、こうして隊員報告や各方面で（各方面を）サポートしてくださる先生方の講演によりいっそう理解が深まり大変有意義でした。望むらくは、出張扱いにできるよう、学校へ出張命令を出して参加をしやすくして頂きたい。（それでも自腹を切ると…身銭を切るからためになるのだとも思います。）
- ・派遣中だけでなく、帰国後のお話を聞くことができ、大変勉強になった。もしできれば、参加者の名札に色分けするなどして、OB・OGなのか候補生なのか等が簡単にでも分かると、休憩時などに声をかけやすく、人的つながりをつくりやすいと思いました。良い機会をありがとうございました。
- ・帰国してもうすぐ1年、改めて還元活動の重要性と可能性を感じることができました。大阪でも広がるといいな…頑張ります。

- ・私たち（17-1）の頃のシンポジウムの時は、派遣前の先生方のためのシンポジウムだったよう感じました。今日は、派遣前の方が少ないよう思いました。
- ・”内なる国際化”についても今後力添えしていけるだろうか。新たな視点を頂き、ビジョンを頂いた。
- ・派遣される前にこのような機会があり、とても参考になりました。やはり、教材・教具や学校体制などの環境は具体的に予想できなくて不安になるので、今回の研修で分かった部分もあり、ありがとうございました。一つ一つの報告について、もう少しじっくり詳しくお聞きしたかったので、時間が短かったのが残念でした。ありがとうございました。
- ・今回驚いた点においては、3年前私が候補生として参加した時より、参加者の様子が変わっていることでした。3年前は、ほとんどが候補生の参加だったのに対し、今回は大学の関係者や各分野の専門家の方が多くいらしたことにびっくりしました。現職参加に対してとても広がりができていると思うと同時に、層（参加者の）が広い分、プログラムのポイントを絞るのが難しいと感じました。個人的には、今回経験を発表させていただく場を与えていただいてとても嬉しく思いました。しかし、少しどこに合わせて発表したらよいかというところでとまどいがありました。私の方からも、もっと連絡を取らせていただき、内容を詳しく確認していれば反省しています。全体的には、今回参加させていただいたて還元活動に少し限りを感じ、ひびの職務の忙しさに流されていたところがありましたが、いろいろなシステムがあることを知れたり、実際に活動されている方の話を聞けて、私も自分のできることを何か始めたいと思いました。協力隊精神がよみがえりました。
- ・少し報告数が多くて何名かの発表内容が途中で終わる感じのものがあったのが、少しもったい無い気がしました。
- ・帰国報告会を各府県単位で開催することを希望します。
- ・時間進行（Time table）にはもう少し余裕を持たせた方が良いと感じました。
- ・資料が多く、帰ってから読んでさらなる参考にさせていただきたいと思います。本日はありがとうございました。
- ・いろんな話が聞けて参考になりました。
- ・現地での具体的な活動の様子を知ることができてよかったです。苦労していること（自分の願い、現地のニーズ、意識の違い）も知り、その中でも自分が出来ることをやっていくことが大事かなと思いました。国の特徴についてもっと事前に知っていると活動がよりスムーズに進むかもと思いました。
- ・受付で「抄録集」と各発表者のレジュメを頂いていたので、どの分科会に行くかより検討しやすく有り難かったです。分科会のタイムテーブルですが、例えば「小学校教諭」を目指していくすべて見ていきたいのですが、同じ時間ですと十分に参加できず考慮していただけると有り難いです。急遽の分科会もあったようですが、資料が準備できない等あります。折角のシンポジウムですので、パワーポイント等準備していただけるよう、事前準備をお願い致します。昼食をJICA内でとれることは大変有り難かったです。会場配置図は封筒に印刷してあると見やすいです。紙1枚節約できますし。

- ・昼食のときに同じ茨城から派遣された方がいらっしゃり、みんなの前では聞きづらいようなことも気軽に聞くことができてラッキーだった。どうしても今、不安が多く、誰に聞いたらよいのか分からぬことばかりだったので、今回参加してよかったです。他に派遣される隊員とも仲良くなり、良い点や情報を得たりしていきたい。帰国後どうしていったらよいのか、しつこくならないよう聞きたいと思う人を増やしていくには、何をどういう順にしていけばよいのかまで聞くことができたことも良かった。2月15日のJICAつくばのワークショップ?にもぜひ参加したいと思う。(でも今は、家族と一緒にいる時間を多くするという目的もあるのではっきりは言えませんが…)
- ・現職教員として参加の希望を検討しています。今日の報告会で、いろいろな種類の実践があることを知り、私も参加できたときには自分自身の実践を見つけたいと感じました。また、任国での現地の人々や同じ隊員の方とのつながりも大切であることが良く分かりました。人ととの出会いの素晴らしさを私も感じたいと思います。帰国後、どんな教育活動を進めていくのかという事も不安でしたが、OB・OGの方やJICAや大学関係者の方が熱心に取り組まれていることがすごく伝わり、少し安心しました。任国でも帰国後もつながりが大切だとよく分かっていました。たくさんのこと学ぶことができた良い一日でした。ありがとうございました。
- ・限られた時間の中でどなたもが十足のお話でしたが、これが「おわり」でなく「スタート」と考えれば、たくさんの情報をもらえてよかったです。ホームページサイトのトップページのような感じで…。分科会は「3」を通して4人の話を伺いましたが、どなたも素晴らしい活動をされていました。JICAはボランティア事業のプログラム化についてもう少し説明したほうがその中の教育協力の意義が分かりやすいでしょう。ネットワークづくりは、以前より環境は整ってきてるので、進んでいくと思います。20年前に「こういうことをやりたい」と思っていたことが「派遣現職教員サポート」の方々により、実践されていると感じました。これは「派遣現職教員サポート」からもっともっと広がっていくとよいと思います。
- ・いろいろな話を聞くことができて有意義な会だった。分科会と分科会の間が短く、質問やお話を発表者の方としたくてもできなかったので、コーナー（部屋）のようなのがあってお話できたらよかったです。
- ・発表された先生方が自信を持って説明していたところに現職教員参加制度の意義と教員自身の有益さを感じることができてとても良かったです。ただ、発表者の方々は時間が不足していました。参加してよかったです。ありがとうございました。
- ・分科会3のビデオ撮りの方の位置が前過ぎて、後ろから前のプロジェクターの画面が見えませんでした。撮る位置は良く考えてほしいと思いました（ずっと立って撮っていたのも見えない理由の一つかもしれません）。今回このような研修会があることを派遣候補生にならないと知りませんでした（私の意識が低かったのも原因かと思いますが）。今後、広く公立学校に研修案内が送られ、広報されると良いなと思いました。
- ・私は日本語が大好きで日本語教育に興味があります。もし来年度（H.20年度）の教採に合格したら、3月末までの期間を使い日本語教師養成学校に通うつもりです。「小学校教員として日本語教育の正しい知識と技術を持って、国内だけでなく青年海外協力隊、地域ボランティア等で

教育分野で活躍したい」という夢が、このシンポジウムで目標に変わりました。教採に向けてこれ以上の動機付けはありません！参加してよかったです。ありがとうございました。

- 改めて協力隊の魅力が高まりました。自分は「登録」という形で連絡が来るのか来ないのか待っている状態ですが、もし今回が無理でも次回またチャレンジしたいと思うことができました。それくらい興味のある話が聞けました。有り難かったです。また、たくさんの支援、ネットワークについても知ることができ、大変参考になりました。ありがとうございました。
- これから現職教員派遣について進めていく方向だと思うのだが、学校現場の状況を見ると新採の人数が大変少なく、2年という期間現場から離れるのは大変である。特に地方ではそれが強いようだ。ちなみに自分の学校では、私（39歳）が男性教員の中で1番若い状況である。地域差はあるが全体的にも平均年齢の増加はどう考えておられるか教えてほしい。シニア派遣はなぜないのか？
- 年々内容が充実してきている。今回のパネルディスカッション、大学の隊員に対するサポート活動は派遣中はもとより、これから候補生にも心強く感じたのではないか。来年（次回）もこのサポート体制を充実して発表していただければと思います。
- JICAでの広報も可能な限り実施したが、参加者は思ったほどいなかった。今後の取り組みとして、全ての技術顧問への声かけ、全国にいる進路相談カウンセラーへの直接の呼びかけをしていくことが必要と感じた。イベント・講演会が数多く開催され、案内に対する興味・関心が低い問題がある。如何に興味ある報告を多くの教員に伝えていけるかが課題と思う。明年に向け、もっと多くの方に聞いていただけるようにもっと広報したい。
- 初めて伺い、皆様の活動を知ることができました。2年間現地で活動されたお話を、よりよい協力を実現するための教材や手引きの作成についての取り組みの成果に期待します。ACCU（ユネスコアジア文化センター）などがこれまでに作ってきた識字教育や環境教育の教材がありますので、そうしたNGOとの連携がなされているのか知りたいところです。
- 派遣前に参加すれば有意義な研修になったと思うが、帰国後ではあまりメリットは感じない。帰国後の実践を発表する分科会（それを中心に）があってもいいのではないか？
- シンポジウムの準備、実施、お疲れ様でした。
- 最初のDVDがよく聞こえなかったので、残念でした。都合で午後の部に参加することができなかったのも残念でした。申し訳ありません。
- 発表者でしたが準備の時間がほとんど取れず、申し訳なかったです。もう少し早くお話をいただければよかったです。それでもよい機会と思ってチャレンジし、実際自分も学べることがあり有り難かったです。
- 派遣前の隊員向けのプレゼンを用意した方が多いわりに、会場の中にはシニアレベルの年齢の方が多かった（大学関係等…？）。なので分科会の一部は、すでに多く見聞している層向けに具体的テーマに分けて論じた方がよいのでは（例：帰国後のネットワークづくりなど）。時間運営が的確で、スタッフの方々がしっかりしていました。気持ちよく会議に集中できました。お疲れ様でした。

平成19年度文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム
開発途上国における派遣現職員の活躍
—帰国隊員報告会—
報告書

発 行：平成20年3月

発行者：筑波大学教育開発国際協力研究センター（CRICED）

国際協力イニシアティブ教育協力拠点形成事業

〒305-8572 茨城県つくば市天王台1-1-1

電話 029-853-7287 FAX 029-853-7288

E-mail: jocv@criced.tsukuba.ac.jp

<http://www.criced.tsukuba.ac.jp>

編 集：佐藤眞理子、鎌田亮一（CRICED）

印 刷：前田印刷株式会社 筑波支店